

昭和二年、アメリカンスクール卒業

山科家は代々素封家として其の名顯はれてゐた。代々學を能くし殊に龔祖勝島惟徳は儒者伊藤仁齋の高弟として幾多の著を公にし其の名高く、先代禮藏の外祖父たりし菅茶山は詩人として又知らる。禮藏は夙に志を立て獨力を以て海事工業所を興し遭難船貨物の引揚に従事し、犠牲的行爲を敢て

三共商會主、土木建築勞力供給及運送請負業

明治一六年五月生、愛知縣  
徳川家康の生地たる愛知縣下に三河武士の流れを汲み生育せる氏は其の意思や又堅く、克く今日の不況に際し善處し業界は勿論一舶世人に其の名知られてゐる。先代熊

子(大正三年生)二男明二(大正元年生)二女淑子(大正六年生)三男達三(大正九年生)三女絢子(大正一〇年生)四男均平(大正一二年生)五男壯吉(大正一四年生)

を以て目さる、當主成一氏はその長男にして大正六年家督を相續せるものにて、學習院を經東京帝大を卒へるや直ちに十五銀行に入り現在に至つてゐる。年漸く壯其のスポーツマン的意氣にて諸事に對す。氏の前途洋々たりである。

妻加代明治四一年九月生(北海道人豊澤通明姉)男祐一昭和二年九月生、弟三郎明治四三年四月生、妹美代子大正二年四月生

### 井上 富三氏

兵庫縣武庫郡精道村三條字松本四六三ノ一 電話 芦屋二三一一二

富山紡績、吳羽紡績各(株)専務取締役、伊藤忠商事(株)監査役

明治一五年六月生、福井縣

氏は福井縣人井上卯之助氏の弟として同縣下に生れ、大正五年分家して一家を創めた。夙に東京高等商業學校を優秀の成績を以て卒業し、直ちに實業界に入り奮闘努力、紡績界に活躍し富山紡績、吳羽紡績會社等の取締役として敏腕の聲が高く伊藤忠商事會社監査役として關西實業界に重きを成してゐる。

妻リウ(明治一九年生、福井縣吹田多四郎姪)男尙一(明治四三年生)長女光

人物編

故子爵澁澤榮一述

### 青淵論叢

統計資料協會發行

菊版 175頁 定價 ¥1,50

### 山本嘉兵衛氏

日本橋區川瀨石町一 電話 日本橋(24)三五五五

茶商山本山主人

山本家の初代嘉兵衛氏は元祿年間江戸に上り茶舗を開き煎茶、玉露等を案出し宇治茶を今日の如き名聲を博すに至るの基礎を築いた。氏の生家は山城國宇治山本村で先々代三四郎氏の代に至り、宮内省各宮家其他各省に出入を許可され、山本山と號して有名になつた。君は先代嘉兵衛氏の後を受けて昭和五年襲名家督を相續せるもので早稻田大學商科を卒業後、祖業を受け継ぎて精進し、現在下谷、牛込等に支店を設け益々良品選出に注意し盛んに發展しつつある。

母ヨシ、元治三年生妻藤江明治三四年三

清の役には近衛第二旅團長として出征したが、臺灣の陣中に病を得て歿す。功績絶大な故を以て男爵を授けられ華族に列す。養子一貫其の後を襲ひ陸軍に入り陸軍少將に累進し、日露戰役に従軍し功四級を賜はる。侍從武官、軍事參議院幹事、東京武官長等の要職を歴補す。其の男性的容貌に貴公子然たる風姿を備へたる華界の新進

月生(神奈川縣人石塚瀧三姪)長男邦一郎大正一五年生、長女智子大正一四年生

### 松田 眞男氏

本郷區駒込十駄木町七二 電話 小石川(85)三二九五

從六位、法學士、辯護士、辨理士 明治一七年二月生、新潟市



氏は新潟縣人松田幸五郎氏の長男で、大正十年三月

東京帝大法科英法科を卒業 同四月司法官

試補となり、後海軍法務官に任ぜられ裁判官たること七ケ年、昭和二年五月高等官五等にて退職した。同月法學博士堀江專一郎氏と協力して丸ビル内の同博士事務所にて辯護士を開業し、清水組、朝鮮鐵道等の事件を處理して名を擧げ、昭和三年八月、神田區小川町交叉點小川ビル内に松田法律事務所を開設し、辯護士二名を置き専ら法律並に特許事務を取扱ひ法曹界に著々と堅實なる地位を占めつつあり。尙ほ氏は第一東京辯護士會員である。趣味は讀書(主に法律書)旅行等で、浄土眞宗を信仰し、「成功は努力の結晶なり」を處生訓とし、

重



「正義を以て進め」を家憲としてゐる。

夫人寛子明治三八年二月生(香川縣人鎌田蓮氏五女)長女淳子昭和三年生

松澤 一鶴氏 赤坂區青山南町六ノ一〇八  
電話青山(36)八二九七

理學士、日本水上競技聯盟理事、東京切抜通信社社長

明治三三年九月生、東京市

氏は東京府人松澤翠爾氏の長男に生る。

翠爾氏は明治二十二年、當時山縣有朋公の洋行土産たる切抜通信業を創業し東京切抜通信社と稱し日本に於ける斯業の嚆矢をなし、氏はその二代目の社長である。昭和二年東京帝大理學部を卒業し家業を繼ぎて今日に至る。又氏は大正十三年日本水上競技聯盟創設當時より之に關係し、昭和二年理事に就任した。宗教眞言宗、趣味水泳。

夫人信子明治三八年生(鹿兒島縣人別府友治氏長女)長女ながみ昭和三年生、長男眞澄昭和五年生

松永半次郎氏 京橋區京橋一ノ六ノ三號  
電話京橋(56)九五三番

帝都に於ける和紙商界に名聲ある山形屋の當主たる氏は、静岡縣人高瀬英二郎氏の次男で、明治二十年九月九日同縣富士郡大宮町に呱呱の聲を擧げた。長じて大正元年

松永家の養嗣子となり、同九年家督を相續

すると共に前名隆司を改め當家累代の名たる半次郎を稱することゝなつた。之より先明治三十二年日本橋區横山町の丸山紙商店に入るや、將來斯業を以て起つべく熱心に業務を見習ふと共に、寸陰を惜んで勉學せる効果空しからず、店主に認められて厚く信用され又、取引先等にも漸次信望を博するに至つた。入店以來十數年刻苦勵精して克く斯業に關する實務に通曉せるを以て、大正二年同店を辭し現在の地に紙商を創めた。當初は微々たるものであつたが、氏の不撓不屈の努力と信用本位、誠實主義の取引は漸次顧客の信用を得て逐年發展に赴き遂に今日の隆盛を見るに至つた。温厚篤實の士にして淨土宗の信仰篤く、趣味の尤なるものは將棋である。ミツ夫人は東京府人平内銈造氏の令姉にして明治二十七年生れ、長男英一君は大正三年生れにして慶應商工學校在學中である。此の外、二男昌夫君(大正一二年生)、長女秀子(大正九年生)等ありて家庭頗る圓滿である。

増田 啓策氏 市外武藏野町吉祥寺三五  
電話荻窪三〇二五

文學士、株式會社帝國書院取締役社長  
明治二九年八月生、長野縣

東都出版界に嚇々たる令名を馳せてゐる我が増田啓策氏は幼より俊才の譽高く、笈を負うて上京し、大正十一年東京帝大文學部國文科を優秀な成績を以て卒業し、其後滿鐵本社圖書館に勤務してゐたが、尋いで松本高女及熊本縣人吉中學等に於て教鞭を執り、大正十五年より昭和二年迄歐米各國の教育、出版、文化施設、風物等を視察し歸朝後は帝國書院の社長となり、以て今日に至つてゐる。氏は資性温厚、學識人格共に高く、趣味又多方面に亘つてゐる。

夫人繁子明治三六年生(帝國書院監査役守屋荒美氏長女)長男正子、長女十三子の二子があり、羨むべき團圓を形造つてゐる。

谷村一太郎氏 京都市中區堺町竹屋下  
電話 上一八一七

湊鐵道(株)社長、藤本ビルビローカー證券(株)取締役、川崎造船所、川崎車輛、帝國人造絹糸、日本活動寫眞、八木商店各(株)監査役  
明治四年四月生、富山縣

氏は富山縣人谷村友吉氏の長男として同縣下に生れ、明治十六年家督を嗣いだ夙に實業界に入り、奮闘主義に依つて著々事業界に地歩を開拓し、藤本ビルビローカー銀行の會長として敏腕を振ひ、現

時前掲各社の重役を兼ねて今日に及んでゐる。

妻ちか(明治八年一月生、京都府人

松村謙吉叔母)長男順藏(明治二五年四月生)同妻ゆき(明治三七年二月生、文學博士新村出長女)二男鐵三郎(明治三二年三月生)孫友一(昭和二年生)女國(明治二八年生)父友吉(嘉永元年生)は母たつ(同五年生、富山縣人前村禮造妹)と共に、弟武次郎(明治六年生)姉つや(同二十一年生)を伴ひ分家、二男敬介

腕を揮つてゐた。大正十二年同店が關東大震災の災禍を蒙るや主家を繼承し、同年十月現地に醫科理化學器械商牧器械店を創立爾來發展を重ねつゝ今日に及んでゐる。宗教は淨土宗、寶生流謠曲に堪能である。

夫人定子明治一七年生(山名次郎四郎氏二女)二男淳市大正五年生、二女愛子大正九年生四男誠也大正一二年生、養子新三郎明治三三年生(栃木縣人大貫長重氏長男)長女松枝明治四五年生(養子新三

圖を修得し、業務に精勵す。廿有餘歳の若冠を以て現場主任に擧げられ其後幾多大なる建築工事設計監督に當り、其名を知らるるに至つた。現に大倉組分身たる大倉土木株式會社の常務取締役たる外前記諸會社の重役として我實業界に重きを爲してゐる。

妻よね明治九年八月生(東京府人砂崎庄次郎長女)男定信明治二九年一〇月生、キミ明治三六年五月生(長男定信妻、東京人苗村又右衛門孫)男信行明治三八年



友治氏長女)長女ながみ昭和三年生、長男眞澄昭和五年生

松永半次郎氏 京橋區京橋一ノ六ノ三號 電話京橋(56)九五三番

帝都に於ける和紙商界に名聲ある山形屋の當主たる氏は、靜岡縣人高瀬英二郎氏の次男で、明治二十年九月九日同縣富士郡大宮町に呱々の聲を擧げた。長じて大正元年

れ、長男英一君は大正三年生れにして慶應商工學校在學中であす。此の外、二男昌夫君(大正一二年生)、長女秀子(大正九年生)等ありて家庭頗る圓滿である。

増田 啓策氏 市外武藏野町吉祥寺三五 電話荻窪三〇二五

文學士、株式會社帝國書院取締役社長 明治二九年八月生、長野縣

券(株)取締役、川崎造船所、川崎車輛、帝國人造絹糸、日本活動寫真、八木商店各(株)監査役 明治四年四月生、富山縣

氏は富山縣人谷村友吉氏の長男として同縣下に生れ、明治十六年家督を嗣いだ夙に實業界に入り、奮闘主義に依つて著々事業界に地歩を開拓し、藤本ビルブローカー銀行の會長として敏腕を振ひ、現

時前掲各社の重役を兼ねて今日に及んでゐる。

妻ちか(明治八年一月生、京都府人松村謙吉叔母)長男順藏(明治二五年四月生)同妻ゆき(明治三七年二月生、文學博士新村出長女)二男鐵三郎(明治三二年三月生)孫友一(昭和二年生)女國(明治二八年生)父友吉(嘉永元年生)は母たつ(同五年生、富山縣人前村禮造妹)と共に、弟武次郎(明治六年生)姉つや(同二一年生)を伴ひ分家、二男敬介(明治一九年生)も亦分家、四男和雄(同三五年生)は京都府人松村謙三の家籍に入り、妹尙(同一年生、富山縣人藤澤助太郎妻)同英(同一六年生、富山縣人藤岡直次郎妻)

牧 勵氏 神田區千代田町一三一 電話神田(25)三三三一

いわしや、牧器械店主 明治一一年三月生、福岡縣

同家の祖は黒田侯直參の臣で、氏は福岡縣人牧運氏の二男として同縣鞍手郡宮田村に生れ、明治四十二年分家して一家を創立した。同二十八年上京し日本橋區本町の岩本藤吉商店に入り勤續三十年に及び、遂に支配人に擧げられ、大いに同店の爲めに手

腕を揮つてゐた。大正十二年同店が關東大震災の災禍を蒙るや主家を繼承し、同年十月現地に醫科理化學器械商牧器械店を創立爾來發展を重ねつゝ今日に及んでゐる。宗教は淨土宗、寶生流謠曲に堪能である。夫人定子明治一七年生(山名次郎四郎氏二女)二男淳市大正五年生、二女愛子大正九年生四男誠也大正一二年生、養子新三郎明治三三年生(栃木縣人大貫長重氏長男)長女松枝明治四五年生(養子新三郎妻)

松田登三郎氏 赤坂區臺町二七 電話青山(36)三七八一 大倉土木(株)常務取締役、横町ビル經營主 太平建築(株)取締役、赤坂臺町々會長 慶應三年八月生、香川縣 工手學校卒業

我國經濟界を風靡する大倉財閥の中樞大倉組に明治二十一年より實に勤續四十有餘年間勤め上げ同組の柱石として又實業家として業界は勿論一般に其の名を知らるゝ我が松田氏は香川縣の人松田源之助の三男として生れ、攻玉舎及工手學校等を卒業し、大倉組に入り諸先輩の指導に依り諸種の工事監督に従事し、克く衆人を抜き長上に見出され累進す。其間氏は夜學に通ひ英語及製

圖を修得し、業務に精勵す。廿有餘歳の若冠を以て現場主任に擧げられ其後幾多大なる建築工事設計監督に當り、其名を知らるるに至つた。現に大倉組分身たる大倉土木株式會社の常務取締役たる外前記諸會社の重役として我實業界に重きを爲してゐる。妻よね明治九年八月生(東京府人砂崎庄次郎長女)男定信明治二九年一〇月生、キミ明治三六年五月生(長男定信妻、東京人苗村又右衛門孫)男信行明治三八年八月生

前川 益以氏 澁谷區千駄谷五ノハチ 電話四谷(35)二七二四 大日本鑛業、朝鮮鐵山、淺野、雨龍炭礦(株)常務取締役、盤城炭礦(株)專務取締役、日本石膏、臺灣地所建物、留萌鐵道各(株)取締役、淺野同族(株)鑛山部長、北樺太鑛業(株)監査役 明治七年九月生、金澤市 明治三一年、東京帝國大學工科大学探鑛冶金學科卒業

金澤藩士として其の名を知らるゝ前川一以の長男として生れた君は、生後二年にして父を喪ひ幼にして家督を相續母の手一つにて育てられた。今日温情篤實として令名ある所以は此處に存するのである。東京帝



大を卒へて實業界に入るや、故淺野總一郎翁に見出され歐米各地を歴訪し、歸朝後は翁の關係せる諸會社に諸事業に參與し、特効あり、曩には淺野總一郎翁の參謀として朝鮮の地に朝鮮最初の鑛業を起し斯界の信望を一身にあつめし事あり、其の後歐米各地に諸業視察に數度渡航し斯業の發展、隆興に盡力する處尠からず、現に前記諸會社の重役として淺野翁無き後を克く舊に倍し盡力され、奮闘を續けてゐる。實に推賞すべき士である。

妻初喜明治一八年四月生(石川縣人山崎主計養姉)男孝一明治三六年一月生、男悌二明治四〇年五月生、男六郎大正六年一月生

前田 利爲氏

目黒區上目黒駒場八六一  
電話青山(36)六〇〇・二四五

正三位勳三等、侯爵、貴族院議員、陸軍歩兵大佐、近衛歩兵第二聯隊長

明治一八年六月生、東京市  
陸軍大學校卒業

同家は菅原道真公の末葉贈從一位權大納言前田利家より興つてゐる。徳川三百年の間加賀百萬石の太守として其の名夙に顯はれてゐた。慶應に至り明治維新の大業成就に特功あり其子利嗣に至り侯爵を賜はる。

當主利爲氏は從四位前田利昭の五男として生れ、後入りて明治三十三年家督を相續し襲爵仰付けられた。氏は社會公共事業の數多に關係され現に北海道に大農牧及造林事業を經營し又公益法人育徳財團を創立し私財五十餘萬圓を投ぜらるゝ等各育英事業に盡瘁せらるゝ外、教育文化事業等に援助され常に華胄界の新人として社會公共の爲めに心勞されつゝある。

養母朗子明治三年六月生(侯爵鍋島直映姉)妻菊子明治三六年九月生(伯爵酒井忠正養妹、女子學習院出身)男利建明治四一年三月生、從五位、女美惠子昭和三年二月生、男利弘昭和四年二月生

増田 次郎氏

澁谷區上智四八  
電話青山(36)六六二〇

正七位勳四等、昭和肥料、大同電力、立山水力電氣、大同肥料各(株)社長、天龍川電力、神岡水電各(株)取締役、大同電氣製鋼所、豐國セメント、四國水力電氣各(株)監査役

明治元年二月生、靜岡縣  
我電力事業界の重鎮として其の名を知らるゝ増田次郎氏は、曩には伯爵後藤新平氏の秘書として大いに活躍し將來政界に飛躍して一大政治家と目されてゐたが、後實業

界に身を投ずるや不撓不屈の精神を以て精進し遂に大成を至せしもので、氏は獨學若冠克く普通文官試験を通過し、臺灣總督に奉職す。氏は又謹嚴精勵克く業務を掌理し今日既に我電力界に名を成すも尙驕る處なく益々業界發展興隆に盡されつゝある。實に國家電力界の至寶と稱すも過言ならず。

妻コマ明治四年四月生(靜岡縣人士飯田清吉長女)養女セツ大正八年一月生(靜岡縣人飯田啓之助三女)弟廉三明治一一年二月生

後藤 文夫氏

澁谷區金王町二九  
電話 青山六九九〇  
(官舎) 麴町區永田町二ノ一二  
電話 銀座七・三三〇

從三位、勳二等、法學士、農林大臣、貴族院議員

明治一七年三月生、大分縣  
明治四一年東京帝大法科卒業

氏は大分縣士族後藤義知氏の五男、明治二十五年家督を嗣ぐ。大學卒業後高文試験に合格し、官界に入り、徳島縣理事官青森縣警察部長、内務省參事官等に歴任した。大正六年官を辭し歐米を歴遊後、同八年再び内務省に入り、大臣秘書官、特殊財産管理局事務官、警保局長、

社會局參與等を経て臺灣總督府に轉じ、總務長官に任ぜられた。昭和三年之を辭し、同五年貴族院議員に勅選され、同七年三月農林大臣に親任せられ、現に其の任に在る。

妻治(明治二五年生、子爵加納久朗妹)長男正夫(大正二年生)一男米夫(同四年生)長女親子(同六年生)二女保子(同一一年生)三女紀久子(同一二年生)

前川 道平氏

小石川區林町四四  
電話 小石川(85)一五一九

妻サク明治元年七月生(東京府士族井深梶之助妹)男正雄明治一六年三月生、久米明治二五年一月生(長男正雄妻、東京府人菅田繁長女)

織物商

明治二六年一月二月生

近江屋として絹布商を營む老舗は、絹の世界的主産地中の第一位を占む。我が前川道平氏は同家養子として入り、後分

眞野 文二氏

澁谷區代々木本村八二四  
電話 四谷五六三

在り、目下の世界恐慌の不況時に際し對外紛々たる諸問題の處理に當り其の卓越せる手腕、經驗を以て事に處し、着々事績を擧げてゐる。氏は長野縣の人松島庄太郎の三男として生れ、東京帝大を卒へるや外交官及領事官試験に合格し、外交官補として露國に在勤、其後穎才を認められ外務大臣秘書官、外務省參事官、外務省書記官、領事、大使館一等書記官、浦鹽派遣軍政務部長等に歴任し、昭和二年九月特命全權公使に進

みボーランド國に註列す。昭和六年一月外



兵大佐、近衛歩兵第二聯隊長  
明治一八年六月生、東京市  
陸軍大學校卒業

同家は菅原道真公の末葉贈従一位權大納言前田利家より興つてゐる。徳川三百年の間加賀百萬石の太守として其の名風に顯はれてゐた。慶應に至り明治維新の大業成就に特功あり其子利嗣に至り侯爵を賜はる。

川電力、神岡水電各(株)取締役、大同電氣製鋼所、豊國セメント、四國水力電氣各(株)監査役  
明治元年二月生、靜岡縣

我電力事業界の重鎮として其の名を知らるゝ増田次郎氏は、曩には伯爵後藤新平氏の秘書として大いに活躍し將來政界に飛躍して一大政治家と目されてゐたが、後實業

明治四一年東京帝大法科卒業  
氏は大分縣士族後藤義知氏の五男、明治二十五年家督を嗣ぐ。大學卒業後高文試験に合格し、官界に入り、徳島縣理事官青森縣警察部長、内務省參事官等に歴任した。大正六年官を辭し歐米を歴遊後、同八年再び内務省に入り、大臣秘書官、特殊財産管理局事務官、警保局長、

社會局參與等を経て臺灣總督府に轉じ、總務長官に任ぜられた。昭和三年之を辭し、同五年貴族院議員に勅選され、同七年三月農林大臣に親任せられ、現に其の任に在る。

妻治(明治二五年生、子爵加納久朗妹)  
長男正夫(大正二年生) 二男米夫(同四年生) 長女親子(同六年生) 二女保子(同一年生) 三女紀久子(同一年生)

眞野 文二氏 澁谷區代々木本村八四  
電話 四谷五六三

正三位勳一等、工學博士、貴族院議員、九州帝國大學、東京帝國大學名譽教授  
文久元年一月生、東京府  
明治一四年工部大學卒業

現我國工學博士中の偉才として其の名を知らるゝ眞野文二氏は、舊幕臣として大いに活躍せる眞野肇の長男として生れ、工部大學を卒へるや母校に助教として教鞭を執り、後英國に留學し工業學の蘊蓄を究め歸朝、再び母校に教授として勤む。其間論文を提出し明治二十四年工學博士の學位を受け、後推されて農商務省特許局審判官を兼任し、昭和二年勅選を以て貴族院議員に列し現に其の任に在る外、前記各名譽職を兼ねてゐる。

妻サク明治元年七月生(東京府士族井深梶之助妹) 男正雄明治一六年三月生、久米明治二五年一月生(長男正雄妻、東京府人菅田繁長女)

前川 道平氏 小石川區林町四四  
電、小石川(85)一五一九

織物商  
明治二六年一二月生

近江屋として絹布商を營む老舗は、絹の世界的主産地中の第一位を占む。我が前川道平氏は同家に養子として入り、後ち分れて一家を成し、織物商を營み本家に勝るとも劣らぬ商營振りに依り漸く其の名を爲した。氏は埼玉縣人北野俊太郎の五男として生れ、早くより近江屋に入り絹綿布の業を修得す。其の慧眼克く今日の基を成し益々發展しつゝある。

男徳之助大正九年七月生、女喜代子大正一五年一〇月生

松島 肇氏 芝區白金志田町七  
電話高輪(44)四七六〇

從四位勳三等、法學士、外務省歐米局長  
明治一六年二月生、長野縣  
明治四〇年東京帝國大學法科大學政治科卒業  
氏は現に外務省歐米局長としての要職に

在り、目下の世界恐慌の不況時に際し對外紛々たる諸問題の處理に當り其の卓越せる手腕、經驗を以て事に處し、着々事績を擧げてゐる。氏は長野縣の人松島庄太郎の三男として生れ、東京帝大を卒へるや外交官及領事官試験に合格し、外交官補として露國に在勤、其後穎才を認められ外務大臣秘書官、外務省參事官、外務省書記官、領事、大使館一等書記官、浦鹽派遣軍政務部長等に歴任し、昭和二年九月特命全權公使に進みポーランド國に駐劄す。昭和六年一月外務省歐米局長に就任し現に其任にあり令名頗る高い。最近歸朝せる氏は諸多文化進歩せる各國の實情と我邦内地との諸設備を比較し二重生活の弊、電氣方面、下水工事の不備等を知り其改善發達策を攻究中とある。多忙中にも拘らず斯くの如き餘裕ある氏の存在は又力強い。

父庄太郎嘉永六年生、妻佐喜子明治三〇年五月生(東京府人士族妻木栗造長女)

松平 忠諒氏 澁谷區穩田三ノ一七三  
電話青山(36)三三一

正五位、子爵  
明治三六年一月生、東京府  
松平家の祖は徳川家康の祖松平和泉守信光の七男元芳である。代々三州深溝の城主



として知られてゐる。其後數度の戦役を経て大炊忠房に至り肥前島原に六萬五千石にて封せられ、近代に至つてゐる。先代忠和水戸權中納言齊昭の第十六子であり、入りて同家を襲ひ、明治十六年に至り子爵を賜はる。東照宮々司、判事、宮内省御用掛等に歴任、當主忠諒氏は其孫で大正六年家督を和續、襲爵して今日に至つてゐる。

妻千代子明治四一年三月生(男爵千家尊統妹)男忠貞昭和三年一月生、男忠久昭和四年一月生、男忠敏昭和五年二月生

松平 乘統氏

赤坂區仲ノ町一七  
電話青山(36)四四二

從四位勳四等、子爵、式部官

明治一六年一月生、東京府

明治四四年東京帝國大學國史學科卒業

松平家は徳川右京亮親忠の二男、加賀守

乘元より出で、乘元三河國大給城に居を持ち大給の松平と稱し其名を知られてゐた。後徳川家康に仕へ數度の戦役に轉戦を重ね三州西尾六萬石に移り近世に至つてゐる。先代乘承明治十七年子爵を賜はり宮内省太政官御用掛付けらる。其後博愛社を興し日本赤十字社副社長に擧げられ萬國赤十字社第四回總會に我邦委員長として出席し克く使命を果し歸朝、今日赤十字社の發展

に絶大なる貢獻あり、當主は其二男として生れ、昭和四年家督を相續す。東京帝大を卒へるや同大史學編纂科に籍を置き諸種の編纂に努力し、後宮内省に入り皇孫御用掛を拜命、式部官に移り皇子傳育官として秩父宮御成年式を擧げさせ給ふ御時迄奉侍す。謹嚴温篤克く大過なく勤め上げた事實は推賞に價す。氏は孝古學を研め又和歌を能くす『みともの旅』等他數種の著あり。

妻總子明治二一年一月生(子爵佐竹義勝從姉)男乘光明治四三年三月生(從五位)男義夫明治四四年五月生、男悌大正三年六月生、男齊大正四年九月生、男潔大正七年二月生

松平 康昌氏

澁谷區千駄谷二ノ三三  
電話 青山一九八八

從四位、候爵、貴族院議員

明治二六年一月生、東京府

大正八年京都帝國大學法學部政治學科卒業 同家は一世の英雄徳川家康第二子權中納言秀康より出でゐる。秀康越前北庄に六十八萬石を領せるも時代の推移に依り減封し三十二萬石となり、北庄を福井と改め代々福井に居を構へてゐた。慶永に至り維新の大業成就に勤王の志士として奔走し特功あり、明治十七年伯爵を賜はる。後ち同二十

年侯爵に陞叙、先代康莊に至り貴族院議員に列す。又福井縣多額納稅者として舊藩の發展興隆等諸公共事業に盡瘁する處尠ならず、當主はその長男にして昭和五年家督を相續す。現に貴族院議員として少壯克く政務に參與し盡瘁する處又大なるものあり。

母節子明治九年九月生(子爵松平康春叔母)妻綾子明治三〇年四月生(公爵徳川家達長女、學習院女學部出身)男康愛大正五年二月生、弟康邦明治三二年二月生、同妻壽子明治四〇年六月生(伯爵廣橋眞光妹)

福島甲子三氏

本郷區駒込神明町七〇  
電 小石川(85)四〇七

青島洋行、京城電氣各(株)社長、私立女子美術學校主、斯文會洗心庵、聖堂復興斯成會、本郷中學校各理事

安政六年二月生、新潟縣 長岡の藩士鬼頭平四郎は文武兩道に達し藩中に其名知られてゐた。維新の役に官軍に抗し奮戦し益々其名顯はる。戦敗れて一家は四散す。東京市水道開發の恩人たる福島甲子三氏はその二男として生れ上京して東京帝大豫備門に學ぶ。入りて福島家を繼ぎ、東京府廳在勤中、才腕を認められ水道

掛長に任命され、水源の探究、上水敷地の實測等を爲し東京府に水道管網を施くに絶大なる功あり、今日の上水道完成の基礎を築き、尙ほ東京瓦斯會社に轉じてよりは同社の發展興隆に腐心し、その社礎をして泰山の安きに置く。氏の過去は實に犠牲的行爲の連續であり、何等眼前の利慾に走らず至誠一念克く國家興隆に努めて來てゐる。其後本郷區會議員に推され自治制に參與し又私學校を興す等公共事業に關與して

の發展興隆に盡力された我が安次郎氏は、後分れ一家を爲し、同社の常務取締役たる外前掲各社に重役として實業界に其名を馳せて居る。氏は和歌山縣の人、清水與兵衛の三男として生れ、夙に小西商店に入り同業を修得し刻苦勉勵、遂に今日を成すに至つたもので、益々業務に精勵され斯界に貢獻する處又絶大なるものがある。

り、敏腕を揮ふこと多年、累進して朝鮮總督府殖産局長に任ぜられ、現時その任に在つて活躍しつゝある。 妻敏子(明治一九年生故芳賀矢一二女)

小谷野傳藏氏

埼玉縣北足立郡浦和町  
三八八五  
電話、浦和四五

勳八等、浦和商业銀行頭取、浦和耕地整理組合長、浦和倉庫取締

氏は明治十六年に生れ、同四十年小谷野



乘元より出で、乘元三河國大給城に居をもち大給の松平と稱し其名を知られてゐた。後徳川家康に仕へ數度の戦役に轉戦を重ね三州西尾六萬石に移り近世に至つてゐる。先代乘承明治十七年子爵を賜はり宮内省太政官御用掛仰付けらる。其後博愛社を興し日本赤十字社副社長に擧げられ萬國赤十字社第四回總會に我邦委員長として出席し克く使命を果し歸朝、今日赤十字社の發展

明治二六年一月生、東京府  
大正八年京都帝國大學法學部政治學科卒業  
同家は一世の英雄徳川家康第二子權中納言秀康より出でゐる。秀康越前北庄に六十八萬石を領せるも時代の推移に依り減封し三十二萬石となり、北庄を福井と改め代々福井に居を構へてゐた。慶永に至り維新の大業成就に勤王の志士として奔走し特功あり、明治十七年伯爵を賜はる。後ち同二十

會 本郷中學校各理事  
安政六年二月生、新潟縣  
長岡の藩士鬼頭平四郎は文武兩道に達し藩中に其名知られてゐた。維新の役に官軍に抗し奮戦し益々其名顯はる。戦敗れて一家は四散す。東京市水道開發の恩人たる福島甲子三氏はその二男として生れ上京して東京帝大豫備門に學ぶ。入りて福島家を繼ぎ、東京府廳在勤中、才腕を認められ水道

掛長に任命され、水源の探究、上水敷地の實測等を爲し東京府に水道管網を施くに絶大なる功あり、今日の上下水道完成の基礎を築き、尙ほ東京瓦斯會社に轉じてよりは同社の發展興隆に腐心し、その社礎をして泰山の安きに置く。氏の過去は實に犠牲的行爲の連續であり、何等眼前の利慾に走らず至誠一念克く國家興隆に努めて來てゐる。其後本郷區會議員に推され自治制に參與し又私學校を興す等公共事業に關與して遅く献身的の努力を續け、現に前掲各要職を兼ね老齡を厭はず益々盡力しつゝあり。其の功績筆舌に盡さざるもの多々あり。

の發展興隆に盡力された我が安次郎氏は、後分れて一家を爲し、同社の常務取締役たる外前掲各社に重役として實業界に其名を馳せて居る。氏は和歌山縣の人、清水與兵衛の三男として生れ、夙に小西商店に入り同業を修得し刻苦勉勵、遂に今日を成すに至つたもので、益々業務に精勵され斯界に貢獻する處又絶大なるものがある。  
妻 小西安兵衛三女

妻 晴明治一七年二月生（石川縣士族岩村卓長女）養子新平明治一二年七月生（養子ヒサ夫、新潟縣人關口幾久治二男）養子ヒサ明治二〇年八月生（養子新平妻、愛知縣人三輪徳寛姪）

總積眞六郎氏 京城府壽町官舎内  
電話 本局八〇一  
正五位、勳四等、法學士、朝鮮總督府殖産局長兼燃料選鑛研究所長事務取扱  
明治二二年生、東京府  
大正二年東京帝大法科卒業  
嚴父故總積陳重氏は愛媛縣宇和島の出身にして、夙に開成學校に學び、後英國のミツヅルテンブル及び獨逸の伯林大學等に於て法律を研究し、多年東京帝國大學に教鞭を執り學界の權威として名聲を馳せたるのみならず、貴族院議員、樞密院副議長等として功績多く、男爵を授けられた。氏は其の長子法學博士總積重遠氏の實弟にして、夙に東京帝國大學法科を抜群の成績にて卒業後直ちに官界に入

小西安次郎氏 中野區昭和通二ノ三  
電話四谷(35)三二八一六  
大日本特許肥料(株)社長、小西安兵衛商店(株)常務取締役、大日本自轉車(株)監査役  
明治一五年九月生、和歌山縣

家庭 養母やさ、妻もと、一男二女あり  
近藤勝太郎氏 芝區一本榎町一ノ六  
電話高輪(44)七二四  
大日本麥酒(株)取締役兼營業部長、輸出部長、南洋貿易信用、愛知中央鐵道各(株)取締役

現時我國工業藥品製造販賣業として古へより其の名知らるゝ小西安兵衛商店に、先代安兵衛の養子となり父業を援け克く同社

り、敏腕を揮ふこと多年、累進して朝鮮總督府殖産局長に任ぜられ、現時その任に在つて活躍しつゝある。  
妻 敏子(明治一九年生故芳賀矢一二女)



明治元年六月生、岡山縣

現時我國和、洋、飲酒界を通じ、エビスアサヒ、サツボロ等の我が大日本麥酒株式會社製品が斷然諸種の群を遠く飛び越し、その需要範圍の廣きと、會社の内容充實等共に天下に冠たる所以はその經營者宜しきは勿論なるも、各部門に在りて常に細心の注意を以て世態の變遷を克く知り、會社としての營業方針を支配する部長級の人々の努力を忘却する事は出来ない。我が近藤氏は同社の營業部長として又輸出部長として才腕を廣く知られ、業務に専念されつゝあり會社に貢獻する處亦甚大なりと云ふべく殊に近年國産品の海外に輸出されるもの漸く多き中に、明治の末世に至る迄世界市場に微々たる足跡すら無かつた我邦ビールを今日多數海外に大量輸出するに至つた。氏は岡山縣人伏見庄太郎氏の長男として生れ、入りて先代松太郎の後を襲ひ、近藤姓を名乗るに至つた。夙に實業界に身を投じ艱難辛苦を嘗め遂に今日を成すに至つた。立志傳中の士と稱すべきである。

妻てう明治八年三月生（岐阜縣人森本安右衛門養子）養子孝悌明治三十七年九月生（群馬縣士族松田欽太郎二男）三千代明治三十九年四月生（養子孝悌妻、岐阜縣人

上省三妹）男功大正二年八月生、女美江大正四年一〇生

小西 孝治氏 京橋區京橋一ノ一 電話京橋(56)二二二七

小西光澤堂(株)本店社長

明治一七年八月生、堺市

KKクリスタルの名聲は今や品質其他の點に於て世界的に冠たるの稱あり、其の製造者として我が小西氏の名も製品と共に彌が上にも稱揚されてゐる。氏は大阪の人小西清三郎の三男として生れ、堺市の中學校

尾崎敏郎長女)

近藤 乾郎氏

四谷區北伊賀町二 電話四谷(35)三二一〇

醫學博士、近藤內科療院長、醫師

明治一二年五月生、愛知縣

大阪高等醫學校卒業

我邦內科醫の泰斗として知らるゝ近藤乾郎氏は、駿河臺病院に新歸朝の新知識を傾く努力し、同病院の興隆に盡瘁された。氏は殊に胃腸病の診療に就て卓拔せる手腕を有し、近藤病院の繁榮する亦偶然ではない。

大森吉五郎氏

京都市南禪橋西入公 舎内、電話上四五

正四位、勳三等、法學士、京都市長

明治一六年四月生、岡山縣

明治四一年京都帝大法科政治科卒業

氏は岡山縣大森久五郎氏の長男として同縣上道郡高島村に呱呱の聲を揚げ、大正五年その家督を嗣いだ。大學卒業後文官高等試験に合格して直ちに官界に入り明治四十三年京都府桑田郡長に任ぜられた。後京都市助役となつたが、再び官界に入り熊本、長崎各縣內務部長、北海道廳土木部長、同內務部長等を経て山口縣知事に任ぜられ、更に熊本縣知事に轉任

妻きよし明治一六年一月生（中村五兵衛三女）男孝信明治四〇年一月生、男秀三 大正五年四月生

小坂 順造氏

澁谷區金王一八 電話青山(36)二四五三

正五位勳二等、衆議院議員

明治一四年三月生、長野縣

東京高等商業學校卒業

民政黨所屬代議士中、衆人の信望篤く將來を囑望され居る士に我が小坂氏が在る。

した。後官を辭して昭和五年七月南滿洲鐵道會社理事に就任し、同六年同社地方部長となつたが、後之を辭して京都市長に選ばれ、以て今日に及んでゐる。宗旨は天皇宗、趣味は讀書、書畫、美術の觀賞蒐集等である。

妻みち（明治二四年生、岡山縣安田重朝長女）長女よし子（大正二年生）

近藤 民雄氏

小石川區東青柳町一八 電、小石川(85)二五五九

辯護士

明治一八年一月生、熊本縣

我邦法曹界の鬼才として知らるゝ近藤民雄氏は熊本に生る。古來熊本人は薩摩の武士道的精神に富み意志強の固と信念の強きを以て誇りとする傳統的慣性を有してゐる。殊に我が近藤氏の如きはその代表的なる人士として郷黨中に異彩を放つてゐる。氏は幼にして其の才能を認められ後懇望されて近藤家の人となり、大正六年分れて一家を成し、前記の個所に辯護士を開業し現在に至つてゐる。氏の業務に當るや常に公明正大、理路整然たる辯護振りを以て今日の名を成すに至つたもので、年漸く壯、今や其の期待甚だ大なるものがある。

妻喜代明治二七年二月生、山口縣士族井

五島 慶太氏

澁谷區長谷戸四九 電話青山(36)二一八〇

東横タクシー、東横乗合自動車、多摩川園各(株)社長、播丹鐵道(株)副社長、目黒蒲田電鐵、東京横濱電鐵各(株)專務取締役、參宮急行電鐵(株)取締役、大阪電氣軌道(株)監査役

明治一五年四月生、長野縣

明治四四年東京帝國大學法科大學卒業

我國鐵道事業界中の新人として頓に其名顯はれて居る士に五島慶太氏がある。氏は



を名乗るに至つた。夙に實業界に身を投じ、艱難辛苦を嘗め遂に今日を成すに至つた。立志傳中の士と稱すべきである。

妻てう明治八年三月生（岐阜縣人森本安右衛門養子）養子孝悌明治三十七年九月生（群馬縣士族松田欽太郎二男）三千代明治三十九年四月生（養子孝悌妻、岐阜縣人

同縣上道郡高島村に呱呱の聲を揚げ、大正五年その家督を嗣いだ。大學卒業後文官高等試験に合格して直ちに官界に入り明治四十三年京都府桑田郡長に任ぜられた。後京都市助役となつたが、再び官界に入り熊本、長崎各縣内務部長、北海道廳土木部長、同内務部長等を経て山口縣知事に任ぜられ、更に熊本縣知事に轉任

れて近藤家の人となり、大正六年分れて一家を成し、前記の個所に辯護士を開業し現在に至つてゐる。氏の業務に當るや常に公明正大、理路整然たる辯護振りを以て今日の名を成すに至つたもので、年漸く壯、今や其の期待甚だ大なるものがある。妻喜代明治二十七年二月生、山口縣士族并

上省三妹）男功大正二年八月生、女美江大正四年一〇生

小西 孝治氏 京橋區京橋一ノ一 電話京橋(56)二二二七

小西光澤堂(株)本店社長 明治一七年八月生、堺市

KKクリスタルの名聲は今や品質其他の點に於て世界的に冠たるの稱あり、其の製造者として我が小西氏の名も製品と共に彌が上にも稱揚されてゐる。氏は大阪の人小西清三郎の三男として生れ、堺市の中學校を卒へるや、我國業界の先驅たる父業懷中時計用硝子製造に父を扶け克く製品の向上に盡力する處あり、氏苦心の結晶たる登録は實に二十餘種に上り、氏が同業發展興隆に如何に貢献せるかを窺ふに足るべく、即ち明治四十年頃より露國、支那、南洋等に同製品の輸出を始め成功を収め逐時盛んになつた。其後世界需要の大部分の數量を産出するに至り、現に世界的な主要工業地に同店の工場を有し業績や實に陽の昇るが如き感あり、大正十二年會社を株式組織に改め、現に社長として遍く其の名知られてゐる。曩には懷中時計硝子の製造調査研究の爲め再度歐米を視察し、其の蘊蓄亦特筆すべきものがある。

妻きよし明治一六年一月生（中村五兵衛三女）男孝信明治四〇年一月生、男秀三 大正五年四月生

小坂 順造氏 澁谷區金王一八 電話青山(36)二四五三

正五位勳三等、衆議院議員 明治一四年三月生、長野縣 東京高等商業學校卒業

民政黨所屬代議士中、衆人の信望篤く將來を囑望され居る士に我が小坂氏が在る。代議士としてのみならず、又實業界でも氏の名は頗る高い。當小坂家は代々長野縣下に往昔より地主として農を營み近隣に其の名知られてゐた。先代に至り京都に出て克く奮闘し明治初期より五度代議士として當選し、其の名頗る顯はる。當主順造氏はその長男である。東京高等商業學校を卒業するや直ちに日本銀行に入り漸次社會的地位を確保するに至り、日銀を退きてよりは信濃銀行に入り、同銀行頭取として我國金融界及實業界に絶大なる貢献する處あり、其後政界に雄飛してよりは農商大臣秘書官、勅任參事官等に歴任してゐる。その將來や又大いに見るべきものあり活躍を期待されてゐる。

五島 慶太氏 澁谷區長谷戸四九 電話青山(36)二二八〇

東横タクシー、東横乗合自動車、多摩川園各(株)社長、播丹鐵道(株)副社長、目黒蒲田電鐵、東京横濱電鐵各(株)專務取締役、參宮急行電鐵(株)取締役、大阪電氣軌道(株)監査役

明治一五年四月生、長野縣 明治四四年東京帝國大學法科大學卒業

我國鐵道事業界中の新人として頗る其名顯はれて居る士に五島慶太氏がある。氏は長野縣の人小林菊右衛門の二男として生れ後五島家に入りて家督を相續す。東京帝大法科大學を卒へるや職を官界に開き逓信省に入る。其後鐵道局に轉じてよりは氏の手腕彌々發揮され監督局總務課長等の要職に歴任し、我國鐵道發展延長に絶大なる貢献あり。官を辭し野に下るや各鐵道關係諸會社に關係し現に我國主要私鐵會社には殆んど關係せざるなき程にて、其の名頗る顯はれてゐる。其他鐵道同志會、帝國鐵道協會等の理事を兼ね斯界に貢献する處又甚だなるものがある。

郷 誠之助氏 澁谷區上二番町二八 電話九段(33)五七二二  
正四位勳二等、男爵、貴族院議員



兩商工會議所會頭、東電會長、東洋製  
鐵、日本鉛管社長

慶應元年一月生、岐阜縣  
東京帝國大學卒業

我國實業界の巨頭郷誠之助男は明治維新  
に其の名知られし郷純造の二男として生れ  
京都同志社を経東京帝大専科を卒へるや直  
ちに獨逸に遊學し經濟學其他を修め、ドク  
トル・オブ・フィロソフイの學位を受けて歸  
朝、其の間白耳義其他に航し海外留學實に  
十有餘年の長きに亘り斯學の蘊奥を究めて  
歸朝す。歸朝後は農商務省農商工事務調査  
を囑託せられ我邦實業界の改革刷新に當り  
克く實績を擧げ、其の名頗に稱揚さる。東株  
理事長として多年業務を遂行し其後諸種の  
各會社等に關係し益々其名擴く知らるゝに  
至つた。前記各職の外、各種委員の要職を  
兼ね、明治四十六年勳爵仰付けられ、四十  
四年貴族院議員に擧げられ現に其任にあり  
公正會に屬す。

養子朔雄明治二五年九月生(父純造九男、  
正五位)英子明治三五年七月生(養子朔  
雄妻、子爵稻葉正凱姉)

近藤 次繁氏 神田駿河臺南甲賀町三  
電話神田(25)三一

來馬 琢道氏 淺草區新谷町一〇  
電話淺草(84)一五二一

萬隆寺住職

明治一〇年十一月生、東京市

氏は來馬立道氏の長男、明治三十三年家  
督を繼ぎ、夙に曹洞宗大學を卒業し、永平  
寺、末寺、淺草萬隆寺三十一世住職となり  
傍ら公共事業に盡して今日に至り、現に區  
會議員、曹洞宗師家同導師、宗務所參與の  
外、借地借家調停、土地區劃整理各委員を  
勤め、又、雜誌『吉祥』を主幹してゐる。

正三位勳二等、醫學博士、駿河臺病院長  
東京帝大名譽教授

慶應元年一二月生、松本市  
明治二四年東京帝大醫科大學卒業

外科醫院として駿河臺病院の名は我國業  
界に君臨し其の名院長近藤次繁氏の名と共  
に斯界に冠たるの感あり、氏は最近に至る  
迄東京帝大に教授として教鞭を執り、名教  
授として我國醫學界に遍く其の名知られて  
ゐた。自ら病院長として實務に就くや従前  
に勝る努力、研究を續け業績又見るべきも  
の多い。氏は東京帝大を卒へるや獨逸に航  
しストラヒブルヒ大學、ハイデルベルヒ大  
學に外科を専攻し更に伯林大學、維也納大  
學等に轉じ、益々蘊奥を究め歸朝するや母  
校に教授として奉職し、其間『胃外科手術  
に就て』外數篇の論文を提出し醫學博士の  
學位を受く。駿河臺病院の經營に當り克く  
奮闘研究を續け、益々學、術共に顯はるゝ  
に至つた。

妻オキテ明治七年一月生(近藤乾郎姉)  
男經一明治二〇年四月生、男綸三明治三  
二年一〇月生、男駿四郎明治三五年九月  
生、男臺五郎明治四〇年六月生、妻子明  
治三五年四月生(長男經一妻)多喜家明  
治三五年九月生(二男綸三妻)

圓隆氏二女(日本女子大學國文科出身の  
才媛)長男琢中明治三九年生(駒澤大學  
卒業)長女かね代明治四五年生(東洋共  
立高等女學校女子專門學校卒業)

山縣菊子女史 麴町區一番町  
電、九段一四〇、一四三、一四五

山縣製本(株)社長  
明治二二年七月生、東京市

築地女學校卒業

一般凸版印刷及製本業を營んで東都斯業  
界に名ある山縣製本株式會社の社長山

近藤 末一氏 麴町區內幸町一ノ五  
銀座(57)三五、三六

旅館旭館主、旅館組合本部長

明治四年八月生、佐賀市

明治二七年早稻田大學政治經濟學部卒業  
往昔秋の亂に江藤新平に與し其の勇名を  
馳せた馬渡雅一は氏の嚴父である。氏は幼  
少の時に上京し苦學力行、早稻田大學政治  
經濟部を卒業、其の間大隈侯の保護下にて  
東京英語學校を卒業し偉人大隈の薫陶を受  
け、政界に出て  
大いに活躍する  
決心たりしも自  
ら期するところ  
あり早稻田大學  
を卒へるや直ち  
に神戸に至り米  
及び石炭輸出商兩榮社に入り後、大阪に出  
て獨立石炭商を營み相當繁榮し業績大いに  
揚げるも事情ありて閉鎖し種々變遷を経て  
東上し、旅館旭館を經營するに至つた。現  
には旅館組合本部長としての要職に在り同  
業の興隆改革に絶大なる盡力を續けつゝあ  
る。



妻敬子明治一七年生 (近藤富徳長女)

於て女史は、悲しみのうちにも雄々しく起  
つて、八人の遺兒を教育する傍ら、亡夫純  
次氏の遺業を繼いで社長となり亡夫の名を  
辱しめず舊に倍する名聲を博して今日に至  
つてゐる。而して長男精一氏は母君の良き  
助手として、陰に陽に女史を援けてゐる。  
尙女史は斯る劇務にありながら、藝術殊に  
文學、音樂を愛好されてゐる優しい女性で  
ある。

長男精一明治四四年生の外二男三女があ  
る。



四年貴族院議員に擧げられ現に其任にあり  
公正會に屬す。

養子朔雄明治二五年九月生(父純造九男、  
正五位)英子明治三五年七月生(養子朔  
雄妻、子爵稻葉正凱姉)

近藤

次繁氏

神田駿河臺南甲賀町三  
電話神田(25)三一

奮闘研究を續け、益々學、術共に邁はる、  
に至つた。

妻オキテ明治七年一月生(近藤乾郎姉)  
男經一明治二〇年四月生、男倫三明治三  
二年一〇月生、男駿四郎明治三五年九月  
生、男臺五郎明治四〇年六月生、妻子明  
治三五年四月生(長男經一妻)多喜家明  
治三五年九月生(二男倫三妻)

及び石炭輸出商兩業に力を入れ、大いに  
て獨立石炭商を營み相當繁榮し業績大いに  
揚げるも事情ありて閉鎖し種々變遷を経て  
東上し、旅館旭館を経営するに至つた。現  
には旅館組合本部長としての要職に在り同  
業の興隆改革に絶大なる盡力を續けつゝあ  
る。

妻敬子明治一七年生 (近藤富徳長女)

來馬 琢道氏

淺草區新谷町一〇  
電話淺草(84)一五二一

萬隆寺住職

明治一〇年十一月生、東京市

氏は來馬立道氏の長男、明治三十三年家  
督を繼ぎ、夙に曹洞宗大學を卒業し、永平  
寺、末寺、淺草萬隆寺三十一世住職となり  
傍ら公共事業に盡して今日に至り、現に區  
會議員、曹洞宗師家同導師、宗務所參與の  
外、借地借家調停、土地區劃整理各委員を  
勤め、又、雜誌『吉祥』を主幹してゐる。

曩に明治四十四年、シヤム國皇帝戴冠式に  
參列し、後支那、印度、歐米を巡遊、昭和  
四年御大典記念全國佛教大會教化部長に推  
され、同五年、淺草區會議員に當選、其他  
萊府會、日印協會、動物愛護會等に關與し  
社會公共の爲めに盡せる功勞枚舉に遑あら  
ず、氏は亦、篤學家として知られ、籐外と  
號して史實、聖典等の筆を執り、現に新作  
『正法東傳』を華族會館に上演して好評を  
博し、『佛教各宗綱要』『禪門寶鑑』『禪宗聖  
典』『同愛社五十年史』等の著書がある。人  
格素より高潔にして凱博の智識を有する名  
僧侶であり、趣味は俳句、寫眞、撞球、演  
劇等殊に俳句は宗匠格である。  
夫人たつ子明治一二年生(東京府人里見

圓隆氏二女(日本女子大學國文科出身の  
才媛)長男琢中明治三九年生(駒澤大學  
卒業)長女かね代明治四五年生(東洋共  
立高等女學校女子専門學校卒業)

山縣菊子女史

麴町區一番町  
電、九段(四〇)一四三、二四五

山縣製本(株)社長

明治二二年七月生、東京市

築地女學校卒業

一般凸版印刷及製本業を營んで東都斯業  
界に名ある山縣製本株式會社の社長山  
縣菊子女史は、松浦啓次郎氏の次女として  
京橋區に生れ、女學校卒業後暫らく母君を  
援けて家事に親しんでゐたが、明治四十三年  
故純次氏は幼にして父母に生別し、世間の  
凡ゆる辛酸を嘗め、二十二歳の時朝倉製本  
所に入り監督として同所の發展に資し、次  
いで以前勤めてゐた水野製本所の再興を劃  
して、明治四十二年神田猿樂町に山縣製本  
所を獨立開業し、四十五年現在の地に移轉  
した。大正十年には歐米各國を見學し、十  
一年歸朝して資本金二十五萬圓の株式組織  
となし、斯界に覇をなす一代の成功者と謳  
はれてゐたが、惜しいことに昭和四年二月  
前途に尙春秋を残して突然長逝した。茲に

於て女史は、悲しみのうちにも雄々しく起  
つて、八人の遺兒を教育する傍ら、亡夫純  
次氏の遺業を繼いで社長となり亡夫の名を  
辱しめず舊に倍する名聲を博して今日に至  
つてゐる。而して長男精一氏は母君の良き  
助手として、陰に陽に女史を援けてゐる。  
尙女史は斯る劇務にありながら、藝術殊に  
文學、音樂を愛好されてゐる優しい女性で  
ある。

長男精一明治四四年生の外二男三女があ  
る。

古部 清治氏

麴町區山元町二ノ一  
電話九段(33)三六三

太田屋洋服店主、麴町區洋服商同業組合幹  
事

明治二〇年三月生、福岡縣

堅實第一主義を店是として終始渝るとこ  
ろなく、顧客の心境に自己を置いて裁斷裁  
縫に全力を濺ぎ、各宮家御用に浴し、同業  
者間に重きをなす我が太田屋洋服店主古部  
清治氏は、福岡縣企救町に夙々の聲を擧げ  
た。夙に獨力自己の運命を開拓せんと志し  
て上京、太田音吉氏の經營する洋服店に入  
つて、年期奉公の勞苦を嘗め、只管店主の  
命に服して斯業の練磨に脇目も振らずに精  
勵すること多年、技能大に進歩した。大正



十一年、年來の宿望たる獨立開店の機會を  
攔み茲に店舗を構へて、主人の名太田屋洋  
服店の商牌を掲げ、爾來發展に發展を重ね  
て今日に至つたものである。今や各官家を  
始め各官衙大會社に高級品を納入して信用  
絶大である。資性温厚にして態度また恭讓、  
従つて同業者間に重視せられ、現時前記公  
職に就き斯業の發展に貢献しつゝある。因  
に氏の趣味は旅行である。

小原 直氏

中野區仲町二三  
電話四谷(35)七二一

正四位勳三等、法學士、東京控訴院長

明治一〇年一月生

明治三五年東京帝大法科大學英法科卒業

氏は新潟縣人田中敬治郎氏の二男にして  
横濱貯蓄銀行取締役として令名ある平澤越  
郎氏の令兄に當り、後懇請されて小原朝忠  
氏の養子となり、大正五年家督を相續した  
東大卒業後司法官となり静岡地方裁判所檢  
事代理を経て、明治三十七年判事に任じ、  
東京地方裁判所判事となり、ついで檢事に  
轉じ、千葉地方、同區、東京區、同地方各  
裁判所檢事、司法省參事官、横濱、東京各  
地方裁判所檢事正、長崎控訴院檢事長、大  
審院檢事等に歴轉し、昭和二年田中内閣組  
閣に際し入りて司法次官となり、同六年十

二月大養内閣の成立に際し、次官より東京  
控訴院長に轉じて今日に及んでゐる。曩き  
に大正十年歐米各國に司法制度の視察に赴  
き、同十一年歸朝した。尙現時中央統計委  
員會、國有財産調査會、中央諸官衛建物準  
備委員會各委員其他の公職にある。謹嚴な  
る一面多分に温情味を有する好紳士にして  
撞球、大弓、圍碁等に趣味を有し、其の信  
奉する宗教は神道である。

養母やす安政六年生、夫人とよ子明治二

〇年生(兵庫縣人生駒八十彌氏長女、日

本女子大國文科卒)嗣子靜雄明治三七年

生(經濟學士)三男誠明治四四年生、三

女初枝大正二年生、六女英子大正八年生

四男正大正一一年生

阪井徳太郎氏

青山高樹町二〇  
電話青山(36)七七一

從五位勳五等、マスター・オブ・アーツ、

三井合名會社理事三信建物(株)取締

明治元年六月生、愛知縣

氏は明治四十一年家督を相續し、立教大  
學を卒業するや歐米に留學し、ハーバート  
大學を卒へてマスター・オブ・アーツの稱號  
を授けられ、歸朝後、その才腕を認められ  
て外務大臣秘書官となり、其後内務大臣秘  
書官に任じ彌々腕の冴を見せ、將來の大政

治家として囑望されてゐたが、感ずる處あ  
り突如として實業界に身を投じ、現に三井  
合名會社の理事たり、資性温厚活潑、頭腦  
亦極めて明敏なる人、蓋し當代好個の紳士  
である。

夫人貞子明治一十九年生(跡見女學校卒業)

長男輝久大正三年生、長女靜子明治四五  
年生、二女清子

案田 八郎氏

四谷區麴町一二ノ三三  
電話四谷(35)五二〇三三

辯護士

明治二九年四月生

大正九年早稻田大學英法科卒業

數多い帝都の辯護士中少壯法律家として  
大なる聲望と信望を集めてゐる氏は、和歌  
山縣西牟婁郡の人、濱口清兵衛氏の次男と  
して生れ、大正十二年案田家の養嗣子とな  
つてその姓を冒した。氏は幼時故あつて和  
歐山市の叔父石本伸二郎氏に養はれて、和  
歐山中學校を卒業した。大正五年笈を負う  
て上京し、早稻田大學に入り、苦學を續け  
ながら専ら勉學に努め、頭腦明晰なる氏は  
常に特待生となり、大正九年優秀な成績を  
收めて同校を卒業した。同十一年辯護士試  
験に合格し、翌十二年登録開業して今日に  
及んでゐる。疾くから練達の手腕と力量を

發揮し、特に民事商事の法律事務はその得  
意とする所であり、謙讓の美德と相俟つて  
氏の名聲は彌々斯界に高りつゝある。而し  
て餘暇あれば内外の書を讀み、新知識の吸  
收に努め、常に自己完成の道を怠らない。  
讀書の外スポーツに趣味を有し、體育向上  
並に精神修養の一助として劍道を愛好して  
ゐる。宗教は淨土宗である。

夫人スヤ子さんは貞叔の譽高く、家庭は

常に和氣藹々の氣分に満ち、氏との間に

道の蘊奥を究めて同校を卒業、歸朝後、美  
容院を経営今日に及んでゐる。即ち麻布霞  
町一七にマリールウキズ化粧院を設け、次  
で、前記の如く麻布、四谷、新橋等に各支  
店を兼營する外、特に麻布材木町八十九番  
地にマリールウキズ美容女學校を設置して  
居り、本邦美容界の最高權威として知られ  
その歴史亦古く、最も堅實なる經營方針の  
もとに着々と發展を遂げ、名聲天下を風靡  
するものあり、大東京に美容術業多しと雖

孫御用掛、東宮職御用掛、皇子傳育官、式  
部官等に歴任、大正十年退官、現在は前記  
各會社の重役である。氏は謡曲、圍碁、運  
動、園藝等趣味豊富、玲瓏珠の如き人格者  
である。

夫人晴子明治一八年生(作間餘三郎氏長

女、東京女子高等師範學校卒業)長男恒  
生明治四四年生(東京帝大在學中)二男  
敏生大正二年生(東京高等學校在學中)  
長女紀子大正八年生(東京高等學校在學中)



氏、養子となり、大正五年家督を相繼した。東大卒業後司法官となり静岡地方裁判所検事代理を経て、明治三十七年判事に任じ、東京地方裁判所判事となり、ついで検事に轉じ、千葉地方、同區、東京區、同地方各裁判所検事、司法省參事官、横濱、東京各地方裁判所検事正、長崎控訴院検事長、大審院檢事等に歴轉し、昭和二年田中内閣組閣に際し入りて司法次官となり、同六年十

從五位上、大正十一年、三井合名會社理事三信建物(株)取締、明治元年六月生、愛知縣。氏は明治四十一年家督を相續し、立教大學を卒業するや歐米に留學し、ハーバート大學を卒へてマスター・オブ・アーツの稱號を授けられ、歸朝後、その才腕を認められ、外務大臣秘書官となり、其後内務大臣秘書官に任じ彌々腕の冴を見せ、將來の大政

歐山市の叔父石本伸二郎氏に養はれて、和歌山中學校を卒業した。大正五年笈を負うて上京し、早稻田大學に入り、苦學を續けながら専ら勉學に努め、頭腦明晰なる氏は常に特待生となり、大正九年優秀な成績を収めて同校を卒業した。同十一年辯護士試験に合格し、翌十二年登録開業して今日に及んでゐる。疾くから練達の手腕と力量を

發揮し、特に民事商事の法律事務はその得意とする所であり、謙讓の美德と相俟つて氏の名聲は彌々斯界に高りつゝある。而して餘暇あれば内外の書を讀み、新知識の吸収に努め、常に自己完成の道を怠らない。讀書の外スポーツに興味を有し、體育向上並に精神修養の一助として剣道を愛好してゐる。宗教は淨土宗である。

夫人スヤ子さんは貞叔の譽高く、家庭は常に和氣藹々の氣分に満ち、氏との間に長男慎一、長女悦子、二男欣二、三男勉の三男一女がある。

### 相原美彌子女史

本店、麻布區霞町一七、電話青山七九三  
分店、麻布區霞町六四、電話青山七九七  
四谷區左門町五九〇、電話四谷五五一〇  
芝區新橋驛際芝口ビルディング五階、電話銀座三六九  
學校、麻布區材木町八九、電話青山三三三

マリールウキズ化粧院々主、マリールウキズ美容女學校長

女史は夙に留學し巴里ルイ・サント・オノレー、ラモット美容女學校を卒へ更に進んで、メゾン、ポットー美容學校に學び、斯

道の蘊奥を究めて同校を卒業、歸朝後、美容院を経営今日に及んでゐる。即ち麻布霞町一七にマリールウキズ化粧院を設け、次で、前記の如く麻布、四谷、新橋等に各支店を兼營する外、特に麻布材木町八十九番地にマリールウキズ美容女學校を設置して居り、本邦美容界の最高權威として知られその歴史亦古く、最も堅實なる經營方針のもとに着々と發展を遂げ、名聲天下を風靡するものあり、大東京に美容術業多しと雖も悉くその追隨を容さず、恒に最新の研究を重ねて斯界に之を發表し、同時に子弟の教育に貢献するところ亦尠からず、今や斷然、斯業者をリードして益々隆盛を極め、今後の一大發展期して待つべきである。

### 作間 富生氏

中野區川添町四六、電話四谷(35)一四〇七

從六位勳六等、共同保善株式會社專務取締役、濱松銀行取締役、日本徵兵保險株式會社囑託、社團法人茗溪會理事、明治一三年七月生、長野縣

氏は宮城縣人田中光享氏の二男として生れ長じて作間餘三郎氏の養子となり、長野縣師範學校を卒へ明治四十二年東京高等師範學校に進み、卒業と共に同校附屬中學の教諭となり、同年辭して宮内省に入り、皇

孫御用掛、東宮職御用掛、皇子傳育官、式部官等に歴任、大正十年退官、現在は前記各會社の重役である。氏は謡曲、園藝、運動、園藝等趣味豊富、玲瓏珠の如き人格者である。

夫人晴子明治一八年生(作間餘三郎氏長女、東京女子高等師範學校卒業)長男恒生明治四四年生(東京帝大在學中)二男敏生大正二年生(東京高等學校在學中)長女紀子大正八年生(東洋英和女學校在學中)

### 神原文右衛門氏

京橋區南小田原町三ノ四、電話京橋三五九、大竹製菓株式會社專務取締役、明石ガレージ株式會社々長

明治一九年九月生、愛知縣

氏は愛知縣人林四郎氏の長男として生れ明治三十四年家督を繼ぎ、同四十四年、早稻田大學商科を卒業して三龍社に勤め、大正三年大竹製菓株式會社に入社、専心、業務に精勵して大いに發展策を講じて社礎を泰山の安きに置かしむるに至り、大正十二年同社專務取締役に擧げられ尙、明石ガレージ會社の社長を兼ねてゐる。氏は誠實を處世訓とし恒に自己省察を怠らず、人格の陶冶に精進しつゝある好個の紳士である宗



教は眞宗。

夫人こと明治二六年生(愛知縣人小野權右衛門氏三女、豊橋高等女學校卒業)長男文夫大正五年生(府立高等學校在學中)長女以禰子大正三年生(市立第一高女在學中)二女寛子大正一年生、三男文哉大正一三年生、三女典子昭和三年生、四男文孝同五年生  
因に大竹製菓株式會社の組織及内容其他は左の如くである。  
本社 蒲田區 高畑二五〇、電話蒲田一〇三八  
設立 大正八年三月 總株數四千株(株主總數九十一名)  
資本金(拂込濟) 一〇〇、〇〇〇圓

沿革

當社は我國一流製菓會社に比し其の創立は比較的新らしいが、重役は總て人格者を網羅し、堅實なる營業に當り、克く實績を擧げ今日に於ては年額三百萬圓以上の製品を算出するに至つた。其の販賣網は全國的に着々地歩を基き近年不況に憐みつゝある他同業社製品を逐驅し、年百萬圓以上の販賣消化を爲し益々信望を博してゐる。  
主なる製品はアサヒチュウインガム、ミルクキャラメル、ゼリピンズ、カハリ玉等

歳、長女文子二四歳、二女百譽二二歳、三女今枝一五歳、一男一也一二歳、三男千別九歳

佐野 弘氏

澁谷區下通五ノ七  
電話高輪一五七三  
會社、日本橋區箱崎町三ノ一東神ビル内  
電話茅場町 四七〇同四七一二同四七二一  
同四七三

共立商會株式會社事務取締役

明治二二年二月生

氏は廣濱茂木合名會社で永勤、後、富島

にして其他各種の製菓を爲してゐる。我國五大銀行中の住友銀行、川崎第百銀行等と取引を續け經濟的にも又堅固なる地位に在り、尙現事務榊原氏は事業に對しては實に眞面目なる人にて又機を見るに敏く近年時世の移り進むに連れ同社製品販賣に對し一新軌軸を發表せんと策してゐる、今後の發展は又期して待つべきである。

役員

(專)榊原文右衛門 (締)小松源治郎  
堤甲子三 (監)堤德藏

齋藤 惣一氏

小石川區林町六一  
電、小石川(85)二九三七

從六位、東京基督教青年會總主事、太平洋問題調査會常務理事

明治一九年七月生、福岡縣

海外漫遊既に數次、太平洋問題に關する研究家として知らるゝ氏は基督教の熱心なる信仰家であり、恒に世界の人類愛を高唱し、當代稀に見る人格の士として令名あり、氏は福岡縣人、齋藤勇氏の息、明治三十三年家督を繼ぎ、同四十四年、東京帝國大學英文科出身の文學士で、同年第五高等學校の教授となり、從六位に叙せられた。現在日本基督教青年會同盟總主事、同軍隊慰問部常務理事並に太平洋問題調査會常務理事

等の要職に在り、青年指導の爲めに盡せる功績亦没すべからざるものがある。氏は讀書を唯一の趣味とし新知識の吸収に努めてゐる。

夫人つたの子明治二一年生(渡邊光藏氏二女、日本女子大學國文科卒業)嗣子勇一明治四四年生(成城高等學校在學中)長女文子大正二年生(日本女子大學附屬高等女學校在學)三男光雄大正五年生(成城中學在學)二女照子大正六年生、四男和夫大正八年生

齋藤五百枝氏

中野區江古田四ノ一五五四  
電話 中野四四一四

洋畫家、挿畫家

明治一四年一二月生、千葉縣

現代挿畫界の巨匠として知らるゝ齋藤五百枝氏は幼にして天稟の畫才あり、長ずるに及んで益々その才能現はれ、東京美術學校洋畫科を卒業後、挿畫に志し、洋畫家として挿畫界に入つたのは氏を以て嚆矢とする。爾來研鑽是れに努め、獨創的境地を拓いて天才の名を馳せ、今や青年畫家にして氏の門に學ぶ者益々多きを加へ、聲望斯界に冠絶するの觀あり、人格、識見亦衆に擢んで當代得難き紳士である。  
夫人マツ子明治一八年生、嗣子大典一八

現に同組合の顧問として同業者間に聲望が高い。趣味は旅行、日蓮宗の信仰家である

夫人のぶ子明治二二年生(千葉縣入屋代眞喜太氏長女)長男健雄明治三七年生、二男正吉同三九年生、三女壽子同四四年生

佐藤 得齋氏

日本橋區大傳馬鹽町一四  
電話浪花(67)五三九八

佐藤産科婦人科醫院長

明治七年一二月生、私田縣

釣魚。



網羅し、堅實なる營業に當り、克く實績を擧げ今日に於ては年額三百萬圓以上の製品を算出するに至つた。其の販賣網は全國的に着々地歩を基き近年不況に憐みつゝある他同業社製品を逐驅し、年百萬圓以上の販賣消化を爲し益々信望を博してゐる。  
主なる製品はアサヒチユウインガム、ミルクキャラメル、ゼリピンズ、カハリ玉等

る信仰家であり、恒に世界の人類愛を高唱し當代稀に見る人格の士として令名あり、氏は福岡縣人、齋藤勇氏の息、明治三十三年家督を繼ぎ、同四十四年、東京帝國大學英文科出身の文學士で、同年第五高等學校の教授となり、從六位に叙せられた。現在日本基督教青年會同盟總主事、同軍隊慰問部常務理事並に太平洋問題調査會常務理事

して挿畫界に入つたのは氏を以て嚆矢とする。爾來研鑽是れに努め、獨創的境地を拓いて天才の名を馳せ、今や青年畫家にして氏の門に學ぶ者益々多きを加へ、聲望斯界に冠絶するの觀あり、人格、識見亦衆に擡んで當代得難き紳士である。  
夫人マツ子明治一八年生、嗣子大典一八

歳、長女文子二四歳、二女百譽二歳、三女今枝一五歳、二男一也一二歳、三男千別九歳

### 佐野 弘氏

澁谷區下通五ノ七  
電話高輪一五七三  
會社、日本橋區箱崎町三ノ一東神ビル内  
電話茅場町四七〇同四七一同四七二同四七三  
共立商會株式會社專務取締役  
明治二二年二月生

氏は横濱茂木合名會社に永勤、後、富島組に入り勤續六閱年、多年の經驗は識見、力量と相俟つて業界の偉材たり、昭和四年十一月共立商會を創立して之が經營に當り同年三月、株式組織に改め、その專務取締役に任じ、大いに業務の刷新改善を圖り、社礎益々堅實となりつゝある。氏は武藏野霞ヶ關、相撲各カントリークラブ員である  
夫人トミ子明治二六年生(中西又市女、高松高等女學校卒業)長男義昭昭和二年生

### 佐野 擴平氏

牛込市ヶ谷本村町三三二  
電話牛込(35)三八一四  
大日本食料品研究所主  
明治一八年一〇月生、山梨縣  
氏は山梨縣人佐野重太郎氏の長男として

生れ、順天中學を経て早稻田大學政治科に入り後、文科に轉じ不幸病を得て中途退學歸郷、大正十二年、養蠶に關する研究改善を志し、報徳舎を創立して益々斯業の發展向上に努め、次で再び上京、大日本食料品研究所を經營、製菓機製造に従事して今日に至つた。氏は日蓮宗を信仰し『協同一致共存共榮』を處世訓として社會公共の爲めにも貢献する處からず犠牲的精神に富める平和主義の人格者である。趣味は園藝と釣魚。

夫人なか子(大久保貞次郎氏妹)長男良一大正九年生、長女みち子大正八年生、二男伸治大正一三年生、二女和子昭和二年生

### 佐藤 庄助氏

本郷區駒込東片町五  
電、小石川(85)二八五四  
東京賣肉同業組合顧問  
明治九年一〇月生、  
氏は千葉縣夷隅郡總野村の舊家として知らるゝ佐藤猪四郎氏の三男で明治二十三年分家と共に牛豚肉商を經營、爾來三十餘年、營業益々發展し、西川第二支店を設けて販路擴張に努力しつゝあるが、氏は曩に居町東片町會副會長に推され、又、東京賣肉同業組合副會長より組合長に擧げられ、

現に同組合の顧問として同業者間に聲望が高い。趣味は旅行、日蓮宗の信仰家である  
夫人のぶ子明治一二年生(千葉縣入屋代眞喜太氏長女)長男健雄明治三七年生、二男正吉同三九年生、三女壽子同四四年生

### 佐藤 得齋氏

日本橋區大傳馬鹽町一四  
電話浪花(67)五三九八  
佐藤産科婦人科醫院長  
明治七年一二月生、私田縣

本邦産科婦人科専門醫の泰斗として聲望ある氏は、私田縣士族、醫師佐藤尙齋氏の二男で、山口高等學校を経て明治三十五年東京帝國大學醫科を卒業、直ちに同大學産科婦人科助手となり蘊奥を究めて同三十七年産科婦人科醫院を開業し、今日に至つてゐる。氏は會て東京府産婆試驗委員に推され又、町會長に選ばれて居町發展の爲めに貢献する處あつた。氏の著書甚だ多く、その主なるものに『科學的性慾觀』『美的衛生』『産婦人科問答』『雙體子宮妊娠三例』『過熱胎兒の一例』等あり、學界に竭せる功績枚舉に遑がない。氏は相撲、音曲等に趣味を持ち又、愛犬家である。  
夫人とし子、(簾内専八女)



重光

葵氏

麴町區霞ヶ關五、官舎内、電話銀座三六一四  
從四位、勳三等、法學士、外務次官  
明治二〇年七月生、大分縣

氏は大分縣士族重光直愿氏の二男、同族氏の實弟にして、同縣下に呱呱の聲を揚げ、後重光彦三郎氏の養子となつた。大學卒業後外交官試験及び文官高等試験に合格して直ちに外務省に奉職し、外交官補に任ぜられ、爾來大使館三等書記官、外務事務官、同參事官、同書記官、條約局第一課長兼航空局事務官、公使館一等書記官、總領事兼大使館參事官等を経て昭和六年八月中華民國駐劄特命全權公使に拔擢され偉功を樹て、更に外務次官に任ぜられて今日に及び、外交界の偉材として前途を囑望されてゐる。

養父彦三郎（嘉永五年生、現戸主）養母タネ（文久元年生、大分縣隈井範六妹）妻喜惠（明治三五年生、熊本縣士族林市藏長女）二男篤（大正一五年生）

佐藤 重遠氏

小石川區小日向水道町九三、電話小石川四三六

從五位、衆議院議員、目白商業學校理事長  
財團法人目白學園理事長  
明治二〇年一二月生、宮崎縣

氏は大正三年東京帝國大學法科政治科出

身の法學士で、大學卒業後、三菱合資、同商事會社に入り、後、北洋漁業株式會社の支配人となり、次で東京電燈株式會社主事駿豆鐵道株式會社社長、大和海上保險株式會社社長等に任じ又、加藤友三郎内閣當時大藏大臣秘書官に擧げられ、從五位に叙せられた。大正十三年以來、衆議院議員當選三回、現に政友會所屬代議士である。氏は又、私立城北學園を經營し、其他目白商業學校等の理事長を勤め、公私多事多端の身克く育英事業に貢献しつゝあり、當代得難き人格者である。趣味は歴史哲學と柔道で殊に柔道は講道館二段の達人である。信仰は日蓮宗。

夫人ふゆ子女史は政界の巨頭、現鐵道大臣床次竹次郎氏の二女、明治三一年生、御茶水高等女學校卒業の才媛である。

佐藤 順造氏

牛込區市ヶ谷三ノ八、電話牛込(35)三三三〇

日本婦女通信社社長  
明治五年一〇月生、岐阜縣

氏は飛騨國古川町の素封家として知らるゝ佐藤泰郷氏の六男で、大正四年に分家した。之より先、第一高等學校を卒業するや富山房編輯部に入り、次で人民新聞、國益新聞等に歴勤、縦横の健筆を揮ひ、後千葉

日報を創立して、その社長となつたが、間もなく日露戰役に從軍し凱旋後、四十五年六月、日本婦女通信社を創立、現にその社長たり。婦人の向上に盡せる功績尠からず聲望今や全國的に高い。尙、氏の夫人貞子女史は長野縣人小野利右衛門氏の三女で、上田高等女學校卒業の才媛であり大正十三年、芝婦人會館の常務理事となり、夫妻共に『新時代の女性』養成に専心努力を續けてゐる。

佐藤 乙二氏

牛込區市ヶ谷富久町官舎、電話 四谷三〇九五

從五位、勳四等、市谷刑務所長  
明治一四年五月生、千葉縣

氏は明治三十五年、和佛法律學校を卒業し、翌三十六年、二十三歳にして判檢事登用試験に優秀なる成績を以て合格したる秀才で、同三十八年判事に任じ、爾來十九年間各地の區裁判所並に地方裁判所判事に歴任したが、頭腦極めて明敏にして理解力に富み、幾多の重大事件に關與、克く之を處理して法曹界に俊秀の名を馳せ、大正十二年典獄となり、名古屋巢鴨所長を経て翌年現在の市谷刑務所長に榮轉した。氏は情理相盡して還善懲惡の實を擧げ、即 刑への目的たる『刑は刑さざらんが爲めの刑也』

との信條を以て職責の完璧を期し、免因保護事業のために盡せる功勞亦没すべからざるものあり名典獄として聲望が高い。氏の趣味は謡曲、俳句、弓術等で、殊に俳句は宗匠格の名人である。

夫人壽美子明治二二年生、長男誠、長女美津子、次女江津子

伊藤 重義氏

大阪市西區西長堀南二ノ六、電話 新町三三六

岡谷(資)鐵道營業部長兼支配人  
明治二五年八月生、名古屋

氏は愛知縣人伊藤延次郎氏の二男、夙に實業界に志し、明治三十七年岡谷合資會社に入社し、精勵、大いに同社の發展に努力し、認められて累進、昭和二年營業部長となり、次で支配人となり、現に其の職にある。篤學力行の人にして人格識見稀に見る信望家である。

盡し來れる氏の不撓不屈の努力は常人の及び易からざるものがある。宗教禪宗

夫人ゆき子明治三二年生（東京市中野勝鹿氏妹、東洋高等女學校卒業）長男惠士大正十二年生、長女典子大正一〇年生、二男裕士昭和二年生、尙、勇氏令兄衣笠豐氏は明治一四年生で正五位勳六等、醫學博士、衛生試驗場技師を勤めてゐる。

北村 勝文氏  
自宅、四谷區番衆町二七、電話四谷(35)二九五  
會社、麴町區丸ノ内三ノ二



族林市藏長女)二男篤(大正一五年生)

佐藤 重遠氏 小石川區小日向水道町  
九三 電話小石川 四三六

從五位、衆議院議員、目白商業學校理事長  
財團法人目白學園理事長

明治二〇年一月生、宮崎縣  
氏は大正三年東京帝國大學法科政治科出

との信條を以て職責の完璧を期し、免因保  
護事業のために盡せる功勞亦没すべからざ  
るものあり名典獄として聲望が高い。氏の  
趣味は謡曲、俳句、弓術等で、殊に俳句は  
宗匠格の名人である

夫人善美子明治二二年生、長男誠、長女  
美津子、次女江津子

北村 勝文氏 自宅、四谷區番衆町二七  
電話四谷(35)二九五  
會社、丸の内區丸の内三ノ二  
電丸内三〇七、二〇八、二〇九

栗林商船株式會社監査役、萬成汽船株式會  
社取締役  
明治八年八月生、長野縣

氏は長野縣士族、北村禎吾氏の二男とし  
て生れ、長じて分家し、有馬組合資會社に  
入つたが、大正四年之を辭し、同七年中川  
組の整理事務に携はり次で八年十二月栗林  
商船株式會社に入社、現在監査役として船  
船監督の要職に在り、尙萬成汽船株式會社  
の取締役を兼ねてゐる。趣味は研究、發明  
園藝等で、恒に新知識の吸収に努め、研究  
心極めて強き人格の士である。信仰日蓮宗  
夫人シン子明治二五年生。廣島縣田中熊  
太郎氏四女)長女とき子昭和六年一月生

日本婦女通信社々長 電話牛込(35)三三〇

明治五年一〇月生、岐阜縣  
氏は飛騨國古川町の素封家として知らる

、佐藤泰郷氏の六男で、大正四年に分家し  
た。之より先、第一高等學校を卒業するや  
富山房編輯部に入り、次で人民新聞、國益  
新聞等に歴勤、縦横の健筆を揮ひ、後千葉

伊藤 重義氏 大阪市西區西長堀南二  
ノ六、電話 新町三七六

岡谷(資)鐵部營業部長兼支配人  
明治二五年八月生、名古屋市

氏は愛知縣人伊藤延次郎氏の二男、夙  
に實業界に志し、明治三十七年岡谷合資  
會社に入社し、精勵、大いに同社の發展  
に努力し、認められて累進、昭和二年營  
業部長となり、次で支配人となり、現に  
其の職にある。篤學力行の人にして人格  
識見稀に見る信望家である。  
母はな(慶應元年生)兄義明(明治二〇  
年生、現戸主)妻琴女(明治三二年生、  
愛知縣人淺野福三郎二女)弟義治(同三  
五年生)

衣笠 勇氏 本郷區向ヶ岡彌生町二  
電、小石川(85)一八二〇

日本車輛製造株式會社東京支店支配人、兼  
營業課長  
明治一九年七月生、大分縣

氏は大分縣人衣笠佐六氏の五男として生  
れ、明治四十四年、東京高等商業學校專攻  
部を卒業して天野工場に入り、後日本車輛  
製造株式會社に轉じ、才腕を認められて營  
業課長に拔擢され、次で東京支店支配人に  
榮進、營業課長を兼任して今日に至つてゐ  
る。名利に超越し唯一意、同會社の爲めに

問各地の區裁判所並に地方裁判所刑事に歷  
任したが、頭腦極めて明敏にして理解力に  
富み、幾多の重大事件に關與、克く之を處  
理して法曹界に俊秀の名を馳せ、大正十二  
年典獄となり、名古屋巢鴨所長を経て翌年  
現在の市谷刑務所長に榮轉した。氏は情理  
相盡して還善懲惡の實を擧げ、即 刑への  
目的たる『刑は刑さくらんが爲めの刑也』

盡し來れる氏の不撓不屈の努力は常人の及  
び易からざるものがある。宗教禪宗  
夫人ゆき子明治三二年生(東京市中野勝  
鹿氏妹、東洋高等女學校卒業)長男惠士  
大正十二年生、長女典子大正一〇年生、  
二男裕士昭和二年生、  
尙、勇氏令兄衣笠豐氏は明治一四年生で  
正五位勳六等、醫學博士、衛生試驗場技師  
を勤めてゐる。

京極 友助氏 自宅、芝區神谷町一八  
電話芝(43)三二二二  
營業所、京橋越前堀三ノ  
一、二、三菱倉庫内  
電話京橋一五六、同六九二

郵船運輸株式會社常務監査役、東京通關運  
送株式會社監査役、京極事務所人夫請負並  
に運送業  
明治二七年四月生、鳥取縣

氏は鳥取縣人、桶谷庄藏氏の二男として  
生れ、後、東京府士族、京極主通氏の養子  
となり、大正七年家督を繼いだ、之より  
先、同六年東京高等商業學校を卒業し先づ  
久原礦業會社に入社、翌年退いて京極事務  
所を設けて運送業に従事、尙、郵船運送會  
社並に東京通關運送會社の各重役である。  
氏は俳句を唯一の趣味とし、忙中閑を偷ん  
では句作三昧に耽り、杜藻と號して既に宗



匠格の腕前を持つてゐる。

夫人喜美子明治二七年生（徳岡裕三郎氏長女、双葉高等女學校卒業）長女都子大正一四年生

木村 重治氏

杉並區阿佐谷五ノ一  
電話荻窪三五三一

正四位勳三等、立教大學經濟學部長  
明治七年五月生、奈良縣

氏は奈良縣人木村芳三郎氏の二男として生れ、明治二十六年、二十歳の折一家を創立、東京立教學院に學び、同二十九年同校高等専修科を卒へ、翌年、米國に留學し、ホバート大學及びハーバート大學を卒業、BA及びMAの學位を授けられ、後歐洲諸國を歴遊し、同三十七年歸朝、立教大學、臺灣協會專門學校、慶應義塾等に教鞭を執り、同四十二年山口高等學校教授に任じ、大正元年東京高等學校教授に榮轉したが、同八年、英語、社會學及史學研究の爲め再び米國に航し、歸朝後、東京商科大學豫科教授兼附屬商學專門部教授となり同十二年長崎高等商業學校長に榮進、昭和五年四月辭して母校立教大學經濟學部長に任じ、今日に至つてゐる。氏は研究心に富み、その蘊蓄正に學界の權威たるのみならず、人格亦極めて高潔にして蓋し現代教育家の典型

である。

夫人やゑ子明治二〇年生（愛知縣土族染川竹次郎氏長女）長男重義明治四一年生二男陽二郎大正元年生、長女靜子明治四三年生、二女英子大正四年生、三女邦子大正八年生

木戸 傳氏

自宅、麻布區森元町一ノ二七、電話赤坂一七八四  
事務所、銀座山口銀行五階、電話京橋一八三

明治三年八月生、長野縣

氏は東京高等工業學校機械科を卒業して明治三十一年、二十九歳の折、母校の助教に任じ後、芝浦製作所、高田商會等に歴勤、同三十五年、辨理士を開業して今日に至つてゐる。資性温厚、頭腦明晰、克く事理を辨へ、思慮亦周密且高潔なる人格者である。宗教禪宗、趣味圍碁。  
夫人みつ子明治五年生（鹿兒島縣人山口たけ子妹）長男保一郎明治四〇年生（慶應大學法科出身）二男正大正元年生、（立教大學在學中）長女千代子明治三〇年生（辨理士市川寛夫人）二女ふさ子（工學士秋元不二三氏夫人）三女みき子四女みよ子、五女八千代子（孰れも他家

に嫁す）

菊本 俊二氏

麻布區弁町一七六  
電話青山(36)四四二六

明治三五年六月生、東京市

氏は生粹の江戸ッ兒で、菊本直次郎氏の二男として生れ、慶應義塾幼稚舎、同普通部を経て慶應大學豫科に入り、後、東京農業大學に轉じ、同大學高等學部を卒業したが、生來、數字を好み、獨學自修以て學界に嶄然一頭角を現はし頭腦の明晰なる敢て言を俟たず、曩に北豊島女子師範、關東女學校、淺草學院等に數學の教鞭を執り、現在市外澁谷町羽澤三十四番地に斯學の個人教授所を設けて初等より高等までの教授に任じ、傍ら淺草女子商業學校及び共立女子藥學專門學校等の教職に在り『家事數字』の創始者として知られ、現に之が體系を整へつゝある尙氏は遺傳學會、帝大化學會同農藝化學會、同農學會等に關與し又、山筭會幹事として現住地の町會にも盡心し高潔なる人格者として聲望あり、年齢未だ三十一、その將來を大いに矚目されてゐる。

新田清三郎氏

深川區木場町三ノ八  
電話 本所三三二九

勳八等、醫師、日本醫科大學囑託、東京市方面委員、借地借家調査委員、木場町會長、同町青年團長、同町警救隊長  
明治一七年四月生、岐阜縣

當家は代々醫を業とし連綿たる舊家に於て、就中祖父は家業の傍ら私塾を開いて近隣の子弟を教導し、嘖々たる名聲を馳せた。氏は幼時より祖父及び父の嚴格なる薰陶を受けて濟世救民の念燃ゆるが

南

弘氏

麹町區四番町官舎内  
電話 九段一二

從三位、勳一等、法學士、遞信大臣、貴族院議員  
明治二年一〇月生、富山縣

氏は富山縣岩間覺平氏の二男として同縣下に生れ、後南兵吉氏の養子となり大正五年その家督を相續した。大學卒業後文官高等試験に合格して直ちに官界に入り、内閣書記官、行政裁判所評定官、内閣書記官長、福岡縣知事、文部次官等に

明治二年一月生、私田縣

嘗て郷里秋田



縣及び北海道の各小學校に教鞭を執つた氏は、其後、實業界入り志し、明治四十五年、小樽

米穀取引所に勤め、大正四年に退職上京した。同八年中外證券信託株式會社の創立に



び米國に航し、歸朝後、東京商科大學豫科教授兼附屬商業專門部教授となり同十二年長崎高等商業學校長に榮進、昭和五年四月辭して母校立教大學經濟學部長に任じ、今日に至つてゐる。氏は研究心に富み、その蘊蓄正に學界の權威たるのみならず、人格亦極めて高潔にして蓋し現代教育家の典型

夫人みつ子明治五年生（鹿州島縣人山口たけ子妹）長男保一郎明治四〇年生（慶應大學法科出身）二男正次大正元年生、（立教大學在學中）長女千代子明治三〇年生（辨理士市川寛夫人）二女ふさ子、（工學士秋元不二三氏夫人）三女みき子四女みよ子、五女八千代子（孰れも他家

農藝化學會、同農學會等に關與し又、山笠會幹事として現住地の町會にも盡心し高潔なる人格者として聲望あり、年齢未だ三十一、その將來を大いに囑目されてゐる。

### 新田清三郎氏

深川區木場町三ノ八  
電話 本所三二九

勳八等、醫師、日本醫科大學囑託、東京市方面委員、借地借家調査委員、木場町會長、同町青年團長、同町警救隊長  
明治一七年四月生、岐阜縣

當家は代々醫を業とし連綿たる舊家に於て、就中祖父は家業の傍ら私塾を開いて近隣の子弟を教導し、嘖々たる名聲を馳せた。氏は幼時より祖父及び父の嚴格なる薰陶を受けて濟世救民の念燃ゆるが如く、夙に日本醫學校及び東京帝國大學醫科選科を卒業後、都下刀圭界に活躍すること多年、此の間營利を超越し常に國民の衛生保健に資することを天職として盡瘁した。一方木場町會長としては帝都に於ける模範町を建設し、或は方面委員其他の公職を兼ねて活躍し、或は地方より上京し學資に窮する青少年十數名を救濟し社會に活躍せしむる等、その美譽は枚擧に遑なく、當世稀れに見る慈善篤行の人格者として尊崇され、現時前掲各職を兼ねて益々社會公共の爲めに貢献しつゝある。

妻あさし（明治二九年生）長男榮一（大正六年生）兄藤次郎（現戸主）兄傳吉（明治二二年生）

### 南

#### 弘氏

麴町區四番町官舎内  
電話 九段一二

從三位、勳一等、法學士、遞信大臣、貴族院議員  
明治二年一〇月生、富山縣

明治二九年東京帝大法科卒業  
氏は富山縣岩間覺平氏の二男として同縣下に生れ、後南兵吉氏の養子となり大正五年その家督を相續した。大學卒業後文官高等試験に合格して直ちに官界に入り、内閣書記官、行政裁判所評定官、内閣書記官長、福岡縣知事、文部次官等に歴任し、大正元年貴族院議員に勅選された。昭和七年三月臺灣總督に親任されたが、同年五月齋藤内閣成立と同時に遞信大臣の印綬を帯び、非常時内閣の國務に處し以て今日に及んでゐる。

妻みさほ（明治八年生、養父兵吉長女）長男達（同三四年生）同妻千賀子（同四四年生、男爵小池正晃長女）長女權子（同三二年生内務事務官飯沼省一妻）

### 結城

#### 長治氏

自宅、本郷區元町一ノ七  
電話小石川（85）九〇九  
會社、同上、電話小石川一五五、四〇五、五九〇

株式會社結城盛報社專務取締役、年史刊行會々長

明治二年一月生、私田縣

嘗て郷里秋田

縣及び北海道の各小學校に教鞭を執つた氏は、



其後、實業界入り志し、明治四十五年、小樽

米穀取引所に勤め、大正四年に退職上京した。同八年中外證券信託株式會社の創立に際し入社して支配人となり、更に取締役を兼ね、同十一年退社、直ちに一株式店を經營したが、關東大震災の厄に遭ふて轉業新聞廣告界に投じ、結城盛報社を創立し現にその專務取締役である。盛報社の營業は時勢の恩恵を受けて逐年隆盛となり、昭和六年五月株式會社に組織を變更して業績大いに見るべきものあり、尙、氏は別業に年史刊行會の出版業を營み、昭和三年以來毎年「年史」を繼續刊行してゐる。氏は「天は自ら助くるものを助く」の金言を處世訓とし、基督教の熱心なる信仰家で、現に日本基督日本橋教會に於て長老の職にあり、頭腦極めて明敏にして才氣喚發、殊に文才あり、人格亦、玲瓏珠の如き君子人である。愛讀書は聖書。



夫人つな子明治三十一年一月生、長女昭子昭和三年九月生

南 茂氏 芝區濱松町四ノ一 電話芝二一〇三

讀賣新聞社(株) 出版部長、油商丸木商店(資)出資社員

明治二七年九月生 東京市 明治四五年日本大學法科卒業

氏は南初三郎氏の長男として生れ、校門を出て警視廳に入り、警部補に任せられ特別高等課に勤務して、思想刑事方面に熟なからざる功勞を残して昭和二年官を辭した昭和三年帝都主要新聞の一つたる讀賣新聞社に入社して、出版部主任となり、同五年同部長となり今日に及んで居り、卓越せる手腕は内外の克く知る所である。尙氏はその傍ら前記丸木商店の出資社員を兼ね、東京都實業界に驥足を伸さんとしつゝある。

夫人操(石川縣人橋本卯三郎氏長女)長男茂太郎大正八年生、長女雅子大正一一年生、二男茂人大正一三年生、三男茂久昭和六年生

水野已太郎氏

(自宅)市外馬込町三七六三、電話荏原二八〇九

(店舗)麴町内幸町、大坂ビルディング新館内、電話銀座二二二八同三三二四  
モンソン商會合資會社支配人  
明治十五年八月生、熊本縣

氏は熊本縣人水野直八氏の二男として生れ、後分家して一家を創立し、明治四十三年早稻田大學に入り商科を卒業して一年志願兵となり、陸軍三等主計に任じ、退役後大阪鐵工所に入り、縦横の才腕を揮つて營業刷新に努め、その功により倉庫課長に擢され、次で昭和二年モンソン商會に轉じ現在、その支配人として業務の發展向上に盡しつゝあり、資性瀟灑恬淡、玲瓏珠の如き人格の士である。趣味獵漁、

夫人つるえ子明治二五年生(熊本縣人宮崎平吉氏三女、熊本高等女學校卒業)長男浩一郎大正四年生、長女清子大正九年生、二女和子大正一二年生

清水 脩次氏 淺草區馬道一ノ一五 電話淺草(84)八五四

梅園本店主 明治一九年七月生、愛知縣

淺草は東京の坩堝であり、大衆のパラダイスである。觀音様を中心に種々雑多の娯樂機關、店舗が文字通り櫛比してゐる。先づ觀音様にお詣りして、目を娛ませ、さ

て最後に口腹を満さうとして適當な店を尋す時、甘黨の士の足は自然に我が梅園本店に向ふであらう。それ程に當店は有名である。抑々當家の創業は古く明治元年の頃に始り、初め梅園院の庫裏で開業した爲め梅園と稱し、昨今都下に流布される梅園名稱の本家であり、粟ぜんざい及び氷汁粉等は當店が元祖にして、又淺草公園にて最初に電燈及び瓦斯を使用した店である。當主脩次氏は先代ぶん女の入夫となつたもので氏が當店の經營に當るに及んで、いさゝかも由緒ある當店の名を辱しめず、益々その聲價を高めつゝ今日に及んでゐる。因に氏は木版を非常に愛好してゐる多趣味の人である。

夫人ぶん明治二十三年七月生

廣瀬 雄氏 瀧野川區田端五二二

從五位勳六等、東京府立第三高等女學校長兼教諭

明治七年二月生、金澤市 明治三六年東京高等師範學校卒業

氏は石川縣人渡邊蕃氏の二男として生れ幼少の折親籍に當る廣瀬家の死跡を再興して戸主となつた。明治三十六年東京高等師範學校卒業後直ちに東京府立第三中學校に

奉職、大正八年同校々長となり、昭和五年五月現職に轉じた。顧るに氏が府立第三中學校に勤續すること實に二十有八年に及んでゐる。光輝ある府立三中の歴史は氏によつて幾多の光彩を放ち、現代の社會に活躍してゐる各方面の人物で氏の薰陶を受けた者は、夥しい數に上つてゐる。三十年の歲月は長い、如何に動搖の少い教育界とは云へ、その半生以上に亘る年月を一つ校と運命を共にする人は稀である。それには確固

國際撞球選手、鈴籠撞球場主、鈴籠商店主 明治二十三年一月生、東京市  
室内スポーツの雄たる撞球は、今や世界の文明各國の凡ゆる階級を通じ、殊に社交界に於てはキューを手にはせざれば紳士の恥とまで稱せられてゐる。而してわが鈴木龜吉氏は斯道の大家として其の名は遍く全

早くも撞球に多大の趣味を有し、キューを握るや忽ち天稟の錚鏘を露し、更に積年に亘る苦心研究の結果、驚異的長足の進歩を來し、遂に他に比肩する者なき技量を會得した。又氏は渡米するや、我國の撞球界の幼稚にして且つ玉臺及球具の粗悪なるを嘆じて、多大の熱意を以て研究に没頭し、遂に理想的玉臺を發明し、之が販賣を開始して以來「鈴籠式玉臺」は全國フアンの熱狂的賞讃を博し、嶄然斯界に君臨するに至り、



夫人操（石川縣人橋本卯三郎氏長女）長男茂太郎大正八年生、長女雅子大正一一年生、二男茂人大正一三年生、三男茂久昭和六年生

### 水野已太郎氏

（自宅）市外馬込町三七六三、電話荏原二八〇九

### 清水 脩次氏

淺草區馬道一ノ一五  
電話淺草(84)八五四

梅園本店主

明治一九年七月生、愛知縣

淺草は東京の坩堝であり、大衆のバラダイスである。観音様を中心に種々雑多の娯樂機關、店舗が文字通り櫛比してゐる。先づ観音様にお詣りして、目を娛ませ、さ

從五位勳六等、東京府立第三高等女學校長兼教諭

明治七年二月生、金澤市

明治三六年東京高等師範學校卒業

氏は石川縣人渡邊蕃氏の二男として生れ幼少の折親籍に當る廣瀨家の死跡を再興して戸主となつた。明治三十六年東京高等師範學校卒業後直ちに東京府立第三中學校に

奉職、大正八年同校々長となり、昭和五年五月現職に轉じた。顧るに氏が府立第三中學校に勤績すること實に二十有八年に及んでゐる。光輝ある府立三中の歴史は氏によつて幾多の光彩を放ち、現代の社會に活躍してゐる各方面の人物で氏の薰陶を受けた者は、夥しい數に上つてゐる。三十年の歲月は長い、如何に動搖の少い教育界とは云へ、その半生以上に亘る年月を一つ校と運命を共にする人は稀である。それには確固たる信念と、衆望を擔ふべき人格がなければならぬ。府立三女に轉じてから日尙淺いが、氏の聲望は府立三中在任中に劣らず千餘の女學生から慈父のやうに

國際撞球選手、鈴龜撞球場主、鈴龜商店主  
明治二三年一月生、東京市  
室内スポーツの雄たる撞球は、今や世界の文明各國の凡ゆる階級を通じ、殊に社交界に於てはキューを手にはせざれば紳士の恥とまで稱せられてゐる。而してわが鈴木龜吉氏は斯道の大家として其の名は遍く全

敬慕されてゐる。斯く當代の教育者中、稀に見る高潔な人格の所有者である氏は、次の時代を作るべき青年子女を養ふ外に何の願望もない富貴を望まず、虚名を求めず、黙々と堅實な下積みの歩みを續けてゐる氏に、吾人は無條件に頭を下げる外はない。令閨タメ子夫人は日本女子大學出の才媛にして且つ貞淑の譽高く氏との間に淳雄、美子、千代子、静子の一男二女がある。

### 鈴木 龜吉氏

芝區櫻田和泉町八  
電話銀座(57)嬰丸、嬰二六

世界に聞え、曩に大正十二年渡米して幾多の巨豪を破つて全世界ジュニア選手權を獲得し、更に全世界オールド・チャンピオン・シップ・トーナメントに出場して赫灼たる雷名を轟かした。氏は鈴木新吉氏の長男として生れ、年齒僅か十歳にして



早くも撞球に多大の趣味を有し、キューを握るや忽ち天眞の鈍鎧を露し、更に積年に亘る苦心研究の結果、驚異的長足の進歩を來し、遂に他に比肩する者なき技量を會得した。又氏は渡米するや、我國の撞球界の幼稚にして且つ玉臺及球具の粗悪なるを嘆じて、多大の熱意を以て研究に没頭し、遂に理想的玉臺を發明し、之が販賣を開始して以來「鈴龜式玉臺」は全國フアンの熱狂的賞讃を博し、嶄然斯界に君臨するに至り、開業後業務は旭日の勢を以て發展して今日に及んで居り撞球を嗜む者にして「鈴龜」の名を知らぬ者は殆んどない程である。

### 關根 守治氏

麴町區元園町一ノ一六  
電話九段(33)二六三三

セキネ羅紗店主

明治六年一月生

身を凡ゆる苦楚の裡に試練して辛酸三十年、遂に初一念を貫徹した關根守治氏の半生に於ける奮闘史は、誠に一世の龜鑑たるべきものである。氏は茨城縣取手町の醫師として徳望高かつた故貞庵氏の長男として生れたが、不幸十九歳の弱冠にして父を失つた。茲に獨立自尊の霸氣を抱いて明治二十四年取手町に洋服商を創めた。後洋品、洋傘、靴、帽子、自轉車、貴金屬等販賣の



店を經營してゐたが、同三十七年上京して

(關根守治氏)



再び洋服商を營み、後羅紗商に轉じて英佛羅紗直輸入及び羅紗並に裏地附屬品を販賣した。麴町區麴町五丁目に堂々たる店舗を構へ、支配人に田中熾氏を推し、店員二十名を擁して汎く全國的に販路を有する當店今日の隆盛は、一に氏の不屈不撓の意志

(關根欣三氏)



と商機を把握するに敏なる頭腦の賜と云ふべきである。氏は篤く禪宗を信仰する傍ら、基督教をも研究してゐられる篤信家で、旅行を唯一の趣味としてゐる。

夫人こま明治一〇年生(茨城縣人染野彌吉氏二女) 養子欣三明治二三年生(長野縣人小菅慶治郎氏二男) 長女春子明治二九年生(養子欣三氏妻) 二女なか子明治三六年生(東北帝大出沼倉三郎氏妻) 外

の隆盛に盡したる功績は尠少でない。靜子夫人は加藤宗六氏の二女にして明治二十二年三月生れ、家庭は頗る圓滿である。

花柳章太郎氏

赤坂區丹後町四三三 電話青山(36)二一七九

俳優

明治二七年五月生、東京市

氏は青山章作氏の長男として日本橋區に呱呱の聲を擧げた。幼時より演劇に興味を有し明治四十年二月東京座に於て新派大合同劇の上演したる時新界で第一歩を踏み

孫に幸子、修、猛、宏、馨がある。

市川 紅梅嬢

麴町區平河町六ノ二四 電話九段(33)一八〇九

舞踊家

大正二年二月生、東京市



舞踊界の新進花形たる嬢は我が歌舞伎劇界の名門、市川宗家の人にして、嚴父は歌舞伎劇界に活躍しつゝある市川三升氏、母堂は故名人九代目團十郎の長女堀越實子即ち現市川流舞踊宗家市川翠扇女史である。此の名門に生れたる女史は先天的に藝術の才に恵まれ、加ふるに幼時より母堂の薰陶を受けて舞踊に長じ、夙にその前途を囑望されるに至つた。昭和四年六月歌舞伎座に於て「戻り駕籠」の雫を勤めたるを初舞臺として劇界に入つたが、病氣のため退き、以來専ら舞踊の研究に没頭して技大いに進み、母堂と共に各所に出演して妙技を發揮し普く斯界に名聲を博した。昭和六年六月二十一日霞ヶ關離宮に於て、高松宮同妃兩殿下御歸朝歡迎の皇族御晩餐會の催されたる際、女史は翠扇母堂と

共に招かれ「山姥」「鞍馬獅子」等を台覽に供し、無上の光榮に浴した。爾來女史の名聲は益々高く、前途洋々たる舞踊家として將來の飛躍を期待せられてゐる、因みに女史は千代田高女の出身にして、趣味は演藝ゴルフ等である。

磯部 泰宏氏

牛込區神樂坂三ノ二 電話牛込(34)二六三二

新歌舞伎座支配人、日本化粧品(株)取締役 明治一九年三月生、東京市

氏は磯部物外氏の長男にして、神田區三崎町一ノ三に呱呱の聲を擧げた。夙に郁文館中學校に學び、卒業後直ちに實業界に入り、實直に業務に精勵して漸次信用を増し東京發動機會社庶務課長、川口鑄造會社支配人、忠北無盡會社支配人等を勤めて敏腕を揮ひ、昭和二年三月新宿の新歌舞伎座創立に際しては東奔西走してその實現に努め當初以來同座に關係し、現に參事支配人として同座の隆盛に貢獻しつゝある。氏は日蓮宗信者にして意志頗る鞏固、何事も素志貫徹せざれば止まざる氣魄に燃え、而も經營の才に富み、資性は温厚である。故に對内的にも對外的にも信望厚く、且つ文學演藝等に趣味を有するを以て、劇場支配人として適材であり、新歌舞伎座の創立以來そ

明治三五年二月生、東京市



氏は岡安派長

唄界の最古參者たる岡安喜三三郎氏の四男にして、本姓名を芳村榮藏と呼ぶ。幼時は岡安南甫

氏の口傳を受けつゝ嚴父の膝下に於て長唄の修業に勵み、十五歳の時四世吉住小三郎氏の指導を受け、劇場では出動せず、専ら



で、旅行を唯一の趣味としてゐる。

夫人は加藤宗六氏の二女にして明治二十二年三月生れ、家庭は頗る圓滿である。

花柳章太郎氏 赤坂區丹後町四三  
電話青山(36)二一七九

俳優 明治二十七年五月生、東京市

氏は青山章作氏の長男として日本橋區に  
呱々の聲を擧げた。幼時より演劇に興味を  
有し明治四十年二月東京座に於て新派大合  
同劇の上演されたる時斯界に第一步を踏み  
翌年一月本郷座に於て「雪子夫人」の上演  
に際し「小僧雪松」として出演したのを初  
舞臺とし、以來新派劇界に在つて伎倆の研  
磨に努力すること多年、或は帝都の各劇場  
に出演し、或は各地方に巡業して活躍し、  
其の藝風は年と共に洗練されて人氣を博し  
新派劇界の花形として謳はれるに至つた。  
當り役は「大尉の娘」の「露子の親の不良」  
「戀ごろも」の「妹美代子」「金色夜叉」の  
「貫一」、「二筋道」の「藝妓桂子」等であ  
る。趣味は繪畫、人形、スポーツ、演藝關  
係其他一般の讀書等である。

岡安 榮藏氏 牛込區拂方町二五  
電話牛込(34)二三五九  
長唄新珠會々主、岡安ひよく會々主

年六月歌舞伎座に於て「戻り駕籠」の香を  
勤めたるを初舞臺として劇界に入つたが、  
病氣のため退き、以來専ら舞踊の研究に没  
頭して技大いに進み、母堂と共に各所に出  
演して妙技を發揮し普く斯界に名聲を博し  
た。昭和六年六月二十一日霞ヶ關離宮に於  
て、高松宮同妃兩殿下御歸朝歡迎の皇族御  
晩餐會の催されたる際、女史は翠扇母堂と

明治三五年三月生、東京市



氏は岡安派長  
唄界の最古參者  
たる岡安喜千三  
郎氏の四男にし  
て、本姓名を芳  
村榮藏と呼ぶ。

氏の口傳を受けつゝ嚴父の膝下に於て長唄  
の修業に勵み、十五歳の時四世吉住小三郎  
氏の指導を受け、劇場には出勤せず、専ら  
門弟の教養に精進し以て今日に及んでゐる  
前記の會を主宰する外、岡安派同志會の主  
事に擧げられ、又岡安會、岡安常盤會等に  
出勤し、岡安系の新進として名聲を博して  
ゐる。作詞及作曲十數曲に達し、就中「抒  
情小品」數種及び「軍神乃木將軍」(上下二  
篇)、「擊滅」等は名曲として夙に普く斯界  
に認められてゐる。信仰は日蓮宗、趣味は  
俳句、川柳、長唄の作詞作曲等である。  
夫人喜千俊(本名敏江)明治四十年三月  
生、長男新太郎昭和二年四月生、長女美  
喜子大正十四年八月生

渡瀬雅太郎氏 澁谷區美竹町三八  
電話青山一〇五八  
東京興農園(株)社長

當初以來同座に關係し、現に參事支配人と  
して同座の隆盛に貢献しつゝある。氏は日  
蓮宗信者にして意志頗る鞏固、何事も素志  
貫徹せざれば止まざる氣魄に燃え、而も經  
營の才に富み、資性は温厚である。故に對  
內的にも對外的にも信望厚く、且つ文學演  
藝等に趣味を有するを以て、劇場支配人と  
して適材であり、新歌舞伎座の創立以來そ

嚴父故渡瀬寅次郎氏は、北海道帝大の前  
身札幌農學校第一期卒業生にして本邦最初  
の農學士である。明治十三年同校卒業後北  
海道開拓使御用係を拜命し、其の翌年現北  
海道農會の前身たる北海道勸農協會を設立  
した。明治十七年農商務省御用係となり、  
同十九年茨城縣立中學校長、同二十一年茨  
城師範學校長に就任して縣下教育界の發展  
に努力する傍ら、勸業施設の改良に關し縣  
知事を輔佐して縣下の産業振興に貢献した  
同二十二年本邦農業の振興に畢生を獻ぐる  
大抱負の下に、斷然教育界を去り、同年八  
月大日本農會幹事に特選され、同二十四年  
同會學藝委員、同二十五年常議員に選ばれ  
晩年に至るまで學藝委員及常議員として、  
本邦農界の發達に盡瘁し功績顯著なるもの  
があつた。一方明治二十五年以來、區會議  
員、市會議員、市參事會員其他市關係の各  
種委員に選ばれて帝都自治に貢献し、大正  
三年東京市長より金杯を授與されて功績を  
表彰された。東京興農園の創設も亦帝國農  
業の發展に資し國産の振興に貢献せんとす  
る素志に基けるものにして、明治二十五年  
赤坂區溜池に創立し、先づ第一着手として  
優良種苗の普及に努め、本邦在來の種苗改  
善に成功するや、續いて各種改良農具の製



造販賣を開始し、優秀機械を歐米より輸入紹介すると共に考案改良を加へ自ら製造し以て農業の發達に貢献した。彼の害虫及病害菌驅除噴霧器の普及の如きは其の最も顯著なる一例である。其後札幌に改良蔬菜の採種場札幌農園を開設し、靜岡縣田方郡西浦村に柑橘園を拓き、澁谷町に分店を設置し、或は興農雜誌及農學講義録を發行する等、只管本邦農業の啓發に努め、大正十五年株式組織に改めて以來益々活躍以て現在に及んでゐる。而して創設者寅次郎氏の没後は長子雅太郎氏が兩弟と共に遺業を繼承したが、氏は温厚篤實而も經營の才に秀で、克く同園を主宰して依然我が農業界の進展に貢献し、今や社運益々隆盛に赴きつゝある。

若柳 吉藏氏

日本橋區蠣鼓町三ノ八  
電話浪化(67)三五〇〇

舞踊若柳流家元、若柳會々主

明治一二年六月生、東京市

氏は本姓名竹内孝太郎と謂ひ、明治落語界の巨人初代三遊亭圓遊(本名竹内金太郎)の長男として小石川區小日向水道町に生れた。幼時より舞踊を好み、先代家元即ち若柳流創始の名人若柳壽童氏の門下となつた。壽童氏は深く氏の藝才を愛し、氏も亦之に

感激して只管修業に勵み、十七歳の時若柳吉藏の名を許され、三十九歳の時恩師の逝去に遭ひ遺族及一門に推されて二代家元を襲ぎ爾來門弟の養成と斯流の普及に努力の効空しからず、今や門下



名取二百餘名、若柳流は全国各地は勿論、滿鮮方面に迄普及され、舞踊界の一大勢力となつた。現時は名取門弟の組織する若柳會、及び幹部門弟の組織する日本舞踊研究會等を主宰し、又日本舞踊協會の専務理事に選ばれ、本邦特有の藝術たる日本舞踊の普及發展に努力し、名實共に斯界の重鎮として普く認められてゐる。趣味は寫眞、骨董等。

夫人竹内和歌明治二〇年一月生、長男進(藝名若柳吉男) 大正二年十月生、二男正次大正十年八月生(小學校在學)

川瀬 順輔氏

四谷區箕輪町九五  
電話四谷(35)四六七六

琴古流尺八、竹友社家元

明治三年一〇月生、山形縣

氏は山形縣人川瀬堅藏氏の長男として山

形市香澄町に生れた。家は代々水野藩に仕へたる名門にして、氏も幼時は嚴格なる武士道的教育を受けたが、青年時代一家悲境に沈倫するや決然として音樂界に投じ、十七歳の時



諸國遍歴の虚無僧柳原三虛山に師事して尺八を學び、二十一歳の時上京して先代荒木古童の門に入り更にその後尺八樂譜附眞法の創始者なる名手上原虚洞の教へを受け、日夜尺八の研究に精進して斯技の蘊奥を究めたが、尙ほ進んで自己の藝術を完成すべく三十一歳の時飄然諸國行脚の途に上り、全國を遍歴して技倆の洗練に努むること約二ケ年、三十三歳の時歸京した。爾來斯技の普及發展に努め、門弟の養成に意を注ぐこと多年、就中教授法に於て在來の習慣を打破し、拍子附點法の宣傳及新譜の普及に努力して、樂譜形式統一に貢献せる功績は没す可らざるものである。後竹友社を創設して其の家元となり以て今日に及んで居るが、竹友社の門人は全國到る所に在つて獨特の藝風を保持し、本邦尺八界に異彩を放つてゐる。趣味

として特に書を好み亦頗る達筆である。里子夫は牛田流箏曲及三絃の名手として其名高く、氏が今日の大成はその内助の功に俟つ所尠少なからざるものがある。

兼康 祐悅氏

本郷區本郷三ノ一〇  
電、小石川(85)一七二二

かねやす店主

明治四〇年八月生、東京市

當家は「本郷も兼康までは江戸の中」なる句に讀まれ、或は義士堀部安兵衛が其の

男にして幼名を一雄と呼び、祐悅として十代目である。

母菊江四十九歳、夫人とし明治四一年二月生(日本橋區馬喰町四宮本庄七三女 日本橋高女卒)

高瀬 寅昌氏

下谷區中根岸四六  
電話下谷(83)七〇六一

日本興業(株)常務取締役、大門館(株)専務取締役、淺草興行組合評議員、淺草借地人

會理事

ざる動を樹てた。其の後東洋漁業、日本隧道等に關係したが、活動寫眞の前途に着眼し、斯界の先覺者横田永之助氏と相謀り日本興業株式會社を創立し、爾來専ら同社の發展を策し、昭和二年映畫殿堂富士館を新築し、同六年神田日活館を買収して七十五萬圓に増資した。かくて現に同社常務として該館の經營に當る外、大正十年頃より大門館の専務として活躍し、或は淺草興行組合の評議員等を兼ね、本邦映畫の發達に貢



舞踊若柳流家元、若柳會々主  
明治一二年六月生、東京市

氏は本姓名竹内孝太郎と謂ひ、明治落語界の巨人初代三遊亭圓遊(本名竹内金太郎)の長男として小石川區小日向水道町に生れた。幼時より舞踊を好み、先代家元即ち若柳流創始の名人若柳壽童氏の門下となつた。壽童氏は深く氏の藝才を愛し、氏も亦之に

夫人竹内和歌明治二〇年一月生、長男進(藝名若柳吉男) 大正二年十月生、二男 正次大正十年八月生(小學校在學)

川瀬 順輔氏 四谷區笹野町九五 電話四谷(35)四六七六  
琴古流尺八、竹友社家元  
明治三年一〇月生、山形縣  
氏は山形縣人川瀬堅藏氏の長男として山

として特に書を好み亦頗る達筆である。里子夫は生田流箏曲及三絃の名手として其の名高く、氏が今日の大成はその内助の功に俟つ所尠少なからざるものがある。

兼康 祐悅氏 本郷區本郷三ノ一〇 電話小石川(85)一七二二  
かねやす店主

明治四〇年八月生、東京市

當家は「本郷も兼康までは江戸の中」なる句に讀まれ、或は義士堀部安兵衛が其の看板を揮毫した事などに依つて江戸以來有名なる老舗である。丹波氏の後裔にして鼻祖鍼博士丹波康頼十四世の孫冬康は、口齒科に長じ典藥頭に任ぜられ、花園帝の御齋齒を治療し參らせて名を擧げ、其孫兼康も亦口齒科に秀で典藥頭に任ぜられ晩年剃髮して兼康を姓とした。以後代々典藥頭に任ぜられ、兼康五代の孫頼元は一族の加茂玄泰(號は安齋)を養嗣としたが、玄泰も亦齒術を學び口齒科に長じ、家康の名と同字であることを憚つて兼康姓を改め、余保姓を名乗つた。其の後再び兼康姓に復し、歴代當主は何れも祐悅の名を繼いでゐる。明治初年「かねやす」を屋號とし又化粧品及小間物をも副業的に商つたが、漸次之を本業とするに至つた。當主祐悅氏は先代の長

男にして幼名を一雄と呼び、祐悅として十代目である。

母菊江四十九歳、夫人とし子明治四一年一月生(日本橋區馬喰町四宮本庄七三女 日本橋高女卒)

高瀬 寅昌氏 下谷區中根岸四六 電話下谷(83)七〇六一  
日本興業(株)常務取締役、大門館(株)専務取締役、淺草興行組合評議員、淺草借地人會理事  
慶應二年一月生、岩手縣



高瀬家は代々南部藩に仕へたる名門である。氏は岩手縣花巻に生れ、明治十八年單身上京して明治法律學校

に學び、後法政大學の前身和佛法律學校に轉校した。同校卒業後岡本監輔等の發起に係る千島義會に参加したが、明治二十六年小笠原島に渡航し更に同地より米國密獵船に乗船して桑港に渡り、外國密獵船の組織方法及裝置構造等を具に研究し、歸朝後榎本農商務大臣に建白して獵虎臘肭獸獵法發布の動機を作り、我が漁獵上に没すべから

ざる動を樹てた。其の後東洋漁業、日本隧道等に關係したが、活動寫眞の前途に着眼し、斯界の先覺者横田永之助氏と相謀り日本興業株式會社を創立し、爾來専ら同社の發展を策し、昭和二年映畫殿堂富士館を新築し、同六年神田日活館を買収して七十五萬圓に増資した。かくて現に同社常務として該館の經營に當る外、大正十年頃より大門館の専務として活躍し、或は淺草興行組合の評議員等を兼ね、本邦映畫の發達に貢獻しつゝある。

家庭には夫人徹子(府立第一高女卒)長女昌子(同)養嗣子七郎(早稻田工業學校出身、日活動務)孫久子、同隆昌の諸氏がある。

高木 民藏氏 芝區田村町二二 電話芝(43)二九二一  
浪曲家(藝名) 木村友衛  
明治三三年生、横濱市



帝都浪曲界に明星視され令名噴々たる氏は、神奈川縣人高木乙藏氏の三男にして横濱市に呱呱の聲を擧げた



幼時より音曲に興味を有し、加ふるに性來頗る美音であつた爲め浪曲界雄飛を志し、斯界の重鎮木村重友の藝風を慕つてその門下となつた。入門後は一意専心藝の洗練に努め、伎倆日を逐ふて上達し、僅かに三ヶ月にして眞打に昇進した、かくの如き短期間に於て眞打に昇進したるは實に異例である。爾來或は帝都の大劇場、寄席等に開演し、或は各地方を巡業して益々伎倆を磨き其の滋味のある藝風と洗練された曲節、及び天性の美音は相俟つて氏の聲價を高め、逐年人氣を博して斯界の花形として普く認められるに至つた。得意は「鹽原太助」「河内山宗俊」等にして、コロンビヤ、ビクタ一等のレコードに吹込みたるもの數十種に達し、何れも好評を博してゐる。因みに信教は日蓮宗、趣味は盆栽、野球、讀書等である。

夫人ふく明治三十四年生、長男建也十五歳（日本中學在學）長女妙子四歳

中尾 都山氏 赤坂區表町三ノ三二 電話青山(36)一七六

都山流尺八家元

明治九年一〇月生、大坂府

氏は大阪府人中尾次郎氏の二男、本名を琳三と呼び、同府北河内郡枚町大字岡新町

に呱々の聲を擧げた。同家は同地方屈指の醬油醸造家として知られ、亦町内有數の素封家である。母



堂三都子女史は箏曲の大家寺内檢校の女にして斯技に秀で、又平曲前田流の家元であつた關係

上、幼時より音樂的雰圍氣に育まれ、十五歳の頃には既に尺八を好くし、二十一歳の明治二十九年二月大阪市天滿に指南所を開いた。爾來其の天稟の才は日を逐ふて認められ、幾許ならずして關西一圓を風靡し更に全國的に波及して琴古流に拮抗し尺八界二分の勢力を有する至つた。氏は夙に藝術家としての社會的使命感を自覺してその貫徹に努め、大正四年には日露親善の目的を以て露都レーニングラード及モスコを訪問し、病傷兵を慰撫して皇室、大臣、市長等より感謝状を贈られたが、此の種の慈善行爲は常に氏の好んでなす所である。明治四十一年以來尺八樂譜を創成すること實に二百曲に及んでゐるが、斯道將來の指標を確立するため絶えず訂正に努め、尺八を以て日本音樂の代表的なるものとして世界的に

普及し、且つ永遠に後世に貽す大抱負を以て一意斯界に勇往邁進しつゝある。

長崎 安衛氏

四谷區新宿三ノ四五 電話四谷(35)二四一五

吾妻パー經營主

明治六年一月生、長野縣

氏は夙に東京高等蠶糸學校に學び、卒業後郷里長野縣を始めとし新潟、山形等各縣に技手として勤務し、養蠶の發達に貢献しつゝあつたが、後辭して上京し、大正十一年現在の地に吾妻パーを開業した。當時新宿は尙ほ場末街として現在の如き隆況なく創業當初は經營難を告ぐる状態であつたが氏は刻苦努力誠實本位を以て顧客の吸収に意を注ぎ、良品廉價主義をモットーとして奮闘の結果、漸次その存在を認められ、加ふるに大震災後新宿の繁榮に伴ひて業務日に榮え、遂に現在の隆況を呈するに至つた而も氏は現況を以て尙ほ康んぜず、一大發展を期して經營の衝に當りつゝある。

夫人ハナ子（犬養太金治長女）長男良知 明治四〇年生、二男春男、長女ツボ明治四四年生

野口兼次郎氏

下谷區西黒門町二三 電話下谷(83)四二五四

能樂家、寶生流仕手方

明治一二年一〇月生、東京市

當家は先々代以來能樂に携はり、氏は先代榮助氏の長男である。下谷區御徒町に呱々の聲を擧げ、幼名を政吉と呼んだが、三代目襲名と共に兼次郎と改めた。幼時より祖父正兵衛氏に就いて能樂を學び、長ずるに及んで斯界の泰斗寶生九郎、大野時太郎兩師の門下となつて修練を積み、寶生流謡曲の蘊奥を究めて名聲を博するに至つた。七歳の時能樂堂に於て初舞臺を勤めて以來今日に至るまで名譽ある演能は殆んど放棄

縣富士郡に生れた。明治十七年上京し精白米商に携はつたが、明治二十七年日清戰爭起るや臺灣に亘つて軍務に服し、續いて日露戰爭の際には東京砲兵工廠に入り、戰爭終熄に至るまで約一ヶ年半年同工廠に在つて恪勤精勵した。砲兵工廠を辭するや直ちに現在の地に割烹業を開始し、何等の實驗なきに拘らず、努力奮闘以て着々基礎を築き、「不二川」の名聲は漸次斯界に認められ、顧客の信望を得て日に盛大に赴き、現今の

麵町區に生れた。明治二十年海軍々樂隊に入り、翌年陸軍々樂基本隊に轉じ、専らパルトンの研究に従事した。其の後軍隊を退き神戸居留地の音樂隊、大阪及京都兩市の音樂隊等の組織に努め、更に横濱グランドホテル東洋汽船會社の音樂隊創設に貢献し明治三十一年東京に還り自ら音樂家の養成に努め、多數の門下生が漸次斯界に發展し行く狀を眺めて無上の怡樂としてゐる。現時斯界に活躍しつゝある中堅の樂師は殆ん



夫人ふく明治三十四年生、長男建也十五歳（日本中學在學）長女妙子四歳

中尾 都山氏

赤坂區表町三ノ三二  
電話青山(36)一七六

都山流尺八家元

明治九年一〇月生、大坂府

氏は大阪府人中尾次郎氏の二男、本名を琳三と呼び、同府北河内郡枚町大字岡新町

以て露都レニングラード及モスコを訪問、病傷兵を慰撫して皇室、大臣、市長等より感謝状を贈られたが、此の種の慈善行爲は常に氏の好んでなす所である。明治四十一年以來尺八樂譜を創成すること實に二百曲に及んでゐるが、斯道將來の指標を確立するため絶えず訂正に努め、尺八を以て日本音樂の代表的なるものとして世界的に

而も氏は現況を以て尙ほ康んぜず、一大發展を期して經營の衝に當りつゝある。  
夫人ハナ子（犬養太金治長女）長男良知  
明治四〇年生、二男春男、長女ツボ明治四四年生  
野口兼次郎氏 下谷區西黒門町二三  
電話下谷(83)四二五四  
能樂家、寶生流仕手方

明治一二年一〇月生、東京市

當家は先々代以來能樂に携はり、氏は先代榮助氏の長男である。下谷區御徒町に夙々の聲を擧げ、幼名を政吉と呼んだが、三代目襲名と共に兼次郎と改めた。幼時より祖父正兵衛氏に就いて能樂を學び、長ずるに及んで斯界の泰斗寶生九郎、大野時太郎兩師の門下となつて修練を積み、寶生流謡曲の蘊奥を究めて名聲を博するに至つた。七歳の時能樂堂に於て初舞臺を勤めて以來今日に至るまで名譽ある演能は殆んど枚擧に違がないが、就中明治大帝並照憲皇太后陛下の御前演能、及び大正四年御大典に際し、華族會館に於て大正天皇の御前に演能したるが如きは、其の最も光榮とする所である。多年研鑽して練磨せる氏の技倆は夙に圓熟の域に達し、老練の藝風は寶生流仕手方の間に普く認められ、帝都能樂界の重きをなしてゐる。趣味は書畫、骨董等。家庭にはツル子夫人、長女和枝（高女在學）の兩女史があつて頗る圓滿である。

久能銀次郎氏

四谷區新宿一ノ一三  
電話(代)四谷(35)五八二

割烹「不二」經營主

明治八年八月生、静岡縣

氏は静岡縣人久能庄七氏の長男として同

縣富士郡に生れた。明治十七年上京し精白米商に携はつたが、明治二十七年日清戰爭起るや臺灣に亘つて軍務に服し、續いて日露戰爭の際は東京砲兵工廠に入り、戰爭終熄に至るまで約一ヶ年同工廠に在つて恪勤精勵した。砲兵工廠を辭するや直ちに現在の地に割烹業を開始し、何等の實驗なきに拘らず、努力奮闘以て着々基礎を築き、「不二」の名聲は漸次斯界に認められ、顧客の信望を得て日に盛大に赴き、現今の活況を呈するに至つた。是れ實に氏の獨立獨歩主義と不斷の健闘の報ひであるが、此の間に在つて夫人の内助の功も亦甚大なるものであつた。氏は先天的に發明考案の才に秀で、又發明考案を以て無上の趣味とし現在までに發明考案したるものは數十種に達してゐるが、就中日露戰役前卷煙草製造機を考案し、現時專賣局に於て使用しつゝある機械の基礎をなしたるは、最も顯著なる功績である。

山田榮次郎氏

下谷區入谷町二七二  
電話下谷(83)三一六七

音樂家、東京音樂師會々長、日本ミュージックシャン協會々長、入谷町會幹事

明治三年五月生、東京市

氏は舊土井藩士山田豐次氏の二男にして

麴町區に生れた。明治二十年海軍々樂隊に入り、翌年陸軍々樂基本隊に轉じ、専らパルトンの研究に従事した。其の後軍隊を退き神戸居留地の音樂隊、大阪及京都兩市の音樂隊等の組織に努め、更に横濱グラントホテル東洋汽船會社の音樂隊創設に貢献し明治三十一年東京に還り自ら音樂家の養成に努め、多數の門下生が漸次斯界に發展し行く狀を眺めて無上の怡樂としてゐる。現時斯界に活躍しつゝある中堅の樂師は殆んど氏の教へを受けたる者であり、又我國に於ける音樂隊の主腦部に活躍しつゝある者は大部分氏の門下生であると謂はれてゐる。以て氏が斯界に貢獻せる功績の如何に甚大なるかは容易に想像される。現在は前記の要職に在つて依然として樂員の養成に努むる傍ら、町自治公共事業等にも盡瘁しつゝある。信仰は眞宗、趣味は刀劍、盆裁、書畫等である。

山田徳兵衛氏

淺草區茅場町一丁目  
電話淺草(84)四三八〇

吉徳商店々主

雛人形界に名聲噴々たる當商店は、今を距る二百三十餘年前の正徳年間、初代吉野屋治郎兵衛の創設に係り、爾來連綿として當代に傳はる斯界屈指の老舗である。開業



當初は附近一帯に蘆茅生ひ繁る寂寥の地であつたが、淺草觀音參道に面したる爲め將軍が觀音參詣の途すがら當店に駕を枉げ、「吉野屋」の屋號を賜はつた。故に吉野屋は由緒深き屋號であるが、人形商には同名の屋號を稱するもの多く紛らはしき爲め之を廢し「吉徳」の屋號に改め、店主は代々山田徳兵衛を襲名するに至つた。三月乃至五月の節句に雛人形を飾つて子女の前途を祝福する本邦古來の風習は、維新後一時衰へたが幾何もなく復興し、特に近年本邦獨特の美術として遠く海外に輸出されるに至り、當店製造の人形は「天光」と稱せられ廣く江湖に歡迎され、英、米、佛、布哇、支那、殖民地等へ輸出されつゝある。氏は由緒ある當商店の信譽を保持し時代の要求に副ふ優秀品の製出に意を注ぎ、斯界の權威西澤笛畝氏を顧問に聘し、店勢の擴張に努力しつゝある。

山崎敏太郎氏

丸ノ内仲十三番館山崎  
旅行案内所電話丸ノ内  
(23)四八二二

合資會社山崎旅行案内所社長兼東京營業所  
總務部長

明治一一年一二月生、鳥取縣  
明治三〇年關西學院卒業

氏は鳥取縣人故山崎初太郎氏の長男として鳥取市に呱呱の聲を擧げた。長じて大阪に出で、日本郵船會社に勤務の傍ら關西學院に學び、卒業後は會社を退いて神戸市に廻送業を創めたが、創業の才に富み機を見るに敏なる氏は在來の廻送業を墨守するに甘んぜず、本邦最初の試みたる海の旅行案内所を創設した。當初は微々として振はず一般の理解なきため利用者が少なかつたが氏は一意専心宣傳に努めたる結果、漸次利用者増加し、一方日本郵船會社にも認められて會社の專屬として指定され、東京、横濱、神戸、大阪、長崎等内地樞要の地は勿論、海外各地にも營業所を許けて業績大いに振ひ、各皇族、諸名士の海外旅行を始め一般にも盛んに利用されるに至つた。茲に於て氏は益々その規模を更新し、營業範圍を擴大し理想的案内所として旅行者の便宜を圖り、今や各方面より頗る便利なる機關として認められてゐる。

山崎 源吉氏

品川區五反田一ノ二五  
電話高輪五四八八

山崎塗料店々主、都汽船株式會社取締役  
明治一五生一〇月生、和歌山縣

氏は和歌山縣人山崎源一郎氏の長男として和歌山市に呱呱の聲を擧げた。和歌山中

學校卒業後は殆んど獨學にて勉強し、後上京して大正七年旭海上火災保險會社に入社したが、大正十二年退社して木材防腐劑の製造販賣を開始した。然るに幾何ならずして機械油の有望なるに着眼して直ちにその販賣を開始し、同時に各種塗料の製造販賣をも兼營した。是れ塗料界雄飛の端緒にして、創業以來品質の向上に努め、徒らに眼前の小利に拘泥せず、永久に顧客の信用を得ることを以てモットーとしたる同店の存在は、年を逐ふて普く認められ業績の進展著しく今日の隆盛を見るに至つた。かくて現今に於ては塗料製造の外諸油及防腐劑の販賣をも兼ね、一方都汽船株式會社の重役として帝都財界に確乎たる地歩を礎いた。夫人きつ明治一五年生（和歌山市井爪氏息女）三男穰明治四一年生、四男啓造同四四年生（青山學院在學）六男英夫大正九年生、長女縫子明治三九年生、養子定一同四〇年生

山本 宣喚氏

下谷區谷中三崎町一八  
電話下谷(83)一〇二二

山本 宣喚氏  
都文館中學校、同商業學校々長 東京高等  
女學校監事

萬延元年一月生、靜岡縣  
氏は維新の志士山本金次郎氏の長男であ

る。金次郎は勝海舟、木村攝津守等と共に佐幕派の頭目として活躍し、後維新の大業に參割して英名を謳はれた。氏は靜岡縣下に生れたが、夙に青雲の志を抱いて上京し明治義塾に學び、卒業後は東京英語學校教師、東京農林學校豫備校教頭、秋田縣立中學校長、群馬縣立中學校長、日本中學校教頭等に歴任し、明治三十七年に同志と共に東京高等女學校を創立する等、多年中等教育界に盡瘁し、現在も尙ほ郁文館中學校及

務見習として入り、精勵恪勤して重用せられた。明治二十七年徵兵検査に合格し、入營後間もなく日清戰爭勃發するや、支那各地に轉戦して武勇を現はし偉功を樹てた。同二十九年除隊後上京して獨力書畫骨董商を創め、爾來三十餘年一意専心美術に對する鑑識眼の養成練磨に努め、店勢の擴張發展に意を注ぎたる効果空しからず、夙に斯界に於ける權威を以て目せられるに至り、就中刀劍及茶器の鑑定に於ては斯界第一人

學んだ。獨法を専攻し、卒業後金融界雄飛を志して三菱銀行に入り、當初本店に勤務したが大正十一年北海道小樽支店に轉じ、支店長代理として同支店の發展に努力すること數年、昭和六年十月九ノ内第二支店に轉じ、支店長代理の要職に在つて活躍以て今日に及んでゐる。氏は性温厚、頭腦頗る明晰にして數理に長け銀行家として理想的タイプと稱せられ、行内外の信譽を博して將來の飛躍を期待されてゐる。ゴルフに趣



努力しつゝある。

### 山崎敏太郎氏

丸ノ内仲十三番館山崎  
旅行案内所電話丸ノ内  
(23)四八二二

合資會社山崎旅行案内所社長兼東京營業所  
總務部長

明治十一年一二月生、鳥取縣

明治三〇年關西學院卒業

を擴大し理想的案内所として旅行者の便宜  
を圖り、今各方面より頗る便利なる機關  
として認められてゐる。

### 山崎 源吉氏

品川區五反田一ノ三番  
電話高輪五四八八

山崎塗料店々主、都汽船株式會社取締役  
明治一五生一〇月生、和歌山縣

氏は和歌山縣人山崎源一郎氏の長男とし  
て和歌山市に呱呱の聲を擧げた。和歌山中

四四年生、青山學院在學、六男、長女、  
九年生、長女、縫子、明治三九年生、養子、  
一同四〇年生

### 山本 宣喚氏

下谷區谷中三崎町一八  
電話下谷(83)一〇一二

郁文館中學校、同商業學校々長、東京高等  
女學校監事

萬延元年一月生、靜岡縣

氏は維新の志士山本金次郎氏の長男であ

る。金次郎は勝海舟、木村攝津守等と共に  
佐幕派の頭目として活躍し、後維新の大業  
に參劄して英名を謳はれた。氏は靜岡縣下  
に生れたが、夙に青雲の志を抱いて上京し  
明治義塾に學び、卒業後は東京英語學校教  
師、東京農林學校豫備校教頭、秋田縣立中  
學校長、群馬縣立中學校長、日本中學校教  
頭等に歴任し、明治三十七年に同志と共に  
東京高等女學校を創立する等、多年中等教  
育界に盡瘁し、現在も尙ほ郁文館中學校及  
商業學校兩校の校長を兼ね、帝都中等教育  
界に重きをなしてゐる。嚴父の性格を享け  
て社會國家に奉仕する念に燃え、常に一身  
の榮譽を顧みずして公共に盡さんとする意  
氣肝なるものがある。従つてその子弟教  
育の方針も亦德育を主眼とし、眞に國家有  
用の材を養成することを以て目的とし、教  
へ子からは慈父の如く仰がれてゐる。

### 山本 力氏

日本橋區濱町一ノ二三  
電話浪花(67)二八二五

溼水堂々主、東京美術俱樂部(株)取締役  
明治八年一月生、大阪市

氏は山本勘兵衛氏の六男として大阪市堂  
島に呱呱の聲を擧げた。勘兵衛氏は維新前  
各藩の御用達を勤めてゐた。氏は幼少の頃  
より大阪屈指の支那貿易商福山文王堂に業

務見習として入り、精勵恪勤して重用せら  
れた。明治二十七年徵兵検査に合格し、入  
營後間もなく日清戰爭勃發するや、支那各  
地に轉戦して武勇を現はし偉功を樹てた。

同二十九年除隊後上京して獨力書畫骨董商  
を創め、爾來三十餘年一意専心美術に對す  
る鑑識眼の養成練磨に努め、店勢の擴張發  
展に意を注ぎたる効果空しからず、夙に斯  
界に於ける權威を以て目せられるに至り、  
就中刀劍及茶器の鑑定に於ては斯界第一人  
者の稱がある。尙ほ此の間東京美術俱樂部  
創立以來の重役として重きを爲してゐる。  
洪翠と號し又古溪の別號あり、三十年來常  
に新美術の考案に意を注ぎ、その考案にな  
れるものは必ず好評を以て斯界に迎へられ  
てゐる。

家庭にはシタ子夫人明治三三年生、西二  
明治三五年生、健一同四三年生等がある

### 山縣 稔氏

杉並區高圓寺六ノ七七

法學士、三菱銀行丸ノ内第二支店長代理  
明治二五年四月生、山口縣

大正七年東京帝國大學法科卒業  
當家は代々岩國町に住し毛利藩吉川家に  
仕へたる名門である。氏は岩國中學校卒業  
後京都第三高等學校を経て東京帝國大學に

學んだ。獨法を専攻し、卒業後金融界雄飛  
を志して三菱銀行に入り、當初本店に勤務  
したが大正十一年北海道小樽支店に轉じ、  
支店長代理として同支店の發展に努力する  
こと數年、昭和六年十月丸ノ内第二支店に  
轉じ、支店長代理の要職に在つて活躍以て  
今日に及んでゐる。氏は性温厚、頭腦頗る  
明晰にして數理に長け銀行家として理想的  
タイプと稱せられ、行内外の信望を博して  
將來の飛躍を期待されてゐる。ゴルフに興  
味を有し六實俱樂部員である。

家庭にはイン子夫人との間に長男穆五歳  
次男稱一歳、長女秀子九歳の二男一女が  
ある。

### 山岸 良雄氏

京橋區新榮町五ノ七  
電話京橋(56)一〇三六

山岸商會(株)取締役、長岡天然瓦斯(株)監  
査役

明治四〇年六月生、新潟縣

昭和五年慶應義塾大學經濟學部卒業  
先代喜藤太氏は新潟縣下屈指の實業家に  
して、幼時より努力奮闘遂に山岸商會を興  
し石油、鑛油及其の副産物の製造販賣、運  
送業、山林業等凡ゆる方面に活躍し、大正  
六年同商會を株式組織として業礎を鞏め、  
更に翌年長岡天然瓦斯株式會社を組織し、



山岸家の根柢を確乎たらしめた。氏は喜藤太氏の長男として長岡市に呱呱の聲を擧げ長じて慶應義塾に學んだが、之より先き大正十五年喜藤太氏の逝去後直ちに家督を相續し、卒業後は乃父の遺業を繼ぐべく兩社に關係して實務の修練に餘念なく、將來の飛躍を期待されてゐる。宗教は眞言宗、趣味はゴルフ。

母イシ明治一〇年一二月生（長岡市矢島安平二女）夫人ハルエ明治四二年生（高橋直治妹、お茶ノ水高女卒業）弟義太明治四三年生（慶大在學）姉キシ明治三八年生（府立第三高女卒）養子嘉二郎明治二九年生（經濟學士、安田貯蓄銀行深川支店長）

安田周三郎氏

澁谷區見町二ノ一七  
電話九段(33)二五八九

美術家

明治三九年七月生、東京市

昭和五年東京美術學校彫塑科卒業

嚴父安田善三郎氏は舊宇和島藩士伊豆忠一氏の長男に生れたが、故安田善次郎氏の養子となり、克く岳父を翼けて安田王國の建設に盡し、數十社の重役を兼ね、或は東京商業會議所特別議員、東京銀行集會所理事、生命保險協會理事等の要職に擧げられ

或は貴族院議員に互選せられ、財界政界に於ける處の功績赫々たるものがある。氏は善三郎氏の三男にして岩次郎氏の令弟、善五郎氏、善次郎氏、伊豆眞平氏等の令甥に當る。藝術的天分豊かにして又幼時より藝術に興味を有し、府立第五中學校卒業後その好める道に進むべく美術學校に入り、致々として研鑽の効空しからず優秀の成績を以て卒業したが、之を以て満足せず、斯道の蘊奥を究むべく目下自宅に於て專念研究に没頭しつゝあるが、斯界の新進氣鋭を以て目せられ、大いにその前途を期待されてゐる。

マサ子夫人明治四四年四月生（畑井新喜司氏長女）は米國に育ち、彼地に於て教育を受け、才媛の譽高く、家庭には長男紫氣郎昭和四年一月生、二男富郎昭和六年生の兩君がある。

丸岡 明氏 澁谷區穩田一ノ一二  
電話青山(36)四七二一

丸岡 明氏

澁谷區穩田一ノ一二  
電話青山(36)四七二一

觀世流改訂本刊行會々主  
明治四〇年六月生、東京市

觀世流改訂本刊行會の創立者たる先代桂氏の長男にして、氏の逝去後直ちに家督を相續し、刊行會主となつた。該刊行會は明治四十年の創立にして爾來逐年發展し、桂

た。女史は桂氏の室にして現同會主、明氏の母堂である。神田區に生れ、長じて渡邊裁縫女學校に學び、後丸岡家に嫁し先代桂氏を翼けて刊行會の基礎確立に内助の功があつたが、不幸桂氏の長逝に遭ひたるを以て、以來家業を繼ぎ幼主明氏を輔佐して専ら經營の衝に當り以て今日に及んで居る。此の間大正十二年大震災に見舞はれて一大打撃を蒙り、その再起をさへ疑はれたが、女史は健氣にも奮然再興を策し、店員を勵まして灰燼中に叫びを擧げ、遂に完全に復

つた日本女子商業に學び、卒業後藤島宇介氏に嫁した。然るに昭和五年藤島氏死去せるため、女史は健氣にも夫の遺業を繼承して其の經營の衝に當り、現に八十餘名の使用人を統轄し一意發展に



努力しつゝある。資性頗る温順であるが、而も獨立の精神に富み「獨立」を以て子女

氏の没後は氏の母堂てい女史の奮闘に依つて今日の隆盛を見るに至つたが、氏は會務一切を母堂に託し、慶應義塾文科に於て佛文學の研究に没頭する傍ら、餘暇を利用して創作に勵み、文藝春秋を始め各雜誌に發表し新進作家として前途を囑望されてゐる。みや子夫人は高知縣士族山川幸雄氏の三女にして文化學院出身の才媛である。洋畫を好くし、文學に興味あり氏と瑟琴相和してゐる。

妹文子明治四二年生（成蹊高女出身）は既に他に嫁し、家庭には母てい、妹臯月明治四四年生（東京女學館卒業）弟大二大正二年生（青山學院在學）同力大正六年生（青山學院在學）の諸君がある。

丸岡てい女史

澁谷區穩田一ノ一二  
電話青山(36)四七二一

出版業、觀世流改訂本刊行會

明治一八年九月生、東京市

當家は舊高知縣士族にして、先々代丸岡完爾氏は高知縣知事を勤めて令名を馳せた先代桂氏は夙に慶應義塾に學び、同校卒業後獨力を以て板倉屋書房を經營し「國家大觀」「國文大觀」等を出版して名を擧げ、明治四十年觀世流改訂本刊行會を起し觀世流謡曲本の出版を創め、今日の基礎を確立し

氏は土州藩士片岡孫五郎氏の二男にして高知縣高岡郡下半山町に生れ、明治三十二年分家した。幼時私塾に於て英語及漢學を修め、後高知陶治學校に學び、卒業後郷里に於て教鞭を執つたが、後自由民權運動に携はり高知立志社に加盟し、その後内務省に入り、累進して滋賀縣警察部長に任ぜられた。後實業界に轉じ保險業界に雄飛すると共に、明治二十五年以來代議士として政界に驥足を伸べ、大正十三年内務政務次官となり、同十四年



明治三十九年七月生、東京市  
昭和五年東京美術學校彫塑科卒業

嚴父安田善三郎氏は舊宇和島藩士伊豆忠一氏の長男に生れたが、故安田善次郎氏の養子となり、克く岳父を翼けて安田王國の建設に盡し、數十社の重役を兼ね、或は東京商業會議所特別議員、東京銀行集會所理事、生命保險協會理事等の要職に擧げられ

丸岡 明氏 澁谷區穩田一ノ二二  
電話青山(36)四七二一

觀世流改訂本刊行會々主  
明治四〇年六月生、東京市  
觀世流改訂本刊行會の創立者たる先代桂氏の長男にして、氏の逝去後直ちに家督を相續し、刊行會主となつた。該刊行會は明治四十年の創立にして爾來逐年發展し、桂

明治一八年九月生、東京市

當家は舊高知縣士族にして、先々代丸岡完爾氏は高知縣知事を勤めて令名を馳せた先代桂氏は夙に慶應義塾に學び、同校卒業後獨力を以て板倉屋書房を經營し「國家大觀」「國文大觀」等を出版して名を擧げ、明治四十年觀世流改訂本刊行會を起し觀世流謡曲本の出版を創め、今日の基礎を確立し

た。女史は桂氏の室にして現同會主、明氏の母堂である。神田區に生れ、長じて渡邊裁縫女學校に學び、後丸岡家に嫁し先代桂氏を翼けて刊行會の基礎確立に内助の功があつたが、不幸桂氏の長逝に遭ひたるを以て、以來家業を繼ぎ幼主明氏を輔佐して専ら經營の衝に當り以て今日に及んで居る。

此の間大正十二年大震災に見舞はれて一大打撃を蒙り、その再起をさへ疑はれたが、女史は健氣にも奮然再興を策し、店員を勵まして灰燼中に叫びを擧げ、遂に完全に復興したるのみならず、倍舊の繁榮をさへ見るに至つた。かくて現在には觀世流謡曲本は勿論、梅若流謡曲本をも出版して我が謡曲界の發達に資しつゝある。趣味は謡曲、和歌等にして共に堪能である。

藤島彌生女史

麻布區筭町克 電話青山二九四九(店)銀座一ノ三 電話京橋四四六二

酒神バツカス店主

明治二八年一〇月生、兵庫縣

日本女子商業學校卒業

女史は兵庫縣人由月喜之助氏の長女として同縣城ノ崎郡豐岡町外に呱呱の聲を擧げた。九歳の時家族と共に上京し、長じて嚴父の竹馬の友故和田垣博士が當時校長であ

つた日本女子商業に學び、卒業後藤島宇介氏に嫁した。然るに昭和五年藤島氏死去せるため、女史は健氣にも夫の遺業を繼承して其の經營の衝に當り、現に八十餘名の使用人を統轄し一意發展に



努力しつゝある。資性頗る温順であるが、而も獨立の精神に富み「獨立」を以て子女訓とし、如何なる苦しみをも征服することをも以て處世訓としてゐる。觀世音を信仰すること厚く、祖先を崇拜し、哲學、偉人傳記等を愛讀して精神修養に努めてゐる。趣味として一般音楽を好み、又音楽に關する造詣が頗る深い。

長男宇宙十三歳(府立第四中學在學)二男宇内八歳、三男宇策六歳

片岡 直温氏

京都市伏見區桃山町松平筑前、電話伏見四九  
東京市牛込區早稲田南町四、電話牛込元六

正四位、勳二等、貴族院議員、立憲民政黨總務  
安政六年九月生、高知縣

氏は土州藩士片岡孫五郎氏の二男にして高知縣高岡郡下半山町に生れ、明治三十二年分家した。幼時私塾に於て英語及漢學を修め、後高知陶治學校に學び、卒業後郷里に於て教鞭を執つたが、後自由民權運動に携はり高知立志社に加盟し、その後内務省に入り、累進して滋賀縣警察部長に任ぜられた。後實業界に轉じ保險業界に雄飛すると共に、明治二十五年以來代議士として政界に驥足を伸べ、大正十三年内務政務次官となり、同十四年商工大臣に親任され、更に同十五年大藏大臣に就任し、昭和二年四月挂冠した。

一方財界に於ても日本生命保險、日本郵船其他數社の重役を兼ねて斯界に雄飛すること多年に及び、昭和三年紺綬褒章を授けられ、同五年貴族院議員に勅選された。現時尙ほ民政黨の元勳として政界に重きをなしてゐる。

妻祝(慶應元年生、高知縣士族松原並枝姉)養嗣子安(明治九年生)二女申代(同一七年生、福岡縣久世庸夫妻)

藤永 義之氏

麴町區下一番町一九 電話九段(33)二七六八

藤永藥品商會主(丸ノ内仲通三二號館)  
明治三年九月生、長崎縣  
氏は夙に實業界に投じ、明治四十二年迄



十餘年間友田合資會社の代表社員として活躍したが、後同社を去り、大正十三年獨力を以て藤永藥品商會を創設した。創設以來優良藥品の普及に努めたる結果、漸次斯界に認められるに至り、現に鎮咳祛痰劑「フスタギン」皮膚病藥「グリテール」催乳劑「ママイン」等の發賣元として知られ、全國各地は勿論、殖民地、滿鮮方面にまで廣汎なる販路を有し、活況を呈してゐる。現在氏は同商會主として益々活躍を續け、創立以來同商會の基礎確立に貢献したる支配人櫻井千尋氏等克く會主を翼け、業績の向上に努力しつゝある。因みに氏の信仰は眞宗、趣味は旅行、書道等である。

えい子夫人との間に長女えみ子明治四四年生（府立第五高女卒）がある。

藤瀬彌一郎氏

豊島區池袋一四〇五  
電話大塚86)二二七七

從四位勳四等、法學士、公證人

明治元年四月生、佐賀縣

明治二七年東京帝國大學英法科卒業

氏は東京府士族藤瀬眞宣氏の長男、佐賀市に生れ、明治三十年家督を相續した。明治二十七年帝大卒業と同時に法曹界に入り同年司法官試補となり、同二十九年判事に任ぜられた。爾來横濱區裁判所を始めとし

三次區裁判所、山口、松山兩地方裁判所部長等に歴任し、名判官を謳はれたが、後退いて公證人となり、現時赤坂田町一ノ五に事務所を置いて活躍しつゝある。その人格の高潔は堂々たる閱歷と相俟つて斯界に重きをなしてゐる。

夫人匡子（茨城縣人山本兼太郎妹、淑徳高女卒）長男義鴨明治三四年生（法學士、三菱海上火災勤務）瑞枝（義鴨妻）明治三九年生（茨城縣人田中正一女）明治三九年生（杉山高女卒、山口縣人宮崎英一妻）弟君三（明治一六年生）、さき（君三妻明治二六年生、東京府人羽坂喜一二女）

後藤半七郎氏

杉並區西高井戸二ノ三

太陽曹達（株）東京出張所長

明治二〇年一月生、山形縣

東京外國語學校本科英語科卒業

氏は山形縣西村山郡谷地町の出身にして青森縣立八戸中學校卒業後上京して語學を修め、學成るや實業界に志して明治四十四年神戸鈴木商店に入り、語學に堪能なるため始め紐育支店詰めとなり、後上海支店に轉じ、砂糖雜貨課長を命ぜられて敏腕を揮ひ、更にその後本社通信課長に榮轉した。

然るに鈴木商店は不幸破綻したる爲め、昭和二年四月その傍系會社たる太陽曹達に轉じ、翌三年同社東京出張所長となり、以て今日に及んでゐる。氏は資性温厚頗る圓滿なる人格者として夙に鈴木商店時代より徳望厚く、而も多年海外に在つて洗練された手腕の冴えは既に普く定評がある。愛子夫人は鳥取縣人幸松鹿次氏の長女にして、淑徳高等女學校出身の才媛である。

車谷馬太郎氏

兵庫縣西宮市産所町四七、電話西宮一四〇〇

日本信託銀行取締役、大阪株式取引所國債取引員

明治一六年九月生、東京府

明治三八年東京高等商業學校卒業

氏は東京府車谷己之助氏の長男として同府下に呱呱の聲を揚げ、大正七年家督を相續した。夙に東京高等商業學校に學び、卒業後直ちに實業界に入り、現に前掲銀行の常務取締役として、信望を博してゐる。

妻若（明治二六年生、石川縣人鈴木文夫姉）長女喜代子（大正三年生）二女擴子（大正九年生）三女豊（大正一二年生）四女孝子（大正一五年生）

木下茂氏

兵庫縣武庫郡精道村三  
条一三四  
電話 蘆屋五六四

山一證券（株）取締役兼大阪支店長

明治八年五月生、長崎縣

大正二年早稻田大學商科卒業

氏は長崎縣人西村武助氏の三男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、後木下きち氏の養子となり、明治四十五年家督を相續した。夙に早稻田大學に學び、優秀の成績を以て卒業し、直ちに三菱合資會社に

助商店に入つた。是れ氏が造花業界に入れる第一歩である。入店後は一意専念造花の製法及び其の販賣等を見習ひ、自信を得るに及んで大正元年現在の地に獨立開業した

爾來努力奮闘の効空しからず、年を逐ふて隆盛に赴き一ケ年の製造額五萬圓を突破するに至り、新宿支店（淀橋町角等一）を設けて益々店勢の擴張を圖り、今や帝都同業界に確乎たる地歩を占め、顧客間に絶大の信望を博してゐる。現時造花組合の會計主

卒業すると同時に東京美容學會を創立して其の會長となり、其後大正九年結髮聯合會



の組織に奔走して翌年幹事に擧げられた。美容及結髮の伎倆は夙に斯界に定評のある所であるが、女史は徒ら

に營利主義に流れず、斯界の圓滿なる發達



從四位勳四等、法學士、公證人

明治元年四月生、佐賀縣

明治二七年東京帝國大學英法科卒業

氏は東京府士族藤瀬眞宣氏の長男、佐賀市に生れ、明治三十年家督を相續した。明治二十七年帝大卒業と同時に法曹界に入り同年司法官試補となり、同二十九年判事に任ぜられた。爾來横濱區裁判所を始めとし

東京外國語學校本科英語科卒業

氏は山形縣西村山郡谷地町の出身にして青森縣立八戸中學校卒業後上京して語學を修め、學成るや實業界に志して明治四十四年神戸鈴木商店に入り、語學に堪能なるため始め紐育支店詰めとなり、後上海支店に轉じ、砂糖雜貨課長を命ぜられて敏腕を揮ひ、更にその後本社通信課長に榮轉した。

木下茂氏

兵庫縣武庫郡精道村三  
条一三四  
電話 蘆屋五六四

山一證券(株)取締役兼大阪支店長  
明治八年五月生、長崎縣

大正二年早稻田大學商科卒業

氏は長崎縣人西村武助氏の三男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、後木下さち氏の養子となり、明治四十五年家督を相續した。夙に早稻田大學に學び、優秀の成績を以て卒業し、直ちに三菱合資會社に入社した。大正二年證券界に轉じ、斯界の雄たる前掲山一證券會社に入社した。爾來信望を得て、同社取締役となり、大阪支店長に榮轉して今日に及んでゐる。

妻とし(明治二三年生、長崎縣山口豊三郎長女)長男高(大正五年生)長女昌子(大正三年生)二女光子(大正一〇年生)二男武久(大正一二年生)

郷章次氏

淺草區三好町一〇  
電話淺草三〇五二

郷商店主

淺草三好町會役員

明治一八年生、岐阜縣  
氏は岐阜縣人郷甚兵衛氏の四男に生れ、明治四十五年分家した。之より先き明治三十三年十五歳の時上京し、淺草區田中金之

助商店に入つた。是れ氏が造花業界に入れ

る第一歩である。入店後は一意専念造花の製法及び其の販賣等を見習ひ、自信を得るに及んで大正元年現在の地に獨立開業した爾來努力奮闘の効空しからず、年を逐ふて隆盛に赴き一ケ年の製造額五萬圓を突破するに至り、新宿支店(淀橋町角等一)を設けて益々店勢の擴張を圖り、今や帝都同業界に確乎たる地歩を占め、顧客間に絶大の信望を博してゐる。現時造花組合の會計主任に擧げられて斯界の發展に盡し、又町會役員として町内の親睦融和に貢献しつゝある。信教は佛教、趣味は盆景等である。

オヨ夫人明治三三年生(東京市郷菊次郎氏長女)長男一夫一六歳(專修商業學校在學)二男保次一二歳、三男芳三、六歳、長女雅惠二〇歳(實科高女卒)二女富貴一八歳(錦科高女在學)三女智子二歳

古泉徳子女史

本郷區東片町八四  
電、小石川(85)六四八九

美容結髮業、本郷區美容結髮組合長、東京美容學會長、結髮聯合會幹事

明治一六年四月生、福島縣  
女史は福島縣人伊東鹿雄氏の長女にして同縣中村町に生れた。郷里の富岡補習學校を卒業後上京し、大正三年高木美容學校を

卒業後直ちに實業界に入り、現に前掲銀行の常務取締役として、信望を博してゐる。

妻若(明治二六年生、石川縣人鈴木文夫姉)長女喜代子(大正三年生)二女擴子(大正九年生)三女豊(大正一二年生)四女孝子(大正一五年生)

卒業すると同時に東京美容學會を創立して其の會長となり、其後大正九年結髮聯合會の組織に奔走して翌年幹事に擧げられた。美容及結髮の伎倆は夙に斯界に定評のある所であるが、女史は徒ら



に營利主義に流れず、斯界の圓滿なる發達を圖ることを理想とし、多年自己の伎倆研究に勵むと共に斯界の進歩發達に貢献し來つた。従つて日を経るに伴つて好評を博し廣く一般の信望を得て今日の隆況を見るに至つた。因みに信仰は神道、趣味は讀書、音樂等である。

家庭には長男光一、明治三四年生(醫學士、石川島療養所勤務)光一妻茂子明治三八年生(福岡縣人岡村久萬太郎長女、同縣立博多高女卒)孫元清大正一五年生、同光子大正一四年生の諸子がある。

小林知治氏

下谷區池之端七軒町二六  
電話下谷(83)三二七二

研精社(博覽會設計設備建築其他)社長  
明治一一年二月生



氏は青年時代より官界に活躍したが、後ち實業界に轉じ、大正十年十二月現在の地に研精社を起した。同社は博覽會の計畫、設計、設備、建築、各種陳列用動力應用裝飾圖案揮毫等を營み、創業當時は未だ一般に認められず、従つて業績も振はなかつたが、氏は極力その宣傳に努めて業務發展を圖りたる結果、次第に世に認められるに至り、陸軍省、文部省其他の諸官省を始めとし、一般民間にも利用され、殊に同社の裝飾は從來の所謂裝飾屋が各種類に依り分類的である爲め不便尠なからざるに鑑み、之を綜合的經營に改めたる點に於て一新機軸を出し、一般の好評を博してゐる。

ひさ子夫人は(大平遊吉氏長女)明治二五年五月一日生、長男健次君一四歳は、(木郷中學校在學)二男知久君九歳は、(小學校通學中)にして家庭頗る圓滿である。

小林 富藏氏 麻布區飯倉四ノ二二一 電話赤坂(48)一七三〇

土木建築請負業 明治四年一二月生、新潟縣

氏は新潟縣人小林乙藏氏の長男にして、同縣西蒲原郡卷町に生れた。夙に上京して土木建築界に投じ、明治四十年以來約十年

間戸田組に在つて活躍したが、大正五年獨立して土木建築請負業を開始した。爾來既に約二十年此の間請負ひたる建築は殆んど枚舉に遑がないが、其の主要なるものを舉げれば村井吉兵衛氏邸の木造純日本式住宅の建築を始めとし、後藤新平氏邸、村上喜代次氏邸、徳富蘇峰氏邸、青山會館、九段病院、平福百穂氏邸、上野東叡山護國院本堂改修、増島六一郎博士邸宅、及法律事務所、塚本ビル、ボーランド公使館、太陽生命保險、山尾子爵邸、虎屋商店等である。かくて今や帝都土木建築請負業界に確乎たる地歩を占め、益々信望を博しつつある。信教は眞宗、趣味は書畫骨董である。

夫人さく明治一七年生(新潟縣人大谷庄松三女)養嗣子徳明治三三年生(早大政治經濟科卒、茨城縣人館野清馬三男)徳氏夫人よし江明治四二年生(新潟縣人島津庄二長女、實踐高女卒)

小松 通允氏 日本橋馬喰町四ノ一一 電話浪花(67)二二五

醫學博士、小松小兒科醫院々長 明治二八年二月生、千葉縣

大正七年千葉醫專卒業 小兒科界に令名ある氏は、郷里の中學校卒業後千葉醫專に學び、同校卒業後大正九

年金澤醫專に於て須藤教授の指導を受けて専ら小兒科を研究し、翌十年再び母校千葉醫專の小兒科教室に於て諸博士指導の下に研究を積み、更に翌十一年東京帝大醫科に轉じ、柿内博士に師事してその研究慾を充し、研究努力すること前後數年に亘り漸く自信を得て大正十二年水道橋の日本赤十字社臨時乳兒院に入り、實地治療に當つたが尙ほ意に満たざるため再び東京帝大の研究室に入り、大正十三年以來孜孜として研究を積んだ。かくて昭和二年和泉橋の慈善病院小兒科に勤務するや、多年研究の結果は漸く認められるに至り、翌三年醫學博士の學位を授與された。同年慈善病院を辭し、現在の地に開業するや、其の造詣深きに信賴して治療を乞ふ者絶えず、日を逐ふて隆盛に赴き、今や普く斯界に名聲を謳はれつゝある。

徳大寺公弘氏 澁谷區若木町一五 正二位 公爵、貴族院議員 文久三年八月生、京都府

當家は所謂七清華の一にして本邦屈指の名門である。右大臣藤原師輔を祖としその十六代の孫左大臣公信は文筆を以て顯はれ、その後竹内式部等と王政復古の

大謀を策したる忠臣公城以來代々勤王の譽れ高く、大いに家名を揚げた。公城四代の孫先代實則氏は維新の偉業に參劃し更に明治元年以來參與職、議定職、侍從長、宮内卿華族局長、官爵位局長、貴族院議員、侍從長兼内大臣等に歴任し此の間明治十七年侯爵を授けられ、更に同十四年公爵に列せられた。氏はその長男にして公爵西園寺公望氏の甥、中院伯爵及び住友男爵の從兄である。夙に英國に留學し、歸朝後此の名門を繼ぎ、皇室の

は豊臣家に仕へて武勇の譽れ高く、七手組の番頭を勤めたが、後徳川家に仕へ攝津國麻田に於て一萬石を領有し、爾來維新に至るまで代々同地の領主であつた。嚴父正三位勳三等子爵貴族院議員青木信光氏は、貴族院の第一線に活躍すること多年、政界の大策士として夙に普く知られてゐる。氏はその長男にして府立第四中學校、第一高等學校を経て東京帝大に學び、卒業後直ちに日本銀行に入り、現に同行國庫局に勤務中

り、又本邦最初の割烹書たる「家庭十二ヶ月料理法」を編纂し、更に明治四十年「割烹教科書」を發行する等、斯界の發達に偉大なる功績を貽して八十九歳の高齡を以て逝去した。氏はその二男であるが幼時より峰翁の薫陶を受けて業を繼ぎ、幼名松太郎を改めて三代峰吉を襲名した。父祖以來當家獨特の技術に最新の理論を併せて、理想的割烹を考察し、赤堀割烹本教場(小石川區表町九一)を經營する傍ら、淑徳高等女



小林 富藏氏 麻布區飯倉四ノ一二一  
電話赤坂(48)一七三〇

土木建築請負業

明治四年一月生、新潟縣

氏は新潟縣人小林乙藏氏の長男にして、同縣西蒲原郡卷町に生れた。夙に上京して土木建築界に投じ、明治四十年以來約十年

津庄一長女 實踐高女卒

小松 通允氏 日本橋馬喰町四ノ一一  
電話浪花(67)二二五

醫學博士、小松小兒科醫院々長

明治二八年二月生、千葉縣

大正七年千葉醫專卒業  
小兒科界に令名ある氏は、郷里の中學校卒業後千葉醫專に學び、同校卒業後大正九

徳大寺公弘氏 澁谷區若木町一五  
電話青山八一三五

正二位 公爵、貴族院議員

文久三年八月生、京都府

當家は所謂七清華の一にして本邦屈指の名門である。右大臣藤原師輔を祖としその十六代の孫左大臣公信は文筆を以て顯はれ、その後竹内式部等と王政復古の

大謀を策したる忠臣公城以來代々勤王の譽れ高く、大いに家名を揚げた。公城四代の孫先代實則氏は維新の偉業に參劃し更に明治元年以來參與職、議定職、侍從長、宮内卿華族局長、官爵位局長、貴族院議員、侍從長兼内大臣等に歴任し此の間明治十七年侯爵を授けられ、更に同四十四年公爵に列せられた。氏はその長男にして公爵西園寺公望氏の甥、中院伯爵及び住友男爵の從兄である。夙に英國に留學し、歸朝後此の名門を繼ぎ、皇室の藩屏として克く其の責務を完うし、又貴族院議員として活躍すること多年に及び華胄界の長老として尊崇されてゐる。

妻久子(慶應三年生、伯爵松平基則姉)  
男實厚(明治一〇年生、從四位勳五等)  
同妻米子(同三二年生、學習院女學部卒、伯爵松平直之二女)

青木 蔚氏 牛込區市ヶ谷河田町一九  
電話牛込(34)二二二〇

從五位、法學士、日本銀行員

明治三六年一月生、東京市

昭和四年東京帝大英法科卒業

當家は多治比古王の子左大臣四郎冠者武峰の末裔青木武藏守直兼の後孫である。武藏守四代の孫右衛門尉重直は土岐氏に仕へ後織田氏に仕へた。重直の子片部少輔一重

は豊臣家に仕へて武勇の譽れ高く、七手組の番頭を勤めたが、後徳川家に仕へ攝津國麻田に於て一萬石を領有し、爾來維新に至るまで代々同地の領主であつた。嚴父正三位勳三等子爵貴族院議員青木信光氏は、貴族院の第一線に活躍すること多年、政界の大策士として夙に普く知られてゐる。氏はその長男にして府立第四中學校、第一高等學校を経て東京帝大に學び、卒業後直ちに日本銀行に入り、現に同行國庫局に勤務中である。學生時代より頭腦の明敏を以て知られ、進取の氣風に富み、新時代に相應はしき少壯有爲の士として前途の飛躍を期待されてゐる。趣味は戶外スポーツ等。

赤堀 峰吉氏 小石川區表町九一  
電、小石川(85)六一六六

赤堀割烹本教場々主、淑徳高等女學校教諭

明治一八年六月生、東京市

赤堀家は靜岡縣小笠郡峰田村より出で、先々代峰吉氏以來江戸に住し、先代峰翁は舊幕時代日本橋に住みて諸大名の料理方を勤めて廣く其の名を知られてゐた。維新後は婦人料理の發達に意を注ぎ、明治十四年割烹教授を創めた。是れ帝都に於ける割烹教授の嚆矢である。其の後お茶ノ水女子高等師範學校を始め都下各女學校に教鞭を執

り、又本邦最初の割烹書たる「家庭十二ヶ月料理法」を編纂し、更に明治四十年「割烹教科書」を發行する等、斯界の發達に偉大なる功績を貽して八十九歳の高齡を以て逝去した。氏はその二男であるが幼時より峰翁の薫陶を受けて業を繼ぎ、幼名松太郎を改めて三代峰吉を襲名した。父祖以來當家獨特の技術に最新の理論を併せて、理想的割烹を考察し、赤堀割烹本教場(小石川區表町九一)を經營する傍ら、淑徳高等女學校教諭を兼ね、廣く婦女子に割烹の妙技を教授しつゝある。

秋谷 藤次郎氏 品川區大井瀧王子壘七  
電話 大森九四二一

大井町眼科醫院々長、慈惠會醫院眼科部副部長、慈惠會醫科大學講師

明治二五年二月生、埼玉縣

大正五年慈惠醫專卒業

秋谷家は埼玉縣足立郡に於て代々醫を業とし、十三代蓮綿として傳はる舊家であつた。氏は島村英二郎氏の二男に生れ、後秋谷家の養子となつた。夙に慈惠會醫科大學の前身醫學專門學校に學び、卒業後東京帝大醫科助教授中泉博士の指導を受け、大正七年八月現在の地に病院開設後も、眼科の泰斗河本重次郎博士に師事して實地の研究



を積み、又母校の研究科に入り森田博士、村上博士等の指導を受けて眼科の解剖及組織學を究め、昭和二年同大學附屬病院の眼科主任に推され、同時に母校講師に聘せられた爾來自己の研究に、子弟の養成に、或は患者の治療に、殆んど席の温まる暇もなき活躍を続け、以て現今に及んで居る。讀書、運動などにも趣味を持つて居るが、眼科に關する研究は最も深き興味を有し、従つてその造詣深きことは普く斯界に認められ、又絶大の信望を博してゐる。

有住榮之助氏

京橋區銀座一ノ五  
電話京橋(56)七〇三三

勳七等功七級、有住商店々主  
明治一三年十月生、埼玉縣

當家は代々埼玉縣北足立郡鳩ヶ谷町に於て織物製造販賣を業とし、氏は先代有住佐兵衛氏の四男として同町に呱呱の聲を揚げた。明治四十一年頃より家業に携はつてゐたが、大正三年之を廢して翌年上京し、同六年より獨立して防水布加工品の製造販賣を目的とする有住商店を起し、刻苦努力遂に斯界に名を成すに至つた。同店の營業品目中主なるものはアイディアアルコットン、同シルク、同フェザー等に加工せるレインコート、運動服、帽子、ゲートル、汗襦袢

等にして何れも氏の獨創的考案に依り新案登録を受けたる優秀品である。其他パレスコート防寒防水服等をも取扱つてゐるが、同店製品は何れも優良國産品として指定されたるものゝみにして、全國百貨店、一流洋服店、洋品店等を顧客として隆況を呈してゐる。尙ほ氏は日露戰役に從軍して偉功を樹て勳七等功七級に叙せられた。長男甲子郎君は第一高等學校在學中である。

新井倬五郎氏

大森區新井宿三ノ一七〇  
電話大森一四七

大正生命保險(株)總務部長、日本教育生命保險(株)會計監督、新日本火災海上保險(株)監査役

明治一五年四月生、群馬縣

氏は壯年時代海外貿易に志し、横濱に於て輸入商を營んで居たが、後保險界に轉じ大正生命保險の創立と同時に入社し、以來現在に至るまで専ら同社の發展に努力し來つた。資性温厚篤實にして敏腕の聞え高く牛字引を以て目せられ、最高幹部として克く重役を輔佐し、社内外の信望隆々たるものがある。同社が今日の發展を遂げたるは關係者一同の努力に因ることは謂ふまでもないが、實際の衝に當る人として創立以來終始奮闘努力を續けたる氏の功績の如きは

特に没す可からざるものであらう。氏は又同社系統の各保險會社に要職を兼ねて活躍に至らざるなき有様である。趣味は讀書。

長男浩君は第一高等學校在學中、二男瞭二君は東京商科大學豫科に在學中である

跡見李子女史

小石川區柳町二七  
電話小石川(85)六五一

跡見高等女學校々長

明治元年一〇月生、京都市  
明治二〇年跡見女學校卒業

先代跡見花蹊女史は、攝津の人跡見重敬氏の二女にして天保十一年生れ、本名を瀧野と呼んだ。幼時後藤松蔭に就いて漢學を修め、後京都に出て、圓山應立の門に學び明治八年上京して神田區仲猿樂町に女塾を開き、女子教育の全然顧みられなかつた當時に於てその先鞭を着けた。其の後小石川區柳町に校舎を移し、私財を投じて財團法人組織に改めた、是れ即ち現在の跡見女學校である。かくて多年教育に盡したる功勞に依り、明治四十五年勳六等に叙せられ寶冠章を賜はつた。李子女史は伯爵萬里小路通房氏の二女に生れ、大正十五年跡見家を繼いだ。夙に花蹊女史に私淑して貞淑の譽れ高く、跡見女學校卒業後同校に教鞭を執り、舎監、學監等に歴任し、大正八年五月

花蹊女史の名譽校長就任と同時に校長となり、以て今日に及んでゐる。此の間大正十二年歐米各國を巡遊して教育狀態を視察研究した。女史は「何事にも最善の誠意と最大の努力を拂ふこと」を處世訓とし、「虚偽を以て人に接せざること」を子女訓とし、「三省」の家憲を奉じて常に精神修養を積んでゐる。信仰は佛教、趣味は美術、文藝等にして書畫に巧みである。

及に努めつゝある、氏は亦書才に富み松本楓湖氏に師事して丹青の道に親しみ、更に小鼓を大見利之助に就いて數年習練し頗る堪能である。こん子夫人との間には五男一女あり第四子聚君は梅旭と號し尺八界に投じ、鶯宿會を主宰して斯界の新進を以て目せられ、嚴父を翼けて琴古流の發展に努力しつゝある。

依つて氏は専らその復興に奔走し、或は各所に生間流庖丁式を公演し、或は女子をして之に携らしめる端緒を開く等努力怠らず其の結果衰滅に瀕したる生間流は漸く復興の曙光を認めるに至り、最近に於ては各方面に歡迎されつゝある。因みに氏の信仰は淨土宗、趣味は書畫骨董、圍碁、撞球、槍術弓道等頗る廣汎である。

佐々木新六氏

日本橋區蠟燭町二ノ二四  
電話浪花(67)六、七九〇



た。明治四十一年頃より家業に携はつてゐたが、大正三年之を廢して翌年上京し、同六年より獨立して防水布加工品の製造販賣を目的とする有住商店を起し、刻苦努力遂に斯界に名を成すに至つた。同店の營業品目中主なるものはアイデリアルコットン、同シルク、同フェザー等に加工せるレインコート、運動服、帽子、ゲートル、汗襦袢

現在に至るまで専ら同社の發展に努力し來つた。資性温厚篤實にして敏腕の聞え高く生字引を以て目せられ、最高幹部として克く重役を輔佐し、社内外の信望隆々たるものがある。同社が今日の發展を遂げたるは關係者一同の努力に因ることは謂ふまでもないが、實際の衝に當る人として創立以來終始奮闘努力を續けたる氏の功績の如きは

人組織に改めた、是れ即ち現在の跡見女學校である。かくて多年教育に盡したる功勞に依り、明治四十五年勳六等に叙せられ寶冠章を賜はつた。李子女史は伯爵萬里小路通房氏の二女に生れ、大正十五年跡見家を繼いだ。夙に花蹊女史に私淑して貞淑の譽れ高く、跡見女學校卒業後同校に教鞭を執り、舎監、學監等に歴任し、大正八年五月

花蹊女史の名譽校長就任と同時に校長となり、以て今日に及んでゐる。此の間大正十二年歐米各國を巡遊して教育狀態を視察研究した。女史は「何事にも最善の誠意と最大の努力を拂ふこと」を處世訓とし、「虚偽を以て人に接せざること」を子女訓とし、「三省」の家憲を奉じて常に精神修養を積んでゐる。信仰は佛教、趣味は美術、文藝等にして書畫に巧みである。

荒木 古童氏 品川區五反田六ノ二八  
電話 高輪七六八〇

琴古流尺八家元

明治一二年二月生、東京市

氏は本名眞之助と謂ひ先代古童の長男である。先代古童は琴古流中興の祖と稱せられたる名手であつたが、氏も亦幼時より藝術的才能に恵まれ、專念尺八に精進して夙にその蘊奥を究め、明治二十九年家督相續と共に古童を襲名して三代家元となつた。その圓熟せる伎倆は斯界に普く認められ、畏くも陛下の御前演奏の光榮に浴したるを一再ならず、中央放送局設置以來其藝術顧問に招聘されて斯界に重きをなしてゐる。門下の指導に當つては懇切叮嚀而も藝に關しては頗る嚴格であるため、門下に俊才多く、名取門弟は産窓會を組織して斯流の普

及に努めつゝある、氏は亦書才に富み松本楓湖氏に師事して丹青の道に親しみ、更に小鼓を大見利之助に就いて數年習練し頗る堪能である。こん子夫人との間には五男一女あり第四子聚君は梅旭と號し尺八界に投じ、鶯宿會を主宰して斯界の新進を以て目せられ、嚴父を翼けて琴古流の發展に努力しつゝある。

佐々木新六氏 日本橋區蠣殼町二ノ二四  
電話 浪花(67)六、七九〇

割烹「八進亭」經營主

明治一一年三月生、京都市

當家は代々京都に於て割烹業を營み、氏の父は明治天皇江戸に行幸の砌大膳方の御用を勤むる光榮に浴したる、生間流料理法の名手であつた。氏は先代新六氏の長男にして第七代目當主である。先代は明治維新當時に於て獨逸語を學びたる程の學者肌の人であつたが、料理にも亦廣く精通し、氏はその薰陶を受けて幼時より生間流料理法を學び、大正五年上京して八新亭を創始した。由來生間流は藤原鎌足の後裔從三位中納言政朝を始祖とし以來連綿として傳はる本邦最古の料理であると共に、又最も權式あるものであるが、その流儀を汲む者尠く將にその正統が絶えんとする状態であつた

依つて氏は専らその復興に奔走し、或は各所に生間流庖丁式を公演し、或は女子をして之に携らしめる端緒を開く等努力怠らず其の結果衰滅に瀕したる生間流は漸く復興の曙光を認めるに至り、最近に於ては各方面に歡迎されつゝある。因みに氏の信仰は淨土宗、趣味は書畫骨董、圍碁、撞球、槍術弓道等頗る廣汎である。

上田源三郎氏

兵庫縣武庫郡御影町城ノ前一四四〇  
電話 御影二五三三  
(事務所) 大阪東區備後町二ノ一四

電話 本局一八一八

大阪商事(株)社長、上田鑛業、上田林業、日華産業、日本農藥各(社)取締役、上田勘商店(株)監査役、上田本店主  
明治一二年八月生、大阪府  
明治三六年慶應義塾理財科卒業  
氏は大阪府先代源三郎氏の長男として大阪市に生れ、大正二年家督を相續すると同時に前名源治郎を改め源三郎を襲名した。夙に慶應義塾に學び、卒業するや直ちに實業界に入り、専ら家業たる鑛山採掘業及金層工業原料等の製造販賣に従事し、爾來奮闘努力以て家業の發展に努



力し父祖の名を辱しめず漸次斯界に名聲を博するに至つた。現に前記各社の重役を兼ね、信望益々高く、同地屈指の敏腕家として聞えてゐる。

妻キミ(明治二二年生、大阪府福島正吉二女) 嗣子成一郎(明治四三年生)長女壽子(大正四年生)二女秋子(大正一三年生)

五十嵐與七氏

京橋區銀座西八ノ六 電話銀座(57)七二七

江木寫真館(株)専務、オリエンタル寫真工業(株)取締役

明治一八年九月生、山形縣

寫真界に令名ある氏は、山形縣人五十嵐俊次氏の二男として同縣西田川郡湯田川村に呱呱の聲を擧げ、大正四年分家した。明治三十七年以來歐米各國を歴遊し、就中米國に最も長く滞留して寫真術を研究し、大正二年歸朝後江木寫真館主に懇望されて同館に入り、滯米中修練を積みたる技術を發揮して經營の衝に當り、大正十年同館が株式組織に變更されると共に専務取締役に擧げられ、現にその任に在つて同館の發展に努力しつゝある。又傍らオリエンタル寫真工業の取締役を兼ねてゐるが、氏の寫真に

關する技術と斯業經營の手腕は夙に普く斯界に認められ、昭和五年再度歐米視察を終へて歸朝後は錦上更に花を添え、斯界に名聲噴々たるものがある。

今宿 次雄氏

豊島區巢鴨六ノ二五 電話大塚二八三四

啓成社常務理事

明治一七年一月生、滋賀縣

明治四二年東京帝國大學法科大學卒業

啓成社常務理事として不具者救済に貢献しつゝある氏は、三浦貫一氏の二男として滋賀縣下に呱呱の聲を擧げ、後今宿信一氏の養子となつた。東京帝大法科卒業後高等文官試験に合格して官界に入り、郷里滋賀縣屬を最初として熊本縣理事官、福岡縣事務官、千葉縣書記官警察部長、宮崎縣書記官内務部長等を歴任して、沖繩縣知事となり、更に昭和四年佐賀縣知事に榮轉したが後官界を去り、財團法人啓成社に入つて救済事業に盡瘁し、現に同社の常務理事の要職に在つて不具者救済に努力しつゝある。資性温厚篤實にして情義に厚く、社會公共奉仕の念に富めるを以て、此の種の事業には適材適所として好評を博し、社内に於ては慈父の如く慕はれてゐる。

妻敦子(明治三〇年生、松江高女卒)と

星野

錫氏

日本橋區濱町二ノ八八 電話 浪花四三

勳四等、雨龍炭鑛(株)社長、東京印刷(株)會長、邦樂座、北海道拓殖各(株)取締役馬來護謨公司、東京地下鐵道、東京築地活版製造所、東邦火災保險各(株)監查役東京商工會議所顧問、東京實業組合聯合會長

安政元年一二月生、東京府

氏は舊姫路藩士星野乾八氏の長男に生れ、明治十三年家督を嗣いだ。夙に藩費に於て經史を修め、語學等をも學び、後横濱に出で、印刷業界に投じ、一職工より體験を積み辛酸具さに嘗めて斯界活躍の基礎を築いた。明治二十年渡米し、歸朝後王子製紙會社に入り、後同社の傍系東京印刷會社の専務取締役を経て同社長となつた。爾來同社の發展に努力すると共に各方面に驥足を伸べ、都下實業界の重鎮として聲望を博し、或は東京商工會議所副會頭、日本橋區會議員、東京市會議員等としての功績も尠ならず、大正五年勳四等に叙せられた。現時前掲の任に在りて寸暇もなき活躍を續けてゐる。養子辰雄(明治二五年生、故澁澤榮一男)同妻萬龜(同二九年生、法學士穗積重威妹)

黒笹 幾雄氏

神田區松枝町二 電話 浪花六四三五

辯護士、神田區會議員、同學務委員

明治二九年八月生、廣島縣

大正一一年中央大學卒業

氏は廣島縣黒笹作右衛門氏の二男として同縣下に呱呱の聲を揚げた。夙に上京して中央大學に學び、卒業後直ちに辯護士試験に合格し、爾來辯護士として活躍すること既に十餘年に及び、幾多の大事件の辯護に當り次第に名聲を博し、都下在野法曹界有数の敏腕家として斯界に

明治三三年日本大學卒業

氏は岩手縣志賀英之進氏の長男として同縣金ヶ崎町に呱呱の聲を揚げ、大正八年家督を嗣いだ。夙に日本大學を卒へ判檢事登用試験に合格し、司法官試験を経て檢事に任ぜられたが、幾何もなく之を辭し明治三十五年辯護士を開業した。爾來在野法曹界に活躍する傍ら、大正九年以來衆議院議員として著々政界に地歩を占め、代議士たること五期、此の間昭和二年鐵道參與官に任ぜられ、同七年六月

小川郷太郎氏

中野區櫻山三二二 電話 四谷三〇三

代議士に當選すをこと三回、此の間若槻内閣の時大藏參與官に擧げられた。昭和六年四月之を辭して以來、民政黨所屬議員として活躍以て今日に及んでゐる。宗旨は淨土宗、趣味は園藝等。

正四位、勳三等、法學博士、衆議院議員 明治九年六月生、岡山縣

明治三六年東京帝大法科政治科卒業

氏は岡山縣村山菊藏氏の長男として同



同、長く滞留して寫眞術を研究し、大正二年歸朝後江木寫眞館主に懇望されて同館に入り、滯米中修練を積みたる技術を發揮して經營の術に當り、大正十年同館が株式組織に變更されると共に專務取締役に擧げられ、現にその任に在つて同館の發展に努力しつゝある。又傍らオリエンタル寫眞工業の取締役を兼ねてゐるが、氏の寫眞に

後官界を去り、財團法人啓成社に入つて救濟事業に盡瘁し、現に同社の常務理事の要職に在つて不具者救護に努力しつゝある。資性温厚篤實にして情義に厚く、社會公共奉仕の念に富めるを以て、此の種の事業には適材適所として好評を博し、社内に於ては慈父の如く慕はれてゐる。  
妻敦子（明治三〇年生、松江高女卒）と

議所副會頭、日本橋區會議員、東京市會議員等としての功績も尠なからず、大正五年勳四等に叙せられた。現時前掲の任に在りて寸暇もなき活躍を續けてゐる。  
養子辰雄（明治二五年生、故澁澤榮一男）同妻萬龜（同二九年生、法學士穂積重威妹）

黒笹 幾雄氏 神田區松枝町二 電話 浪花六四三五

辯護士、神田區會議員、同學務委員  
明治二九年八月生、廣島縣  
大正一一年中央大學卒業

氏は廣島縣黒笹作右衛門氏の二男として同縣下に呱呱の聲を揚げた。夙に上京して中央大學に學び、卒業後直ちに辯護士試験に合格し、爾來辯護士として活躍すること既に十餘年に及び、幾多の事件の辯護に當り次第に名聲を博し、都下在野法曹界有数の敏腕家として斯界に確乎たる地歩を占むるに至つた。資性温厚篤實にして公共奉仕の念に富み、多年松枝町々會顧問等として盡瘁せる所尠なからず、昭和八年十一月區民に推されて神田區會議員に當選以來、區政の刷新、區民の福祉増進に努力し、益々信望を博しつゝある。趣味は讀書、旅行、銃獵等。  
妻美恵子（明治三七年生、廣島縣吉舎高女卒）長男庶幾（大正一三年生）長女和子（昭和四年生）二女翠（同八年生）

志賀和多利氏 神田區猿樂町一ノ七 電話 神田三四四三

正五位、勳四等、辯護士、衆議院議員、立憲政友會總務  
明治七年一〇月生、岩手縣

明治三三年日本大學卒業

氏は岩手縣志賀英之進氏の長男として同縣金ヶ崎町に呱呱の聲を揚げ、大正八年家督を嗣いだ。夙に日本大學を卒へ判檢事登用試験に合格し、司法官試験を経て檢事に任ぜられたが、幾何もなく之を辭し明治三十五年辯護士を開業した。爾來在野法曹界に活躍する傍ら、大正九年以來衆議院議員として著々政界に地歩を占め、代議士たること五期、此の間昭和二年鐵道參與官に任ぜられ、同七年六月遞信政務次官に擧げられた。現時政友會總務として黨内に重きをなしてゐる。大本教を信仰し、趣味は讀書等である。

勝 正憲氏 品川區大井鹿島三瓦 電話 高輪一〇三六

正四位、勳三等、法學士、衆議院議員  
明治一二年五月生、福岡縣  
明治三八年東京帝大法科卒業  
氏は福岡縣士族勝平八郎氏の長男として同縣田川郡香春町に生れ、大正九年家督を嗣いだ。學業を卒へるや直ちに大藏省に奉職し、累進して仙臺稅務監督局長となり、更に大藏書記官兼參事官、東京稅務監督局長、海外駐在財務官等に歴任した。大正十五年官を辭し東京市助役に任ぜられたが、昭和三年郷里福岡縣第四區より選ばれて衆議院議員となり、爾來

代議士に當選すをこと三回、此の間若槻内閣の時大藏參與官に擧げられた。昭和六年四月之を辭して以來、民政黨所屬議員として活躍以て今日に及んでゐる。宗旨は淨土宗、趣味は園藝等。

小川郷太郎氏 中野區櫻山三二二 電話 四谷三〇三

正四位、勳三等、法學博士、衆議院議員  
明治九年六月生、岡山縣  
明治三六年東京帝大法科政治科卒業  
氏は岡山縣村山菊藏氏の長男として同縣下に生れ、後同縣士族小川知彰氏の養子となり、明治三十九年分家した。之より先き東京帝大を優秀の成績にて卒業後直ちに京都帝大講師に拔擢され、續いて助教授に任ぜられた。同三十九年渡歐し獨、塙、伊、佛、白の諸國に於て財政經濟學を研究する事六ケ年、明治四十五年歸朝後直ちに京都帝大教授に昇進し、大正二年法學博士の學位を授けられた。同六年學界を去つて政界に入り、爾來衆議院議員たること五期に亘り、現に民政黨内に重きを爲してゐる。此の間昭和四年より同六年四月迄大藏政務次官として活躍し、財政學の權威として又政界屈指の財政通として聲望を博してゐる。



新田留次郎氏

京城府南米倉町二八一  
電話 本局三九五七

正四位、勳三等、工學士、朝鮮鐵道(株)  
專務取締役、朝鐵自動車(株)取締役  
明治六年二月生、石川縣

明治三〇年東京帝大工科土木科卒業

氏は石川縣新田喜三郎氏の二男として  
同縣下に呱呱の聲を揚げ、明治四十一年  
分れて一家を創立した。之より先き東京  
帝國大學を卒業して朝鮮總督府に入り、  
鐵道局技師に任ぜられ、鐵道部に於て敏  
腕を揮ふこと多年、累進して鐵道局工務  
課長に任ぜられ、正四位、勳三等に陞叙  
された。後官を辭して朝鮮鐵道會社に入  
り、專務取締役たる傍ら傍系朝鐵自動車  
會社の重役をも兼ねて活躍以て今日に及  
んでゐる。

妻時(明治一七年生、東京府高田隆七

二女)長男稔(同四〇年生)三男稔(大  
正四年生)四男泰夫(同六年生)二女

知惠(明治四三年生)三女敏(大正二  
年生)四女尚子(同八年生)長女二三  
子(明治二七年生、福岡縣崎山克治妻)

初瀬浪子女史

麻布區筈町九四  
電話青山(36)三五八

女優、帝劇第一期生

明治二二年八月生、東京市

山脇高等女學校卒業

本名を岩尾ヒデ子と呼び、岩尾淳粹氏の  
二女として京橋區築地に生れた。嚴父淳粹  
氏は大倉組に勤め支店長として敏腕を揮ひ  
實業界に名聲を博してゐる。女史は山脇高  
等女學校家庭科に學んだが、卒業後間もな  
く帝劇女優第一期生として入所し、卒業と  
同時に帝劇の開場の際に「頼朝」の巫女「神」  
を勤めた。是れ實に女史の初舞臺にして、  
爾來現在に至るまで帝劇に専屬して専ら藝  
の洗練に努め、其の滋味のある藝風は夙に  
普く認められてゐる。得意の役は三右衛門  
賣女の「湯女」四谷五更話の「お岩」等である  
趣味は讀書、觀劇、旅行等、信教は眞宗で  
ある。令弟岩尾英助君は、大正二年生、成  
城中學校在學中である。

原田 治郎氏

下谷區上野櫻木町二二二  
電話下谷(83)一、五三二

帝室博物館囑託、日本美術協會委員、ゼ・  
スタヂオ東洋通信記者

明治一一年一二月生、山口縣  
カリフォルニア大學卒業

美術研究家として知られてゐる氏は、山  
口縣人原田勝五郎氏の二男として同縣下に  
生れ、大正五年分家して一家を創立した。

明治二十四年、即ち十四歳の幼時に渡米し

加州大學に學び、同二十八年歸朝した。其  
後名古屋高等工業學校教授兼第八高等學校  
教授、日英博覽會派遣員、パナマ運河博覽  
會理事官等に歴任し、大正十五年帝室博物  
館囑託に任ぜられ、正倉院圖録解説を擔任  
し、其の傍ら前記の職にある。尙氏は第二  
回、第三回、第七回及び第十一回の各萬國  
勞働會議に政府委員隨員として出席し名聲  
を博した。又氏は海外留學の頃より日本を  
各國に紹介する目的で美術を研究し、爾來  
多年日本美術の海外紹介に盡せられつゝ  
ある。因に氏は敬虔なるキリスト教の信者  
である。

妻初枝(明治一七年生、工學博士服部俊  
一長女、フェリエス高女卒)

西川喜代春女史

下谷區西黒門町二九  
電話下谷(83)七三三〇

舞踊正派西川流頭取

明治二七年一〇月生、東京市



正派西川流  
の名手として  
舞踊界に名聲  
高き女史は、  
同流の創始者  
西川喜州女史  
の娘として下

御台覽の光榮に浴したことは一再でない。

西本 聿造氏

麹町區山元町一ノ七  
電話九段(33)二、四三二

マスター・オブ・アーツ、日本映畫劇場株  
式會社專務取締役

明治一七年一〇月生、廣島縣

明治四一年米國コロンビア大學卒業

氏は廣島縣人西本善六氏の長男として同  
縣豊田郡瀬戸町に生れた。米國に航シコロ  
ンビア大學卒業後同市メーシーデパート、

一四年五月生) 四女喜久子(昭和四年  
八月生)

杉野 喜精氏

目黒區三田二二  
電話高輪七七五

東京商工會議所議員、山一證券(株)社長  
日英釀造(株)取締役、東株代行(株)監査  
役、中央製糖(株)相談役、前東京府多額  
納稅者

明治三年九月生、青森縣

氏は舊津輕藩士杉野喜永氏の長男とし  
て弘前市に呱呱の聲を揚げ、明治二十三

谷區に生れた。喜州女史は明治八年東京に  
生れ、四歳の時西川喜舞の門弟となり、更  
に十六歳の時西川流家元西川己之助の直弟  
子となつたが、修業中恩師の訃に遭ひたる  
ため二十四歳の頃より水木流家元水木歌  
春、藤間流家元藤間ふじ坂東三津江、花柳  
壽輔の諸師に就いて各流の長所を究め正派  
西川流を創始した。爾來専ら門弟の教養及  
び振付、古典の研究に没頭し、舞踊界の發  
達に貢献した。女史は五歳の頃より母堂喜



正四年生) 四男泰夫(同六年生) 二女  
知惠(明治四三年生) 三女敏(大正二  
年生) 四女尚子(同八年生) 長女二三  
子(明治二七年生、福岡縣崎山克治妻)

初瀬浪子女史 麻布區筈町九四  
電話青山(36)三五八  
女優、帝劇第一期生  
明治二二年八月生、東京市

帝室博物館囑託、日本美術協會委員、ゼ  
スタヂオ東洋通信記者  
明治一一年一二月生、山口縣  
カリフォルニア大學卒業

美術研究家として知られてゐる氏は、山  
口縣人原田勝五郎氏の二男として同縣下に  
生れ、大正五年分家して一家を創立した。  
明治二十四年、即ち十四歳の幼時に渡米し



正派西川流  
の名手として  
舞踊界に名聲  
高き女史は、  
同流の創始者  
西川喜州女史  
の娘として下

御台覽の光榮に浴したことは一再でない。

西本 聿造氏 麹町區山元町一ノ七  
電話九段(33)二四三一

マスター・オブ・アーツ、日本映畫劇場株  
式會社專務取締役  
明治一七年一〇月生、廣島縣

明治四一年米國コロンビア大學卒業

氏は廣島縣人西本善六氏の長男として同  
縣豊田郡瀬戸町に生れた。米國に航しコロ  
ンビア大學卒業後同市メーシーデパート、  
シャノンハメル銀行等に勤務し、滯米十七  
ケ年に及んだ。大正四年歸朝後ジャバンプ  
ドバークライザー社に入り、同社關西支局長  
として約五ケ年間敏腕を揮ひ、故横田千之  
助氏がワシントン會議に列席の際その秘書  
官として隨行し大いに名聲を博した。大正  
十一年日活に入り營業部長兼支配人の要職  
に在つたが、昭和四年退社して日本映畫劇  
場の專取締役となり、以て今日に及んでゐ  
る。眞宗の信仰厚く「人事を盡して天命を  
俟つこと」を處世訓としてゐる。趣味は一  
般戶外運動。

妻やすよ(明治一九年生) 廣島縣人西本  
儀三郎長女、尾道高女卒) 長男宏(昭和三  
年一月生) 長女玉子(大正九年一月生) 二  
女正子(同一一年一〇月生) 三女照子(同

一四年五月生) 四女喜久子(昭和四年  
八月生)

杉野 喜精氏 目黒區三田二二  
電話高輪七七五

東京商工會議所議員、山一證券(株)社長  
日英醸造(株)取締役、東株代行(株)監査  
役、中央製糖(株)相談役、前東京府多額  
納稅者

明治三年九月生、青森縣

氏は舊津輕藩士杉野喜永氏の長男とし  
て弘前市に呱呱の聲を揚げ、明治二十三  
年家督を相續した。夙に銀行事務講習所  
に學び、日本銀行員、愛知銀行副支配人  
取締役等に歴勤した。同四十年獨立して  
證券業を始め、後小池合資會社に入り、  
社長故小池國三氏の信任を得た。大正六  
年同社廢業に當り直ちに山一合資會社を  
組織、同十二年山一證券株式會社と變更  
其社長として今日に及び傍ら前記各職を  
兼ね資性温厚、斯界稀に見る人格者とし  
て信望を博してゐる。宗旨は眞宗。

妻やま(明治一〇年生、東京府士族飯  
田巽二女) 長男伊勢男(明治三三年生)  
二男昌甫(明治三四年生) 長女綾子(明  
治二八年生、醫學博士福岡五郎妻) 三  
女須磨子(明治三五年生、日本郵船會  
社員大塚鐵雄妻) 四女清子(明治三六  
年生、山一證券會社員村上徹妻)

谷區に生れた。喜州女史は明治八年東京に  
生れ、四歳の時西川喜舞の門弟となり、更  
に十六歳の時西川流家元西川己之助の直弟  
子となつたが、修業中恩師の訃に遭ひたる  
ため二十四歳の頃より水木流家元水木歌  
春、藤間流家元藤間ふじ坂東三津江、花柳  
壽輔の諸師に就いて各流の長所を究め正派  
西川流を創始した。爾來専ら門弟の教養及  
び振付、古典の研究に没頭し、舞踊界の發  
達に貢献した。女史は五歳の頃より母堂喜



州女史の嚴格  
なる薰陶を受  
けて斯道に勵  
み、大正十二  
年喜代春を襲  
名し市村座に  
於て盛大なる

(先代故西川喜洲女史)

襲名披露を行  
つた。その妙藝は夙に普く斯界に認められ  
てゐるが、女史は尙熱心に修業を積むと共  
に母堂を援けて同流の普及發展に努力しつ  
ゝある。振付は一中節の「松襲」、新曲長唄の  
「お七吉三」常磐津の「鶴龜」新内の「子寶」及  
「傾城音羽の瀧」等である。因みに正派西川  
流は各皇族方の御覺え厚く、女史は母堂と  
共に箱根御用邸、北白川宮邸等に召され、



川田 順氏

兵庫縣武庫郡御影町掛  
田一七八  
電話 御影二八三七

住友ビルディング(株)常務取締役、住友伸銅鋼管、住友倉庫、住友肥料製造所、住友製鋼所、土佐吉野川水力電氣、住友別子鑛山、住友電線製造所各(株)取締役住友(資)常務理事兼人事部長

明治一五年一月生、東京府

明治四一年東京帝國大學法科政治科卒業

氏は東京府士族川田鷹氏の弟として同府下に呱呱の聲を揚げ、明治四十三年分れて一家を創めた。夙に東京帝國大學に學び、拔群の成績を以て同校を卒業し、直ちに住友總本店に入り精勵恪勤、爾來次第に其の敏腕を認められ、本店經理課長、住友製鋼所支配人となり、今や前掲住友傍系各社の重役の要職を兼ねて益々雄飛しつゝある。此の間支那に遊び、又佐々木行綱に師事して、歌人として知られてゐる。「陽炎」「伎藝天」「山海經」「青淵」等の著述あり、歌山協會の理事である。趣味は和歌。

妻カズ(明治二〇年生、京都府河原象三妹)養子周雄(明治四四年生、兄鷹四男)

本田 龍二氏 目黒區中目黒四丁目  
一五二六

第一銀行赤坂支店長

明治二〇年三月生、東京府

温厚なる銀行家として信望ある氏は、東京府人本田常徳氏の二男にして府下に呱呱の聲を擧げた。明治三十二年十月第一銀行に入社し、本店各課に於て精勵恪勤して漸次昇進し計算係長等として夙に社内信望を受け、後堀留支店に轉じて次席を勤め、克く支店長を援けて同支店の業績向上に努め、功績顯著なるものがあつた。本支店を通じて同行に在ること實に三十餘年に及び而も此の間何等の過誤なく勤績し得たることは、實に氏の人格の反映にして亦誠實謹直主義を以て奮闘努力せる賜と稱すべく、多年の功績は報ひられて昭和五年九月赤坂支店長に榮轉し以て現在に及んでゐる。眞宗を信仰し、園藝に趣味を有してゐる。

妻八重子(三二歳、神奈川縣人上保勸兵衛四女)男見吉郎(一四歳)男保徳(一五歳)男秀夫(一〇歳)男篤男(八歳)

本山 仲造氏

京橋區銀座三ノ三  
電話京橋(56)一五五

報知新聞社編輯局客員

明治一四年三月生、岡山縣

萩舟の雅號を以て廣く江湖に知らるゝ氏は、岡山縣人本山海吉氏の長男として同縣下に生れ、明治二十六年家督を継いだ。

性來頗る總明敏活、夙に操觚界に投じ、明治三十三年山陽新報社に入り社會部記者となつて以來、中國民報、二六新報等に於て敏腕を揮ひ、大正元年報新新聞社に入り通信部長の要職に在つて活躍すること多年、現に同社編輯局客員として操觚界に重きをなしてゐる。廣く社會の表裏に通じ、文章頗る輕妙にして「近世數奇傳」「名人畸人」「近世劍客傳」「日蓮」等何れも洛陽の紙價を高からしめたる好著として知られてゐる趣味として觀劇及料理研究を最も好み、特に料理に關する造詣頗る深く、料理通として名聲を博してゐる。

妻光子(明治二九年生、東京府人前田孫七三女)

鼈甲齋虎丸氏

神田區美土代町三ノ一  
電話神田(25)一、五一〇

浪曲大家

明治一八年六月生、東京市

浪曲界の大神所たる氏は本名を荒井正三郎と稱し、品川北馬場の寄席山崎亭に呱呱の聲を揚げた。代々同地に住し苗字帶刀御免の家柄であつたが、維新後氏の嚴父與三郎氏は海軍飲料水の御用達を勤む傍ら山崎亭を經營してゐた。氏は幼時より演藝に憧憬れ、劇界雄飛を夢みて市川宗三郎の門弟

となつたが、一家の悲運に際會して横濱に移り活版所に勤めて家計を助ける身となつた。然るに藝事に執着を禁じ得ざるため幾何もなく活版所を辭し、新派荒木清一座に投じて各地に巡業し後自ら一座を組織したが失敗に歸し、止むを得ず上京して二代目虎丸の門に入り、入門と同時に何等の修業をも行はずして深川の櫻館に初高座を勤め、意外にも好評を博した。これ實に氏が二十歳の時にして、之が動機となつて以來帝都各奇席劇場等て出演し、鼈甲齋吉右衛

傳右衛門惟精の後裔で、維新の志士贈從五位柳川藩士十時惟泰氏の四男として、柳川に生れ後分れて一家を創立した。夙に郷里の中學校を卒へて明治三十六年上京し、同三十八年東京市役所に奉職して事務員となり、爾來内記課に勤務して専ら編纂事務に従事し恪勤衆に勝れ、遂次累進して大正九年四月内記課主事に榮進し、次いで同年八月内記課長に拔擢され、敏腕を謳はれてゐたが、同十三年九月永田市長の辭職に殉じて職を辭し、暫らく閑居して就き、同十四年

保險契約者相互の救済を目的とし、純然たる相互組織の下に計畫された新時代的保險會社にして且つ基礎極めて鞏固なる千代田生命保險相互會社の取締役兼東京支店長の要職にある氏は、千葉縣人土井七郎氏の長男として生れ、大正十三年家督を相續した。慶應義塾を卒業して保險業界に身を投じ現時前記の要職にあつて、明晰なる頭腦と卓越せる手腕とに依つて、斯界に噴々たる名を馳せてゐる。



佐々木行綱に師事して、歌人として知られてゐる。「陽炎」「伎藝天」「山海經」「青淵」等の著述あり、歌山協會の理事である。趣味は和歌。

妻カズ(明治二〇年生、京都府河原象三妹)養子周雄(明治四四年生、兄鷹四男)

本田 龍二氏 目黒區中目黒四丁目一五二六  
第一銀行赤坂支店長

歳(男秀夫(一〇歳)男篤男(八歳))

本山 仲造氏 京橋區銀座三ノ三 電話京橋(56)一五五  
報知新聞社編輯局客員

明治一四年三月生、岡山縣 萩舟の雅號を以て廣く江湖に知らるゝ氏は、岡山縣人本山梅吉氏の長男として同縣下に生れ、明治二十六年家督を継いだ。

明治一八年六月生、東京市 浪曲界の大御所たる氏は本名を荒井正三郎と稱し、品川北馬場の寄席山崎亭に颯々の聲を揚げた。代々同地に住し苗宇帶刀御免の家柄であつたが、維新後氏の嚴父與三郎氏は海軍飲料水の御用達を勤む傍ら山崎亭を經營してゐた。氏は幼時より演藝に憧憬れ、劇界雄飛を夢みて市川宗三郎の門弟

となつたが、一家の悲運に際會して横濱に移り活版所に勤めて家計を助ける身となつた。然るに藝事に執着を禁じ得ざるため幾何もなく活版所を辭し、新派荒木清一座に投じて各地に巡業し後自ら一座を組織したが失敗に歸し、止むを得ず上京して二代目虎丸の門に入り、入門と同時に何等の修業をも行はずして深川の櫻館に初高座を勤め、意外にも好評を博した。これ實に氏が二十歳の時にして、之が動機となつて以來帝都各寄席劇場等に出演し、齧甲齋吉右衛門を名乗つて漸次斯界に擡頭し、二十五歳の三月神田區市場亭に於三代目虎丸の襲名披露を行つた。其の後或は大阪に下り或は滿洲に渡り、辛酸具さに嘗めて修業を積むこと多年、遂に斯界隨一の名人として全國普く名聲を博するに至つた。得意の語物は「安中草三郎」「伊達評定」等既に斯界に定評がある。趣味繪畫、清元等。

十時 尊氏 澁谷區圓山七九 電話青山(36)二、三九一  
東京市助役

明治一二年九月生、福岡縣 多事多端なる帝都の市政に、永田市長を輔けて、徳望内外に高い氏は、秀吉の朝鮮征伐當時碧蹄館に先陣の功名を樹てた十時

傳右衛門惟精の後裔で、維新の志士贈從五位柳川藩士十時惟泰氏の四男として、柳川に生れ後分れて一家を創立した。夙に郷里の中學校を卒へて明治三十六年上京し、同三十八年東京市役所に奉職して事務員となり、爾來内記課に勤務して専ら編纂事務に従事し恪勤衆に勝れ、遂次累進して大正九年四月内記課主事に榮進し、次いで同年八月内記課長に拔擢され、敏腕を謳はれてゐたが、同十三年九月永田市長の辭職に殉じて職を辭し、暫らく閑地に就き、同十四年十月再び起用されて本所區長となり、難事の區政に善處して功績を顯はした。區長辭任後昭和二年以來代々幡町長の職に在つたが、同五年六月永田秀次郎氏が再び東京市長に就任の際、其の助役に擧げられ、帝都の施政に對して功績を樹てて今日に及んでゐる。

妻靜江(明治二六年生、東京府人池田章長女)長男惟臣(大正五年生)二男惟彦(大正七年生)長女花子(大正一一年生)

土井 正司氏 澁谷區大山二〇 電話青山(36)五八七  
千代田生命保險(互)取締役兼東京支店長  
明治一八年五月生、千葉縣 慶應義塾卒業

保險契約者相互の救済を目的とし、純然たる相互組織の下に計畫された新時代的保險會社にして且つ基礎極めて鞏固なる千代田生命保險相互會社の取締役兼東京支店長の要職にある氏は、千葉縣人土井七郎氏の長男として生れ、大正十三年家督を相續した。慶應義塾を卒業して保險業界に身を投じ現時前記の要職にあつて、明晰なる頭腦と卓越せる手腕とに依つて、斯界に嘖々たる令名を馳せてゐる。

母とみ(明治一二年生)夫人富美(明治二五年生、愛媛縣人兒島八二郎三女)嗣子和夫(大正五年生)弟清次(明治二五年生)

千葉 龜雄氏 品川區大井庚塚四三 電話大森一〇一〇  
大阪毎日、東京日日各新聞社編輯顧問  
明治一一年九月生、宮城縣 早稻田大學文科卒業

該博なる知識と透徹した論理とを以つて文學の凡ゆる領域に亘つて侃々の論鋒を示してゐる人に、千葉龜雄氏がある、氏は宮城縣人千葉恒平氏の二男として生れ、明治二十九年亡兄叔太郎氏の後を承けて家督を相續した。夙に早稻田大學に學び、又國民英學會をも卒業し、その後文庫、新聲、日本及日本人、日本新聞、國民新聞、時事新



報等の記者となり、傍ら評論を諸新聞雜誌に寄稿し、評論家として名を爲し、其後讀賣新聞社文藝部長、同編輯局長となり、更に名古屋新聞社事務取締役、大阪毎日新聞社學藝部長等を歴任して、現時前掲各新聞社編輯顧問の職にある。其の文藝評論、社會思想に關する論評は斯界の耆宿として景仰せられてゐる。旅行、讀書等に趣味を有し、權威ある著書も亦頗る多い。

妻フク(明治二十一年一月生、群馬縣人) 小島峰藏氏(三女)長男靜一(明治二十八年九月生) 女靜江(明治四十一年二月生)同菊江(明治四十四年九月生) 二男泰二(大正四年四月生)三男明(大正六年一月生)四男朗(大正十二年一月生) 姉よね(明治八年一月生、滋賀縣人中島吉之助妻)

岡田幸三郎氏 品川區出石五〇二一 電話大森一六七〇

鹽糖製品販賣(株)取締役、鹽水港製糖(株)營業部長

明治二十一年四月生、千葉縣

明治四十二年長崎高等商業學校卒業

鹽水港製糖の營業部長の要職に就き且つ東京製糖工場長をも兼ねて内外の信望極めて厚い氏は、千葉縣人岡田幸吉氏の三男として同縣海上郡銚子町に呱呱の聲を揚げ、

後分家して一家を創立した。序を追うて長崎高商に進み、卒業後臺灣製糖會社に入社し、計算、販賣各課長に歴任し、後ち東京支店詰となつたが、大正六年之を辭して鹽水港製糖會社に轉じ、現時營業部長の職にある傍ら前記鹽糖製品會社取締役を兼ね、本邦實業界に雄飛すべき基礎を得た氏の將來は、大いに期待されてゐる。氏はゴルフに興味深く、程ヶ谷カントリー俱樂部會員である。宗旨は日蓮宗である。

妻隆子(明治三〇年九月生、福島縣士族) 鈴木寅彦(長男)長男英(大正一〇年一月生) 二男幸彦(大正一三年一月生) 長女順子(昭和二年八月生) 二女正子(同四年三月生)

岡田 忠彦氏 麴町區永田町二ノ三二一 電話銀座(57)三三二〇

從四位勳三等、法學士、衆議院議員

明治十一年三月生、岡山市

明治三六年東京帝大法科大學政治科卒業

嘗て牧民に従ひて良二千石の名高く、又東京市高級助役として能くその大任を完ふし現に代議士として政友會の中堅を以つて知らるゝ氏は、岡山藩の一門池田伊賀守家臣岡田險平氏の長男として岡山市に呱呱の聲を揚げ、大正四年家督を相續した。夙に

俊英の譽高く、明治三十六年優秀なる成績を以て東大卒業後文官高等試験に合格し、同三十八年三重縣屬、三十九年靜岡縣事務官に任ぜられた。爾來大分、奈良、山口、熊本の各縣事務官を経て、同四十四年中央政廳に入つて内務書記官となり、警務局警務課長を命ぜられ、同四十五年長崎縣内務部長に轉じ、大正四年東京府内務部長となり、同五年埼玉縣知事に任ぜられた。八年休職となり、歐米に遊んで其の地方行政、社會政策を視察して同三十年歸朝し、直ちに長野縣知事に任じ、從四位勳三等に陞つた。十二年熊本縣知事に轉じ、同年内務省警保局長となり、同十三年桂冠して野に下り、岡山縣より衆議院議員に選出され、更に同年十月村中公氏の下に東京市高級助役となり復興途上の多端なる市政に貢獻した。代議士に當選すること四回、立憲政友會所屬にして、旅行を好み座談に長じ、亦客を愛する好紳士である。

母堂多嘉惠(安政五年生)妻しづ(明治一八年生、東京府人秋山有文氏姉)長男武彦(明治四一年生)長女ふじ(明治三九年生、京都府人原田源之助氏妻)

岡田 庄作氏 瀧野川區上中里六二一 電話小石川(85)二四五一

從五位勳六等、東京辯護士會長、明治大學教授、法學博士、辯護士、辨理士

明治六年三月生、島根縣

明治三五年明治法律學校卒業

在野法曹界の權威として斯界に重きをなしてゐる氏は、島根縣人岡田宗三郎氏の三男として同縣瀨摩郡波積村に呱呱の聲を揚げ、昭和四年令兄卯吉氏より分れて一家を創立した。夙に島根縣師範學校を卒業し、同縣下小學校長として初等教育に従事して

村孟文氏(姉)長男正登(明治四一年生) 二男正世(大正元年生) 長女ヒサ子(大正五年生)

岡本 達夫氏 葛飾區金町四ノ一六九 電話新宿二三三

三菱製紙(株)中川工場次長

明治三二年二月生、名古屋

明治四五年東京高等商業學校卒業

三菱製紙會社は三菱王國系の一大會社にして其の營業の盛たるは今日五言を更し

明治元年三月生、高崎市

明治二十二年同志社大學卒業

攻玉社工學校は其の歴史も古く、本邦工業界に多くの俊髦を輩出して居る此の名譽ある學校長たることに實に三十年に及びし我大沼文哉氏の功勞は誠に甚大と云はねばならない。氏は群馬縣人大沼傳藏氏の長男として生れ明治三十一年家督を相續した。夙に同志社を卒業して攻玉社に奉職し、累進



岡田幸三良氏 電話大森一六七〇

鹽糖製品販賣(株)取締役、鹽水港製糖(株)營業部長

明治二十一年四月生、千葉縣

明治四十二年長崎高等商業學校卒業

鹽水港製糖の營業部長の要職に就き且つ東京製糖工場長をも兼ねて内外の信望極めて厚い氏は、千葉縣人岡田幸吉氏の三男として同縣海上郡銚子町に呱呱の聲を揚げ、

從四位勳三等 法學士、衆議院議員

明治十一年三月生、岡山市

明治三六年東京帝大法科大學政治科卒業

嘗て牧民に従ひて良二千石の名高く、又東京市高級助役として能くその大任を完ふし現に代議士として政友會の中堅を以つて知らるゝ氏は、岡山藩の一門池田伊賀守家臣岡田陰平氏の長男として岡山市に呱呱の聲を揚げ、大正四年家督を相續した。夙に

會所屬にして、旅行を好み座談に長じ、亦客を愛する好紳士である。

母堂多嘉惠(安政五年生)妻しづ(明治一八年生、東京府人秋山有文氏姉)長男武彦(明治四一年生)長女ふじ(明治三九年生、京都府人原田源之助氏妻)

岡田 庄作氏 瀧野川區上中里六一  
電話小石川(85)二四五

從五位勳六等、東京辯護士會長、明治大學教授、法學博士、辯護士、辨理士

明治六年三月生、島根縣

明治三五年明治法律學校卒業

在野法曹界の權威として斯界に重きをなしてゐる氏は、島根縣人岡田宗三郎氏の三男として同縣瀨摩郡波積村に呱呱の聲を揚げ、昭和四年令兄卯吉氏方より分れて一家を創立した。夙に島根縣師範學校を卒業し、同縣下小學校長として初等教育に従事してゐたが、明治三十三年上京し、明治大學の前身明治法律學校に入りて法律學を學び、同三十五年之を卒業して判檢事試験に登第檢事として大分、熊本、水戸、東京、各地方裁判所に歴任した。而して同四十二年獨逸ミュンヘン大學に學び、歸朝後東京地方、同區裁判所東京控訴院の各判事に歴補し、大正八年官を辭して野に下り、辯護士を開業し、衆望を擔つて東京辯護士會長に推戴せられ、以つて今日に及んでゐる。尙氏は大正十三年法學博士の學位を授けられ現時辯護士たる外辨理士をも開業し、傍ら母校明治大學教授として學生に其の蘊蓄を授けつゝある而して讀書を唯一の趣味とし、宗教は眞宗である。

妻マトイ(明治一三年生、熊本縣士族西

明治元年三月生、高崎市

明治二十二年同志社大學卒業

攻玉社工學校は其の歴史も古く、本邦工業界に多くの俊髦を輩出して居る此の名譽ある學校長たることに實に三十年に及びし我大沼文哉氏の功勞は誠に甚大と云はねばならない。氏は群馬縣人大沼傳藏氏の長男として生れ明治三十一年家督を相續した。夙に同志社を卒業して攻玉社に奉職し、累進して同三十五年攻玉社工學校長となり、大正十四年同高等工學校主事を兼ねて大いに之れ務めた。氏が攻玉社に奉職してより實に四十有餘年、専心子弟の教育を天職と心得、虚名を求めず、其半生を同一私學と共にせるは、如何に異動少き教育界とは云へ、他に多く匹儔を見ざるところである。因に氏は曹洞宗の信者にして、趣味は佛像蒐集、書畫等である。

妻ふじ(明治八年生、兵庫縣人山下増三郎四女)長男正吉(明治一七年生)同妻はる(明治三二年生、群馬縣人反町純一妹)二男保次(明治三七年生)三男毅一(明治四四年生)四男末吉(大正二年生)長女きよ(明治三〇年生、東京府人工兵中佐岸新妻)二女ひで子(明治三四年生、東京府人日清製粉社員澤野保次妻)

村孟文氏姉)長男正登(明治四一年生)二男正世(大正元年生)長女ヒサ子(大正五年生)

岡本 達夫氏 葛飾區金町四ノ一六七  
電話 新宿二三三

三菱製紙(株)中川工場次長

明治三二年二月生、名古屋市

明治四五年東京高等商業學校卒業

三菱製紙會社は三菱王國系の一大會社にして其の業績の隆々たるは今更贅言を要しない同社中川工場次長として信望内外に篤いわが岡本達夫氏は、名古屋市に生れ、大正二年家督を相續した。明治四十五年一ツ橋を出て、直ちに三菱製紙に入り、其の恪勤の資性と、明敏なる頭腦は、濟輩を抜いて累進し、現時中川工場次長の職にある。氏の趣味に書畫があり、宗旨は禪宗である。令閨クニ子夫人は淑徳の譽高く、氏との間に一男二女を儲け、和氣霽々たる家庭を營んでゐる。

妻クニ子、長男達也(大正一四年生)長女清子(大正五年生)二女耐子(大正一二年生)

大沼 文哉氏 淀橋區百人町二ノ四  
電話四谷(35)四七三二



大野 求 氏

牛込區新小川町二ノ二〇  
事務所神田區表猿樂町二五  
電話神田(25)三二八八

神田日活館支配人  
明治二五年一〇月生、愛媛縣  
大正四年早稻田大學商科卒業



氏は愛媛縣  
人大野市次郎  
氏の二男にし  
て、郷里の中  
學校卒業後上  
京して早稻田  
大學に學んだ

卒業後大正八年小林喜三郎商店に勤務したが、幾何もなく國際活動寫真株式會社に轉じ、大正九年松竹キネマ金春館の主任となつた。其の後帝國館、キネマ俱樂部、日活營業部、三友館、みやこ座等に轉勤して日活館經營の經驗を積み、昭和四年神田日活館に聘せられて其の支配人となり、以て今日に及んでゐる。映畫には夙に深き趣味を有し、多年の經驗に依つて斯業に關する造詣頗る深く、然も業務に熱心なるため、就任以來日活館の業績は逐年向上して斯界に晋く認められ、氏の名聲も亦噴々たるものがある。

道枝夫人は明治三十二年生、愛媛縣人戒田貞雄氏の姉にして、杉山高女出身の才媛である。

大木忠三郎氏

小石川區茗荷谷町一六

第一銀行牛込支店長

明治一一年一二月生、千葉縣

氏は千葉縣人大木彌助氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、大正二年家督を相續した。夙に金融界雄飛を志して第一銀行に入社し、孜々として行務に精勵したる効果空しからず、漸次信用を得て地位向上し、曩に同行牛込支店長に拔擢され、現にその職に在つて専ら支店の信用を高め業績を進展せしめ、以て第一銀行の隆興に貢獻すべく努力しつゝある。氏は四男五女の子福者にして、其の三女は既に他家に嫁し、目下家庭には四男二女が和氣霽々としてゐる。

妻すま(明治二四年生、千葉縣人藤崎造酒八郎妹) 男嶸明治三九年生、東京帝大工科卒業、工學士、鐵道省勤務) 男正光(大正四年生) 男周光(大正一〇年生) 男英夫(大正一二年生) 女きた(明治三五年生) 府立第二高女卒業、法學士、拓殖大學及農業大學教授澤田五郎に嫁す) 女たか(明

治三八年生、千葉縣人大木きく(養女) 女あい(明治四三年生、府立第一高女卒業農學士、著述家木村靖二に嫁す) 女芳子(明治四五年生、府立第二高女卒業) 女桂子(昭和三年生)

大瀨 貴明氏

日本橋區濱町三ノ六  
電話浪花(67)一〇五八

正七位勳六等、醫學士、在郷陸軍一等軍醫濱町産科婦人科病院長、日本橋區醫師會常務理事

明治九年二月生、秋田縣

明治三六年東京帝大醫科大學卒業

學究に忠たる刀圭家は動もすれば臨床の對症療法に温容を缺き、温容にして如才なき市井醫は兎角學究的に缺如し、この二者を兼ね備へたる良醫に至つては甚だ得易くないが、濱町病院長大瀨貴明氏の如きは何等の遲疑する處なくこの代表的國手と云ひ得るであらう。氏は秋田縣人大瀨貴誠氏の長男として生れ、後家督を相續した。東大卒業後暫く軍籍に身を置いてゐたが、後本邦斯界の權威木下博士の經營する濱町病院に勤務して、一般患者の診療に従事すること多年昭和三年十月、濱町病院長となつて今日に及んでゐる。然かも仁術の使命を遺憾なく完ふして、患者の絶大なる信頼を

博してゐる。一方同業者間に信望篤く日本橋醫師會常務理事に擧げられ、斯業の向上と發展に盡瘁する所亦決して尠くない。因に氏の信奉する宗旨は禪宗にして、且つ趣味として謠曲を嗜み頗る堪能である。

妻菊子(明治一〇年生、大澤勝氏姉) 長男貴光(明治四二年生) 長女章子(大正元年生) 二女千枝子(大正三年生)

大河内正敏氏

下谷區谷中清水町一  
電話下谷(83)四三七

仰付けられた。帝大卒業後更に大學院に學び、後獨逸兩國に留學し、歸朝後は東京帝國大學工科大學に教鞭を執り、大正三年工學博士の學位を受けた。同十年大學教授を辭任し、理化學研究所長となり、以つて今日に及んでゐる。研究的諸劑が、實際民衆の生活に寄與する所尠くないのは、隱に陽に氏の功勞が與つて力あると云はざるを得ない。曩に貴族院議員に擧げられ、研究會の一領袖として活躍してゐたが、現在は政

て同縣下に生れた。夙に上京して帝國大學に學び政治科を専攻して卒業すると同時に第一銀行に入つた。本店に於て行務の經驗を積みたる後下關支店に轉じ、更に京都支店に移つて支店長代理を勤め、幾何もなく足利支店長代理となり、經驗手腕共に備はるや、兜町支店長に拔擢され、更にその後大崎支店長に轉じ、以て現在に及んでゐる入社以來信用第一主義を以て終始一貫し、人格の高潔なる點に於て夙に同行内は勿論



動館經營の經驗を積み、昭和四年神田日活館に聘せられて其の支配人となり、以て今日に及んでゐる。映畫には夙に深き趣味を有し、多年の經驗に依つて斯業に關する造詣頗る深く、然も業務に熱心なるため、就任以來日活館の業績は逐年向上して斯界に晋く認められ、氏の名聲も亦噴々たるものがある。

家庭には四男二女が和氣霽々としてゐる。妻すま(明治二四年生、千葉縣人藤崎造酒八郎妹)男嶸明治三九年生、東京帝大工科卒業、工學士、鐵道省勤務)男正光(大正四年生)男周光(大正一〇年生)男英夫(大正一二年生)女きた(明治三五年生)府立第二高女卒業、法學士、拓殖大學及農業大學教授澤田五郎に嫁す)女たか(明

ひ得るであらう。氏は秋田縣人大瀨貴証氏の長男として生れ、後家督を相續した。東大卒業後暫く軍籍に身を置いてゐたが、後本邦斯界の權威木下博士の經營する濱町病院に勤務して、一般患者の診療に従事すること多年昭和三年十月、濱町病院長となつて今日に及んでゐる。然かも仁術の使命を遺憾なく完ふして、患者の絶大なる信頼を

博してゐる、一方同業者間に信望篤く日本橋醫師會常務理事に擧げられ、斯業の向上と發展に盡瘁する所亦決して尠くない。因に氏の信奉する宗旨は禪宗にして、且つ趣味として謡曲を嗜み頗る堪能である。

妻菊子(明治一〇年生、大澤勝氏姉)長男貴光(明治四二年生)長女章子(大正元年生)二女千枝子(大正三年生)

### 大河内正敏氏

下谷區谷中清水町一  
電話下谷(83)四三七

正三位勳三等、子爵、工學博士、東京府多額納稅者、理化學研究所長、理化學興業(株)取締役會長、國寶保存會委員

明治一一年一二月生

明治三六年東京帝大工科造兵學科卒業

當家は從三位賴政の次男左衛門尉兼綱の末葉にして、其の子顯綱は大河内源太夫と稱した。爾後相傳へて右衛門太夫正綱に至つて徳川家康に仕へ、嗣子伊豆守信綱閣老に列して武州川越六萬石に封ぜられ、後ち三州吉田城に移り、十世を経て先代信好氏に至り、明治十七年子爵を授けられた。其の後を享けた氏は、上總大瀧の主大河内正質氏の長男に生れ、子爵大河内正倫氏の令兄に當り、後懇請されて先代信好氏の養子となり、明治四十年家督を相續し同時に襲爵

仰付けられた。帝大卒業後更に大學院に學び、後獨逸兩國に留學し、歸朝後は東京帝國大學工科大學に教鞭を執り、大正三年工學博士の學位を受けた。同十年大學教授を辭任し、理化學研究所長となり、以つて今日に及んでゐる。研究的諸劑が、實際民衆の生活に寄與する所尠くないのは、隱に陽に氏の功勞が與つて力あると云はざるを得ない。曩に貴族院議員に擧げられ、研究會の一領袖として活躍してゐたが、現在は政界を退いて前掲の職にある。

養母美能子(慶應三年生、子爵牧野一成叔母)妻一子(明治九年生、先々代信古長女)長男信威(明治三五年生、從五位)二男信敬(明治三六年生、分家)三男信敏(明治三八年生、分家)四男信定(明治四五年生)五男信秀(大正一二年生、東京府人大河内信紅死跡相續)孫信賢(長男信威の男)

### 太田 民治氏

澁谷區神山一四

第一銀行大崎支店長、法學士

明治二六年一月生、山形縣

大正九年東京帝國大學法科大學卒業

德望家として又敏腕家として知らるゝ氏は、山形縣人故太田直右衛門氏の二男にし

て同縣下に生れた。夙に上京して帝國大學に學び政治科を専攻して卒業すると同時に第一銀行に入つた。本店に於て行務の經驗を積みたる後下關支店に轉じ、更に京都支店に移つて支店長代理を勤め、幾何もなく足利支店長代理となり、經驗手腕共に備はるや、兜町支店長に拔擢され、更にその後大崎支店長に轉じ、以て現在に及んでゐる入社以來信用第一主義を以て終始一貫し、人格の高潔なる點に於て夙に同行内は勿論一般に崇敬され、絶大の信用を博してゐる信教は禪宗、趣味は圍碁、謡曲等である。妻富子(明治三二年生、石川縣人堀俊明二女、石川縣立高女卒)男逸郎(大正一三年生)男治男(大正一五年生)男昭三(昭和三年生)

### 太田 半六氏

澁谷區千駄谷三ノ四九  
電話 青山三二八

太田(名)、東京瓦斯副産(株)各社長、帝國火藥工業(株)常務、北海道瓦斯(株)專務、東京瓦斯、東洋耐火煉瓦、平和海上火災保險、横濱工作所各(株)取締役、東京回漕(株)相談役

明治九年七月生、千葉縣

明治二七年東京專門學校政治經濟科卒業



回漕業界に於て夙に隆々たる聲望を現はし、現時前掲諸會社の重役として本邦實業界に鬱然たる潛勢力を有する氏は、千葉縣士族太田滿直氏の二男として同縣夷隅郡多喜町に呱呱の聲を揚げ、明治三十年令兄源三郎氏の後を享けて家督を相續した。同二十七年東京專門學校を卒業し始めて職を官に奉じ、大藏省屬となつたが、同三十二年官界を退いて實業界に入り、北海道炭礦汽船會社販賣主任となり、隨所に卓越せる手腕を發揮し、後ち東京回漕株式會社社長に擧げられ、現時太田合名會社東京瓦斯副産株式會社の二社を主宰する外、前掲諸會社の重役として愈々獨自の飛躍を爲しつゝある

妻光(明治一〇年八月生、東京府人山本惣五郎氏長女)弟健吉(明治一四年一月生、分家)甥源一(明治二七年一月生、亡兄源三郎長男、分家)

太田 惣吉氏 品川區上大崎三ノ番三三 電話 高輪一六三二

東京府多額納稅者、地主 明治一六年一二月生、東京府

當家は江戸時代より金融業を營み、代々惣吉を暖簾名とする由緒深い家である。中興の祖了我は書畫骨董の鑑識に勝れ、又和歌俳句を好くし、爲めに松平雲州公の寵愛

を恣にした。祖父了雲亦斯道に長じ、當家に名什珍器甚だ多く、且つ嚴父幸吉氏は夙に政治及び自治に關心し、後感する處あつて十五歳の氏に家督を譲り、惣吉を幸吉と改稱し悠々自適して今日に至つてゐる。氏は其の長男として日本橋區新右衛門町に呱呱の聲を揚げ、年少家督を相續して前名幾太郎を改め、爾來聊も家名を辱しめず、明治三十九年時勢に鑑みて營業を全廢し、専ら土地家屋を經營して今日に及び、爾來多額納稅者の一人として、現時直接國稅六千二百八十圓を納めてゐる。大正十一年現地に隱棲した。同邸は舊幕時代「牛仙波」の茶席と稱し、數寄を凝した結構、林泉の風致老樹古苔蒼然として頗る雅趣に富んでゐる氏も亦書畫に頗る堪能にして、其の蒐集せる佳什は尠くない。

父幸吉(安政四年生)妻やす(明治二〇年生、東京府人大崎又三郎氏妹)嗣子福次郎(明治四四年生)

太田與一郎氏 四谷區麴町二ノ一四 電話四谷(35)二、九八八

法學士、公證人 明治一七年六月生、山形縣 大正三年東京帝大法科佛法科卒業 都下の公證人中、其の學殖に於て、其の

人格に於て、わが太田與一郎氏の如きは誠に斯界に於ける名實共に第一人者といふべきである。氏は山形縣士族石岡與市氏の長男に生れ後先代信武氏の養子となり、大正十年家督を相續した。東大卒業後辯護士となり、幾多の難事件を取扱つて名を斯界に謳はれたが、同九年東京地方裁判所々屬公證人に任命され、今日に及んでゐる。曩に東京公證人會副會長に擧げられ、斯界の發展と向上に盡瘁する能頗る甚大であつた。因に氏は金光教の篤信家にして、その趣味とするものに圍碁がある。

妻はる(明治二四年生、東京府人田中泰助女)養子みつ(明治四四年生、山形縣士族石岡與市三女)同つる子(大正九年生、東京府人富岡利三郎三女)同とよ(大正一五年生、山形縣人鈴木八郎二女)弟康夫(大正四年生、養父信武養子、長野縣人中島久藏五男)

落合 寅平氏 豐島區西巢鴨三ノ二七二 電話 大塚九八八

從五位、勳五等、東京府立第五中學校長 明治六年一二月生、福島縣 明治三一年東京高等師範學校卒業 氏は福島縣人大山與四郎の二男として同縣伊達郡大田村に呱呱の聲を揚げ、後絶家

落合家を再興した。夙に福島縣師範學校を経て明治三十一年東京高等師範學校本科文科を卒業し、更に研究科に入りて研究を積み、爾來沼津、高崎、會津、宇都宮各中學校長、東京高等師範學校教授、日本青年館理事私立日本高等女學校長、東京府學務課長、同府立第三高等女學校長を経て、昭和五年現職に就き、以つて今日に及び、教育界特に中等教育界の耆宿として學界に重き

長男として生れ、大正十年家督を相續した。夙に校門を出づるや、實業界に身を投じ、隨所に其の卓越せる手腕を發揮して、次第に業界に於ける基礎を築き、現時富士紡績會社常任監査役たる外滿洲紡績會社監査役として斯界に雄飛しつゝある。

十年歐米に派遣され、先進諸國に於ける教育状態を視察研究して同十一年歸朝後文部省宗教局長、社會教育局長等に歴任し昭和四年十月退官したが、同七年四月再び文部省に出仕し、宗教局長として活躍以て今日に及んでゐる。信仰は佛教、趣味は讀書等。

奥 弘之氏 芝區白金三光町二七六 電話高輪(44)五、六五八



太田 惣吉氏 品川區上大崎三ノ五四  
電話 高輪一六三二

東京府多額納稅者、地主  
明治一六年一二月生、東京府

當家は江戸時代より金融業を営み、代々惣吉を暖簾名とする由緒深い家である。中興の祖了我は書畫骨董の鑑識に勝れ、又和歌俳句を好くし、爲めに松平雲州公の寵愛

生、東京府人大崎又三郎氏妹) 嗣子福次郎(明治四四年生)

太田與一郎氏 四谷區麴町二ノ一四  
電話四谷(35)二、九八八

法學士、公證人  
明治一七年六月生、山形縣  
大正三年東京帝大法科佛法科卒業  
都下の公證人中、其の學殖に於て、其の

島久藏五男)

落合 寅平氏 豐島區西巢鴨三ノ二七三  
電話 大塚九八八

從五位、勳五等、東京府立第五中學校長  
明治六年一二月生、福島縣  
明治三一年東京高等師範學校卒業  
氏は福島縣人大山與四郎の二男として同縣伊達郡大田村に呱呱の聲を揚げ、後絶家

落合家を再興した。夙に福島縣師範學校を経て明治三十一年東京高等師範學校本科文科を卒業し、更に研究科に入りて研究を積み、爾來沼津、高崎、會津、宇都宮各中學校長、東京高等師範學校教授、日本青年館理事私立日本高等女學校長、東京府學務課長、同府立第三高等女學校長を経て、昭和五年現職に就き、以つて今日に及び、教育界特に中等教育界の耆宿として學界に重きをなしてゐる。氏は又讀書を唯一の趣味とし、宗教は眞宗である。

妻文子(明治一三年生、京都府人中川謙三郎二女)長男矯一(明治三六年生、文學士東京府立第九中學校教諭)二男健二(明治三八年生)二女憐子(明治四四年生)

緒方 正亮氏 澁谷區大山一八  
電話青山(36)一、三三五

富士瓦斯紡績(株)常任監査、滿洲紡績(株)監査  
明治九年五月生、熊本縣  
明治三〇年慶應義塾高等科卒業

富士瓦斯紡績の常任監査役の要職にあつて本邦纖維工業界に令名高い緒方正亮氏は財界に幾多の俊才を輩出したる慶應義塾の出身にして、母校の名譽に一段の光彩を添へてゐる。氏は熊本縣土族緒方慶次郎氏の

長男として生れ、大正十年家督を相續した。夙に校門を出づるや、實業界に身を投じ、隨所に其の卓越せる手腕を發揮して、次第に業界に於ける基礎を築き、現時富士紡績會社常任監査役たる外滿洲紡績會社監査役として斯界に雄飛しつゝある。

妻ケイ(明治一六年生、東京府人清水繁雄長女)嗣子亮一(明治三七年生)二男英次(明治三九年生)三男三郎(明治四二年生)四男芳郎(明治四四年生)二女千代子(大正四年生)五男正夫(大正九年生)弟正敏(明治二六年生)同妻米(明、三二年生)弟正康(明治三〇年生)同妻千代(明治三七年生)弟正治(明治三七年生)

下村 壽一氏 豐島區池袋三ノ一五四、七  
電話 大塚二九一〇

從四位、勳三等、法學士、文部省宗教局長  
明治一七年七月生、京都府  
明治四三年東京帝大法科卒業

氏は京都府與謝郡加悦町下村與七郎氏の長男として同町に呱呱の聲を揚げた。東京帝國大學法科政治科を卒業後直ちに山形縣屬を拜命し、爾來同縣警視、富山縣理事官、東京府理事官等を経て文部省參事官兼文部大臣秘書官に進んだ。大正

十年歐米に派遣され、先進諸國に於ける教育狀態を視察研究して同十一年歸朝後文部省宗教局長、社會教育局長等に歴任し昭和四年十月退官したが、同七年四月再び文部省に出仕し、宗教局長として活躍以て今日に及んでゐる。信仰は佛教、趣味は讀書等。

奧 弘之氏 芝區白金三光町二七六  
電話高輪(44)五、六五八

奧商會、サロン春各經營主  
明治二八年一〇月生、大阪市  
大正七年明治大學商科卒業

黄昏の光がすっかり落ちると、銀座は一時、赤い灯、青い灯で輝き出し、都會人の散歩心をそよる。四季を通じて毎夜、銀座の鋪道は人の波で埋る。——カフェーはそこに美しく咲く花にも譬ふべく、カフェーを語るとすれば、「サロン春」を先づ挙げなければならぬ。サロン春の經營者である氏は、田中工業會社常務取締役として實業界に令名ある大阪府人奧長造氏の長男として大阪市に生れた。明治大學卒業後直ちに十五銀行に入り、神戸支店に勤務してゐたが、同十二年之を辭し、酒造業に従事し、後之を廢して奧商會を創立した。一方時代文化の流れに鑑みてカフェー「サロン春」



を經營し、巧妙なる營業方針に依つて、斷然帝都人の人氣を集めつゝある。因に氏の信奉する宗旨は眞言宗である。

父長造(明治三年生、現戸主)妻里代(明治三年生、兵庫縣人酒造業安福又四郎二女)長男惠一郎(大正一三年生)長女弘子(大正一五年生)二男保男(昭和三年生)

尾上 菊子嬢 麴町區平河町五ノ二六 電話九段(33)三、〇八一

女優(尾上菊五郎座付)

明治四四年一月生、愛知縣

昭和二年文化學院卒業



嬢は本名杉山房枝、中京實業界に名聲噴々たる杉山榮氏の長女として名古屋市に呱呱の聲を揚げた。

幼時より演藝に興味深く、藤間勘十郎に師事して舞踊を學び、八歳の時尾上菊五郎の門弟となり、通學の傍ら藝道の修業を勵み、昭和二年文化學院卒業後間もなく新橋演舞場に初舞臺を踏み「かしくの釣針」の乙姫を勤めて好評を博した。爾來只管藝の洗練に努力しつゝあるが、その豊

富なる天分は當代の名人六代目の嚴格なる教導と相俟つて日を逐ふて伸び、劇界の新進女形として大いに將來の飛躍を期待されてゐる。當り藝は山本有三氏作「盲目の弟」のお琴、舞踊に於ては九條武子夫人作「四季」の秋等である。趣味はスポーツ、讀書及び映畫等である。

尾上 菊枝嬢 麴町區麴町一ノ三 電話九段一一七二

女優(尾上菊五郎座付)

大正四年二月生、東京市

昭和七年精華高女卒業



嬢は本名近藤富志子と呼び、埼玉縣人近藤波保氏の三女として神田區佐久間町に生れ、嚴父

波保氏のクラブ化粧品東部總代理店主として實業界に雄飛しつゝある。嬢は幼時より藝術に興味を有し、十一歳の時尾上菊五郎の門下となり舞踊を學んだが、天才の閃きは日ならずして師に認められ、嚴格なる指導を受けつゝ致々として研究に勵むこと數年、一と度舞臺に現はれるや賞讃湧くが如

く、舞踊の天才、劇界の花として謳はれるに至り、昭和六年十月師の菊五郎外五名の幹部の推薦に依つて六等に昇格し、大日本俳優協會より本邦最初の女名題適任證を授與され、歌舞伎座の十二月興行に於て、所作「銘作左小刀」の「京人形の精」を勤め菊五郎の口上で盛大なる名題披露が行はれ益々名聲を博した。趣味は讀書、スポーツ等である。

小田切武昌氏 芝區白金三光町五一 電話高輪(44)五、五四四

三井合名會社調査課勤務、法學士

明治三二年五月生、東京市

大正一二年東京帝國大學佛法科卒業

氏は横濱正金銀行取締役として財界に名聲噴々たる小田切萬壽之助氏の二男にして東京市に呱呱の聲を揚げた。長じて東京帝國大學に學び、優秀の成績を以て卒業するや、嚴父の後を繼いで實業界に雄飛すべく三井合名に入社した。爾來既に十ヶ年、此の間専ら職務に恪勤して漸次その手腕を認められ、現に同會社調査課に在つて只管社の發展の爲め努力しつゝある。學生時代より頭腦の明晰を以て知られてゐたが、今や經驗を積んで實務の才に長け、その圓滿なる人格と相俟つて社内における信望厚く、

而も常に新知識の吸収に努めて自己修養を怠らず新進有爲の材として一般に認められ、將來の飛躍を期待せられてゐる。

小野藍次郎氏 向島區寺島一三三七

從六位勳六等、前寺島町長、東京府江戸川

上水町村組合評議員

明治三年七月生、水戸市

城東寺島町は、近來著しい發展を遂げ、

(明治四四年生)三女たまき(大正三年生) 四女さかゑ(大正一一年生)

渡邊 扶氏 澁谷區景丘五五四 電話高輪(44)一、〇五四

工學士東京瓦斯(株)工務課長

明治一九年一月生、福島縣

明治四三年東京帝國大學工科卒業

瓦斯技術界の權威たる氏は福島縣士族渡

邊長綱氏の二男に生れ、福島縣立相馬中學

校卒業後、第一高等學校を経て東京帝國大

堤 康次郎氏 品川區上大崎町中丸四 電話高輪(44)五、五四四

正五位、拓務政務次官、衆議院議員

明治二二年三月生、滋賀縣

氏は滋賀縣堤猶治郎氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、明治二十六年その家督を嗣いだ。夙に早稻田大學政治科に學び、卒業後實業界に投じ、敏腕達識以て著々斯界に於ける地歩を開拓し、箱根土地會社々長等として噴々たる名聲を博するに至つた。後政界に進出し、大正九年衆議院議員に選ばれて以來議政壇上



に呱呱の聲を揚げた。幼時より演藝に興味深く、藤間勘十郎に師事して舞踊を學び、八歳の時尾上菊五郎の門弟となり、通學の傍ら藝道の修業を勵み、昭和二年文化學院卒業後間もなく新橋演舞場に初舞臺を踏み「かしくの釣針」の乙姫を勤めて好評を博した。爾來只管藝の洗練に努力しつゝあるが、その豊

に生れ、嚴父波保氏、クラブ化粧品東部總代理店主として實業界に雄飛しつゝある。嬢は幼時より藝術に興味を有し、十一歳の時尾上菊五郎の門下となり舞踊を學んだが、天才の閃きは日ならずして師に認められ、嚴格なる指導を受けつゝ致々として研究に勵むこと數年、一と度舞臺に現はれるや賞讃湧くが如

や嚴父の後を繼いで實業界に雄飛すべく三井合名に入社した。爾來既に十ヶ年、此の間専ら職務に啓動して漸次その手腕を認められ、現に同會社調査課に在つて只管社の發展の爲め努力しつゝある。學生時代より頭腦の明晰を以て知られてゐたが、今や經驗を積んで實務の才に長け、その圓滿なる人格と相俟つて社内における信望厚く、

而も常に新知識の吸収に努めて自己修養を怠らず新進有爲の材として一般に認められ、將來の飛躍を期待せられてゐる。

### 小野藍次郎氏 向島區寺島一三三七

從六位勳六等、前寺島町長、東京府江戸川上水町村組合評議員  
明治三年七月生、水戸市

城東寺島町は、近來著しい發展を遂げ、府下に於ける一大工業地として今や人口五萬有餘を擁してゐる。而して此地に町長として施政宜しきを得て内外の信頼を一身に集めてゐる我が小野藍次郎氏は、茨城縣人藤枝六左衛門氏の二男として、水戸市に呱呱の聲を揚げ、後明治二十三年に小野七藏氏の養子となつた。同三十八年郡視學となり、翌年茨城縣鹿島郡長に轉じ、地方自治及教育に尠からざる功績を残した。昭和二年十月推戴されて寺島町長に就任、爾來同町發展に挺身しつゝ今日に及んで居る、資性温厚篤實なる氏は、旅行讀書等に趣味を持ち、又眞言宗の篤信家である。

夫人あさ(明治八年生、小野七藏氏長女)  
長男尙志(明治三四年生、七十七銀行員)  
長女満知子(明治四三年生)二女那珂子

(明治四四年生)三女たまき(大正三年生)  
四女さかゑ(大正一一年生)

渡邊 扶氏 澁谷區景丘五五四  
電話高輪(44)一、〇五四

工學士東京瓦斯(株)工務課長  
明治一九年一月生、福島縣

明治四三年東京帝國大學工科卒業

瓦斯技術界の權威たる氏は福島縣士族渡邊長綱氏の二男に生れ、福島縣立相馬中學校卒業後、第一高等學校を経て東京帝國大學に學び、明治四十三年工科應用科學科卒業後、千代田瓦斯會社に入社、次で山陰瓦斯會社技師長となつた。其後、南滿洲鐵道株式會社技師、橫濱市瓦斯局長等に歴任し昭和四年瓦斯工務課長千住製作所長に任ぜられた。瓦斯技術に關しては、その蘊奥を究め、今や斯界の第一人者として令名を馳せてゐる。

妻靜子(明治二二年生、東京府人田岡忠次郎二女)長女敏子(明治四四年生、家政學院卒業、法學士千葉縣人安西浩に嫁す)  
二女淑子(大正一〇年生)三女綾子(大正一四年生)一男宏(大正一二年生)

### 堤 康次郎氏

品川區上大崎町中丸四〇五 電話 高輪望究  
正五位、拓務政務次官、衆議院議員  
明治二二年三月生、滋賀縣

氏は滋賀縣堤猶治郎氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、明治二十六年その家督を嗣いだ。夙に早稻田大學政治科に學び、卒業後實業界に投じ、敏腕達識以て著々斯界に於ける地歩を開拓し、箱根土地會社々長等として噴々たる名聲を博するに至つた。後政界に進出し、大正九年衆議院議員に選ばれて以來議政壇上屈指の鬪將として民政黨内に漸次有力なる地位を占め、代議士たること僅かに四回にして昭和七年六月拓務政務次官の要職に拔擢された。現時その任に在つて敏腕の聞え高く、前途洋々たる政客として囑望されてゐる。趣味として柔道を好み三段の猛者として知られてゐる。

### 能澤外茂吉氏

臺北市兒玉町四ノ二官舎内 電話臺北三六五  
從五位、勳六等、法學士、臺灣總督府事務官兼秘書官、殖産局山林課長兼鑛務課長

明治二二年三月生、石川縣  
大正五年京都帝大法科卒業  
氏は石川縣能澤長太郎氏の二男として金澤市に呱呱の聲を揚げ、大正七年分れ



て一家を樹てた。大學卒業後直ちに司法官試補に任ぜられ、後京都地方裁判所檢事を拜命し、奈良地方裁判所檢事を経て大正九年臺灣總督府に轉じた。爾來臺中地方法院判官、警察官練習所教授、臺南州警務部長、總督府事務官、臺中州內務部長等を経て昭和七年三月殖産局山林課長兼礦務課長に陞進し、以來引續き其の職に在つて活躍してゐる。宗旨は眞宗、趣味は圍碁、庭球等。

妻ヨシ(明治三一年生、石川縣奥田幸一郎二女) 長男一郎(大正一五年生) 長女美代子(同七年生) 二女惠美子(同九年生) 三女富美子(同二二年生) 四女幸子(同四四年生)

渡邊 四郎氏

麴町區上六番町五 電話九段(33)一三四一

撫順炭販賣、東洋石油各(株)取締役、松島炭礦(株)監査役、三井物産(株)石炭部長 明治一五年五月生、岐阜縣 明治三九年東京高等商業學校卒業

實業界特に石炭業界に非凡の手腕を發揮しつゝある氏は、岐阜縣人渡邊章氏の四男として生を享け、長じて東京高商に學び、卒業後直ちに三井物産會社に入社した。門司支店に勤務し、石炭部副長を経て昭和三

年三月石炭部長に擧げられ、社業發展に努力する傍ら前記諸會社の重役として斯界に潑刺たる活躍をなしつゝ今日に及んでゐる。氏は資性温厚篤實、頭腦また明晰にして、曩に歐米各國を具さに視察して財界の實情に通じ、將來の飛躍は大に期待されてゐる。讀書に趣味を有し新智識の吸收に努めてゐる宗旨は眞宗の篤信家である。

妻玲(明治二七年生、福岡縣人横山貞嗣三女、長崎高女卒業) 男眞一(大正四年生) 長女妙(大正六年生) 二女恭子(大正九年生) 三女尚子(大正一四年生) 四女友子(昭和二年生)

渡邊龜次郎氏

麴町區有樂町一三三 電話丸の内(23)三、九八八

鹽瀨總本店(資)代表社員、日本全國菓子同業組合理事、麴町區菓子同業組合理事、有樂町一丁目町會長、鹽瀨會々長 明治一四年三月生、富山市 富山中學校卒業

本邦菓子製造界に名聲ある鹽瀨本店の創業は、實に今を去ること約一千年前にして東山義政は當家の製菓を激賞し、特に「五七ノ桐」の商標を許し「日本第一番本饅頭所」と大書した櫛の大看板を當家の祖先林淨因

に贈つた。林淨因は支那に渡航して彼の地の菓子製造法を修得したる先覺者にして、爾來連綿として一千年の今日に續く名門である。當主龜次郎氏は、富山縣人北野伊兵衛氏の四男に生れ、明治三十九年先代タネの入夫となり、同四十五年家督を相續した氏は家業を専心修得し、百人以上の店員を愛撫すること慈父の如く、由緒あるこの名家を益々繁榮ならしめ、現時各宮家御用を勤めてゐる。尙氏は前記公職に在つて、或は營業の向上發展に、或は町會自治に盡瘁する處尠くない。因に同家は十八家に分れ當家は即ちその宗家にして、氏は現に鹽瀨同族會の會長として同門同族の繁榮に努めて居る。

妻種子(明治一三年生、養父利一長女) 長男貫治(明治四二年生) 長女愛子(明治三八年生) 二女淳子(大正二年生) 三女房江(大正四年生) 三男浩助(大正五年生) 四女富美子(大正九年生)

渡邊孫一郎氏

淀橋區戸塚二ノ一四〇 電話牛込(34)五、八〇九

從四位勳三等、理學博士、東京工業大學教授兼東京商科大学教授 明治一八年九月生、栃木縣 明治四一年東京帝大理科數學科卒業

數學の大家として知られてゐる氏は、栃木縣人渡邊藤太氏の長男として生れ、大正十四年實家より分れて一家を創立した。夙に數學に興味を有し、東京帝大にて數學を専攻し、優秀なる成績を以て卒業したる後第八高等學校、第一高等學校の各教授、東京商科大学豫科教授等を経て昭和四年現職に就き、以つて今日に及んでゐる。尙大正八年に理學博士の學位を授けられ、數學に關する著書も多く、斯界の權威として噴々

年家督を相續した。校門を出ると直ちに日本郵船會社に入り、本社會計課に勤務し、後倫敦支店詰に轉じ、幾許もなく内地に歸り、横濱支店副長となつた。次いで再び海外に赴きシャートル支店長に榮進し、大正十二年再び横濱に戻つて支店長となり、彼の大震災の際には身を以つて危きを免れ、後ち本店文書役を命ぜられた。其の後倫敦支店長を命ぜられたが、赴任に先立ち神戸支店長に轉じ、同十五年五月破格の拔擢を

先代正三郎氏は山形瓦斯會社副社長、山形商工會議所副會頭等に擧げられ、藍綬褒章を賜つた山形縣財界の重鎮であつた。氏はその長男として生れ、昭和三年家督を相續した。夙に東京帝大醫科に學び、藥學を専攻し、同大學卒業の、大正二年南洋商會に入り、明晰なる頭腦と恪勤なる資性と相俟つて、次第に累進し、理事を経て常務取締役に擧げられ、同社發展に大なる貢獻をなしつゝある。現時前掲の諸會社の重役



撫順炭販賣、東洋石油各(株)取締役、松島炭礦(株)監査役、三井物産(株)石炭部長

明治一五年五月生、岐阜縣  
明治三九年東京高等商業學校卒業

實業界特に石炭業界に非凡の手腕を發揮しつゝある氏は、岐阜縣人渡邊章氏の四男として生を享け、長じて東京高商に學び、卒業後直ちに三井物産會社に入社した。門司支店に勤務し、石炭部副長を経て昭和三年

業組合理事、麴町區菓子同業組合長、有樂町一丁目會長、鹽瀨會々長

明治一四年三月生、富山市  
富山中學校卒業

本邦菓子製造界に名聲ある鹽瀨本店の創業は、實に今を去ること約一千年前にして東山義政は當家の製菓を激賞し、特に「五七ノ桐」の商標を許し「日本第一番本饅頭所」と大書した櫛の大看板を當家の祖先林淨因

八年生)二女淳子(大正二年生)三女房江(大正四年生)三男浩助(大正五年生)四女富美子(大正九年生)

渡邊孫一郎氏 淀橋區戸塚二ノ一四〇 電話牛込(34)五、八〇九

從四位勳三等、理學博士、東京工業大學教授兼東京商科大學教授  
明治一八年九月生、栃木縣  
明治四一年東京帝大理科數學科卒業

數學の大家として知られてゐる氏は、栃木縣人渡邊藤太氏の長男として生れ、大正十四年實家より分れて一家を創立した。夙に數學に興味を有し、東京帝大にて數學を專攻し、優秀なる成績を以て卒業したる後第八高等學校、第一高等學校の各教授、東京商科大學豫科教授等を経て昭和四年現職に就き、以つて今日に及んでゐる。尙大正八年に理學博士の學位を授けられ、數學に關する著書も多く、斯界の權威として嘖々たる名聲を博してゐる。

妻政子(明治二五年四月生、東京府人伊藤英夫氏二女)長男研一(大正五年二月生)長女靜子(大正三年五月生)二男隆二(大正八年九月生)三男洋三(大正一〇年一月生)五男章吾(大正一四年八月生)二女和子(昭和三年一月生)三女昭子(昭和四年一〇月生)

渡邊水太郎氏 品川區上大崎中丸四九 電話高輪(44)四、三八四

日本郵船(株)專務取締役  
明治一四年七月生、新潟縣  
明治三八年東京高等商業學校專攻部卒業  
海の王者日本郵船會社の專務取締役の要職にあつて斯界に頗る令名高い氏は、東京府人渡邊兵吉氏の長男として生れ、大正二

年家督を相續した。校門を出ると直ちに日本郵船會社に入り、本社會計課に勤務し、後倫敦支店詰に轉じ、幾許もなく内地に歸り、横濱支店副長となつた。次いで再び海外に赴きシャートル支店長に榮進し、大正十二年再び横濱に戻つて支店長となり、彼の大震災の際には身を以つて危きを免れ、後本店文書役を命ぜられた。其の後倫敦支店長を命ぜられたが、赴任に先立ち神戸支店長に轉じ、同十五年五月破格の拔擢を受けて庶務部長となり、昭和四年十一月更に專務取締役の要職に擧げられた。氏は人となり圓滿にして常識に富み、人格高潔、手腕また秀れ、加ふるに精勵格勵家にして同社の模範となつてゐる。讀書に興味を有し、特に造船學に關する造詣は頗る深い。

妻かつ(明治一七年生、東京府人金澤大吉四女)養子正廣(大正四年生、弟次郎長男)

渡邊恒太郎氏 淀橋區戸塚一ノ三五〇 電話牛込(34)九九一

藥學士、オリエンタル寫眞工業南洋商會各(株)常務、日本塗紙工業(株)取締役、南洋貿易信用(株)監査役  
明治二二年五月生、山形縣  
大正二二年東京帝大醫科藥學科卒業

先代正三郎氏は山形瓦斯會社副社長、山形商工會議所副會頭等に擧げられ、藍綬褒章を賜つた山形縣財界の重鎮であつた。氏はその長男として生れ、昭和三年家督を相續した。夙に東京帝大醫科に學び、藥學を專攻し、同大學卒業の、大正二年南洋商會に入り、明晰なる頭腦と格勤なる資性と相俟つて、次第に累進し、理事を経て常務取締役に擧げられ、同社發展に大なる貢獻をなしつゝある。現時前掲の諸會社の重役の職にあり、都下藥學工業界に令名頗る高い。因に宗旨は眞宗である。

母ナミ(明治三年生、山形縣人渡邊吉兵衛叔母)妻シン(明治二七年生、福島縣人根本祐太郎二女)長男良一郎(大正九年生)長女繁(大正七年生)二男謹次郎(大正一一年生)二女芳(大正一三年生)三女房(大正一五年生)

加藤 信好氏 本郷區本郷二ノ四一 電話小石川(85)三、八六六 公證人  
安政五年一月生  
司法省法律學校卒業  
數多い帝都の公證人の中、斯界の耆宿として畏敬されてゐる氏は、舊幕臣加藤源十郎氏の子息として生れ、明治十一年家督を



相續した。夙に司法省法律學校に學び、後前橋地方裁判所、東京地方裁判所、長野地方裁判所の各判事となり、名判官の名を謳はれてゐたが、後官を辭して辯護士を開業した。其の後同四十一年公證人となり、爾來二十有餘年、誠實主義を以て斯業に従事し以て今日に及んでゐる。宗教は眞言宗にして趣味に謡曲、圍碁等がある。

妻ひさ子(明治一二年生、東京府人三木田幸太郎長女) 四女照子(明治四二年生) 長女操(明治二二年生、東京府人橋田一郎母) 三女出鶴子(明治四二年生、別家して加藤姓を稱す)

加藤 重治氏

牛込區市谷加賀町二ノ三 電話牛込(34)三、七八一

大日本製氷(株)常務、土佐製氷冷蔵、宇和島製氷冷蔵、田子製氷、日本製氷、日銚製氷冷蔵、佐原製氷冷蔵、茨城製氷、勝浦製氷冷蔵、鹽釜港製氷、大湊冷蔵、羽後製氷各(株)取締役、東神冷蔵製氷(株)監査役

明治一四年九月生、東京市

明治三六年東京高工機械科卒業

本邦屈指の大會社たる大日本製氷會社の常務取締役たる外前掲幾多の製氷及製氷冷蔵會社の重役として、斯界に燦として君臨してゐる我が加藤重治氏は、東京府人加藤

重次郎氏の長男として日本橋區に呱呱の聲を揚げた。明治十六年幼にして家督を相續し、同三十六年東京高工卒業後直ちに芝浦製作所に入り、後機械工業研究の爲米國に渡航する事前後二回に及んだ。同四十二年大日本製氷の前身日東製氷株式會社に入社し、大正九年取締役となり、同十四年七月常務取締役に擧げられ、現時前記諸會社の重役をしてゐる傍ら工政會、日本冷蔵協會、機械會の各會員として本邦機械工業界の發展と向上に盡瘁せられつゝある。氏は敬虔なる基督教信者にして、旅行、讀書、謡曲等に趣味を有してゐる。

妻美亞(明治二二年生、東京府人中川信妹、東京女學館卒) 長男元(大正元年生) 二男二郎(大正四年生) 長女治(明治四三年生) 二女美佐(大正七年生) 三男(和男) (大正一四年生) 三女喜久子(昭和三年生)

加納四十二氏

下谷區下根岸一四 電話根岸三三二

從六位、東京府立工藝學校教諭木材工藝科長、同府立家具工養成所囑託

明治二五年一月生、滋賀縣

大正三年東京高等工業學校圖案科卒業

東京府立工藝學校は二十有五年の歴史を有し、工業學校規定に依り金屬工藝、木材

工藝機械、印刷の業に従事せんとする者に必要なる教育を施すを目的とし、獨立獨歩自ら身を修むるの自治を教訓として、内容實質其の堅實なる校風は世人周知であるが當校の木材工藝科長として令名ある氏は、滋賀縣人三上彦兵衛氏の三男に生れ、後ち懇請されて加納光太郎氏の養子となり、大正五年家督を相續した。是より曩き同三年東京高工卒業後横濱市にあつた西川樂器店技師、大澤家具製作所技師、あめりかや家具部技師等に歴職した。同九年東京府立工藝學校教諭に就任。傍ら府立家具工養成所囑託を兼ね、子弟の教育に挺身して今日に及んでゐる。淳男と號し、釣魚、乘馬等に趣味を有してゐる。

妻マサ(明治二九年生、養父光太郎長女) 長男良光(昭和元年生) 長女昭惠(大正七年生) 二女壽々惠(大正一一年生) 三女和惠(昭和三年生)

桂 新七氏

芝區三田小山町二七 電話高輪(44)四、一五〇

經濟學士、共保生命保險(株)社員

明治三二年八月生

大正一四年東京帝大經濟科卒業

氏の嚴父は明治の巨人陸軍大將公爵桂太郎氏である。同公爵は維新の際奥羽鎮撫

督參謀となり、後獨逸に留學し、歸朝後陸

軍大尉に任ぜられ、爾來累進を重ねて明治

三十一年陸軍大將に陞り、從一位大勳位功

三級に叙せられた。其の間臺灣總督、陸軍

大臣四回、大藏大臣兼拓殖局總裁、侍從長

内大臣及び内閣總理大臣三回等の顯職に就

き、又日清戰役の功に依つて子爵、日英同

盟締結の功に依りて侯爵、日韓合併の功に

依りて公爵を授けられ、位人臣を極めた。

氏はその令息にして公爵桂廣太郎氏の叔父

に當つてゐる。夙に伶俐發明の才聞え、東

明治二八年大阪商業學校卒業

氏は大阪府人川田作兵衛氏の長男として

生れ、明治三十五年家督を相續した。同二

十八年大阪商業卒業後直ちに三井物産會社

に入社し、致々として社務に努め、大正七

年倫敦支店勤務を命ぜられ、滯英すること

六年の後歸朝した。曩に擧げられて營業部

長秘書の職にあつたが、現在本部秘書とし

て其の温厚篤實の資性は社の内外に厚き信

望を博してゐる。氏の趣味とする所は旅行

讀書等である。家庭には二男二女ありて、

た。夙に俊英の名を郷黨に馳せ、學序を踏

んで最高學府に學び、卒業後直ちに職を大

藏省に奉じて精勤すること年餘、同二十八

年退官して大阪銀行の副支酒人となつた。

これ氏の實業界に馳驅する端緒にして、後

同行が三十四銀行に合併されるに及んで、

氏も亦三十四銀行に奉職し、その恪勤は同

僚の模範となつた。同三十八年京都市高級

助役に推され市政に貢獻する處頗る多く、

勳六等に叙せられた。同四十一年南滿洲鐵

道會社に入りて調査課長及び理事の重位に



水冷蔵、佐原製水冷蔵、茨城製水、勝浦製水冷蔵、鹽釜港製水、大湊冷蔵、羽後製水各(株)取締役、東神冷蔵製水(株)監査役  
明治一四年九月生、東京市  
明治三六年東京高工機械科卒業  
本邦屈指の大會社たる大日本製氷會社の常務取締役たる外前掲幾多の製氷及製水冷蔵會社の重役として、斯界に燦として君臨してゐる我が加藤重治氏は、東京府人加藤

(大正一四年生)三女喜久子(昭和三年生)  
加納四十二氏 下谷區下根岸一四  
電話根岸三三二一  
從六位、東京府立工藝學校教諭木材工藝科長、同府立家具工養成所囑託  
明治二五年一月生、滋賀縣  
大正三年東京高等工業學校圖案科卒業  
東京府立工藝學校は二十有五年の歴史を有し、工業學校規定に依り金屬工藝、木材

惠(昭和三年生)  
桂 新七氏 芝區三田小山町二七  
電話高輪(44)四、二五〇  
經濟學士、共保生命保險(株)社員  
明治三二年八月生  
大正一四年東京帝大經濟科卒業  
氏の嚴父は明治の巨人陸軍大將公爵桂太郎氏である。同公爵は維新の際奥羽鎮撫

督參謀となり、後獨逸に留學し、歸朝後陸軍大尉に任ぜられ、爾來累進を重ねて明治三十一年陸軍大將に陞り、從一位大勳位功三級に叙せられた。其の間臺灣總督、陸軍大臣四回、大藏大臣兼拓殖局總裁、侍從長内大臣及び内閣總理大臣三回等の顯職に就き、又日清戰役の功に依つて子爵、日英同盟締結の功に依りて侯爵、日韓合併の功に依りて公爵を授けられ、位人臣を極めた。氏はその令息にして公爵桂廣太郎氏の叔父に當つてゐる。夙に伶俐發明の才聞え、東大經濟學部を卒業後直ちに日本晝夜銀行に就職し、同行麻布支店に精勤してゐたが、昭和三年七月共保生命保險株式會社に轉じて今日に及んでゐる。趣味廣汎にして、特に柔道、角力、野外運動、日本音樂等を愛好し、又社交に厚く、學士會、智慧の輪俱樂部の各會員である。  
妻復子(明治三八年生、煙草元賣捌商石部泰藏養子) 長男泰郎(大正一四年生) 長女常子(大正一二年生)

明治二八年大阪商業學校卒業  
氏は大阪府人川田作兵衛氏の長男として生れ、明治三十五年家督を相續した。同二十八年大阪商業卒業後直ちに三井物産會社に入社し、孜々として社務に努め、大正七年倫敦支店勤務を命ぜられ、滯英すること六年の後歸朝した。曩に擧げられて營業部長秘書の職にあつたが、現在本部秘書として其の温厚篤實の資性は社の内外に厚き信望を博してゐる。氏の趣味とする所は旅行讀書等である。家庭には二男二女ありて、何れも俊英の譽高く、當家の前途を祝福されてゐる。  
母デウ(萬延元年生) 長男壽雄(明治四二年生) 二男増雄(大正四年生) 長女はま(明治四一年生) 二女のぶ(明治四三年生)

た。夙に俊英の名を郷黨に馳せ、學序を踏んで最高學府に學び、卒業後直ちに職を大藏省に奉じて精勤すること年餘、同二十八年退官して大阪銀行の副支酒人となつた。これ氏の實業界に馳驅する端緒にして、後同行が三十四銀行に合併されるに及んで、氏も亦三十四銀行に奉職し、その恪勤は同僚の模範となつた。同三十八年京都市高級助役に推され市政に貢献する處頗る多く、勳六等に叙せられた。同四十一年南滿洲鐵道會社に入りて調査課長及び理事の重位に就き、又營口水道電氣會社々長となり、同社發展に大なる功勞を残して大正九年三月之を辭し、同十五年現職に就いて今日に及んでゐる尙氏は日本俱樂部會員にして、圍碁、將棋等に趣味深く、宗教は神道である。  
妻はつ(明治一八年生、東京府士族曲淵景章長女、御茶水高女專攻科卒) 長男一次(大正二年生) 長女たづ子(大正八年生) 二男次郎(大正一〇年生) 三男參次(大正一四年生)

川田 作藏氏 四谷區本村町三九

三井物産(株)本部秘書、東洋レーヨン(株)囑託

明治一一年一二月生

川村 柳次郎氏 豊島區駒込四ノ二一  
電話小石川(85)六八八六  
勳六等、法學士、大安生命保險(株)事務、ロツクアスファルト工業(株)監査役  
明治二四年四月生、長野縣

明治二七年東京帝大法科政治科卒業  
生命保險界に、或は工業界に絶倫の精力を披瀝しつゝある川村柳次郎氏は、長野縣士族川村清音氏の二男として同縣南佐久郡田口村に生れ、明治二十五年家督を相續し

河野 藤兵衛氏 瀧野川區上中里一四五

法學士、東京建鐵(株)營業部主任  
明治二六年生  
大正七年東京帝大法科獨法科卒業



本邦鐵工業界に聲名ある東京建鐵會社の營業部主任として、其の才腕を謳はれてゐる氏は、鹿兒島縣人河野藤次郎氏の長男として生れ、大正七年東大卒業後直ちに浦賀船渠會社に入り、同十二年東京建鐵會社に轉じ、その勤勉と卓越せる手腕は同僚の模範となつてゐた。昭和二年六月東京鋼板工業常務取締役に擧げられ、同社の樞機に携つてゐたが、昭和五年二月同社が東京建鐵會社に合併されるに際して再び東京建鐵に戻り、現時前掲の職にある。家庭には兩親健在し、氏は克く父母に仕へ至孝の譽れ高い、その信奉する宗旨は眞宗である。

父藤次郎(元治元年生、現戸主)母のぶ(明治四年生)長身藤明(大正一三年生)長女みき(昭和二年生)

河村菊江女史

鎌倉町長谷福瀬川  
電話 鎌倉七七八

女優、帝劇第一期生

明治二十三年七月生、東京市

明治四二年築地女子語學校卒業

女史は本名を芳子と呼び、河村重固氏の二女として本郷區西片町一〇に生れた。嚴父は文部省の官吏であつた。築地女子語學校卒業後間もなく帝劇女優第一期生として入所し、明治四十四年帝劇開場の際し山崎

紫紅氏作「頼朝」の「魚賣」に初舞臺を踏み、爾來帝劇專屬女優として活躍し、名聲を博した。得意の藝は谷崎潤一郎氏作「お國と吾平」の「お國」、小山内薫氏作「千姫」、山本有三氏作



「女親」の「母親」、「大菩薩峠」の「お松」、「淀君」等であるが、女史の洗練されたる技倆は帝劇女優中に於て異彩を放ち、至藝克く觀客を魅するものがある。大正八年英國皇太子殿下御來遊の際に森律子、村田嘉久子兩女史等と共に御前に妙技を演じて大いに面目を施したが、此の外高貴の御前に出演し光榮に浴したことは一再でない。音曲舞踊等にも廣く通じ、文學の造詣が深い。趣味は觀劇、旅行等である。

「女親」の「母親」、「大菩薩峠」の「お松」、「淀君」等であるが、女史の洗練されたる技倆は帝劇女優中に於て異彩を放ち、至藝克く觀客を魅するものがある。大正八年英國皇太子殿下御來遊の際に森律子、村田嘉久子兩女史等と共に御前に妙技を演じて大いに面目を施したが、此の外高貴の御前に出演し光榮に浴したことは一再でない。音曲舞踊等にも廣く通じ、文學の造詣が深い。趣味は觀劇、旅行等である。

笠 五朗 氏

麴町區富士見町五ノ七  
電話九段(33)二、九二二

能樂金春流、金春會幹事

慶應三年五月生、熊本縣

金春流謡曲に熟達し斯界の長老を以て目せられる氏は、熊本縣人佐藤氷五氏の二男として同縣下に呱呱の聲を揚げたが、長じ

て笠和吉氏の養子となり、明治十七年家督を相續した。謡曲は夙に明治十三年頃より斯界の名手櫻間伴養氏に就いて學び、縣下謡曲界に名聲を博するに至つたが、更に斯藝の蘊奥を究めんとし、明治二十四年上京して金春流宗家金春廣成氏の門弟となり、専心修業に勵んだ。かくて其の藝は圓熟の境に入り、帝都謡曲界に認められるに至つたが、後細川家の知遇を得て大正七年金春會の設立に奔走し、同會成立と共にその幹事に擧げられ、以て現在に至るまで同會の發展と斯流の普及に努力しつゝある。眞宗を信ずること厚く、書畫、圍碁、讀書等に趣味を有してゐる。

妻ナヲ(明治四年生、熊本縣土族岩家重長妹)男美雄(明治四三年生、立教大學在學)

笠原孝三郎氏

澁谷區羽澤七(勤務先)  
淺草區並木町一、電話  
淺草(84)二〇〇、二〇一

第一銀行駒形支店支配人

氏は夙に第一銀行に入り、精勵恪勤して漸次その手腕を認められ、地位も亦年を逐ふて累進し、同行吳服橋支店に轉じて支配人次席となつた。その後史に堀留支店に轉じ支配人次席を勤め、克く支配人を援けて

支店の業績向上に努力し、經營上の難局には進んで解決の衝に當り、功績顯著なるものがあつた。かくて多年誠實勤勉を旨として一意同行の信用保持と業績の進展に献身的努力を續けたる効果空しからず、昭和六年駒形支店支配人に擧げられた。支配人としての經驗は日尙ほ淺いが、曩に吳服橋及堀留兩支店に於て支配人次席として活躍したる手腕より推して、必ずや顯著なる功績を顯はし駒形支店をして活況を呈せしむる

樂家として起つことを望まず、藥劑師を志して殆んど獨學を以て研究し、大正十年藥劑士試験に合格した。然るにその後能樂家として雄飛すべく益々斯道の修業に勵み各流の舞臺に勤めて藝の洗練に努め、昭和五年「豫の卷會」を組織してその主宰者となり、門弟を指導するに至つた、斯て現今に於ては斯界に確乎たる地歩を占め、益々自藝の研鑽と斯道の發展に努力しつゝある。信仰は淨土宗、趣味は川柳、寫眞等である。

堅田家の養子となり、二十五歳の時襲名披露を行つた。堅田家は鳴物界に由緒ある家柄にして、初代喜惣次氏は約百年前斯界隨一の名手として名聲を謳はれたが、二代以後振はず堅田喜干治女史に依つて瀬川家名を維持する状態であつた。然るに氏が喜干治女史の養子として此の名門を襲ぐや忽ち復興の曙光認められ、爾來氏の名聲は年を逐ふて高く、帝都は勿論大阪下關博多或は小樽、札幌等の各地に門弟を有して隆況を



河村菊江女史 鎌倉七七八

女優、帝劇第一期生

明治三三年七月生、東京市

明治四二年築地女子語學校卒業

女史は本名を芳子と呼び、河村重固氏の二女として本郷區西片町一〇に生れた。嚴父は文部省の官吏であつた。築地女子語學校卒業後間もなく帝劇女優第一期生として入所し、明治四十四年帝劇開場の際し山崎

舞踊等にも廣く通じ、文學の造詣が深い。趣味は觀劇、旅行等である。

笠 五朗氏

麴町區富士見町五ノ七 電話九段(33)二、九二二

能樂金春流、金春會幹事 慶應三年五月生、熊本縣

金春流謡曲に熟達し斯界の長老を以て目せられる氏は、熊本縣人佐藤氷五氏の二男として同縣下に呱呱の聲を揚げたが、長じ

笠原孝三郎氏

澁谷區羽澤七(勤務先) 淺草區並木町一、電話淺草(84)二〇〇、二〇一

第一銀行駒形支店支配人

氏は夙に第一銀行に入り、精勵恪勤して漸次その手腕を認められ、地位も亦年を逐ふて累進し、同行吳服橋支店に轉じて支配人次席となつた。その後史に堀留支店に轉じ支配人次席を勤め、克く支配人を援けて

支店の業績向上に努力し、經營上の難局には進んで解決の衝に當り、功績顯著なるものがあつた。かくて多年誠實勤勉を旨として一意同行の信用保持と業績の進展に献身的努力を續けたる効果空しからず、昭和六年駒形支店支配人に擧げられた。支配人としての經驗は日尙ほ淺いが、曩に吳服橋及堀留兩支店に於て支配人次席として活躍したる手腕より推して、必ずや顯著なる功績を顯はし駒形支店をして活況を呈せしむるに至るべく、多大の期待を以て迎へられてゐる。

柿本 豊次氏

淀橋區柏木三ノ三二五 電話四谷(35)七二二

能樂家。金春流太鼓方

明治二六年七月生、石川縣



金春流太鼓方として帝都能樂囃子界に普く名聲を博してゐる氏は石川縣人柿本勝次郎氏の次男として金澤市に生れた。幼時より郷里に於て金春流家元金春惣石衛門氏に太鼓を學び、夙にその天才を認められたが、初め能

樂家として起つことを望まず、藥劑師を志して殆んど獨學を以て研究し、大正十年藥劑士試験に合格した。然るにその後能樂家として雄飛すべく益々斯道の修業に勵み各流の舞臺に勤めて藝の洗練に努め、昭和五年「豫の卷會」を組織してその主宰者となり、門弟を指導するに至つた、斯て現今に於ては斯界に確乎たる地歩を占め、益々自藝の研鑽と斯道の發展に努力しつゝある。信仰は淨土宗、趣味は川柳、寫眞等である。妻タメ(明治三四年生)長男弘吉(昭和三年生)長女節子(大正一五年生)

堅田喜惣治氏

赤坂區傳馬町三ノ一八 電話青山(36)五、五九六

長唄協會評議員、長唄喜與志會主、長唄囃子十五夜會主

明治二六年二月生、東京市



長唄囃子界の長老望月朴清氏の二男として日本橋區横山町に生れた氏は、十八歳の頃より父

の薰陶を受けて斯道に秀で、望月久藏を名乗つて長唄囃子界に雄飛し、二十三歳の時

堅田家の養子となり、二十五歳の時襲名披露を行つた。堅田家は鳴物界に由緒ある家柄にして、初代喜惣次氏は約百年前斯界隨一の名手として名聲を謳はれたが、二代以後振はず堅田喜干治女史に依つて瀨川家名を維持する状態であつた。然るに氏が喜干治女史の養子として此の名門を襲ぐや忽ち復興の曙光認められ、爾來氏の名聲は年を逐ふて高く、帝都は勿論大阪下關博多或は小樽、札幌等の各地に門弟を有して隆況を呈するに至つた。かくて現在主として指導に當り、傍ら古曲の研究及保存に努力しつゝある。

觀世 元繼氏

世田ヶ谷區深澤四ノ一六 電話世田谷(33)三五七

能樂觀世流太鼓宗家、洲崎商事(株)社長

明治一五年二月生、東京市

明治三八年東京高等商業卒業



能樂界に於ては名門觀世流太鼓宗家として令名を馳せ、實業界に於ては多年三井物産に敏腕

を揮ひ又洲崎商事社長として名聲ある氏は



故觀世元規氏の長男として芝區愛宕下町に生れた。正則中學校を経て一ツ橋の高商に學び、卒業後直ちに三井物産に入社し、大阪、カルカッタ、シンガポール等の各支店に歴勤し玉造造船所造船課長會計課長等の要職に進み、在社二十五年に及んで敏腕を認められた。一方能樂は十二歳の頃初舞臺を勤めて以來、明治三十四年流祖三百年祭には「望月」、赤十字社創立二十五週年記念には「石橋」の大獅子、同三十七年東照宮奉能には「老松」等に演し、又觀世舞臺に於ても「咸陽宮」「鷲」「高砂」其他數十番に勤めて技倆を認められ、大正十三年十五世家元を繼いで以來名實共に斯界の重鎮として名聲を博し、以て今日に及んでゐる。佛敎を信仰し、趣味はゴルフ、麻雀、ボート、野球其他一般運動競技を好み、高商在學當時はボートの選手であつた。

妻トメ子(三十一歳、武井市松女)長男豊(十二歳)二男元信(一歳)長女百代(四歳)

觀世 元業氏

澁谷區松濤八五

能樂觀世流太鼓方、紐育スタンダード石油會社東京支店營業部長  
明治二六年四月生、東京市  
大正八年慶應義塾大學理財科卒業

實業界と能樂界の兩方面に活躍しつゝある氏は、故觀世元規氏の三男、現宗家元繼氏の弟として芝區愛宕下町に生れた。明治四十四年正則中學校卒業後南洋シンガポールに航して商業を視察し、歸來慶應大學に學んだ。同校卒業後内田商會社に入社し大正十一年スタンダード石油會社に轉じ、以來同社に在つて漸次昇進し昭和三年東京支店營業部長となつた。能樂は幼時より父元規氏の敎へを受け、十歳の時「羅生門」に初出演して以來、明治四十四年前田侯邸に於ける明治天皇御前能には「土蜘蛛」に出演し、其他照憲皇太后、大正天皇、攝政宮並に各皇族方の御前能に數回勤めて光榮に浴し、又觀世舞臺に於ても夙にその妙技を認められ、大正十二年迄元繼氏東京不在の爲め家元代理を勤め、現に元繼氏と共に觀世流太鼓方の代表的名手として能樂界に重きをなしてゐる。信仰は佛敎、趣味は銃獵、ゴルフ等である。

妻京子(三二歳、正富照治長女、實踐高女卒)男元孝(八歳)男元久(三歳)女喜美子(十一歳)

横堀治三郎氏 本郷區西片町一〇  
電話小石川(85)一、七九一  
正四位、勳三等、工學博士

戸田利兵衛氏

本郷區駒込神明町五  
電話 小石川一四六

工學士、東洋遊園地(株)取締役、戸田組頭取、東京府多額納稅者  
明治一九年一月生、茨城縣  
東京帝國大學工科大學卒業

氏は茨城縣富田重吉氏の實弟にして、同縣下に呱呱の聲を揚げ、前名を繁秋と呼び、後先代戸田利兵衛氏の養子となりその家督相續と同時に利兵衛を襲名した夙に東京帝國大學工科に學び、卒業後戸田組に入り、養父を援けて業勢の進展に

參松(資)代表社員

明治一三年八月生、横須賀市  
明治三五年慶大理財科卒業

其の堅實さを謳はれてゐる參松合資會社の代表社員として、又嘗ては三陸汽船會社の社長として本邦實業界に令名ある氏は、岩手縣人横山久太郎氏の長男にして、大正十年家督を相續した。慶應義塾卒業の翌明治三十六年冶金學研究のため歐米各國を視察漫遊して同三十五年歸明した。同四十年再

明治四年三月生、千葉縣

明治二七年東京帝國大學工科大學卒業

礦物鑑定の權威として令名ある氏は、千葉縣の素封家横堀源一郎氏の實弟として同縣下に生れた。長じて帝國大學に學び探礦冶金科を卒業するや、直ちに母校助教任に任ぜられ、幾何もなく獨逸留學を命ぜられた。歸朝後京都帝國大學の敎授となり、滯獨中研鑽の新知識を傾注して講座を擔任する傍り、益々研究に努め、明治三十四年工學博士の學位を授與された。その後秋田礦山専門學校々長に就任し、本邦礦物學界の權威として多年後進の養成に貢献し、斯界に噴々たる名聲を馳せたが、後學界を去り郷里千葉縣より衆議院議員として出馬し、國政に參與して政界に異彩を放つた。現時帝國學士院會員として依然學界に重きをなし、特にその專攻する礦物學就中礦物の鑑定に於ては斯界の第一人者として推され、その功績顯著なるものがある。酒を嗜み、秋田礦山學校時代より酒仙を以て普く知られてゐる。

故子爵澁澤榮一述

青淵論叢

175頁 菊版  
定價 ¥1,50

統計資料協會發行

吉田嘉四郎氏

芝區二本榎四町二  
電話高輪(44)二、一七五

東京府農工銀行(株)預金割引課長、大日本酒類釀造(株)取締役、東京米穀商品取引所(株)支配人  
明治二〇年五月生、長崎縣

明治四〇年長崎高等商業學校卒業

氏は長崎縣人吉田嘉七氏の長男として生れた。夙に長崎商業を卒業し、大正七年東京府農工銀行書記となり、計算課、鑑定課



は、その下の選手であつた。  
妻トメ子(三十一歳、武井市松女)長男豊  
(十二歳)二男元信(一歳)長女百代(四歳)

觀世 元業氏 澁谷區松濤八五

能樂觀世流太鼓方、紐育スタンダード石油  
會社東京支店營業部長  
明治二六年四月生、東京市  
大正八年慶應義塾大學理財科卒業

流太鼓方の名手として、自ら身に着け、  
をなしてゐる。信仰は佛教 趣味は銃獵、  
ゴルフ等である。

妻京子(三二歳、正富照治長女、實踐高  
女卒)男元孝(八歳)男元久(三歳)女喜美  
子(十一歳)

横堀治三郎氏 本郷區西片町一〇  
電話小石川(85)一、七九一  
正四位、勳三等、工學博士

戸田利兵衛氏 本郷區駒込神明町五  
電話 小石川一四六

工學士、東洋遊園地(株)取締役、戸田組  
頭取、東京府多額納稅者  
明治一九年一月生、茨城縣  
東京帝國大學工科大學卒業

氏は茨城縣富田重吉氏の實弟にして、  
同縣下に呱呱の聲を揚げ、前名を繁秋と  
呼び、後先代戸田利兵衛氏の養子となり  
その家督相續と同時に利兵衛を襲名した  
夙に東京帝國大學工科に學び、卒業後戸  
田組に入り、養父を援けて業勢の進展に  
努力すること多年、養父の逝去後は自ら  
戸田組の代表として經營の衝に當り、大  
いに業務を擴張し、土木建築請負業界に  
雄飛以て今日に及んでゐる。傍ら東洋遊  
園地株式會社重役をも兼ね、その敏腕と  
崇高なる人格相俟つて聲望隆々たるもの  
がある。

養母まつ(明治四年生、東京府大矢庄  
松長女)妻千勢子(同三一年生、長野  
縣熊谷修一郎三女)長男順之助(大正  
七年生)二男守二(同一年生)長女  
統子(同九年生)二女敦子(同二〇年  
生)

横山長次郎氏 芝區高輪車町四五  
電話高輪(44)一、四四五

參松(資)代表社員  
明治一三年八月生、横須賀市  
明治三五年慶大理財科卒業

グルコース水飴製造販賣を營み、斯界に  
其の堅實さを謳はれてゐる參松合資會社の  
代表社員として、又嘗ては三陸汽船會社の  
社長として本邦實業界に名ある氏は、岩  
手縣人横山久太郎氏の長男にして、大正十  
年家督を相續した。慶應義塾卒業の翌明治  
三十六年冶金學研究のため歐米各國を視察  
漫遊して同三十八年歸朝した。同四十年再  
度歐米を歴遊し、歸朝後北海道鑛業鐵道會  
社取締役就任し、該博なる學殖と卓越せ  
る手腕は大に同社發展に貢献する處があつ  
たが、大正十四年之を辭した。大正五年五  
月參松合資會社を創立して其の代表社員と  
なり、爾來才腕を縦横に發揮して日を遡う  
て會社の基礎を鞏固ならしめつゝ今日に及  
んでゐる。尙大正八年三陸汽船會社々長に  
就任して其の名を謳はれてゐたが、後之を  
辭した。氏は社交に厚く、交詢社の會員で  
ある。趣味は音楽、旅行、撞球等。宗旨は  
禪宗である。

妻勝(明治二三年生、東京府人小泉信三  
令妹、香蘭高女卒)

定に於ては斯界の第一人者として推され、  
その功績顯著なるものがある。酒を嗜み、  
秋田鑛山學校時代より酒仙を以て普く知ら  
れてゐる。

故子爵澁澤榮一述  
**青淵論叢**  
統計資料協會發行  
菊版 175頁  
定價 ¥1,50

吉田嘉四郎氏 芝區二本榎四町二一  
電話高輪(44)二、一七五

東京府農工銀行(株)預金割引課長、大日本  
酒類釀造(株)取締役、東京米穀商品取引所  
(株)支配人  
明治二〇年五月生、長崎縣  
明治四〇年長崎高等商業學校卒業  
氏は長崎縣人吉田嘉七氏の長男として生  
れた。夙に長崎商業を卒業し、大正七年東  
京府農工銀行書記となり、計算課、鑑定課  
等に歷勤して同十年預金割引課長に擧げら  
れ、同行内外の信用を集めて今日に及んで  
ゐる。傍ら東京米穀商品取引所支配人及び  
大日本酒類釀造會社取締役の重職を兼ね、  
金融界並びに東都實業界に著々驥足を伸ば  
しつゝある。資性篤實にして、趣味として  
謡曲を嗜み、小鳥、金魚等を愛育してゐる  
尙當家の宗旨は日蓮宗である。

父嘉七(嘉永五年生、現戸主)母すゑ(嘉  
永五年生)妻きよ(明治二三年生、大分縣  
人永井三九郎長女)長男哲郎(大正六年  
生)

吉田 茂氏 豐島區目白二ノ二六〇〇  
電話大塚(86)一、七〇八  
從三位勳三等、法學士、協調會常務理事  
明治一八年九月生、大分縣



明治四四年東京帝大法學部獨法科卒業

近時我國の世相は異常なる伸展をなし、殊に勞資間の紛擾は逐年激烈を加へつゝあるが、これが協調和解に、防止對策に大なる貢獻をなしてゐるものに財團法人協調會があることは普く知られてゐる。而して同會の常務理事として勞資間に信望厚き吉田茂氏は、東京府士族吉田龜次郎氏の長男として生れ、大正十五年家督を相續した。東大卒業後文官高等試験に合格し、當初職を内務省に奉じ、爾來石川縣試補、同縣警視三重縣理事官、明治神宮造營局書記官、内務書記官、特殊財産管理局事務官、東京市助役、復興局書記官、同整地部長等を歴任して、地方行政に、又帝都復興に没すべからざる功勞を樹て、昭和二年七月内務省神戶局長に榮轉し、造神官副使を兼ね、ついで同四年七月社會局長に轉じて大に手腕を揮つたが、後野に下つて現に前掲の職にあつて社會事業に挺身しつゝある。尙曩に大禮使事務官を拜命し、又歐米に出張を命ぜられたこと等もある。

母ハル(慶應二年生)夫人章子(明治二五年生、石川縣人下平用彩氏長女)長男浩(大正六年生)長女和子(大正四年生)二女壽子(大正八年生)二男樓(大正一三年生)

安政五年八月生、大津市

三井、三菱等の大財閥に依らず獨立獨歩

我が實業界に今日の基礎を築き上げたる氏は、滋賀縣人吉村源六氏の長男に生れ、明治二十九年分家して一家を樹てた。夙に同志社に學び、後電氣諸機械業を營み、事毎に成功を収めて遂に今日の大をなすに至つた。曩に衆議院議員に選ばれたこと二回、又家庭學校を創立したことがある。尙曩に江若鐵道、南滿洲精糖の各會社長、南滿洲

三男豊(昭和二年生)

吉野源治郎氏 牛込區赤城下町五三

太陽生命保險(株)徵收課長

明治二八年一月生、東京市

大正五年東京高等商業學校卒業

經濟界未曾有の不振にも拘らず、堅實なる社是を針路として著々好成績を擧げ同業界は勿論汎く一般實業界に重きをなしてゐる太陽生命保險會社に、徵收課長の職を帯び内外の信望を博してゐる氏は、東京府人吉野源吉氏の二男として東京市に生れ、後分れて一家を創立した。本邦財界に幾多の俊髦を輩出してゐる一ツ橋の高商に學び入卒業の翌大正六年太陽生命保險株式會社に入り、氏の精勵と才腕は同僚の模範と謳はれ、累進して現時徵收課長の職に在る。因に氏は運動に趣味を有し、就中庭球と撞球とを深く愛好して、其の道に卓越せる技倆を持つてゐる。尙當家は代々天臺宗の壇家である。

妻賴子(明治三三年生、新潟縣人西脇新次郎長女)長男量夫(昭和三年生)

吉武 進氏 中野區本町通四ノ四 電話中野四五〇八

勳八等、中央自動車(株)支配人

明治一九年二月生、東京市

都會は海のない港で、自動車はそこに浮ぶ汽船だと謂はれてゐる。實に近來自動車數の激増には一驚を喫せざるを得ない。而して數多い帝都のタクシー業者間に令名高い中央自動車會社の支配人の要職にある氏は、東京府士族吉武一氏の三男として四谷に生れ、後代々土井家の劍道指南であつた當家の家督を相續した。夙に遞信省に奉職し在勤十三年に及び、その精勵は周圍の等しく畏敬する所であつたが、大正十年退官して中央自動車會社に入り、現に支配人の職にあつて内外の信望を博してゐる。觀劇に興味を有し、宗旨は淨土宗である。

妻君代(明治二四年生、岡山縣人赤木勝三郎妹、順正高女卒)

吉村鐵之助氏 芝區白金臺町二ノ六八 電話高輪(44)一、〇五〇

滿洲製粉、吉村木工場、大日本電球、江若鐵道、吉村商會各(株)社長、明治電機(株)代表取締役、相模紡績、高砂麥酒、新竹製糖比律賓產業、昭和土地建材、石渡電機、大日本モーターズ各(株)取締役、帝國製糖東京乘合自動車、北海道製糖、井口鐵工場、安部與村商事、東京テレヂング商會北海道殖産各(株)監査役

聞社編輯顧問

明治一一年二月生、福岡縣

氏は福岡縣士族米田慶太氏の長男にして久留米市に生れ、明治三十八年家督を相續した。夙に米國に遊學し、オレゴン州立大學、カリフォルニア州立大學院、オハイオ州立大學院等を卒業し、歸朝後東京朝日新聞社に入社し、外報部長、相談役或は論說委員長等に歴任して敏腕を揮ふ傍ら、明治大學、東京商科大學等に教鞭を執り、該專



で同四年七月社會局長に轉じて大に手腕を揮つたが、後野に下つて現に前掲の職にあつて社會事業に挺身しつゝある。尙曩に大禮使事務官を拜命し、又歐米に出張を命ぜられたこと等もある。

母ハル(慶應二年生) 夫人章子(明治二五年生、石川縣人下平用彩氏長女) 長男浩(大正六年生) 長女和子(大正四年生) 二女壽子(大正八年生) 二男穰(大正一三年生)

に氏は運動に興味を有し、就中庭球と撞球とを深く愛好して、其の道に卓越せる技倆を持つてゐる。尙當家は代々天臺宗の壇家である。

妻頼子(明治三三年生、新潟縣人西脇新次郎長女) 長男量夫(昭和三年生)

吉武 進氏 中野區本町通四ノ二四  
電話中野四五〇八  
勳八等、中央自動車(株)支配人

滿洲製粉、吉村木工場、大日本電球、江若鐵道、吉村商會各(株)社長、明治電機(株)代表取締役、相模紡績、高砂麥酒、新竹製糖比律賓産業、昭和土地建材、石渡電機、大日本モーターズ各(株)取締役、帝國製糖東京乘合自動車、北海道製糖、井口鐵工場、安部奧村商事、東京テレヂング商會北海道殖産各(株)監査役

安政五年八月生、大津市

三井、三菱等の大財閥に依らず獨立獨歩我が實業界に今日の基礎を築き上げたる氏は、滋賀縣人吉村源六氏の長男に生れ、明治二十九年分家して一家を樹てた。夙に同志社に學び、後電氣諸機械業を營み、事毎に成功を収めて遂に今日の大をなすに至つた。曩に衆議院議員に選ばれること一回、又家庭學校を創立したことがある。尙曩に江若鐵道、南滿洲精糖の各會社長、南滿洲鐵道會社理事、箱根土地、東京護謨、岩手電力企業、北海道製糖各會社取締役として活躍し、現に前掲諸會社の重役として本邦實業界一方の覇者として雄飛しつゝある。氏は社交に厚く、交詢社、帝國鐵道協會、日本工業俱樂部、日本俱樂部の各會員にして又敬虔なる基督教の信者である。

妻ミネ(文久元年生、奈良縣人筒井佐久馬長女) 嗣子孫鐵郎(明治四二年生、亡養子五郎長男) 亡養子五郎妻ユウ(明治一七年年生、一男一女を伴ひて分家す) 孫齋子(明治四五年生、亡養子五郎二女、絶家福井家を再興す)

吉岡 藏二氏 澁谷區代々木一四四一  
電話四谷(35)六、三八二  
東京吳服商同業組合副組合長、織物商工信

用組合常務理事、稻元屋吳服店(株)専務、中村屋吳服店(株)取締役

明治一〇年二月生、神奈川縣 帝都吳服業界に名聲ある氏は、往年福岡地方裁判所檢事として活躍したる舊小田原藩士吉岡信徳氏の二男にして、小田原に呱呱の聲を揚げた。夙に藤澤の稻元屋吳服店に勤務して斯業界雄飛の基礎を築き、爾來奮闘努力以て斯界に確乎たる地歩を占め、現時頭記の要職に在る外、神奈川縣人會評議員、大久保子爵家評議員、同家育英會理事根津八重垣町會長、鶴戸二丁目町會及潮田町會顧問等を兼ねて、寧日なき活躍をなしつゝある。淨土宗を信仰し、育英事業に興味深く後進の指導に努めて郷黨間に信望を博してゐる。

妻マダ(明治一五年生、東京府人石井忠次郎養姉) 嗣子敏彌(明治四五年生、慶大法學部在學) 男要(大正一〇年生) 男康之(大正一三年生) 女幾代(明治四一年生、跡見高女卒、東株取引員鈴木圭三長男一衛妻) 女綾子(大正二年生、跡見高女卒) 女典代(大正四年生、跡見高女卒)

米田 實氏 豊島區雜司ヶ谷六ノ九五  
電話牛込四三四六  
法學博士、東京商科大学講師、東京朝日新

聞社編輯顧問  
明治一一年二月生、福岡縣

氏は福岡縣士族米田慶太氏の長男にして久留米市に生れ、明治三十八年家督を相續した。夙に米國に遊學し、オレゴン州立大學、カリフォルニア州立大學院、オハイオ州立大學院等を卒業し、歸朝後東京朝日新聞社に入社し、外報部長、相談役或は論說委員長等に歴任して敏腕を揮ふ傍ら、明治大學、東京商科大学等に教鞭を執り、該博なる學識を以て鳴り、大正十一年法學博士の學位を授與された。又曩に世界大戰の際には英、佛等に渡航し、外交事情を具さに調査して名聲を博した。現時は頭記の職に在つて益々活躍しつゝあるが、社會經濟に關する權威ある著書も尠くない。

妻わか(明治一九年二月生、東京府人森島修太郎長女) 男欣一(明治四四年一月生) 女安子(大正三年六月生) 女壽子(同四年七月生) 女悦子(同六年一月生)

田中 治朗氏 淀橋區戸塚三ノ一五六  
電話牛込(34)一、七五六  
樺太電氣、北海水力電氣、雨龍電力、電氣化學工業(各専務) 王子製紙、樺太鐵道、南樺鐵道、北海道合同電氣、定山溪鐵道(各取締役) 共同バルブ、函館水電(各監査役)



明治六年一月生、山口縣  
明治三二年日本大學法科卒業

本邦實業界一方の重鎮として令名ある氏は山口縣人田中了性氏の四男にして同縣下に生れ、明治三十五年分家した。之より先日本大學を卒業するや直ちに王子製紙に入り、漸次累進して同社取締役任に擧げられ、又同社系統の各社に關係し、現時十餘社の重役として活躍至らざるなく、製紙界及電氣事業界に潤歩して名聲隆々たるものがある。

妻マサ(明治一九年五月生、北海道士族粟屋貞一二女) 女勝(明治三七年二月生) 養嗣子梅作(明治三三年二月生、勝の夫新潟縣人小出梅吉弟) 孫ミワ(大正一五年生) 同節(昭和三年生) 同純(昭和五年生)

田中 秀夫氏

豊島區目白二ノ一五五  
電話牛込(34)四、一七九  
役場 神田區美土代町一ノ二二  
電話神田(25)三、四一六

正三位勳二等、公證人

文久二年八月生、佐賀縣

東京公證人會常議員議長の要職に在る氏の令名は夙に斯界に噴々たるものがある。氏は佐賀縣人田中關太郎氏の長男として同縣北方村に生れ、明治四十一年田中甚兵衛

手腕を認められ、検査部長に就任今日に至つてゐる。

因に氏の令閨は大川平三郎氏の二女孝子(明治三七年生)にして長男修一(大正一四年生) 長女智子(大正一五年生)の一男一女がある。

田川大吉郎氏 小石川區小日向臺町二ノ二五  
電話小石川(85)二、二八八

明治學院總理

明治二年一〇月生、長崎縣

の養子となり、家督を相續した。夙に判檢事登川試験に合格して、名古屋裁判所同控訴院各判事、名古屋控訴院檢事、松江、岡山、新潟、福岡、廣島、函館、鹿兒島、千葉等の各地方裁判所檢事正、大審院檢事等に歴任し、法曹界の俊足として令名あつたが、大正十二年二月官を辭して野に下り、公證人役場を開き、長年の經驗と蘊蓄を披瀝して事件に當り、今日に至つてゐる。氏の信望に依頼し、事件依頼するものに多く隆盛を極めてゐる。

妻きい(明治六年生、佐賀縣人飯守八郎長女) 長男耕太郎(明治三二年生) 峰子(明治三七年生、法學博士松本丞治長女、長男耕太郎妻) 女順(明治四一年生)

田中 隆吉氏

四谷區愛佳町三九  
電話四谷(35)四、〇二七  
小池銀行(株) 取締役兼支配人、小池證券(株) 取締役、越中島木材倉庫(株) 監査役  
明治一五年一二月生、山梨縣

我邦二流銀行の筆頭小池銀行に取締役兼支配人として、東都金融界に重きを爲す氏は山梨縣勝沼郡の僻村に縣下の素封家田中英作の二男として生れ、後別れて一家を創立した。夙に實業界に身を投じ、小池銀行に入り、不斷の努力と性來の頭腦明晰と相

俟つて漸次累進し、昭和二年取役兼支配人に就任し、傍ら前記各職を兼ね今日に至つてゐる。今や世界一般不況に起因して金融界萎縮の際好く内外に善處し其の名聲は隆々たるものがある。

妻よしえ(明治一五年二月生、山梨縣人堀田峻二郎妹) 男正隆(大正五年生) 男昌吉(大正六年生) 女茂子(大正二年生) 女婦美子(大正四年生)

田邊 武次氏

瀧野川區中里三六七  
電話小石川(85)七〇八

明治二八年二月生、宮城縣  
大正八年東京帝大卒業

我邦事業會社中、最も華かな歴史と堅實なる地盤を有する大川平三郎氏の經營に係る樺太工業株式會社は、近年に至り一般財界不況に原因されて一時不振に陥つたが、最近に至つて復活し、社名は頓に發揚されるに至つた。同社検査部長の重職に在り、社の發展に貢獻しつゝある氏は宮城縣人田邊文素氏の二男にして、我國電氣工業界の新人同姓文之助氏の實弟である。大正八年東京帝國大學を卒業するや直に三菱銀行に入り、後武州銀行に轉じ金融界の實際に就き修得、大正十五年樺太工業に轉じて以來

いに前途を囑望されてゐる。氏は又餘技として洋畫に秀で、第一美術協會展覽會に出品して第一、二回共に入選し、現時も餘暇あれば丹青の道に怡んで居る。

高橋 美章氏

市ヶ谷臺町七  
電話四谷(35)三、四三九

鑛山懇話會書記長  
明治六年四月生、三重縣

氏は三重縣人高橋幽石氏の二男として同縣下に呱呱の聲を擧げた。幽石氏は醫を業

高階 修氏

本郷區湯島新花町三四  
電小石川(85)四、五〇一

醫學博士、高階小兒科醫院々長

明明三二年九月生、埼玉縣



田中秀夫 電話牛込(34)四、一七九

役場 神田區美土代町一ノ二二  
電話神田(25)三、四一六

正三位勳二等、公證人  
文久二年八月生、佐賀縣

東京公證人會常議員議長の要職に在る氏の令名は夙に斯界に噴々たるものがある。氏は佐賀縣人田中關太郎氏の長男として同縣北方村に生れ、明治四十一年田中甚兵衛

小池銀行(株)取締役、越中島木材倉庫(株)監査役  
明治一五年一二月生、山梨縣

我邦二流銀行の筆頭小池銀行に取締役兼支配人として、東都金融界に重きを爲す氏は山梨縣勝沼郡の僻村に縣下の素封家田中英作の二男として生れ、後別れて一家を創立した。夙に實業界に身を投じ、小池銀行に入り、不斷の努力と性來の頭腦明晰と相

最近に至つて復活し、社名は頓に發揚されるに至つた。同社検査部長の重職に在り、社の發展に貢獻しつゝある氏は宮城縣人田邊文素氏の二男にして、我國電氣工業界の新人同姓文之助氏の實弟である。大正八年東京帝國大學を卒業するや直に三菱銀行に入り、後武州銀行に轉じ金融界の實際に就き修得、大正十五年樺太工業に轉じて以來

手腕を認められ、検査部長に就任今日に至つてゐる。

因に氏の令閨は大川平三郎氏の二女孝子(明治三七年生)にして、長男修一(大正一四年生)長女智子(大正一五年生)の一男一女がある。

田川大吉郎氏 小石川區小日向臺町二ノ二五  
電話小石川(85)二、二八八

明治學院總理  
明治二年一〇月生、長崎縣

當家は舊大村藩主大村家の家臣として堂々たる家柄である。氏は先代節造氏の長男として生れ、後家督を相續した。明治二十二年東京專門學校政治科を卒業し、都新聞記者となり、後東京市吏、陸軍通譯官等を歴任し、東京市助役に擧げられ、第三部長兼下水改良事務所長に就任して事績を揚げ令名頓に顯著となつた。明治四十一年衆議院議員に擧げられてより、六回當選し革新俱樂部に屬し、又尾崎行雄氏等と行を共にし、大いに政界に名聲を馳せた。曩には日本大博覽會理事官の要職に在つて盡瘁したが、其の他常に公共事業に貢獻し、功績顯著である。

母こと(文久二年生)妻直(明治一八年生、京都人中江種造三女)男信一(明治三四年

六月生)いく子(明治三八年四月生、長男信一妻、兵庫縣人庄司乙吉一女)男文二(明治三七年八月生)女靜枝(明治四二年四月生)男行三(大正四年生)男忠(同一二年生)男敬吾(昭和二年生)女安子(大正一〇年生)

高階 修氏 本郷區湯島新花町三四  
電小石川(85)四、五〇一

醫學博士、高階小兒科醫院々長  
明明三二年九月生、埼玉縣

大正一五年東京帝國大學醫學科大學卒業。小兒科界の新進として聲望隆々たる氏は、埼玉縣人高階涉氏の長男にして同縣大里郡吉見に生れた。涉氏は夙に帝都に醫院を経営し、傍ら東京市囑託、本郷區衛生評議員、町會副會長等を兼ねて令名を馳せた。氏も亦醫を以て起つべく、獨逸協會中學、第一高等學校を経て東京帝國大學に學び、卒業後同大學附屬病院小兒科及藥理學教室に於て、諸博士の指導を受けて小兒科を研究し、昭和五年開業した。一方研究は依然として其の歩を緩めず、曩に「アドレナリンの吸収に關する實驗的研究、特に年齢的差違に就いて」なる論文を提出し昭和六年八月醫學博士を授與されし後猶ほ益々研究に勵み、其の明晰なる頭腦と相俟つて大

いに前途を囑望されてゐる。氏は又餘技として洋畫に秀で、第一美術協會展覽會に出品して第一、二回共に入選し、現時も餘暇あれば丹青の道に怡んで居る。

高橋 美章氏 市ヶ谷臺町七  
電話四谷(35)三、四三九

鑛山懇話會書記長  
明治六年四月生、三重縣

氏は三重縣人高橋幽石氏の二男として同縣下に呱呱の聲を擧げた。幽石氏は醫を業とし近隣に聞ゆる徳望家であつた。氏は明治四十二年分家し、同五年鑛山懇話會書記長に就任して以來實に二十餘年、現今尙ほその職に在つて精勵しつゝある。資性頗る温厚にして忍耐力に富み、俗世の毀譽褒貶に超然たる襟度を持ち、私利私慾を圖つて虚偽の榮達を望むが如きことなく、何事に對しても誠心誠意を以て之に臨み、實に當世稀に見る高潔なる人格者として夙に知られてゐる。趣味として讀書を好み、公務の餘暇には凡ゆる種類の書籍を涉獵し以て無上の怡樂としてゐる。

妻かね(明治八年生、三重縣人三木市太郎四女)男成章(明治三五年生、東京齒科醫專卒業同校助手勤務)



高峰 筑風氏 芝區三田四國町二八  
電話三田(45)四〇二九

高峰琵琶宗家 明治一二年五月生、福岡縣



氏は本名を鈴木徹郎と謂ひ、黒田藩士の長男として同縣博多に生れた。十八歳の時同縣立工業學校に入學したが、第三學年の時兵役に徵集され偶々日露の役に際會し、各地に轉戦して偉功を樹て勳七等に叙せられた。凱旋の翌明治三十九年上京して帝都琵琶界に進出するや、其の妙技は忽ち認められて名聲を博し、畏くも御前演奏の光榮に浴すること數回に及んだ。大正元年十一月高峰琵琶を公表し文部省に出願して興行權を得、自ら作歌、作曲して其の眞價を世に問ひ又劇界進出の端緒を開いた。其の後琵琶界の刷新を期して高峰琵琶交樂團を組織して斯界に一新機軸を示した。高峰琵琶は作歌、作曲共に大部分氏の創作に係り、就中「小楠公」「高山彦九郎」「宇治川」等は斯界の名曲として普く認められてゐる。

家庭には八重子夫人との間に長男龍平、長女三枝子、次女眞利子の諸子がある。高田せい子女史 淀橋區柏木四ノ八六八 電話 四谷一二五四 音樂・舞踊家、高田舞踊團主任 明治三二年九月生、石川縣

女史は石川縣人澤野徳太郎氏の三女として金澤市に生れ、縣立第一高女卒業後大正三年上京して東京音樂學校器樂部に學び、翌年十二月同校を中途退學して同六年帝劇に入り、翌七年五月高田雅夫に嫁した。爾來夫君と共に松竹新星歌舞劇團を組織して東京を始め大阪、京都等に活躍し、大正九年秋根岸興行部に轉じた。大正十一年研究のため歐米漫遊の途に上り、英京ロンドンを本據としパリ、ベルリン、スイス、ベルギー、ニューヨーク等各地を巡歴し、辛酸具さに當めて藝道の研鑽に勵むること三ヶ年、その進境著しきものがあつた。歸朝後高田舞踊研究所及舞踊團を設立したが、昭和四年五月夫君雅夫氏歿したるため、女史は自ら



之を統卒して活躍し、同年十一月第一回新作舞踊發表會を日比谷公會堂に於て舉行し、以來毎年春秋二期に大會を開催しつゝある。昭和六年五月、門下生により銅像を建立された。女史は獨立の精神に富み、何事をも獨自の努力を以て成し遂げることを處世訓としてゐるが、今日の成功も亦此の精神に基くものであらう。趣味は音樂、演劇等である。

武知 徳本氏 深川區佃町二一 電話本所(73)二六八三 帝都美化實行會主幹 明治一一年生、愛媛縣



氏は愛媛縣人武智文平氏の次男である郷里の縣立山中學卒業後上京して現大正大學の前

後、衆議院議員添田敬一郎氏の養子となつた。大學を卒業後三菱合資會社に入り、才腕衆に擡んで漸次累進し、現に三菱地所部副部長として庶務課に勤務中であるが、年齒未だ不惑を越えず、資性温厚にして才氣煥發、而もその玲瓏たる人格と相俟つて大いに將來を囑望されてゐる。趣味は圍碁。

妻ゆき子(西野忠次郎氏妹、山形縣立高女卒)長男利一(大正一〇年生)二男立也

妻つる子(明治二五年生)長男史郎(大正一五年生)長女節子(明治四五年生)二女満里子(大正九年生)三女優子(昭和二年生)

辻 高俊氏 神田區小川町六一 電話神田(25)三、一三七

九日より十三日まで深川公園に於て勤勞者慰安大會を催し、約十五萬人の大衆に慰安を與へ、續いて錦糸公園に於ても慰安大會を開催し、來會者無慮二十五萬に達し、財界の不況に依り動搖せる思想の鎮靜に絶大な効果を收め、時の東京市社會局長安井誠一郎氏の信任を得て、同年十月十六日帝都美化實行會を創立した。以來理事長として會務を處理し、生活窮迫者の救濟に是れ



認められて名譽を得し、長、大正元年光榮に浴すること數回に及んだ。大正元年十一月高峰琵琶を公表し文部省に出願して興行權を得、自ら作歌、作曲して其の眞價を世に問ひ又劇界進出の端緒を開いた。其の後琵琶界の刷新を期して高峰琵琶交樂團を組織して斯界に一新機軸を示した。高峰琵琶は作歌、作曲共に大部分氏の創作に係り、就中「小楠公」「高山彦九郎」「宇治川」等は斯界の名曲として普く認められてゐる。

め大阪、京都等に活躍し、大正九年秋根岸興行部に轉じた。大正十一年研究のため歐米漫遊の途に上り、英京ロンドンを本據としパリ、ベルリン、スイス、ベルギー、ニューヨーク等各地を巡歴し、辛酸具さに嘗めて藝道の研鑽に勵むること三ヶ年、その進境著しきものがあつた。歸朝後高田舞踊研究所及舞踊團を設立したが、昭和四年五月夫君雅夫氏歿したるため、女史は自ら

身、豊山尋常高等學院に入學し、明治四十五年卒業した。後、政治運動に携はり傍ら出版事業を經營し、眞に赤手空拳を以て今日の地位を築き上げたる立志傳中の人である。昭和五年、時の警視總監丸山鶴吉氏東京市助役白上祐吉氏等の後援の下に 七月



山中學卒業後上京して現大正大學の前

九日より十三日まで深川公園に於て勤勞者慰安大會を催し、約十五萬人の大衆に慰安を與へ、續いて錦糸公園に於ても慰安大會を開催し、來會者無慮二十五萬に達し、財界の不況に依り動搖せる思想の鎮靜に絶大なる効果を收め、時の東京市社會局長安井誠一郎氏の信任を得て、同年十月十六日帝都美化實行會を創立した。以來理事長として會務を處理し、生活窮迫者の救済に是れ努め、一年間に三萬人を救済し、又、深川濱園町所在東京市埋立地に約一萬三千坪の農園を經營し、此の地域に舊東京市設天幕村に青バラツクを設けてルンペン百二十名を收容し、授職指導に従事する等、社會公共事業に盡せる功勞は殆んど枚擧に遑がない。今や一般貧民より救世主として尊敬され、社會的にも聲望を馳せてゐる。氏は「理想より實行」を處世訓としてゐる。

妻和子(三八歳、淺川元次郎長女、高女卒)長男博(一七歳、順天中學在學)

**添田 滋氏** 目黒區富士見臺一五二  
電話荏原二四四五  
法學士、三菱地所部副部长  
明治二六年一月生、福井縣  
大正六年東京帝國大學法科卒業  
氏は福井縣人添田良平氏の五男にして、

後、衆議院議員添田敬一郎氏の養子となつた。大學を卒業後三菱合資會社に入り、才腕衆に擢んで漸次累進し、現に三菱地所部副部长として庶務課に勤務中であるが、年齒未だ不惑を越えず、資性温厚にして才氣曠發、而もその玲瓏たる人格と相俟つて大いに將來を囑望されてゐる。趣味は圍碁。

妻ゆき子(西野忠次郎氏妹、山形縣立高女卒)長男利一(大正一〇年生)二男立也(大正二二年生)三男敬夫(大正一五年生)長女知子(昭和四年生)

**曾我 精一氏** 電話世田谷四一九  
(會社)京橋區銀座六ノ五  
瀧山ビル電銀座(57)九五  
千代田住宅建築(株)幹部  
明治一六年九月生、岐阜縣

往年操觚界に敏腕を揮ひ、現時實業界に活躍しつゝある氏は、岐阜縣人曾我鹿三郎氏の息にして、愛知縣立第一中學校を卒業後、明治四十年日本電報通信社に入り、次で東京時事新報社に轉じて、編輯局地方部長に拔擢され、後營業局廣告部長となり、更に調査係長より調査部長に榮進し、經營の樞機に參畫し、同社幹部中の偉材として前途を囑望されてゐるが、感ずる處あつて實

業界に投じ、現時、千代田住宅株式會社の幹部として才腕を揮つてゐる。趣味は繪畫及び園藝である。

妻つる子(明治二五年生)長男史郎(大正一五年生)長女節子(明治四五年生)二女滿里子(大正九年生)三女優子(昭和二年生)

**辻 高俊氏** 神田區小川町六一  
電話神田(25)三、一三七  
辻産婦人科醫院々長、醫學士  
明治元年八月生、東京府  
明治三一年東京帝大醫科卒業

氏は東京府辻安次郎氏の長男として神田に生れ、明治二十一年家督を相續した。同三十一年東京帝國大學醫科を卒業して同大醫學婦人科助手となり、同三十二年東京産科婦人科病院に招聘せられ、その手腕を認められて副院長に推され同院が濱田病院と改稱せらるゝに及んでその院長となつたが、大正八年獨立して神田小川町に産婦人科醫院を開業し、今日に及んでゐる。懇切丁寧を旨として婦人科一般診療に當り、多年の經驗と技倆は弛みなき研究と相俟つて斯界に益々聲望を高めつゝある。趣味は文學と謠曲とである。

妻柳子(明治二一年生、東京府神原玄展



二女、御茶水高女卒(長男勇(明治三八年生)一男復(明治四〇年生)三男春雄(明治四四年生)三女淑子(明治四五年生))

辻 順治氏 麻布區霞町一三三

從六位、勳五等、陸軍一等樂長前陸軍戸山學校軍樂隊長兼教官

明治一五年七月生、山形縣

軍樂隊の元老として名聲ある氏は、山形縣人辻貞吉氏の長男である。明治三十四年陸軍戸山學校に入學し、同四十二年日英博覽會に際し陸軍省より選抜されて英國に航し、同四十四年歸朝、以來軍樂界に投じ、昭和二年、陸軍戸山學校軍樂隊長に昇進し現時陸軍一等樂長である。尙ほ氏は日波協會、日佛協會の各會員で國際的にも令名を馳せ、本邦樂壇の權威として汎く知られてゐる。

妻ミヨ子(明治二九年生、東京府山岡隆貞二女、東京女學校卒業)長女靜子

月岡 道保氏 大森區山王一ノ三三七

電話大森三〇

醫學博士、月岡病院々長

明治八年五月生、千葉縣

明治四四年東京帝大醫科卒業

氏は千葉縣人月岡福壽氏の長男にして、

品を普く世に頒布したる功績は實に没す可らざるものである。氏の趣味は徹頭徹尾美術一點張りである。

長男節夫(三二歳)同妻千代子(二三歳)孫哈子(二歳)

中村 玄三氏 下谷區下根岸九七

電話下谷(83)六八八

工學士、多額納稅者

明治四年四月生、徳島縣

明治三二年東京帝國大學工學科卒業

夙に東京帝國大學に學び卒業後三井慈善病院に勤務し、後大正五年獨立して月岡病院を創立し、昭和三年醫學博士の學位を授けられた。氏は研究心篤く、恒に新智識の吸収に努め、蘊蓄を傾けて一般難症患者の診療に當り、誠實をモットーとし眞に「醫は仁也」との醫師本來の使命遂行に専心是れ努めつゝある人格者として好評を博してゐる。趣味は釣魚及び讀書。

妻ひで子(明治二七年生、東京府士族喜多喜太郎養女)長男道雄(大正八年生)長女光子(大正四年生)二女文子(大正七年生)三女恭子(大正八年生)四女孝子(大正一〇年生)

塚崎 直義氏

牛込區市ヶ谷富久町三三 電話四谷(35)二八〇三

法學士、辯護士、日本辯護士協會名譽理事

東京日日新聞社顧問

明治一四年五月生、大分縣

明治四一年京都帝大獨法科卒業

本邦法曹界の權威として知らるゝ氏は、學業を了へるや辯護士となり、爾來二十五年此の間、幾多の難事件を鮮やかに處理し、斷然斯界に頭角を現はした。昭和五年東京辯護士會の會長に擧げられ、現に日本辯護士協會名譽理事の要職に在る。其の他

明治二九年東京帝國大學醫科卒業

眼科界の權威として名望ある氏は、埼玉縣人後藤彌兵衛氏の二男として生れ、後中泉正氏の養子となり家督を相續した。明治二十九年東京帝國大學醫學部を卒業後、同大學眼科助手を経て助教となり、其の後中泉眼科病院を開業した。現時東大醫學部の講師並に泉橋慈善病院眼科部長等を兼任して益々斯界に活躍しつゝある。歐米に遊學すること前後三回、明治四十年醫學博士

小田原急行電鐵株式會社並に東京日日新聞社の各顧問に推され、人格、識見、手腕力量共に當代法曹界の偉材として衆望隆々たるものがある。

妻ハツ子(明治二四年生、大分縣人生地治氏長女)長男公俊(大正五年九月生、市立一中在學)長女敏子(明治四五年二月生、東京女高師附屬高女卒、富山縣人東大出身法學士、ロンドン大使館勤務山田久就氏に嫁す)二女テル子(大正九年二月生)

中山音次郎氏

澁谷區穩田二ノ一五〇 (勤務先)京橋區銀座三ノ三 電話京橋(57)一二五、三五五

審美書院重役

文治元年生、東京市

美術寫真界の元老として名聲高き氏は、明治二十四年頃美術研究に志し、當時斯界の權威であつた小川一眞堂に入り、美術寫眞の研究に努むること十四五年、後現在の審美書院に轉じた。爾來勤續二十四年に亘り、此間一意専心斯業の進歩向上に努力し今尙老軀を提して斯道に精進しつゝある。斯界に身を投じてより茲に五十周年、總ゆる名人の手に成る歴史的美術古書畫の複製

されて先代マキ氏の養子となり、明治三十七年家督を相續した。幼時より豪放にして惻隱の譽は郷黨間に聞え、學序を踏んで最高學府に學び、卒業後直ちに文官高等試験に合格して職を官界に奉じ、爾來内務屬、北海道事務官、法制局、拓殖局各參事官、遞信書記官兼高等海員審判官、遞信局長、遞信省通信局長、南滿洲鐵道會社理事、香川、熊本各縣知事、北海道廳長官東京府知事等を歴任して昭和四年十月文部次官に



貞二女、東京女學校卒業、長女静子

月岡 道保氏 大森區山王一ノ三七一  
電話大森三〇

醫學博士、月岡病院々長

明治八年五月生、千葉縣

明治四四年東京帝國大學醫學科卒業

氏は千葉縣人月岡福壽氏の長男にして、

明治一四年五月生、大分縣  
明治四一年京都帝國大學法科卒業

本邦法曹界の權威として知らるゝ氏は、

學業を了へるや辯護士となり、爾來二十五年此の間、幾多の難事件を鮮やかに處理し、斷然斯界に頭角を現はした。昭和五年東京辯護士會の會長に擧げられ、現に日本辯護士協會名譽理事の要職に在る。其の他

明治二十四年頃美術研究に志し、當時斯界の權威であつた小川一眞堂に入り、美術寫眞の研究に努むること十四五年、後現在の審美書院に轉じた。爾來勤續二十四年に亘り、此間一意専心斯業の進歩向上に努力し今尙老軀を提して斯道に精進しつゝある。斯界に身を投じてより茲に五十週年、總ゆる名人の手に成る歴史的美術古書畫の複製

品を普く世に頒布したる功績は實に没す可らざるものである。氏の趣味は徹頭徹尾美術一點張りである。

長男節夫(三二歳)同妻千代子(二三歳)孫  
哈子(二歳)

中村 玄三氏 下谷區下根岸九七  
電話下谷(83)六八八

工學士、多額納稅者

明治四年四月生、徳島縣

明治三一年東京帝國大學工學科卒業

徳島縣士族、藤本文策氏の二男として生れた氏は、長じて中村直次郎氏の養子となり、大正九年、養弟直次郎氏方より分れて一家を創立した。東京帝國大學卒業以來父業を續いで今日に至つてゐるが、氏は百萬の富を擁し、社會公共事業に寄附せる奇篤の行爲枚舉に遑なく、名望家として尊敬されてゐる。

長女位子(明治一九年一月生)同夫、佛明  
治二一年二月生(分家)、二女萬代子  
(明治三二年四月生、工學士高見祥平妻)  
三男祥三(日本大學卒)

中泉 行徳氏 京橋區銀座西五ノ一  
電話銀座(57)一九四

醫學博士、東京帝國大學醫學部講師、中泉  
眼科病院々長、泉橋慈善病院眼科部長

人物編

明治二九年東京帝國大學醫學科卒業

眼科界の權威として名望ある氏は、埼玉縣人後藤彌兵衛氏の二男として生れ、後中泉正氏の養子となり家督を相續した。明治二十九年東京帝國大學醫學部を卒業後、同大學眼科助手を経て助教授となり、其の後中泉眼科病院を開業した。現時東大醫學部の講師並に泉橋慈善病院眼科部長等を兼任して益々斯界に活躍しつゝある。歐米に遊學すること前後三回、明治四十年醫學博士の學位を授けられ、今や本邦眼科の重鎮として普く斯界に知られてゐる。趣味は釣魚、臯月栽培等である。

長男正徳(明治二八年生、醫學博士、帝  
大教授)二男行正(明治三〇年生)長女婦  
美子(大正二一年生)

中川 健藏氏 赤坂區青山南町五ノ四  
電話青山(36)三三二

正四位勳三等、法學士、前東京府知事、前  
文部次官

明治八年七月生、新潟縣  
明治三五年東京帝大法科卒業

往年各縣知事として良二千石の名を揚げ、近く文部の府に次官として輔弼の大任を完し、官界に名聲噴々たる氏は、新潟縣人山本傳十郎氏の二男として生れ、後懇請

されて先代マキ氏の養子となり、明治三十七年家督を相續した。幼時より豪放にして剛毅の譽は郷黨間に聞え、學序を踏んで最高學府に學び、卒業後直ちに文官高等試験に合格して職を官界に奉じ、爾來内務屬、北海道事務官、法制局、拓殖局各參事官、遞信書記官兼高等海員審判官、遞信局長、遞信省通信局長、南滿洲鐵道會社理事、香川、熊本各縣知事、北海道廳長官東京府知事等を歴任して昭和四年十月文部次官に擧げられ昭和六年十二月犬養現内閣成立と共に野に下つた。因に氏は本誌發行所たる社會教育研究所の後援者として本誌の發行に盡瘁されつゝある。尙氏は七人の子女を有する子福者で、その何れもが俊英の譽高く、當家の前途は實に洋々として繁榮しつゝある。

養母マキ(安政五年生、新潟縣人佐藤清  
見長女)妻キヨ(明治八年生、養母マキ長  
女)長男清吾(明治二七年生、法學士、日  
本郵船社員)同妻藏子(明治三七年生、海  
軍大佐川合昌吾一女)二男整(明治三〇年  
生、早大卒業、南滿洲鐵道會社員)同妻  
房江(明治三一年生、高知縣人大里熊次郎  
養子)三男晃成(明治三八年生、法學士  
五男哲郎(明治四二年生)六男融(明治四



四年生)二女壽子(大正三年生)三女鶴子(大正六年生)孫三子(大正一二年生)一男整氏長女)

中井三之助氏

下谷區下根岸町六六  
電話下谷(83)二、四五六

從七位勳六等、後備陸軍中尉、中井商店、洋紙合同販賣各(株)取締役社長、王子製紙(株)監査役、紙商越後屋商店主

明治八年七月生、京都市

中井家は京都に於ける最も古き暖簾を有する商家にして、往時は兩替商を營み、同市屈指の資産家であつた。中代に至つて一時絶家したが、乾家から入つた先々代三平氏に至つて再興した。三平氏は三井吳服店に永年勤務して功勞尠くなかつたが後ち獨立して越後屋と稱し、紙商を營み、當家今日の基礎を作つたのである。氏は先代三郎兵衛氏の長男として京都市三條通東洞院西入ル梅忠町に生れ、大正十一年七月家督を相續した。現時郷地に本宅を構へ、中井家一門の中樞人物として又中井商店社長たる外前記諸會社の重役として實業界に名を知られ、昭和四年紺綬褒章を下賜せられた。尙氏の趣味は能樂で宗教は佛教である。

父三郎兵衛(嘉永四年生)母ツタ(安政三年生)夫人ツル(明治一四年生、京都府人

木本茂兵衛妹)養子康三(大正一二年生、弟誠三郎長男)

中田 一衛氏

日本橋區通二丁目一ノ六  
電話日本橋(24)九七一

蓬萊家旅館(資)代表社員、日華萬歲生命保險(株)代理店

明治三四年九月生、東京市

大正一〇年慶應義塾商工部卒業

蓬萊屋旅館は明治二十三年先代の創立に係り、大正八年合資組織に改め、堅實なる基礎と可重なる客扱ひに依つて、都下旅館業界に其の名を知られてゐる。氏は先代東京府人與惣兵衛氏の長男として現住所に呱呱の聲を揚げ、昭和四年四月家督を相續した。大正十年學校卒業後直ちに第百銀行に入り、同十四年之を辭して専心旅館業に従事し、父君を輔けて當館の業勢發展に努め、家督相續後は尙一層奮闘を續け現時日華萬歲生保險會社の代理店を兼命今日に及んでゐる。而も前途尙春秋に富む氏の眞の活躍は今後にあるべく、大いに期待されてゐる。宗旨は日蓮宗。趣味は讀書、旅行、觀劇等である。

父與惣兵衛(明治一一年生)母喜與(明治一〇年生)夫人れつ子(明治三六年生、千葉縣東金高女卒)長男裕康(昭和三年生)長女公子(大正一〇年生)二女園子(大正

一一年生)

中島 義敬氏

芝區一本榎西町二  
電話高輪(44)六、三二六

日本アスベスト(株)取締役兼東京營業所長  
明治一六年一二月生、岐阜縣

石綿採掘及び加工業其他を營業して斯界に基礎堅實の名を謳はれてゐる日本アスベスト會社の、取締役兼東京營業所長の要職にある氏は、岐阜縣人中島與治兵衛氏の長男として生れ、明治三十八年家督を相續した。同四十二年志を立て、渡米し、彼地に於て雜貨商を營んでゐたが、後ち之を廢して歸朝し、大正八年日本アスベスト株式會社に入社し、其の卓越せる手腕は忽ち認められて、現時前記の要職にあつて内外の信望を集めてゐる。

妻とし(明治一八年生、岐阜縣人河村和一三女、岐阜高女卒)長女智恵子(大正一一年生)二女百合子(大正一五年生)

仲本昇太郎氏

深川區東平野町二  
電話本所(73)八一〇

深川裁縫女學校長、仲本材木店主  
明治九年一二月生、東京府

氏は東京府人先代昇太郎氏の長男にして、明治四十四年家督を相續すると同時に舊名傳吉を現名に改めた。氏は深川區會議

員として區政に參與し、又、東京材木運送會社取締役として敏腕を揮ひ、曩に帝都復興事業に際しては第五十五地區より推されて區劃整理委員となり功勞顯著であつた。

現在には仲本材木店を經營の傍ら、深川裁縫女學校長とし教育界に盡瘁しつゝある。

妻しよの(明治九年生、愛知縣人清水佐次兵衛女)母みよ子(元治元年生)長男健次郎(明治四五年生)長女登喜(明治三六

宮之助二女)長女敏子(明治四四年生、名古屋市立第一高女卒業)

内藤春次郎氏

世田谷區北澤三ノ八  
電話世田谷(15)五六七

日本車輛(株)技師兼丸ノ内出張所長  
明治一六年三月生、兵庫縣

氏は兵庫縣人内藤誠一郎氏の二男にして、郷里篠山中學を卒業して山陽鐵道會社に入り、次で鐵道省工作課に轉じ、其の後

生れ、明治十三年家督を相續した。同二十年東京農林學校卒業後官界に身を投じ、農商務技師、林務官、營林技師、山林技師、山林局作業課長等を経て鹿兒島大林區署長に擧げられ、能吏の名を謳はれてゐたが、大正十二年五月官を辭して野に下つた。次いで鴨綠江探木公司理事長に就任し、同公司發展の爲めに録すべき功勞を残して昭和四年五月之を辭し、爾來花や魚を友として



兵衛氏の長男として京都市三條通東洞院西  
入ル梅忠町に生れ、大正十一年七月家督を  
相續した。現時郷地に本宅を構へ、中井家  
一門の中樞人物として又中井商店社長たる  
外前記諸會社の重役として實業界に名を知  
られ、昭和四年紺綬褒章を下賜せられた。尙  
氏の趣味は能樂で宗教は佛教である。

父三郎兵衛(嘉永四年生) 母ツタ(安政三  
年生) 夫人ツル(明治一四年生、京都府人

相續後は尙一層奮闘を續け現時日華萬歳生  
保險會社の代理店を兼命今日に及んでゐる  
而も前途尙春秋に富む氏の眞の活躍は今後  
にあるべく、大いに期待されてゐる。宗旨は  
日蓮宗。趣味は讀書、旅行、觀劇等である。  
父與惣兵衛(明治一一年生) 母喜與(明治  
一〇年生) 夫人れつ子(明治三六年生、千  
葉縣東金高女卒) 長男裕康(昭和三年生)  
長女公子(大正一〇年生) 二女閑子(大正

三女 眞高女(大正一五年生)  
一年生) 二女百合子(大正一五年生)

仲本昇太郎氏 深川區東牛野町二  
電話本所(73)八一〇

深川裁縫女學校長、仲本材木店主  
明治九年一月生、東京府

氏は東京府人先代昇太郎氏の長男にし  
て、明治四十四年家督を相續すると同時に  
舊名傳吉を現名に改めた。氏は深川區會議

員として區政に參與し、又、東京材木運送  
會社取締役として敏腕を揮ひ、曩に帝都復  
興事業に際しては第五十五地區より推され  
て區劃整理委員となり功勞顯著であつた。

現在には仲本材木店を經營の傍ら、深川裁縫  
女學校長とし教育界に盡瘁しつゝある。

妻しよの(明治九年生、愛知縣人清水佐  
次兵衛女) 母みよ子(元治元年生) 長男健  
次郎(明治四五年生) 長女登喜(明治三六  
年生) 二女宣子(明治三八年生) 二男正三  
(大正三年生) 三女澄江(大正六年生)

永治類三郎氏 麻布區今井町二二五  
電話青山(36)七、五一九

安田生命保險(株)東京支店長

明治一六年六月生、岐阜縣

氏は岐阜縣人永治彦七氏の長男として同  
縣下に生れ、大正六年家督を繼いだ。夙に  
岐阜中學卒業後小學校に教鞭を執つたが、  
後ち兼松木材會社に入り會計係として勤務  
し、次で明治四十年、共濟生命保險會社に  
入社して、名古屋支店次長、鹿兒島、小樽、  
名古屋各支店長に歴任して東京支店長とな  
り、安田生命と改稱後も引續き東京支店長  
として今日に及んで居る。神道の信仰家で、  
當代得難き人格者として信望が高い。

妻いと子(明治二〇年生、岐阜縣人松田

宮之助二女) 長女敏子(明治四四年生、名  
古屋市立第一高女卒業)

内藤春次郎氏 世田谷區北澤三ノ八二  
電話世田谷(一五六七)

日本車輛(株)技師兼丸ノ内出張所長  
明治一六年三月生、兵庫縣

氏は兵庫縣人内藤誠一郎氏の二男にし  
て、郷里篠山中學を卒業して山陽鐵道會社  
に入り、次で鐵道省工作課に轉じ、其の後  
日本車輛株式會社に招聘せられて入社し、  
昭和元年丸ノ内出張所長に擧げられ今日に  
至つてゐる。資性温厚篤實、一見舊知の感  
を抱かしむる八面玲瓏の人格者である。趣  
味は撞球、信仰は淨土宗である。

妻しよの(柏原高等女學校卒業) 長男雅  
雄(大正七年生、成溪高等學校尋常科在  
學) 長女章子(大正四年生、青山學院女學  
部在學) 二女文子(大正一〇年生) 三女和  
子(大正一二年生) 四女敏子(大正一四年  
生)

内藤 確介氏 目黒區中目黒一ノ八二  
電話高輪(44)六、七九六

從三位、勳三等 慶應元年三月生、福山市

明治二〇年東京農林學校卒業

氏は廣島縣士族内藤延雄氏の二男として

生れ、明治十三年家督を相續した。同二十

年東京農林學校卒業後官界に身を投じ、農  
商務技師、林務官、營林技師、山林技師、  
山林局作業課長等を経て鹿兒島大林區署長  
に擧げられ、能吏の名を謳はれてゐたが、  
大正十二年五月官を辭して野に下つた。次  
いで鴨綠江探木公司理事長に就任し、同公  
司發展の爲めに録すべき功勞を残して昭和  
四年五月之を辭し、爾來花や魚を友として  
悠々自適の生活を送つてゐる。氏の趣味に  
園藝、釣魚等があり、宗教は日蓮宗である。

妻まさよ(明治一三年生、山形縣人鈴木  
美通姉) 養子政雄(明治三一年生、廣島縣  
士族中井愛之助二男、經濟學士、樺太工  
業勤務) 同妻樂明治三五年生、東京府人  
石森安太郎妹、三輪田高女卒)

村田嘉久子女史 麻布區本村一六一  
電話高輪三六七三

女優、帝劇第一期生  
明治二六年四月生、東京府

本名村田覺子、市外北品川新宿の酒問屋  
村田勝助氏の三女である。當家は代々同地  
に於て酒問屋(松木屋)を營み、同町屈指の  
老舗であるが、勝助氏は松花と名乗り義太  
夫の名手又母堂は常磐津三味線に堪能にし  
て家族皆演藝に興味深く、女史も又幼時よ



り演藝に志し、十六歳の時帝劇女優養成所に入り、明治四十四年帝劇開場の際「頼朝」の「侍女浪路」を勤めたのを初舞臺として、爾來今日に至るまで劇界に活躍しつゝある。此の



間大正八年英國皇太子殿下御來朝の際、御前に於て「四人道成寺」の「櫻子」を勤め、大正十年には芝離宮に於て各宮殿下の御前公演の光榮に浴し、大正十五年には守田勘彌氏と共に支那に公演旅行を試み、北京に於て梅蘭芳一座との合同劇に出演して歌舞伎劇を各國人に紹介し大いに氣焔を擧げた。當り藝は「清姫」「政岡」「お弓」「信夫」等であるが、舊劇に於ては女優界の第一人者を以て目せられてゐる。長唄、舞踊、箏曲等に通じ、趣味は旅行、讀書、繪畫等である。令兄尾上蟹十郎、令妹美彌子、竹子の三兄妹も亦劇界に活躍しつゝある。

上原 三雄氏

麻布區谷町五四  
電話青山(36)五一七〇

濫澤倉庫(株)勤務  
明治三五年四月生

衰微して諸流の權威者も或は轉業し、或は地方に四散したる際、實氏は獨り帝都に踏止つて能樂の維持に心血を濺ぎ、遂に再興の機運に向はしめ更に現時の隆盛に導いた。嚴父萬三郎氏も亦克く斯界の發展に盡したる功勞者として、實氏と共に近世の名人たる名聲を博した。かゝる名流の血を享けたる氏は、幼時より斯道に興味深く又天分頗る豊富にして、嚴父の教導を受けて技巧大に進み、斯道の最高名譽たる行幸啓能

少壯實業家としてその前途を囑目されて

ゐる氏は、徳澤高き有力者上原豊吉氏の三男である。夙に曉星中學を経て中央大學法學部を卒業するや、濫澤倉庫會社に入社し、深川支店詰を経て現在本社に勤務中である。氏は曩に帝都復興事業の施行に際し第六十二地區の地主側より推されて委員となり、委員中の最年少者であつたにも拘らず克く交渉調停の功を擧げ、大いに貢獻顯著にして當局及地區民より激賞され、聲望頓に揚つた、是れ即ち氏の人格の然らしむる所である。趣味は讀書、旅行、運動等で今や濫澤倉庫に在つて社内信望厚く、益々社のため努力しつゝある。

妻富久子(明治四一年生、千秋謙作長女、淑徳高女並に自由學院高等科卒業)

上田 厚吉氏

芝區柴井町一〇  
電話芝(43)一、六四三

東京株式取引所取引員、上一商店々主  
明治二一年八月生、東京市  
明治三九年大倉高等商業學校卒業  
帝都輪贏市場に活躍し名聲噴々たる氏は、上田與三吉氏の長男として東京に生れた。先代は洋服商として成功し後株式賣買を業とし上一商店を経営して新界に確乎たる地歩を築上げたが、氏も亦大倉高商卒業

て、同六年三月まで青山割烹講習會を開設經營したが、其後明治大帝遺蹟保護會の維持を志し、此の事業に終生を捧ぐべく精進しつゝある。傍ら、華族、上流階級夫人の需めに應じて割烹の自宅教授を爲し、淑徳高き婦人として夙に令聞がある。尙ほ長男隆之氏は帝大在學中であるが、次男信夫氏は實業學校卒業後割烹實習中にして、修業後は郷里に歸り慈母の意志を繼いで斯道の普及向上に努むる方針である。女史は茶道、

後直ちに斯界に投じ、父と共に上一商店の擴張發展に努め、大正十五年家督を相續した。爾來氏は同店經營の衝に當つて奮闘努力、克く父の遺業を經營し、盛衰常なき斯界に在つて十年一日の如き信用を保持し得たるのみならず、更に倍舊の發展を遂げ現在の隆況を呈するに至り、一販、短期及實物の各方面に亘つて尙益々飛躍しつゝある。

妻たつ(明治一五年生、石井次郎吉二女)  
男吉兵衛(明治四四年一月生、早稻田大學高等學院在學)女ちか(大正四年生、東京女學館在學)

梅若万佐世氏

品川區北品川六、三三三  
電話(代)高輪(44)四七六

梅若流能樂家  
明治四一年三月生、東京市



當家は梅若流祖梅若太夫の直系にして、第五十三世梅若實氏は氏の祖父、梅若萬三郎氏は實父、現梅若流家元梅若六郎氏は伯父に當る。實氏は能樂樂界中興の大恩人にして明治維新當時能

年、その功に依り從四位、勳四等に叙せられた。大正十二年官界を去ると同時に辯護士となり、主として稅務關係の事件を取扱ひ中央法曹界に名聲を博してゐる。一方帝國稅務協會を設立して其の主幹となり、又頭記の職を兼ねて活躍しつゝある。信教は佛教、趣味は釣等である。  
妻なつ子(明治一八年生、東京府士族近藤太郎妹)男忠良(明治三七年生、慶應大學卒、三越大阪支店勤務)男止良(同三八



者を以て目せられてゐる。長唄、舞踊、箏曲等に通じ、趣味は旅行、讀書、繪畫等である。令兄尾上蟹十郎、令妹美彌子、竹子の三兄妹も亦劇界に活躍しつゝある。

上原 三雄氏

麻布區谷町五四  
電話青山(36)五一七〇

濫澤倉庫(株)勤務  
明治三五年四月生

東京株式取引所取引員、上一商店主  
明治二十一年八月生、東京市

明治三九年大倉高等商業學校卒業

帝都輪贏市場に活躍し名聲噴々たる氏は、上田與三吉氏の長男として東京に生れた。先代は洋服商として成功し後株式賣買を業とし上一商店を經營して新界に確乎たる地歩を築上げたが、氏も亦大倉高商卒業



の直系にして、第五十三世梅若實氏は氏の祖父、梅若萬三郎氏は實父、現梅若流家元梅若六郎氏は伯父に當る。實氏は能樂樂界中興の大恩人にして明治維新當時能

衰微して諸流の權威者も或は轉業し、或は地方に四散したる際、實氏は獨り帝都に踏

止つて能樂の維持に心血を濺ぎ、遂に再興の機運に向はしめ更に現時の隆盛に導いた。嚴父萬三郎氏も亦克く斯界の發展に盡したる功勞者として、實氏と共に近世の名人たる名聲を博した。かゝる名流の血を享けたる氏は、幼時より斯道に興味深く又天分頗る豊富にして、嚴父の教導を受けて技大いに進み、斯道の最高名譽たる行幸啓能を始めとし光榮ある演能に屢々出演して麒麟兒の名を謳はれてゐる。趣味は讀書寫眞等である。

妻薰(日本橋病院長故岡本武次女、東京女學館卒)長女美枝子(昭和六年六月生)

宇多繁野女史 大森區蒲田梅屋敷内

梅屋敷保存會、明治大帝御遺蹟保護會

明治一三年二月生、愛媛縣

女史は守田彌一郎氏の次女として愛媛縣波止濱町に生れ、長じて尾道市の醫師宇多節之氏に嫁し二男三女を擧げて恵まれたる家庭生活を續けて來たが、大正二年不幸良夫病歿の爲め五人の愛兒を擁して健氣にも獨立生活を決意し、大阪割烹學校に入學し、大正四年卒業と共に子女教育のため上京し

て、同六年三月まで青山割烹講習會を開設

經營したが、其後明治大帝遺蹟保護會の維持を志し、此の事業に終生を捧ぐべく精進しつゝある。傍ら、華族、上流階級夫人の需めに應じて割烹の自宅教授を爲し、淑徳高き婦人として夙に令聞がある。尙ほ長男隆之氏は帝大在學中であるが、次男信夫氏は實業學校卒業後割烹實習中にして、修業後は郷里に歸り慈母の意志を繼いで斯道の普及向上に努むる方針である。女史は茶道、生花、音樂等の趣味深く是等に關する識見も亦賞揚すべきものがある。

野崎新太郎氏

下谷區谷中三崎町一八  
電話下谷(83)五二八三

從四位、勳四等、法學士、辯護士、帝國稅務協會主幹、全國町村長會囑託、帝國農村振興會囑託

明治五年二月生、埼玉縣

明治三一年東京帝國大學英法科卒業

氏は埼玉縣人野崎吉太郎氏の長男として、同縣蕨町塚越に生れた。北足立郡立中學、第一高等學校を経て帝大に學び、卒業と同時に司法官試補となり、東京區裁判所及地方裁判所に勤務したが、後大藏省に轉じ稅務監督官として熊本、丸龜、廣島、札幌仙臺の各稅務監督局に歷任すること十六

年、その功に依り從四位、勳四等に叙せられた。大正十二年官界を去ると同時に辯護士となり、主として稅務關係の事件を取扱ひ中央法曹界に名聲を博してゐる。一方帝國稅務協會を設立して其の主幹となり、又頭記の職を兼ねて活躍しつゝある。信教は佛敎、趣味は釣等である。

妻なつ子(明治一八年生、東京府士族近藤太郎妹)男忠良(明治三七年生、慶應大學卒、三越大阪支店勤務)男止良(同三八年生、東京帝大卒、經濟學士、中央倉庫勤務)男謙三(同四二年生、帝大工學部在學)男惺三(大正四年生、第二市立中學卒)女富子(明治四五年生、跡見高女卒)

倉上 由一氏

亦坂區青山南町六ノ二六  
電話青山(36)二二七六

醫學博士

明治一七年五月生、埼玉縣

氏は埼玉縣人倉上伊十郎氏の長男にして、夙に濟生學會醫學專門學校を卒業して内務省醫術開業試驗に合格し、後東京帝國大學選科生として衛生學科及皮膚科を專攻し、明治四十年獨立開業した。爾來益々研究して大正十四年醫學博士の學位を授與せられた。開業以來主として血壓亢進症、糖尿病等の診療に従事して今日に及んでゐる



が、多年の経験は、熱心なる研究と相俟つて今や我が醫界の重鎮として令名を馳せてゐる。趣味は義太夫、煙草、讀書等である。母とき子(慶應元年生)長男武雄、長女照子(明治四四年生、女子學習院卒業)一女喜代子、二男義雄

柴田善三郎氏

中野區桃園町二  
電話四谷三〇七

從三位、勳二等、法學士、貴族院議員

明治一〇年十一月生、靜岡縣

明治三七年東京帝大法科卒業

氏は靜岡縣佐藤善六氏の三男、後柴田佐平氏の養子となつた。大學卒業後更に同大學院に進んで研鑽し、明治三十八年高文試験に合格して和歌山縣事務官、愛媛縣警察部長、北海道廳拓殖部長、宮崎縣内務部長、大阪府内務部長、朝鮮總督府學務局長等を経て三重縣知事、愛知縣知事、大阪府知事等として敏腕を揮ひ、昭和七年五月内閣書記官長となり、後之を辭し貴族院議員に勅選された。

松田 源治氏

澁谷區穗田一ノ四  
電話青山五〇〇〇

從三位、勳二等、衆議院議員、立憲民政黨幹事長

明治八年一〇月生、大分縣

井富士官支配人となり以て今日に及んでゐる。氏の映畫館經營の手腕は夙に普く認めるところであるが、最近益々その敏腕を發揮して同館の經營に努力しつゝある。

妻ナオ夫人(神奈川縣人)長男菊雄(三〇歳、早稻田卒、酒類薪炭商自營)

柳家三語樓氏

本郷區駒込神明町八六  
電小石川(85)一、三四一

落語家、落語協會頭取

明治八年三月生、神奈川縣

氏は日本大學を卒業後文官高等試験及び判檢事登用試験に合格し、直ちに司法官試補に任ぜられたが、明治三十一年之を辭して、辯護士を開業した。明治四十年郷里より出馬して代議士たること九回に及び、濱口内閣には拓務大臣として臺閣に連り敏腕以て我が殖民政策に貢献した。現に民政黨の重鎮として活躍しつゝある。

山本吉太郎氏

瀧ノ川西ヶ原八七二一  
電小石川(85)三、五一四

松竹キネマ取締役兼營業部長、新潟松竹館(株)監査役

明治六年十一月生、石川縣

明治四〇年日本大學卒業

活動界に雄飛しつゝある氏は、始め教育界に志して石川縣立師範學校に學び、明治二十九年同校卒業後縣下各小學校に教鞭を執つた。然るにその後偶々感ずる所あつて上京し、日本大學に入り、研究の傍ら雄辯會、ボート部、尙友會等の牛耳を執つて校内は勿論、都下學生界に名聲を博した。同大學卒業後直ちに當時映畫界一方の雄であつた福寶堂に入社し、大正二年九月映畫界の大合同成り日本活動寫真株式會社の設立に

れるに及んで同社に轉じ、營業部長として敏腕を揮ひ、殊に同社が國活合併後に於て盛んに活躍し、映畫界に名聲を謳はれるに至つた。其の後大正十年十一月松竹キネマに聘せられて以來、大松竹の發展に心血を濺ぎ、現に同社重役として奮闘しつゝある。資性温厚篤實而も霸氣滿々として進取の氣風に富み、加ふるに斯業に關する造詣深く社内外の信望を得て益々同社の發展に努力してゐる。趣味は謠曲である。

柳川 政吉氏

澁橋區戸塚一ノ三三七  
大井富士館支配人

明治五年十一月生、神奈川縣

氏は神奈川縣人柳川源兵衛氏の二男として同縣中郡奏野町に呱呱の聲を揚げた。明治十九年同縣相模銀行に入つたが、後辭して煙草製造に従事し、煙草が官營となるに及んで廢業した。大正三年日活に入社し、淺草公園常盤座を始めとし日活經營の各座に勤め、大正七年地方に轉動したが幾何もなく歸朝し四谷の第四福寶館支配人に擧げられ、續いて大正十三年神樂坂日活館支配人に轉じ、更に青山館に轉じ、昭和四年日活系統の日本興業株式會社に移つて淺草鳥越の富士館支配人となり、昭和五年九月大

に捉はれざる一新機軸を出して好評を博し斯界隨一の人氣を呼ぶに至つた。一方落語界の發展に意を注ぎ落語協會を設立して大同團結を圖る等、斯界への功績は頗る顯著であり、現に協會頭取として益々落語界の發展に盡瘁しつゝある。

前田 利滿氏

小石川區三軒町八  
電話小石川(85)四九七

正五位、子爵

明治三八年一月生

前田 仁吉氏

下谷區龍泉寺町一六四  
電話龍泉寺(85)一、二四一

女(妹文子(明治四〇年四月生)伯母隆子(明治三年一〇月生、子稱稻葉正凱母)

大學に學んだが、昭和三年三月一旦歸朝し、更に同年六月よりメキシコ國に渡航して實業を開始し、以つて今日に及んでゐる。運動に趣味を有し、就中テニス、乗馬、水泳等を愛好して居り、宗旨は日蓮正宗である。

母龜子(明治一一年三月生、祖父利宅二



府警務局長等を経て三重縣知事、愛知縣知事、大阪府知事等として敏腕を揮ひ、昭和七年五月内閣書記官長となり、後之を辭し貴族院議員に勅選された。

**松田 源治氏** 澁谷區穗田一ノ四  
電話青山五〇〇〇  
從三位、勳二等、衆議院議員、立憲民政  
黨幹事長  
明治八年一〇月生、大分縣

二十九年同校卒業後縣下各小學校に教鞭を執つた。然るにその後偶々感ずる所あつて上京し、日本大學に入り、研究の傍ら雄辯會、ボート部、尚友會等の牛耳を執つて校内は勿論、都下學生界に名聲を博した。同大學卒業後直ちに當時映畫界一方の雄であつた福寶堂に入社し、大正二年九月映畫界の大合同成り日本活動寫真株式會社の設立さ

及んで廢業した。大正三年日活に入社し、淺草公園常盤座を始めとし日活經營の各座に勤め、大正七年地方に轉勤したが幾何もなく歸朝し四谷の第四福寶館支配人に擧げられ、續いて大正十三年神樂坂日活館支配人に轉じ、更に青山館に轉じ、昭和四年日活系統の日本興業株式會社に移つて淺草鳥越の富士館支配人となり、昭和五年九月大

井富士官支配人となり以て今日に及んでゐる。氏の映畫館經營の手腕は夙に普く認めるところであるが、最近益々その敏腕を發揮して同館の經營に努力しつゝある。

妻ナオ夫人(神奈川縣人) 長男菊雄(三〇歳、早稻田卒、酒類薪炭商自營)

**柳家三語樓氏** 本郷區駒込神明町八六  
電小石川(85)一、三四一

落語家、落語協會頭取  
明治八年三月生、神奈川縣

本名山口慶二、神奈川縣人山口新吉氏の長男として横濱市松枝町に呱呱の聲を揚げた。嚴父は外人専門の運送業を營んで居たが、氏も亦青年時代に實業界に入り、横濱取引所、サミュエル商會等に勤めて實務の經驗を積み、將來は貿易商として起つべき大抱負の下に、獨立開業してサンデン博士の發明に係る電氣ベルトの販賣を開始した。然るに三十三歳の時俄然心機一轉して實業界を去り、落語界に投じた。所謂中年の輩にして修業の苦闘は筆舌に盡し難きものであつたが、氏は頑として初志を翻さず、恩師橋家圓衛の門に在つて専心研鑽に努めた。かくて神田立花亭に初高座を勤めて以來、帝都各寄席に出勤して益々洗練されたその努力空しからず、遂に在來の落語の型

に捉はれざる一新機軸を出して好評を博し斯界隨一の人氣を呼ぶに至つた。一方落語界の發展に意を注ぎ落語協會を設立して大同團結を圖る等、斯界への功績は頗る顯著であり、現に協會頭取として益々落語界の發展に盡瘁しつゝある。

**前田 利滿氏** 小石川區三軒町八  
電話小石川(85)四九七

正五位、子爵  
明治三八年一月生

當家は右大臣菅原道眞の後裔前田利家の子利常の三男利治の後である。利治は大聖寺に封ぜられ、十二世を経て利豐氏に至つた。利豐氏は正二位前田齊泰の七男で、伯爵前田利男氏の叔父に當り、先代利行氏の養子となり、宮中祇候、太政官御用掛、修史館御用掛、掌典、貴族院議員、御歌所參候等の職につき、明治十七年子爵を授けられた。氏はその孫にして前田利彭氏の長男として生れ、子爵前田利定氏はその伯父、侯爵前田利爲氏及び東北鐵道鑛業株式會社取締役前田利乘氏は共に氏の叔父に當つて居る。大正九年家督を相續して襲爵を仰付けられた。氏は學習院中等科を卒業後渡米して、北米合衆國ニユハンブシヤ州エキセター高等學校を卒業し、同州ハノーバー

大學に學んだが、昭和三年三月一旦歸朝し、更に同年六月よりメキシコ國に渡航して實業を開始し、以つて今日に及んでゐる。運動に趣味を有し、就中テニス、乗馬、水泳等を愛好して居り、宗旨は日蓮正宗である。母龜子(明治一一年三月生、祖父利豐二女)妹文子(明治四〇年四月生) 伯爵隆子(明治三年一〇月生、子稱稻葉正凱母)

**前田 仁吉氏** 下谷區龍泉寺町一六四  
電話淺草(84)二、二七七

地主、龍泉寺町會顧問、門徒宗檀家總代理  
慶應二年八月生、福井縣



氏は福井縣に生れたが若冠にして上京し、明治二十年頃より土地の有

望なるに着眼し、餘裕あれば悉く土地に投資する方針を以て進み、逐年所有地が増加したるを以て大正十二年の震災を機として土地及家屋專業となつた。爾來入谷、新谷町等の窪地を順次買收整理して家屋を建設し、現今に於ては區内屈指の大地主として



數へらるゝに至つた。資性温厚にして公共奉仕の念に富み、大震災後帝都復興事業起るや第四十三地區區劃整理委員として盡瘁し、或は門徒宗檀家總代として、或は町會顧問として、其他社會公共的事業に關係して功績顯著なるものがある。趣味は植木、庭園等である。因みに長男一男氏は幼時神童の名を博したる秀才にして、武藏高等學校を首席を以て卒業し、目下東京帝國大學に在學中である。

妻オフサ(六四歳)一男(明治四五年生)

前川 斧次氏

日本橋區久松町一三二  
電話浪花(67)五、七二五  
三、〇二二

織物問屋前川斧次商店々主

明治元年四月生、滋賀縣

前川家は江州より江戸に出で代々太郎兵衛を名乗つて織物問屋を業とせる老舗にして、先々代は東京府多額納税者として斯界に令名を謳はれた。氏は江州彦根藩士池田太一郎氏の長男に生れたが、夙に帝都に出で先々代前川太郎兵衛氏の長女こうの入夫となり、織物問屋前川斧次商店を創始し、刻苦努力して漸次斯業界に擡頭し遂に今日の隆盛を見るに至つた。氏は斯界稀に見る人格者にして、夙に士魂商才の好典型とし

て定評がある。現在は長男榮次郎氏が氏を援け同店支配人として活躍し益々店勢の擴張に努力しつゝある。

妻こう(明治五年生、前川太郎兵衛叔母)  
長男榮次郎(明治二七年生、東京商大卒、前川商店支配人)榮次郎妻てい(明治三二年生、大熊丑之助二女、お茶ノ水高女卒)  
孫泰次郎(大正一四年生)同義郎(昭和三年生)同昌夫(昭和五年生)二男豊吉(明治三二年生、東京商大卒業前川商店販賣主任)三男久三郎(明治三四年生、慶大卒、前川商店仕入部主任)五男和吉(明治四一年生、法政大學在學)六男信吉(明治四三年生、慶大在學)三女キミ(明治四五年生、跡見高女卒)

松本 長氏

芝區琴平町二一  
電話芝(43)二、四四六

能樂家、寶生流仕手方

明治一〇年一月生、靜岡縣

常家は元祿時代より寶生流仕手方を勤め、代々宗家の番頭格として同流の發展に努力し來つた名門である。氏は先代松本金太郎氏の長男として靜岡市寶臺院に生れ、六歳の頃より父の薫陶を受けて能樂の修業に勤み、明治十九年九歳の時一家と共に上京して以來宗家寶生九郎氏の門弟とな

つた。上京の年芝公園能學堂に於て「滿仲」の子方を勤めたのを初舞臺とし、翌年十歳の時には徳川家達公邸に於ける明治大帝御前能に「三井寺」の子方を勤め、大正四年先帝陛下御即位の際宮中舞臺に於て「連獅子」の仕手方を勤め、翌年皇后陛下御前能には「松風」の仕手方を勤めた。かくて漸次斯界に名聲を博し、松本同門會、松本婦人同門會等を主宰する外、大阪、京都、金澤等へ出張教授して斯流の發展に努力しつゝある。得意のものは「隅田川」「松風」「熊野」等である。

松井 榮堯氏

芝區西久保櫻川町四  
電話芝(43)二、六三三

正四位、勳四等、法學士、公證人

明治五年七月生、石川縣

明治三二年東京帝國大學法科卒業

氏は石川縣士族松井堯一氏の長男にして、同縣下に呱呱の聲を揚げた。長じて東京帝國大學に學び、卒業後官界に入り其の敏腕を認められて漸次累進し、臺南地方法院檢察官長、臺北地方法院檢察官長、臺南州知事等に歴任して功績を顯はし、正四位、勳四等に叙せられた。大正十四年官界を去り、公證人として起ち、爾來今日に至るまで公證人として活躍し夙に斯界に普く名聲

を博してゐる。資性剛毅果斷、然も一面に於て人情に厚く、公共奉仕の念に富み斯界稀に見る人格者として信望がある。

妻照子(明治一五年生、吉澤卯三郎長女)

男堯政(明治三九年生、第四高等學校卒)

女雪子(大正三年生、山脇高女在學)

眞野清次郎氏

荒川區日暮里七ノ四五  
電話下谷(83)四、一六九

東京玩具製造組合理事、日暮里交和會顧問

豊島工業聯合會理事、トシボハ一モニカ及

治三六年生、東京商工機械科卒)同妻菊子(明治四一年生、若林惣之助長女、東京女學校卒)同長女京子(昭和四年生)同長男精次(昭和五年生)清次郎二女リヘ子(明治四四年生、武藏野高女卒)同三女久子(大正二年生)同三男(富太太正五年生、開成中學在學)同六男邦作(大正一一年生)同長女和子(明治三五年生、宮城縣原野重二妻)

め御大典參列の榮を辱うした。近年スポーツの流行に伴れて弓術も勃興し、斯界に定評ある氏の製品は各方面に歡迎されて業績逐年繁榮に赴き、京城に支店を設けて益々斯界に活躍しつゝある。信仰は眞言宗、趣味弓術、寫眞等である。

妻八百子(明治一三年生、茨城縣人部庄

三郎長女)男宗一(明治三八年生、京華商

業卒)男宗次(明治四五年生、獨逸協會中

學卒)女百合子(大正四年生、跡見高女卒)



て、先々代は東京府多額納税者として斯界に令名を謳はれた。氏は江州彦根藩士池田太一郎氏の長男に生れたが、夙に帝都に出で先々代前川太郎兵衛氏の長女こうの入夫となり、織物問屋前川斧次商店を創始し、刻苦努力して漸次斯業界に擡頭し遂に今日の隆盛を見るに至つた。氏は斯界稀に見る人格者にして、夙に士魂商才の好典型とし

明治一〇年十一月生、靜岡縣  
當家は元祿時代より寶生流仕手方を勤め、代々宗家の番頭格として同流の發展に努力し來たつた名門である。氏は先代松本金太郎氏の長男として靜岡市寶臺院に生れ、六歳の頃より父の薫陶を受けて能學の修業に努み、明治十九年九歳の時一家と共に上京して以來宗家寶生九郎氏の門弟とな

て、同縣下に夙々の聲を揚げた。長じて東京帝國大學に學び、卒業後官界に入り其の敏腕を認められて漸次累進し、臺南地方法院檢察官長、臺北地方法院檢察官長、臺南州知事等に歴任して功績を顯はし、正四位、勳四等に叙せられた。大正十四年官界を去り、公證人として起ち、爾來今日に至るまで公證人として活躍し夙に斯界に普く名聲

を博してゐる。資性剛毅果斷、然も一面に於て人情に厚く、公共奉仕の念に富み斯界稀に見る人格者として信望がある。

妻照子(明治一五年生、吉澤卯三郎長女)

男堯政(明治三九年生、第四高等學校卒)

女雪子(大正三年生、山脇高女在學)

### 眞野清次郎氏

荒川區日暮里七ノ四五  
電話下谷(83)四、一六九

東京玩具製造組合理事、日暮里交和會顧問  
豊島工業聯合會幹事、トンボハイモニカ及玩具製作所主、東京工場協會評議員

明治一二年生、新潟縣

氏は明治三十二年以來玩具製造に従事し、輸出玩具業者の第一人者として汎く知られてゐる。大正五年よりトンボハイモニカの製作所を設立し、全國及び外國にまで販路を擴め、更に昭和六年より手風琴の製作を始め、其他前記の要職に在り、不撓不屈の努力と、卓越せる經營の才は益々營業の發展を遂げ、現に従業員百二十名を擁し、その製品の優秀なる事は既に定評がある。今や國産品愛用の聲高きを以て將來一段の隆盛を招來するものとして一般に期待されてゐる。氏は書畫、骨董、刀劍等に趣味を持ちその鑑定眼は玄人を凌ぐものがある。妻キン子(明治一六年生)長男市太郎(明

治三六年生、東京商工機械科卒)同妻菊子(明治四一年生、若林惣之助長女、東京女學校卒)同長女京子(昭和四年生)同長男精次(昭和五年生)清次郎二女リヘ子(明治四四年生、武藏野高女卒)同三女久子(大正二年生)同三男(富太太正五年生、開成中學在學)同六男邦作(大正一一年生)同長女和子(明治三五年生、宮城縣原野重二妻)

### 眞家 宗吉氏

神田區松住町一〇  
電話下谷(83)一、八九五

弓具製造業、松住町會長、東京弓具組合顧問  
明治八年七月生、茨城縣

當家は歴代弓師として水戸徳川家に仕へたる名門にして、維新後も弓具の製造を以て業とし、先代宗吉氏は明治二十年頃上京し畏くも明治天皇の御弓矢調製の光榮に浴した。氏も亦幼時より家業に携はり、嚴父の薫陶を受けて斯道に長じ、先代の歿後倫治を改めて當家累代の名たる宗吉を襲名した。夙に帝都弓具製造業界に名聲を博し、大正天皇即位の御大典に際しては典儀に御使川の御弓矢、及び伊勢大神宮へ奉納の御弓矢製造の御恩命に接し無上の光榮に浴し又昭和四年には伊勢神宮に御弓矢納入のた

め御大典參列の榮を辱うした。近年スポーツの流行に伴れて弓術も勃興し、斯界に定評ある氏の製品は各方面に歡迎されて業績逐年繁榮に赴き、京城に支店を設けて益々斯界に活躍しつゝある。信仰は眞言宗、趣味弓術、寫眞等である。

妻八百子(明治一三年生、茨城縣人部庄三郎長女)男宗一(明治三八年生、京華商業卒)男宗次(明治四五年生、獨逸協會中學卒)女百合子(大正四年生、跡見高女卒)男宗重(大正八年生)

### 堀越角次郎氏

芝區伊皿子町三三  
電話高輪(七〇)七五三

勳五等、堀越(資)代表社員、東京府多額納税者  
明治一八年一月生、東京市

當家は舊幕時代より吳服太物商を営み都下同業界に於ける屈指の老舗にして、祖父田島角次郎氏は上州の豪商堀越文右衛門の支店を主宰し、後堀越姓に改めた先代角次郎氏亦その業を継ぎ、敏腕克く斯界に進出して巨萬の富を積んだ。氏はその嫡男にして前名を善七と呼び、明治二十九年家督相續と同時に角次郎を襲名した。夙に慶應義塾大學理財科に學び、卒業後家業に携はり、東京モスリン會社



合資會社モスリンキヤラコ商店等の設立に参劃し、斯業界に敏腕を揮つたが後堀越商店の經營を義兄堀越勘治氏に委ね、芝區内の所有地一萬餘坪の經營管理に主力を注ぎ、以て今日に及んでゐる。資性濃厚にして公共奉仕の念に富み、國家に貢獻する所尠ならず、往年日露事件の功に依り勳五等に叙せられ、更に昭和四年紺綬褒章飾版を下賜された。

妻梅子(明治二五年生、故公爵松方正義五女) 男善雄(大正七年生) 兄久三郎(明治七年生)

石垣 昌氏 下谷區東黒門町二六  
電話下谷(83)六、一五九

齒科醫、石垣齒科醫院々長

明治二四年一月生、宮城縣  
大正七年日本齒科醫學專門學校卒業

氏は仙臺市の出身にして、宮城縣立第一中學校卒業後齒科醫を志して上京し、日本齒科醫專に入學して研鑽を積み、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに上野驛前に開業し、爾來懇切本位を以て業務の發展に努力したる結果、漸次患者の信望を得て基礎漸く鞏固となつたが、不幸大正十二年大震災に見舞はれたる爲め、現在の地に移轉した。氏は資性濃厚にして其の診療に當つては頗る懇切丁寧を極め、然も技工には獨特

の手腕を有するため、現地に移轉後も年々逐ふて隆盛に赴き、今や確乎たる信望を得て名聲噴々たるものがある。

妻すゑ子(明治二七年生、東京府人拓植米三郎妹) 長女貞子(大正七年生)

今村 壽男氏 京橋區木挽町二ノ四  
野口編物製作所  
電話京橋(56)一、九七〇

軍手製造並同機販賣業  
明治三〇年生、長野縣

軍手製造業界に活躍し名聲噴々たる氏は、今より約十年前大阪に出で莫大小業界に投じて斯業界雄飛の基礎を作り、確乎たる自信を以て昭和五年獨立し軍手製造を開始した。爾來専心業務の擴張を圖り製品の品質向上に努めると共に一方販路の開拓に意を注ぎ、遂に斯界に一大勢力を有するに至り、更に東京に進出し、今や東京、大阪を通じて一ヶ年生産高二百萬足に達し、各官省、一般工、等より注文殺到の盛況を呈しつつある。軍手製造業者は頗る多數であるが、氏は專賣特許の優秀製造機械を專屬者のみに販賣して專屬製作を爲さしめる方法を執つてゐるため、他の同業者の追隨を許さず、氏の東京進出に依つて帝都同業者は一大脅威を蒙つた程である。宗旨は神道、

趣味は釣魚等である。

妻きくえ(明治三一年生、大阪府人濱田國松妹 男豊(一歳) 男昇(一〇歳) 男昭男(五歳) 男珍男(二歳) 女秀子(二三歳)

市村今朝藏氏 淀橋區上落合一ノ五七  
電話大塚(86)三、八三三

政治經濟研究所同人、輕井澤公園土地(株)社長、日本寫眞工業(株)取締役

明治三一年一月生、長野縣  
大正一二年早稻田大學卒業

著述家として、將た實業家として共に洋々たる前途を有する氏は、長野縣下著名の實業家市村藏吉氏の二男にして、同縣輕井澤町に生れた。早稻田大學に學び政治經濟科を卒業後直ちに渡米し、市俄古大學政治科、コロンビヤ大學等に學び、更に獨逸に轉じベルリン大學に於て研鑽を積み、大正十四年歸朝後國民新聞社に入社したが、昭和二年辭任し爾來専ら著述に勵んでゐる。著書には「西洋政治思想史」の快著があり、又「政治經濟年鑑」執筆者の一人である。一方實業界に於ては、曩に輕井澤公園土地株式會社の設立に奔走してその社長に推され、或は日本寫眞工業株式會社の重役として活躍しつつある。家庭にはキヨジ夫人との間に美男、米子、信江の一男二女があつ

て、和氣霽々たるものがある。

林 嘩氏 牛込區辨天町七四  
電話牛込(34)一、〇〇〇

醫學博士、林外科病院院長、日本醫師共濟生命保險(互)監査役、東京瓦斯(株)囑託、濟生會病院本院醫務參與

慶應二年五月生、東京府

明治二五年東京帝國大學醫科卒業

外科醫界の權威たる氏は、東京府土疾山

ひろ(大正九年生)

林 彌一郎氏 芝區高輪南町五三  
電話高輪(44)一、六五七

澁澤倉庫(株)取締役兼營業部長

明治一八年五月生、宮城縣

明治四二年長崎高等商業學校卒業

帝都倉庫業界に活躍して名聲噴々たる氏は、宮城縣人林芳太郎氏の長男として同縣

下て瓜々の聲を揚げ、昭和四年

明治八年一二月生、群馬縣

氏は群馬縣人長谷川寛敦氏の三男として同縣館林町に生れた。夙に上京し佃氏に師事して田鎖式速記術を學び、明治二十四年速記事務所を開設した。當時速記術は未だ一般的に普及されてゐなかつたが、氏は奮

闘努力以て子弟の教導に當ると共に、速記の必要を力説して其普及發達に貢獻した。其後明治三十二年



中學校卒業後齒科醫を志して上京し、日本齒科醫專に入學して研鑽を積み、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに上野驛前に開業し、爾來懇切本位を以て業務の發展に努力したる結果、漸次患者の信望を得て基礎漸く鞏固となつたが、不幸大正十二年大震災に見舞はれたる爲め、現在の地に移轉した。氏は資性温厚にして其の診療に當つては頗る懇切丁寧を極め、然も技工には獨特

至り、更に東京に進出し、今や東京、大阪を通じて一ヶ年生産高二百萬足に達し、各官省、一般工業等より注文殺到の盛況を呈しつつある。軍手製造業者は頗る多數であるが、氏は專賣特許の優秀製造機械を專屬者のみに販賣して專屬製作を爲さしめる方法を執つてゐるため、他の同業者の追隨を許さず、氏の東京進出に依つて帝都同業者は一大脅威を蒙つた程である。宗旨は神道、

十四年歸朝後國民新聞社に入社したが、昭和二年辭任し爾來專ら著述に勵んでゐる。著書には「西洋政治思想史」の快著があり、又「政治經濟年鑑」執筆者の一人である。一方實業界に於ては、曩に輕井澤公園土地株式會社の設立に奔走してその社長に推され、或は日本寫眞工業株式會社の重役として活躍しつゝゐる。家庭にはキヨジ夫人との間に美男、米子、信江の一男二女があつ

て、和氣霽々たるものがある。

林 嘩氏 牛込區辨天町七四  
電話牛込(34)一、〇〇〇

醫學博士、林外科病院長、日本醫師共濟生命保險(互)監査役、東京瓦斯(株)囑託、濟生會病院本院醫務參與  
慶應二年五月生、東京府  
明治二五年東京帝國大學醫科卒業

外科醫界の權威たる氏は、東京府士族山高信雄氏の二男に生れたが、後林鶯溪氏の養子となり、其家督を相續した。夙に帝大醫科を卒業後明治二十八年獨逸に留學して専ら外科に關する研究を重ね、歸朝後外科専門の林病院を創立し、新知識を傾注して診療に従事するや、其懇切なる診療と獨特の手腕は忽ち認められて患者の絶大なる信任を得、爾來逐年發展して現時の隆況を呈するに至つた。又此の間醫學博士の學位を授與せられ、頭記の要職を兼ねて名聲を博してゐる。

妻しげ(明治一八年生、益田達妹)長男章(同二四年生) 同妻愛子(同四一年生、池田辨吉長女)二男是明(同三九年生) 三男信男(同四一年生) 四男正夫(同四三年生) 五男明雄(大正二年生) 三女きよ子(明治四四年生) 四女きく子(大正五年生) 五女

ひろ(大正九年生)

林 彌一郎氏 芝區高輪南町五三  
電話高輪(44)一、六五七

濫澤倉庫(株)取締役兼營業部長  
明治一八年五月生、宮城縣  
明治四二年長崎高等商業學校卒業

帝都倉庫業界に活躍して名聲噴々たる氏は、宮城縣人林芳太郎氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、昭和四年家督を相續した。幼少の頃より頭腦明晰を以て知られ、長じて長崎高等商業學校に學び、卒業後實業界に奮闘すること既に多年、今や信望ある濫澤倉庫株式會社に在つて營業部長の要職に据り、重役として益々敏腕を揮つてゐる。氏は資性温厚にして情誼に厚く、業務に當つては誠實眞摯を旨とし殊に責任感強く、依頼するに足る人物として夙に社内の上下共に尊敬されてゐる。のみならず將來公共奉仕の念に富み、常に社會的に貢献することに留意し、業界稀に見る人格者として聲望を博してゐる。

妻君子(明治三〇年三月生、東京府人依田盛之四女)  
長谷川 篤氏 豐島區駒込一ノ二六  
電小石川(85)四、四七一  
三井同族會勤務

明治八年一二月生、群馬縣

氏は群馬縣人長谷川寛敦氏の三男として同縣館林町に生れた。夙に上京し佃氏に師事して田鎮式速記術を學び、明治二十四年速記事務所を開設した。當時速記術は未だ一般的に普及されてゐなかつたが、氏は奮闘努力を以て子弟の教導に當ると共に、速記の必要を力説して其普及發達に貢献した。其後明治四十三年三井家の囑託として聘せられ、後三井合名會社の秘書課に轉じ、恪勤勵精すること多年、現時は三井同族會の事務に携はつてゐる。氏は上州人傳統の俠氣に富むと共に、頗る温厚篤實の人格者として知られ、克く後進を掖導して慈父の如く慕はれてゐる。家庭には二男四女があつて、和氣霽々たるものがある。

長谷川 伸氏 品川區西大崎四ノ八元

文藝家  
明治一七年三月生、神奈川縣  
本名長谷川伸二郎、横濱市に呱呱の聲を揚げたが幼にして父母を喪ひたるため辛酸具に嘗め、十二歳の頃九州の某土木組に入り約十ヶ年艱難辛苦を重ねた。その後獨學を以て文藝の素養を作り、明治末葉には地方新聞に投じ漸く糊口を凌ぐ状態であつた



が、其天才的文筆は漸次認められ、上京して新聞社に入社した。是れ氏が帝都文壇に名を成す第一歩であつた。其後同社を退いて専ら創作に没頭し、幾百篇の力作を發表して文名を謳はれるに至つた。小説に秀で、評論に長じ、脚本を好くし、大衆作家としても亦獨特の筆を持ち、好評噴々たるものがある。最近の作品として「戸並長八郎」「一本刀土俵入」等はその代表的名篇にして、普く人々に膾炙されたものである。

伴野 賢造氏

中野區住吉二、六  
電話中野四、三〇七

東京セロファン紙(株)専務、桂屋商店(株)取締役、永樂信用組合理事

明治一三年二月生、静岡縣

氏は夙に郷里静岡市に於て静岡瓦斯株式會社専務、静岡銀行支配人等として敏腕を揮ひ、同地實業界に令名を馳せた。大正五年静岡縣廳の囑託を受け、茶の視察の爲め歐米諸國に漫遊し、大正六年歸朝後直ちに上京して白木屋呉服店の常務に擧げられ、大正十一年迄その職に在つて活躍し、漸次帝都財界に認められるに至つた。昭和三年元日光社の經營したる事業を繼承し、東京セロファン紙株式會社を設立し其専務に就任した。セロファン紙は佛國の世界的特許紙と

鈴木武三男(同妻芳江(明治三三年生)

堀井新治郎氏

小石川區高田豊川町三四  
電話牛込二七〇  
(營業所) 神田區鍛冶  
町二 電話神田四三、四三六

堀井膳寫堂本店主

明治八年八月生、滋賀縣

先代新治郎氏は滋賀縣蒲生郡の出身にして、初め茶業に従事し、近江茶取引所主任、農商務省、岐阜縣、滋賀縣各囑託

して著名であるが、氏は同社創立以來幾多の困難に遭遇したるに拘らず克く之を突破して社礎を鞏め、莫大の犠牲を拂つて研究を重ね、氏獨特の敏腕を揮つて經營の衝に當りたる結果、遂に現在の隆況を見るに至つた。然も氏は尙益々研究の歩を緩めず、國家産業の振興に資する意氣を以て奮闘すると共に、頭記の職を兼ねて活躍しつゝある。

陸口久次郎氏

京橋區銀座四ノ一二  
電話京橋(56)五、五二二

半襟商「あり久」店主

明治三四年六月生、東京市

都下婦女子の間に好評噴々たる半襟商「あり久」は、明治三十三年頃先代久次郎氏の創始に係る。氏は先代の長男として銀座三ノ三に呱呱の聲を揚げ、昭和三年三月家督を相續すると同時に舊名健次郎を改めて久次郎を襲名し、二代目當主となつた。夙に小學校卒業後二十一歳の時まで、淺草區「伊勢新」に於て修業を積み、後實家に於て先代を翼けて家業の發展に努力し來つたが、父の逝去後は益々奮闘努力して多年賣込みたる名聲を失墜せざるは勿論、倍舊の繁昌振りを來しつゝある。然も氏は尙は大成を將來に期し、良品廉價主義を標榜して顧客の吸収に努め、品質の向上を怠らず、

著々として發展の一路を辿つてゐる。

母リキ(明治一三年生、京都府人中村彌三郎長女)長男健次郎(明治三四年生)長女ヨネ(同三〇年生、東京府人安藤秀次郎氏妻)

岡島新太郎氏

日本橋區横山町三ノ一二  
電話浪花(67)一、〇六五

東京化粧品同志(株)社長、湖南土地(株)専務、小間物化粧品同業組合副組長、化粧品商

明治六年一〇月生、東京市

慶應義塾大學理財科卒業

帝都化粧品界に令名噴々たる氏は、先代岡島喜八郎氏の長男として現在地に生れ、明治三十七年家督を相續した。夙に慶應義塾に學び、卒業後實業界に投じ、現に化粧品商を營む傍ら前掲各社の重役を兼ねて帝都財界に敏腕を揮ひつゝある。性來頗る敏活にして經營の才腕秀れ、大いに産を興したが、一方公共奉仕の念に富み、都下の小間物化粧品同業組合副組長として同業者の融合と圓滿なる發展に盡瘁し、その顯著なる功績は斯界に普く認められてゐる。宗旨は淨土宗、趣味は圍碁である。

妻あき(明治一八年生、東京府人伊藤金吉女)養嗣子明(明治三一年生、千葉縣人

渡邊 聖二氏

牛込區原町一ノ一七  
電話牛込(34)二、〇四四

經濟學士、三菱銀行勤務

明治四〇年一二月生、愛知縣

昭和三年東京帝國大學經濟學部卒業

新進の材として前途の飛躍を期待されてゐる氏は、愛知縣人渡邊義郎氏の二男にして、名古屋市東區白壁町に呱呱の聲を揚げた。嚴父義郎氏は愛知銀行頭取、名古屋商

新進氣鋭の辯護士として帝都法曹界に鳴

る氏は、廣島縣の出身にして、夙に上京して中央大學に法律を學び、大正十三年同大學を卒業後も研鑽に勵みたる効果空しからず、昭和三年國家試験に應じて司法科を優秀の成績を以て合格した。同年司法官試補となつたが、感ずる所あつて之を辭し、辯護士を開業した。同五年四月司法省囑託として歐米漫遊の途に上り、司法制度を調査



揮 同地實業界に名を馳せ、大正五年  
静岡縣廳の囑託を受け、茶の視察の爲め歐  
米諸國に漫遊し、大正六年歸朝後直ちに上京  
して白木屋呉服店の常務に擧げられ、大正  
十一年迄その職に在つて活躍し、漸次帝都  
財界に認められるに至つた。昭和三年元日  
光社の經營したる事業を繼承し、東京セロ  
ファン紙株式会社を設立し、其事務に就任し  
た。セロファン紙は佛國の世界的特許紙と

に小學校卒業後二十一歳の時まで、淺草區  
「伊勢新」に於て修業を積み、後實家に於て  
先代を翼けて家業の發展に努力し來つた  
が、父の逝去後は益々奮闘努力して多年賣  
込みたる名聲を失墜せざるは勿論、倍舊の  
繁昌振りを來しつゝある。然も氏は尙は大  
成を將來に期し、良品廉價主義を標榜して  
顧客の吸収に努め、品質の向上を怠らず、

活にして經營の才腕秀れ、大いに産を興し  
たが、一方公共奉仕の念に富み、都下の小  
間物化粧品同業組合副組長として同業者の  
融合と圓滿なる發展に盡瘁し、その顯著な  
る功績は斯界に普く認められてゐる。宗旨  
は淨土宗、趣味は圍碁である。  
妻あき(明治一八年生、東京府人伊藤金  
吉女)養嗣子明(明治三十一年生、千葉縣人

鈴木武三男)同妻芳江(明治三十三年生)

堀井新治郎氏

小石川區高田豊川町四  
電話 牛込二七〇  
(營業所) 神田區鍛冶  
町二 電話 神田四三・四六

堀井膳寫堂本店主

明治八年八月生、滋賀縣

先代新治郎氏は滋賀縣蒲生郡の出身に  
して、初め茶業に従事し、近江茶取引所  
主任、農商務省、岐阜縣、滋賀縣各囑託  
等として斯業界に活躍した。明治二十六  
年渡米して膳寫術を研究し、歸朝後膳寫  
版を發明し堀井膳寫堂を創設し、爾來膳  
寫版及附屬品の製造販賣に従事して遂に  
堀井膳寫堂今日の業礎を確立し、大正六  
年隱退した。氏は滋賀縣堀井彦四郎氏の  
長男にして前名を耕造と呼び、大正五年  
先代の養子となり、同六年家督相續と同  
時に新治郎を襲名した。爾來養父の業を  
繼いで只管その發展に努力以て今日に及  
んでゐる。宗旨は黄蘗宗、趣味は發明、  
研究、寫眞等である。

養父元紀(安政三年生)妻コト(明治

一一年生、滋賀縣黄地直次郎長女)長  
男彦次郎(同三三年生)三男綠郎(大  
正五年生)二女篠子(明治四〇年生)  
長女エイ(同三一年生、夫三郎と共に  
分家)養子三郎(小石川廣吉三男)

渡邊 聖二氏

牛込區原町一ノ二七  
電話 牛込(34)二、〇四四

經濟學士、三菱銀行勤務

明治四〇年一二月生、愛知縣

昭和三年東京帝國大學經濟學部卒業  
新進の材として前途の飛躍を期待されて  
ゐる氏は、愛知縣人渡邊義郎氏の二男にし  
て、名古屋市東區白壁町に呱呱の聲を揚げ  
た。嚴父義郎氏は愛知銀行頭取、名古屋商  
業會議所顧問たる外、各大會社の重役を兼  
ね、中京財界の元老として名聲噴々たるも  
のがある。父の薰陶を受けて氏は幼少の頃  
より氣宇壯大、學に秀で、同地の第八高等  
學校を経て東京帝國大學に學ぶや、成績拔  
群然も進取の氣象に富み、學生間に信望を  
博した。卒業後實業界に志し、三菱銀行に  
入社し現に同行本店に勤務して行務に勉勵  
しつゝあるが、學識豊富にして實務の才に  
富み、資性頗る温厚にして夙に社内の信望  
厚く、將來の利器として認められてゐる。  
趣味の尤なるものはスポーツである。

渡邊 忠雄氏

日本橋區新材木町八  
電話 浪花(67)二、八一三

辯護士

明治三十一年七月生、廣島縣

大正一三年中央大學法科卒業

新進氣鋭の辯護士として帝都法曹界に鳴

る氏は、廣島縣の出身にして、夙に上京し  
て中央大學に法律を學び、大正十三年同大  
學を卒業後も研鑽に勵みたる効果空しから  
ず、昭和三年國家試験に應じて司法科を優  
秀の成績を以て合格した。同年司法官試補  
となつたが、感ずる所あつて之を辭し、辯  
護士を開業した。同五年四月司法省囑託と  
して歐米漫遊の途に上り、司法制度を調査  
研究して同年十一月歸朝した。爾來新知識  
を披瀝して在野法曹界に活躍しつゝある  
が、氏は先天的に頭腦頗る明晰にして、加  
ふるに多年の研究に依つて各國の法規に通  
曉し、辯護亦爽快、辯護士としての凡ゆる  
條件を具備せる點に於て斯界に嶄然頭角を  
顯はし、洋々たる前途の飛躍を期待されて  
ゐる。

若松 友吉氏

芝區高輪車町四八  
電話 高輪(44)三、九八七

素封家

明治三四年四月生、新潟縣

慶應義塾大學理財科卒業

氏は新潟縣人仲野榮太郎氏の三男として  
同縣下に呱呱の聲を揚げ、長じて若松長藏  
氏の養子となつた。幼少の頃より頭腦頗る  
明晰にして、小、中學校共に優秀の成績を



以て卒業し上京して慶應義塾に學ぶや、頭腦益々冴えて儕輩の間に尠なからず尊敬されるに至つた。養父長藏氏は夙に同地の資産家として知られ慈善事業等に寄附して名望があつたが、氏も亦資性温厚にして公共奉仕の念に富み、博愛主義者として夙に知られてゐる。日蓮宗を信仰し、趣味は柔道、劍道、寫眞等である。

妻わか(明治四〇年生、東京府人山田新吉氏四女、東京高女卒)長女節子(大正一四年生)二女昌子(昭和二年生)

和田 文吾氏

麻布區弁町一六一  
電話青山(36)六、五一〇

理學士、東京帝國大學理學部講師

明治三三年一月生、廣島縣

大正一四年東京帝國大學理學部卒業  
氏は廣島縣人和知泰一郎氏の男として廣島市に生れ、先代和田豊次氏の養子となり、昭和三年和田家を相續した。先代豊治氏は慶應義塾の出身にして日本郵船、鐘ヶ淵紡績、富士瓦斯紡績等に關係し、本邦財界の大御所然たる地位を占め、晩年貴族院議員に勅選されたる一世の巨人であつた。その養嗣子にして和田家の常主たる氏は、夙に東京帝國大學理學部に學んで植物學を研究し、卒業後一年志願兵として服役後更に大

學院に進んで研鑽を重ね、昭和三年母校講師に聘せられ、現にその職に在つて後進の指導に當ると共に、一方更に研究を進め、其熱心と造詣の深き點に於て漸次本邦理學界に認められ、前途の活躍を期待されてゐる。

妻米子(明治四一年生、大分縣人櫻井好一二女)長男修一(昭和三年生)

吉川春次郎氏

日本橋區北島町一ノ三三  
電話茅場町(66)五八三

醫學博士、ドクトル・メヂチーネ、  
外科吉川病院々長

明治一五年四月生、神奈川縣

明治三六年千葉醫專卒業

外科特に盲腸手術の泰斗として名聲噴々たる氏は、神奈川縣人吉川唯次郎氏の長男にして、同縣高座郡相澤村に生れ、後家督を相續した。夙に千葉醫專に學び、卒業後明治三十八年より大正十一年迄林病院に勤務したが、此の間明治四十一年より同四十二年迄獨逸に留學して外科の研究を積み、ドクトル・メヂチーネの稱號を受けた。大正十二年三月林病院を辭して獨立開業後幾何もなく大震災に見舞はれたが、直ちに復興に着手し昭和四年竣工した。復興の吉川病院は其設備の優秀なることに於て模範的

病院と稱せられ、氏の卓拔せる技術と相俟つて治療を乞ふ者日に激増し、特に盲腸の手術を受ける者一ケ年二百名を下らざる盛況を呈してゐる。尙ほ氏は曩に「家鶏肉腫の免疫學的研究所」の論文を提出して醫學博士の學位を授與され、名實共に外科醫界の權威として謳はれてゐる。

妻キク(明治二一年生、神奈川縣人辻村能吉二女)長男春壽(同四二年生)

吉田 泰久氏

京橋區新川町二ノ二一  
電話京橋(56)二、三、一五

「大黒正宗」發賣元吉田泰久店々主、新川町會副會長

明治一五年一月生、東京市

氏は東京府人吉田太七郎氏の長男にして愛知縣龜崎町に生れ、明治三十九年分家した。夙に實業界に志し、明治三十年叔父堀越孝次郎氏の經營に係る堀越商店に入つた。同店は銘酒丸越釀造元として著名の酒舗であつたが、氏は茲に勤務すること實に二十餘年に亘り、後大正十一年獨立して酒問屋吉田泰久商店を創始した。翌年灘御影の大黒正宗釀造元安福又四郎商店に囑せられて其東京支店支配人に擧げられ、以來大黒正宗の販路擴張に努め、昭和三年同店を吉田泰久商店と改稱後も、依然大黒正宗を

一手に販賣して益々奮闘努力以て今日に及んでゐる。大黒正宗は本場の灘に於ける屈指の銘酒として夙に關西方面に定評があるが、氏の努力に依つて今や東京及關東、東北方面にまで噴々たる好評を博しつゝある。氏は性來公共奉仕の念に富み、曩に四

屬を拜命し、官制改正後拓務省官房秘書課屬となり以て今日に及んでゐる。海軍大將加藤寛治、同岡田啓介兩氏等と同郷にして、郷黨後進の掖導に盡瘁せる恩人として信望を博してゐる。信仰は佛教、趣味は書畫等。

妻壽子(明治一五年生)長男威夫(同三九年生、東京商工學校卒、滿洲國奉天郵便局勤務)長女佳子(同四三年生、澤田高女卒)二女家子(二女家子)大

高松 誠氏

大森區新井宿一ノ三三〇  
電話 大森三四六

工學士、日本鋼管(株)川崎工場長

明治二〇年生、東京府

長として町自治に盡瘁しつゝある外、常に社會公共的事業に參與し頗る信望がある。宗



島市に生れ、先代和田豊次氏の養子となり、昭和三年和田家を相續した。先代豊治氏は慶應義塾の出身にして日本郵船、鐘ヶ淵紡績、富士瓦斯紡績等に關係し、本邦財界の大御所然たる地位を占め、晩年貴族院議員に勅選されたる一世の巨人であつた。その養嗣子にして和田家の常主たる氏は、夙に東京帝國大學理學部に學んで植物學を研究し、卒業後一年志願兵として服役後更に大

を相續した。夙に千葉醫專に學び、卒業後明治三十八年より大正十一年迄林病院に勤務したが、此の間明治四十一年より同四十二年迄獨逸に留學して外科の研究を積み、ドクトル・メヂチーネの稱號を受けた。大正十二年三月林病院を辭して獨立開業後幾何もなく大震災に見舞はれたが、直ちに復興に着手し昭和四年竣工した。復興の吉川病院は其設備の優秀なることに於て模範的

越孝次郎氏の經營に係る堀越商店に入つた。同店は銘酒丸越醸造元として著名の酒舗であつたが、氏は茲に勤務すること實に二十餘年に亘り、後大正十一年獨立して酒問屋吉田泰久商店を創始した。翌年灘御影の大黒正宗醸造元安福又四郎商店に囑せられて其東京支店支配人に擧げられ、以來大黒正宗の販路擴張に努め、昭和三年同店を吉田泰久商店と改稱後も、依然大黒正宗を

一手に販賣して益々奮闘努力以て今日に及んでゐる。大黒正宗は本場の灘に於ける屈指の銘酒として夙に關西方面に定評があるが、氏の努力に依つて今や東京及關東、東北方面にまで噴々たる好評を博しつゝある。氏は性來公共奉仕の念に富み、曩に四日市町會長に擧げられ又現に新川町會副會長として町自治に盡瘁しつゝある外、常に社會公共的事業に參與し頗る信望がある。宗旨は眞宗、趣味は廣告考案等である。妻ゆき子(明治一十九年生、東京府人堤清七五女)一男勘一(大正四年生、獨逸協會中學在學)三男僚介(同九年生)長女琴子(明治四〇年生)

屬を拜命し、官制改正後拓務省官房秘書課屬となり以て今日に及んでゐる。海軍大將加藤寛治、岡田啓介兩氏等と同郷にして、郷黨後進の掖導に盡瘁せる恩人として信望を博してゐる。信仰は佛教、趣味は書畫等。妻壽子(明治一五年生)長男威夫(同三九年生、東京商工學校卒、滿洲國奉天郵便局勤務)長女佳子(同四三年生、澤田高女卒、他家に嫁す)二女義子(大正五年生、淑徳高女卒、安田銀行勤務)三女昌子(同九年生、淑徳高女在)

上田昌之助氏 瀧野川區瀧野川町五〇 從六位、勳六等、拓務省官房秘書課勤務 明治一三年一月生、福井縣 氏は福井市豊島中町に呱呱の聲を揚げた。明治三十年遞信省に入り、遞信書言補、遞信書記、遞信屬等に歴任し同三十四年之を辭したが、同三十六年再び遞信省に入り航路標識管理所看守及び書記として勤続し、大正三年辭任した。爾來實業界に投じ敏腕を揮つたが、同八年農商務省に入り、同十一年一旦辭任後拓務局

長谷川誠也氏 品川區上大崎一丁目 博文館(株)取締役、臨時國語調査會委員 早稻田大學評議員 明治九年一二月生、新潟縣 氏は新潟縣士族長谷川周亮氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げた。幼少の頃より文才に秀で、長じて早稻田大學の前身東京專門學校文科に入り、坪内博士等の教へを受くるに及んで其の天才は遺憾なく發揮され、文人として前途を囑望されるに至つた。同校卒業後博文館に奉職し、同館發行各雜誌の編纂に従事する傍ら各誌に執筆して名聲を博し、後編纂長の要職に拔擢され、更に取締役に選ば

れ、社運の興隆に貢獻以て今日に及んでゐる。天溪の號を以て文名夙に遍く、著書には「文藝觀」「アリストートル」「自然主義」「歐洲文藝思潮」等がある。妻チヨ(明治一十九年九月生)

高松 誠氏 大森區新井宿一ノ三〇〇 工學士、日本鋼管(株)川崎工場長 明治二〇年生、東京府 大正二年東京帝大工科機械科卒業 嚴父高松豊吉氏は我が化學工業界の權威にして、夙に工學博士の學位を授與され、東京帝國大學名譽教授、帝國學士院會員、科學協議會議長、科學知識普及會理事長等として學界に重きを爲し、又各種事業會社に關係して業界の進展に貢獻し、その顯著なる功績に依つて從三位、勳二等に叙せられ、各方面に名聲噴々たるものがある。氏はその嗣子にして、夙に東京帝國大學工科大學機械科に學び、優秀の成績を以て卒業後直ちに日本鋼管會社に入社し、累進して工務部理事に拔擢され、更に川崎工場長の要職に擧げられ、以て今日に及んでゐる。妻スガ(明治三〇年生、醫學博士鳥居武雄妹)長男道(大正一二年生)二男倫(同一年生)三男育(昭和四年生)長女愛(大正六年生)



長谷川吉次氏

神田區永富町六、大同  
ビル内 電話神田二五

辯護士、松竹興業(株)監査役

慶應二年二月生、岐阜縣

明治二七年明治法律學校卒業

氏は明治大學の前身明治法律學校卒業  
後辯護士試験に合格、爾來辯護士として  
著々地歩を占めると共に、東京市會議員

同府會議員、同參事會員等に選ばれるこ  
と數回に及び、更に實業界に進出し曩に  
は東京油肥會社取締役、東京乘合自動車  
會社、歌舞伎座各監査役等として敏腕を  
揮ひ活躍し、現に前記の職にある。

牟田吉之助氏

朝鮮新義州王子製紙會  
社社宅内

王子製紙(株)朝鮮工場長

明治一七年一〇月生、福岡縣

氏は福岡縣士族牟田吉平氏の三男とし  
て同縣下に呱呱の聲を揚げた。夙に郷里  
の福岡工業學校に學び、卒業後大正二年  
三井合名會社經營の樺太紙料工場に入社  
し、製紙界活躍の第一歩を踏んだ。その  
後王子製紙會社に轉じ、大泊工場勤務を  
經て豊原工場工務係長心得に進み、後朝  
鮮製紙會社工務係長、王子製紙會社工務  
課長等に歴任し、大正十二年同社より歐  
米に於ける紙業視察の爲め出張を命ぜら  
れ、歸朝後朝鮮工場長に擧げられた。後

朝鮮殖産電氣會社重役をも兼ねたが、現  
時は専ら朝鮮工場長として活躍しつゝあ  
る。趣味は野球、圍碁、撞球等。

母イソ(安政三年生、福岡縣井上増彌  
長女)妻ヨシ(明治三〇年生)長女須  
美子(大正二年生)二女喜代子(同六  
年生) 兄源太郎(明治八年生、現戸主)  
弟茂雄(同二九年生)

矢田七太郎氏

澁谷區代々木初臺四六  
電話 四谷九〇四

法學士、滿洲國參事

明治一二年一二月生、靜岡縣

明治三九年東京帝大法科卒業

氏は靜岡縣人矢田周作氏の實弟にして  
同縣田方郡に生れ、明治四十一年分家し  
た。夙に東京帝國大學法科政治科に入り  
卒業後外務省に奉職し、廣東領事官補と  
なり、爾來漢口、天津各領事官補、伊太  
利大使館二等書記官等を経て倫敦總領事  
に進み、更に桑港、上海各總領事を経て  
昭和四年瑞西駐劄特命全權公使に任ぜら  
れ、同五年七月第十一回國際聯盟帝國代  
表者代理を命ぜられ、同六年十一月一般  
軍縮會議全權委員として壽府に派遣され  
其重責を全うし、後滿洲國參事に擧げら  
れ今日に至る。聰明、外交手腕に勝れ、  
大いに前途の雄飛を期待されてゐる。  
妻鈴江(明治二八年生、東京府志賀重

昂長女)長男申(大正一二年生)長女  
榛江(同二年生)二女伊豆江(同三年  
生)

廣瀬鉞太郎氏

牛込區矢來町二四  
電話牛込一四三七

法學士、共同火災保險(株)專務取締役、

高砂香料、昭和火災保險各(株)取締役、

大日本火災海上再保險(株)監査役

明治一三年一〇月生、愛媛縣

明治三九年京都帝大法科卒業

氏は愛媛縣士族廣瀬坦氏の長男にして  
醫學博士福岡五郎氏の實兄である。同縣  
下に呱呱の聲を揚げ、明治四十三年その  
家督を嗣いだ。夙に京都帝國大學法科に  
入り、經濟學を專攻し、優秀の成績を以  
て同大學を卒業後共同火災保險會社に入  
社した。爾來一意その職務に勵精し、累  
進して關東營業部長に拔擢され、後取締  
役に選ばれ、更に專務取締役として今日  
に及べる傍ら、前掲各社の重役を兼任し  
て敏腕の聞え高く、嘖々たる名聲を馳す  
るに至つた。

母ヒサ(嘉永二年生)妻敏子(明治二  
〇年生、石川縣横地石太郎二女)長男  
太郎(大正五年生)二男二郎(同七年  
生)長女惠津子(同元年生)

樋口元之助氏

澁谷區糎田一ノ四  
電話青山五七二五

兼ねて醸造業界に活躍し、更に合同毛織  
株式會社常務取締役として毛織物業界に  
名聲を馳せ、或は九州製壘株式會社監査  
役をも兼ねて敏腕を揮ふこと多年、現時  
前掲の任に在つて實業界に名聲を博して  
ゐる。

母キツヨ(慶應二年一月生、岩手縣  
佐々木雄治四女)妻アキ(明治三一年  
生、宮崎縣向井太郎妹)長女園子(大

共同火災保險(株)關東營業部長兼市内契  
約課長

明治二二年一月生、東京府

明治四五年慶應義塾大學理財科卒業

氏は東京府樋口正峻氏の七男として呱  
々の聲を揚げ、大正十年家督を嗣いだ。  
夙に慶應義塾大學理財科に入り、専心學  
業に勵み、優秀の成績を以て同校を卒業  
後直ちに共同火災保險會社に入社した。

同市内に呱呱の聲を揚げ、大正十二年そ  
の家督を嗣いだ。夙に慶應義塾大學に學  
び、優秀の成績を以て卒業後直ちに大倉  
組に入社した。大正八年滿洲及び支那各  
地を歴遊し、續いて同九年歐米各國を遍  
歴し經濟その他各方面に亘つて調査研究  
し、歸朝後東邦商會取締役に擧げられ更  
に坂本商會製作所監査役等として活躍し  
た。昭和四年徳川頼貞侯爵家の參事とな



氏は福岡縣士族牟田吉平氏の三男として同縣下に呱呱の聲を揚げた。夙に郷里の福岡工業學校に學び、卒業後大正二年三井合名會社經營の樺太紙料工場に入社し、製紙界活躍の第一歩を踏んだ。その後王子製紙會社に轉じ、大泊工場勤務を経て豊原工場工務係長心得に進み、後朝鮮製紙會社工務係長、王子製紙會社工務課長等に歴任し、大正十二年同社より歐米に於ける紙業視察の爲め出張を命ぜられ、歸朝後朝鮮工場長に擧げられた。後

なり、爾來漢口、天津各領事官補、伊太利大使館二等書記官等を経て倫敦總領事に進み、更に桑港、上海各總領事を経て昭和四年瑞西駐劄特命全權公使に任ぜられ、同五年七月第十一回國際聯盟帝國代表者代理を命ぜられ、同六年十一月一般軍縮會議全權委員として壽府に派遣され其重責を全うし、後滿洲國參事に擧げられ今日に至る。聰明、外交手腕に勝れ、大いに前途の雄飛を期待されてゐる。  
妻鈴江(明治二八年生、東京府志賀重

進んで關東營業部長に拔擢され、後取締役に選ばれ、更に專務取締役として今日に及べる傍ら、前掲各社の重役を兼任して敏腕の聞え高く、嘖々たる名聲を馳するに至つた。  
母ヒサ(嘉永二年生)妻敏子(明治二〇年生、石川縣横地石太郎二女)長男太郎(大正五年生)二男二郎(同七年生)長女惠津子(同元年生)

樋口元之助氏 澁谷區穩田一ノ四  
電話青山五七二五

共同火災保險(株)關東營業部長兼市内契約課長

明治二二年一月生、東京府

明治四五年慶應義塾大學理財科卒業

氏は東京府樋口正峻氏の七男として呱呱の聲を揚げ、大正十年家督を嗣いだ。夙に慶應義塾大學理財科に入り、専心學業に勵み、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに共同火災保險會社に入社した。爾來只管その職務に勵精し、着實勤勉なる資性と炯眼敏才は相俟つて次第に社内の信望を高め、漸次要職に拔擢され、遂に關東營業部長に擧げられた。現時その任に在る傍ら市内契約課長をも兼ねて敏腕至らざるなく、同社内にては勿論、斯業界に於ける有数の敏腕家として信望を博してゐる。

妻カナ(明治三四年生、神奈川縣井田清三五女、フェリス和英女學校卒)長男剛正(大正一四年生)長女豐子(同二二年生)

藤村 稻造氏

澁谷區北谷町五四  
電話 青山八三〇四

南葵産業(株)常務取締役、徳川頼貞侯爵家參事兼財務部員

明治二一年一月生、東京府

大正二年慶應義塾大學理財科卒業

氏は東京府藤村清次郎氏の二男として

同市内に呱呱の聲を揚げ、大正十二年その家督を嗣いだ。夙に慶應義塾大學に學び、優秀の成績を以て卒業後直ちに大倉組に入社した。大正八年滿洲及び支那各地を歴遊し、續いて同九年歐米各國を遍歴し經濟その他各方面に亘つて調査研究し、歸朝後東邦商會取締役に擧げられ更に坂本商會製作所監査役等として活躍した。昭和四年徳川頼貞侯爵家の參事となり、後同家關係の南葵産業會社常務取締役に選ばれ現にその任に在る。宗旨は眞言宗、趣味は野球、旅行等。

妻マツエ(明治二九年生、東京府川上太四郎長女)妹繁子(同二五年生、熊本縣坂本潮妻)妹房子(同二八年生、横濱市内田角藏妻)

戸坂 降吉氏

世田谷區弦卷町  
電話世田谷三一

富士瓦斯紡績(株)取締役

明治二〇年三月生、東京府

明治四三年早稻田大學商科卒業

氏は東京府戸坂熊吉氏の長男として呱呱の聲を揚げ、後その家督を嗣いだ。夙に早稻田大學商科に入り孜孜として學業に勵み、優秀の成績を以て卒業後直ちに實業界に入り、奮闘努力主義を以て着々その地歩を開拓した。後日本酒類釀造株式會社及び豊年醬油株式會社の取締役を

兼ねて醸造業界に活躍し、更に合同毛織株式會社常務取締役として毛織物業界に名聲を馳せ、或は九州製壘株式會社監査役をも兼ねて敏腕を揮ふこと多年、現時前掲の任に在つて實業界に名聲を博してゐる。

母キツヨ(慶應二年一月生、岩手縣佐々木雄治四女)妻アキ(明治三一年生、宮崎縣向井太郎妹)長女園子(大正八年生)二女淺子(同二〇年生)三女富士(同二二年生)

西山傳太郎氏

本所區小梅業平町五〇  
電話 墨田六四六

明治一九年一月生、東京府

氏は東京府西山清三郎氏の三男として都下に呱呱の聲を揚げた。幼少の頃より業務見習ひの爲め秋庭商店に入り、孜孜として實務の経験を積むと共に主家の發展に努力し、店主にその才腕を認められるに至つた。明治三十八年同店を退き、同四十年獨立して銅鐵商を創始するや、多年の経験を基礎とし堅實なる營業方針を執り、優良品廉價提供をモットーとし信用本位の取引に依つて着々その地歩を開拓し、顧客逐年増加し新販路次第に各方面に開かれ、一般の信用日に加はり、業績向上の一路を辿つて遂に今日の盛況



を呈するに至つた。資性温厚にして公事に貢献尠ならず、その炯眼敏才と相俟つて業界に信望を博してゐる。

妻房子、長男喜一郎、二男佐助、三男金三郎、長女錦子。

黒沼勇太郎氏

大森區新井宿五ノ五五

入新井第二小學校長

明治二十一年一月生、山形縣

明治四一年山形縣立師範學校卒業

氏は夙に教育界に志し山形師範卒業後同縣下の成生、千歳、中野各小學校訓導に歴任して角川小學校長となり、縣下教育界に貢献した。其の後大正四年高等師範學校附屬小學校訓導に聘せられ、更に大正十五年入新井第二小學校長に就任し以て現在に及んでゐる。多年小學校教育に従事し、且つ熱心に研究を重ねたる結果、兒童教育に關する造詣頗る深く、「劣等兒の原因と其教育」「算術學習精義」「最新綴方學習指導書」等の外教育に關する著書は十數種に達してゐる。氏は禪宗を信仰し、一般宗教に關する研究に興味を有し、又宗教關係の著書も尠くない。

妻たか(明治二十七年生、山形縣士族橋詰達雄姉、山形女子師範卒)嗣子俊男(大正

七年生、府立八中在學)四男和夫(昭和元年生)五男正夫(同三年生)六男紀夫(同五年生)長女美知子(大正九年生)二女芳子(同一四年生)

國井 秀作氏

瀧野川區西ヶ原九八三 電話王子七五三

瀧野川町助役

明治二六年五月生、新潟縣

大正五年日本大學高等工學校卒業

氏は新潟縣佐渡郡相川町の小川家に生れたが、後同縣新發田町の國井家に養子となり、其家督を相續した。夙に新發田中學校に學び、後佐渡礦山の鑛山學舎に轉じ、同校卒業後上京して岩倉鐵道學校本科に入り、卒業後更に日本大學高等工學校に學ぶと共に、大正四年以來東京市役所土木局下水課に勤務し、同校卒業後も引續き土木局に在つて活躍すること十餘年、昭和二年七月辭職した。之より先き大正十四年以來瀧野川町會議員として町政に參與すること二期に亘り、同町の發展に貢献したが、昭和六年一月推されて同町助役となり、現にその職に在つて専ら町政刷新に努力し、人格と手腕と相俟つて町内に信望を博してゐる。

藏重 貞次氏

赤坂區青山南町六ノ二三 電話青山(36)七、五九五

コークス販賣業

明治一一年九月生、福岡縣

當家は代々柳河藩に仕へたる名門にして、氏は先代藏重卯三郎氏の四男として福岡縣に呱呱の聲を揚げた。夙に上京して中央大學の前身たる東京法學院に學び、卒業後單身朝鮮に渡つて新聞經營に携はり、其の後博文館發行の諸誌に筆を執つて操觚界に名を擧げたが、後轉じて實業界に投じた。大正九年三菱鑛業株式會社と交渉の結果、同社のコークス一手販賣權を獲得し、獨立して斯業を開始し、爾來奮闘努力漸次販路を擴張して業績年と共に揮ひ、以て今日に及んで居る。氏は廣く財界の事情に曉通し、業界稀れに見る任侠の士にして、徒らに私利私慾に汲々たるの徒とは其の選を異にしてゐる。而も商機に敏達し信用本位を以て業に當るを以て、斯業界の異彩として好評を博し尙商勢日に活況を呈しつゝある。

山村 正雄氏

赤坂區新坂町二三三 電話青山(36)一、二二八

醫學博士、山村病院々長、日本醫師會理事、日本橋區醫師會々長

明治一〇年一二月生、東京府

明治三七年東京帝國大學醫科卒業

刀圭界に令名ある氏は、東京府士族山村

次郎作氏の四男に生れ、明治三十八年家督を相續した。夙に東京帝國大學に學び、卒業後明治四十年より岩佐病院に勤務して實地經驗を積み、大正三年同病院を辭して母校東京帝國大學の病理學教室に於て研究を重ね、大正六年現在の地に山村病院を創立して其の院長となり、爾來専ら治療に従事し以て今日に及んで居る。此の間大正十一年醫學博士の學位を授與され、又曩に醫術

務の修業を積んだが、更に銀行業務の視察研究の爲大正十三年米國に航し、各地を歴遊し、具さに斯業を調査し新知識の吸収に努めた。歸朝後芝區白金支店に轉じて支店次長となつたが、大正十四年小日向支店長に榮轉し、更に昭和三年四月本所支店長に轉じ、同五年四月深川支店長となり以て今日に及んでゐる。資性温厚にして人格の高潔を以て夙に社内外に信望を博し、前途の

を主眼として經營し來つた。されば氏の信望は益々厚く、その徳望は普く認められ、曩に推されて町會議員となつて以來重任すること實に十數年に及び、現に同町名譽職待遇者として彌々同町の隆盛進展に貢献しつゝある。宗旨は淨土宗、趣味は讀書である。

妻みつ(明治九年生、東京府人藤本常七二女)二男孝也(同三一年生、東京商大卒)



及んでゐる。多年小學校教育に從事し、且つ熱心に研究を重ねたる結果、児童教育に關する造詣頗る深く、「劣等児の原因と其教育」「算術學習精義」「最新綴方學習指導書」等の外教育に關する著書は十數種に達してゐる。氏は禪宗を信仰し、一般宗教に關する研究に興味を有し、又宗教關係の著書も尠くない。

妻たか(明治二七年生、山形縣士族橋詰達雄姉、山形女子師範卒)嗣子俊男(大正

の勤勞し、同村の實業に力をつくして活躍すること十ヶ年、昭和二年七月辭職した。之より先き大正十四年以來瀧野川町會議員として町政に參與すること二期に亘り、同町の發展に貢献したが、昭和六年一月推されて同町助役となり、現にその職に在つて専ら町政刷新に努力し、人格と手腕と相俟つて町内に信望を博してゐる。

藏重 貞次氏 赤坂區青山南町六ノ二三  
電話青山(36)七、五九五

業に當るを以て、斯業界の異彩として好評を博し尙尙努力に活況を呈しつゝある。

山村 正雄氏 赤坂區新坂町三三  
電話青山(36)一、二二八  
醫學博士、山村病院々長、日本醫師會理事、日本橋區醫師會々長

明治一〇年一二月生、東京府  
明治三七年東京帝國大學醫學科卒業  
刀圭界に令名ある氏は、東京府士族山村

次郎作氏の四男に生れ、明治三十八年家督を相續した。夙に東京帝國大學に學び、卒業後明治四十年より岩佐病院に勤務して實地經驗を積み、大正三年同病院を辭して母校東京帝國大學の病理學教室に於て研究を重ね、大正六年現在の地に山村病院を創立して其の院長となり、爾來専ら治療に従事して今日に及んで居る。此の間大正十一年醫學博士の學位を授與され、又曩に醫術開業試験委員に擧げられて益々名聲を博し、現に前掲の名譽ある地位に在つて活躍し普く斯界に信望を博してゐる。

母しゆん(天保一一年生、福井縣人桑谷惣兵衛二女)妻いく(明治一十九年生、山梨縣人三枝隆造二女)長男常正(明治三七年生)長女妙子(明治四〇年生)二女悦子(明治四一年生)三女禮子(大正二年生)

山岸嘉二郎氏 牛込區市ヶ谷仲之町四  
電話牛込(34)六、三二六  
法學士、安田貯蓄銀行深川支店長

明治二九年二月生、德島縣  
大正一一年東京帝國大學經濟學部卒業  
氏は德島縣人宮内虎太郎氏の二男に生れ、山岸嘉藤太氏の養子となり、後分家した。夙に上京して帝大に學び、卒業と同時に安田貯蓄銀行に入り、初め本店に於て實

務の修業を積んだが、更に銀行業務の視察研究の爲大正十三年米國に航し、各地を歴遊し、具さに斯業を調査し新知識の吸収に努めた。歸朝後芝區白金支店に轉じて支店次長となつたが、大正十四年小日向支店長に榮轉し、更に昭和三年四月本所支店長に轉じ、同五年四月深川支店長となり以て今日に及んでゐる。資性温厚にして人格の高潔を以て夙に社内外に信望を博し、前途の飛躍を期待されてゐる。宗旨は眞言宗、趣味は乗馬、柔道等である。

妻キン子(明治三八年生、養父喜藤太長女、府立第三高女卒)長男多喜雄(大正一五年生)二男武彦(昭和六年生)長女美喜子(大正一四年生)

山崎 忠藏氏 足立區千住二ノ二七  
電話 足立二〇六一

明治元年九月生、東京府  
千住町屈指の名望家たる氏は、先代山崎梧大氏の長男として現住地に生れた。當家は同地方有數の大地主として著名の舊家に於て、先代梧大氏は千住町長として同地の發展に功績顯著なるものがあつたが、氏も亦夙に町内の發展に意を注ぎ、又家業たる質商も下層階級者に金融の便を與へること

を主眼として經營し來つた。されば氏の信望は益々厚く、その德望は普く認められ、曩に推されて町會議員となつて以來重任すること實に十數年に及び、現に同町名譽職待遇者として彌々同町の隆盛進展に貢献しつゝある。宗旨は淨土宗、趣味は讀書である。

妻みつ(明治九年生、東京府人藤本常七二女)二男孝也(同三一年生、東京商大卒)同妻くに子(同三七年生、埼玉縣人柏平兵衛二女、浦和高女卒)三男悌也(同三五年生)五男匡(同四一年生)六男達(明治四五年生)七男充(大正一二年生)八男大(大正五年生)長女りつ(明治三五年生)二女正子(大正八年生)孫健吾(昭和四年生、二男孝也長男)

山口 金徳氏 日本橋區洲河岸三二  
電話浪花(67)七、〇九六  
從七位、勳六等、陸軍二等軍醫、ドクトル・メヂチーネ

明治一八年二月生、秋田縣  
明治三八年日本醫學學校卒業  
花柳病科の泰斗として名聲高き氏は、秋田縣人佐藤其名氏の二男にして、同縣由利郡本庄町に生れ、長じて同縣人山口嘉左衛門氏の養子となり家督を相續した。日本醫



學校卒業後直ちに陸軍を醫となつたが、大正元年退いて深川區に開業し、同五年現地に移つた。大正七年西比利亞に出征し翌年凱旋して引續き診療に従事したが大正十二年の大震災の爲め一時大阪に移轉開業し、大正十四年研究のため歐米漫遊の途に上り獨逸の柏林大學、瑞西のベルン大學、米國の市俄古大學等に學び、ドクトル・メヂチーネの學位を授けられた。同十五年歸朝し現在の地に開業して内科及外科特に花柳病科の診療に従事し以て今日に及んでゐるが、多年の經驗と熱心なる研究と相俟つて好評を博し、患者の信頼を得て近年益々盛況を呈しつゝある。曩に西比利亞出征中病傷兵及土民の疾病注射藥並に注射法を發見したるは偉大なる功績にして、該注射は特に熱病に對して百發百中の卓効を有し、遠く上海方面より來訪して治療を乞ふ者さへ尠なからず、廣く江湖に名聲を博してゐる。宗旨は禪宗、趣味は煙草、酒、圍碁、舞踊等である。

松平 貞雄氏 豊島區雜司谷一ノ二二  
電話牛込(34)二〇三

明治四二年六月生、東京府  
昭和七年早稻田大學政治經濟學部卒業  
華胄界の新人として名聲ある氏は、伯爵

刻苦奮闘し一意業務の擴張に努力したる効果空しからず、逐年發展して斯業界に漸次認められるに至り、現に同舎を主宰する外總武牛乳會社の重役として活躍しつゝある。氏は性來頗る公共心に富み、興真社創立後山伏町の發展に盡瘁し、大正十四年同町々會長に推されて益々顯著なる貢獻をなし、昭和五年牛込區會議員に選ばれて以來

松平頼壽氏の男として呱呱の聲を揚げ、後分れて一家を樹てた。父頼壽氏は正三位勳三等の學位に在り、貴族院議員として夙に政界に令名を謳はれ、早稻田大學に關係して同大學の發展に貢獻し、又巨萬の富を擁し常に社會公共的事業に盡瘁する等、凡ゆる方面に信望を博してゐる。その血を享けたる氏も亦幼少の頃より俊敏の譽れ高く、進取の氣象に富み、進んで自由の學園早稻田大學に學び、經濟を専攻して優秀の成績を以て卒業した。爾來家庭に在つて修養に勵んでゐるが、その潑刺たる意氣と平民的なる性格とは相俟つて夙に聲望高く、洋々たる前途の飛躍を期待されてゐる。

父頼壽(明治七年生)母昭子(同一六年生、  
徳川閉順叔母)

古川 誠助氏 麻布區新綱町一ノ五五  
電話赤坂(4)七七八

醫師、麻布區醫師會副會長  
明治六年一〇月生、鹿兒島縣  
明治二八年東京慈惠會醫科大學卒業

氏は鹿兒島縣人古川神兵衛氏の六男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、後分れて一家を創立した。慈惠醫大卒業後東京病院に勤務したが、後辭して明治三十四年現在の地に獨立開業し、爾來懇切をモットーとして

患者の診療に當ると共に、益々研究を重ね奮闘努力すること多年、その聲望は年と共に普く認められ、同業者間にも信望を得て麻布區醫師會の副會長に選ばれるに至つた。資性温厚にして頗る義俠心に富み、利害に超然たる態度を以て診療に當り、又常に公共奉仕に意を注ぎ、好評噴々たるものがある。宗旨は曹洞宗、趣味は植木、盆栽等。

妻璞子(明治一六年生、淺野勇長女、頌榮高女卒)長男明(同三八年生、慶大醫科卒、慶應病院勤務)三男誠(同四四年生)四男正、長女春子(明治四〇年生、双葉高女卒、東京府人石井信太郎に嫁す)二女節子(同四三年生、双葉高女卒)三女菊子(大正六年生、同上在學)四女花子(同八年生、東京女學館在學)

古谷 吉造氏 牛込區市ヶ谷山伏町五  
電話牛込(43)四三五八

興真舎々主、總武牛乳(株)取締役、東京牛乳商同業組合副組長、牛込區會議員、山伏町々會長

明治二二年二月生、千葉縣  
氏は横芝中學校卒業後直ちに實業界に入り、興真舎本店に勤務すること約十年にして大正四年獨立し、興真舎を創めた。爾來

氏は大分縣人藤田芳太郎氏の三男に生れ大正十五年家督を相續した。幼時より頭腦の明晰を以て知られ、長じて關西大學に學んで法律の研究を積み同校卒業後直ちに辯理士試験に合格した。辯理士の資格を得るやその翌年上京して開業したが、其の後も更に研究を怠らず、大正六年辯護士試験に合格した。現時東京特許代理局に勤務して

の聲を揚げた。夙に實業界に志し、東京電氣株式會社に多年勤續して電球製造の技に長じ、大正六年獨立して小島電球製作所を創立し、以來その所主として經營の衝に當り、奮闘努力以て今日に及んで居る。同所製造に係るタカト電球は、氏が多年の蘊蓄を基礎とし加ふるに最新の學理を應用したるものにして、その品質の優良なることは



に對して百發百中の卓効を有し、遠く上海方面より來訪して治療を乞ふ者さへ尠なからず、廣く江湖に名聲を博してゐる。宗旨は禪宗、趣味は煙草、酒、圍碁、舞踊等である。

松平 貞雄氏

豊島區雜司谷一ノ二二  
電話牛込(34)二〇三

明治四二年六月生、東京府

昭和七年早稻田大學政治經濟學部卒業

華胄界の新人として名聲ある氏は、伯爵

古川 誠助氏

麻布區新網町一ノ五五  
電話赤坂(4)七七八

醫師、麻布區醫師會副會長

明治六年一〇月生、鹿兒島縣

明治二八年東京慈惠會醫科大學卒業

氏は鹿兒島縣人古川神兵衛氏の六男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、後分れて一家を創立した。慈惠醫大卒業後東京病院に勤務したが、後辭して明治三十四年現在の地に獨立開業し、爾來懇切をモットーとして

八年生、東京女學館在學

古谷 吉造氏

牛込區市ヶ谷山伏町五  
電話牛込(43)四三二五八

興真舎々主、總武牛乳(株)取締役、東京牛乳商同業組合副組長、牛込區會議員、山伏町々會長

明治二一年二月生、千葉縣

氏は横芝中學校卒業後直ちに實業界に入り、興真舎本店に勤務すること約十年にして大正四年獨立し、興真舎を創めた。爾來

刻苦奮闘し一意業務の擴張に努力したる効果空しからず、逐年發展して斯業界に漸次認められるに至り、現に同舍を主宰する外

總武牛乳會社の重役として活躍しつゝある。氏は性來頗る公共心に富み、興真社創立後山伏町の發展に盡瘁し、大正十四年同町々會長に推されて益々顯著なる貢獻をなし、昭和五年牛込區會議員に選ばれて以來自治の刷新向上に努力しつゝある。一方同業界の發展に對しても亦常に意を注ぎ、昭和三年以來東京牛乳同業組合の副組長として組合員の親睦と業界の圓滿なる進展に功績尠なからず、或は昭和五年渡米して斯業界の實情を視察研究し、歸來本邦斯業界の刷新に盡す等、その熱心努力は普く斯界に賞揚されつゝある。信教は基督教、趣味は圍碁、狩獵等。

妻よし(明治三三年生、北海道人依田勉  
三次女)長女初子(大正三年生)二女梅子  
(同五年生)三女竹子、四女永子(同一一年生)五女愛子(同一五年生)

藤田 實雄氏

鎌倉町雪ノ下四五〇  
電話鎌倉七四五

辯護士、辯理士、東京特許代理局主席

明治一八年三月生、大分縣

明治四一年關西大學法科卒業

氏は大分縣人藤田芳太郎氏の三男に生れ大正十五年家督を相續した。幼時より頭腦の明晰を以て知られ、長じて關西大學に學んで法律の研究を積み同校卒業後直ちに辯理士試験に合格した。辯理士の資格を得るやその翌年上京して開業したが、其の後も更に研究を怠らず、大正六年辯護士試験に合格した。現時東京特許代理局に勤務して其の主席に在るが、その敏腕達識は圓滿なる人格と相俟つて斯界に異彩を放ち、斯界の權威者として普く信望を博してゐる。佛敎の信仰厚く、趣味として讀書を最も好み、餘暇あれば凡ゆる書籍を涉獵して修養に努めつゝある。

妻静葉(明治二八年生、東京府人、女子師範卒)長男俊雄(大正一一年生)長女良子(同六年生)二女久子(同八年生)四女光子(同一四年生)五女昭子(昭和二年生)

小島 文藏氏

麻布區六本木町六  
電話赤坂(4)一八〇四

小島電球製作所主、東京電球製造業組合幹事、六本木町會幹事、東京市聯合青年團麻布分團顧問兼評議員

明治二五年九月生、神奈川縣

電球製造業界に令名ある氏は、神奈川縣人小島喜代藏氏の四男として同縣下に呱呱

の聲を揚げた。夙に實業界に志し、東京電氣株式會社に多年勤続して電球製造の技に長じ、大正六年獨立して小島電球製作所を創立し、以來その所主として經營の衝に當り、奮闘努力以て今日に及んで居る。同所製造に係るタカ印電球は、氏が多年の蘊蓄を基礎とし加ふるに最新の學理を應用したるものにして、その品質の優良なることは夙に普く認められ、昭和四年優良國産品監査會に於て褒賞を受領し、同五年國産獎勵協會より彰功狀を授與された。而も氏は絶えず品質の向上に意を注ぎ販路の擴張に努め、今や全国各地に好評を博して業績隆々たるものがある。氏は公共奉仕の念に富み、東都電球製造業組合幹事として業界の發展に貢献し、或は町會幹事として町内の親睦に努め、或は市青年團に關係して創立當時より活躍し大正十二年大震災當時、及び市電ストライキの際等功績顯著にして褒狀を授與されたること數回に及ぶ。宗旨は禪宗、趣味は茶道、花卉等である。

妻かね(明治三三年生)長男富重(大正一〇年生)二男高文(同一四年生)長女ふみ子(同四年生)二女ひさる(昭和二年生)

小寺 西二氏

目黒區上目黒一ノ二六  
電話青山(36)二四七九



慶應義塾普通部教諭

明治三〇年一月生、岐阜縣  
大正一一年慶應大學理財科卒業

氏は岐阜縣人小寺成藏氏の二男として同縣大垣市に呱呱の聲を揚げた。神戸第一中學校を経て慶應義塾に學び、卒業後渡米してプリントン大學に入り、經濟學を専攻し、更に米國各地及歐州各國の經濟を視察研究し、大正十四年歸朝した。昭和二年聘せられて母校普通部に教諭となり、爾來新知識を披瀝して生徒の薰育に努力し、以て今日に及んで居る。氏は資性進取の氣象に富み、研究心燃ゆるが如く、教鞭を執る傍ら専門とする經濟學に關する研究を重ねてゐるが、夙に斯學の造詣深く、且つ東西の經濟實情に曉通し、加ふるに教育に對しては懇切をモットーとして國家有爲の材を養成することに努め、好評を博してゐる。宗旨は眞宗。趣味はゴルフ、繪畫、登山等である。妻さだ（明治二八年生、神奈川縣人範田龍太郎長女、神戸女學院卒）長男重隆（昭和元年生）二男實一（同一年生）

小松 留吉氏 杉並區高圓寺四ノ六八  
電話 中野三三四八  
富士製紙（株）販賣部長  
明治一九年二月生、群馬縣

本邦製紙界の雄たる富士製紙に在つて敏腕の聞えある氏は、群馬縣人松山卯三郎氏の四男として同縣下に生れたが、後東京府人小松はるの養子となり、小松姓を繼承した。夙に實業界に志し、明治四十二年二十三歳の時富士製紙に入社して以來既に二十餘年間、他を顧みずして専ら同社の爲め奮闘を續け、今日に及んでゐる。此の間氏の精勵努力は漸次報ひられて地位累進し、上海支店長、本社販賣部副部长等の要職に擧げられ、更に販賣部長に榮轉して現にその職に在り敏腕を揮つてゐる。同社が創業以來逐年發展して今日の隆盛を見るに至つたのは、歴代重役及社員の活躍に俟つことは論ずるまでもないが、此の中に在つて氏の功績も亦没す可らざるものである。穩健着實主義を以て夙に社内に普く認められ、又一般業界に信望を博してゐる。

妻ふく（明治二二年生、静岡縣人一本長兵衛二女、静岡女子師範卒）長男博（大正二年生、成城中學在學）二男正（同四年生、同上）三男茂（同一年生）四男進（同二年生）長女ふみ子（同六年生、青山女學院在學）

小池 惠吉氏 牛込區山伏町一四  
電話 牛込(34)六二五

氏は山口縣戸倉五郎氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、後その家督を嗣いだ。夙に上京して中央大學法科に學び優秀の成績を以て卒業後直ちに帝國海上火災保險會社に入社し、爾來約三十年の

正七位

明治一三年三月生

百萬の富を擁し名望高き氏は、往年貴族院議員として活躍したる正五位、勳四等小池靖一氏の長男に生れた。夙に第四高等學校に學び、卒業後明治四十年米國に遊學し、新知識の吸収に勵み明治四十五年歸朝した。歸朝後凸版印刷に勤め敏腕を揮つて同社の發展に貢獻する所尠ならず、印刷業界に聲名を馳せたが、大正七年之を辭し、早川電力株式會社に入社した。大正十四年同社が東京電力株式會社に合併されると同時に退社し、その後富士山麓土地株式會社、富士電氣鐵道株式會社等に關係してその興隆に努力し、又該地方の開発に貢獻した。資性頗る温厚にして淨土宗を信仰し、從來社會公共的事業に盡瘁して頗る徳望がある。

妻ふく（明治一八年生、茨城縣人新井善二郎長女、日本女子大學卒）嗣子例（明治三三年生、早稻田大學卒、凸版印刷會社勤務）

小林 和助氏 淺草區北仲町八  
電話 淺草(84)二五八二  
舟和屋本店々主  
明治一六年一〇月生、東京市

淺草名物の一として「舟和」の名聲は夙

に普く都人士の間に知られてゐる。その創始者にして又現店主たる氏は、淺草區駒形に生れ、若冠の頃より實業界に入り、始め薪炭商を經營したが後知友石川定吉氏に就いて菓子販賣業に轉じ、明治三十七年頃現在地に「蜜豆ホール」を開業した。由來蜜豆は石川氏がその郷里信州の一地方に於て、同地方の名産杏子に心天を配したるも

戸倉惣太郎氏

豐島區西巢鴨二ノ三三  
電話 大塚五三二一

帝國海上火災保險（株）支配人  
明治一五年生、山口縣  
明治三九年中央大學法科卒業

氏は山口縣戸倉五郎氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、後その家督を嗣いだ。夙に上京して中央大學法科に學び優秀の成績を以て卒業後直ちに帝國海上火災保險會社に入社し、爾來約三十年の

平塚 廣義氏

臺北市文武町一丁目、  
官舎内 電話 臺北七  
（東京宅）目黒區中目黒  
三ノ九六 電話 高輪六二六

土木建築に關する新知識を吸収し、歸來復興局都市計畫第一技術課長として敏腕を揮ひ、帝都復興事業に貢獻する所甚大であつた。後荒玉水道町村組合技師長に就任し以て今日に及んでゐる。



切をモットーとして國家有爲の材を養成することに努め、好評を博してゐる。宗旨は眞宗。趣味はゴルフ、繪畫、登山等である。

妻さだ（明治二八年生、神奈川縣人範田龍太郎長女、神戸女學院卒）長男重隆（昭和元年生）二男實（同一年生）

小松 留吉氏 杉並區高圓寺四ノ六八  
電話 中野三三四八

富士製紙（株）販賣部長  
明治一九年二月生、群馬縣

實主義を以て夙に社内に普く認められ、又一般業界に信望を博してゐる。

妻ふく（明治二二年生、靜岡縣人一本長兵衛二女、靜岡女子師範卒）長男博（大正二年生、成城中學在學）二男正（同四年生、同上）三男茂（同一〇年生）四男進（同一二年生）長女ふみ子（同六年生、青山女學院在學）

小池 惠吉氏 牛込區山伏町一四  
電話 牛込（34）六二五

社會公共的事業に盡瘁して頗る徳望がある。

妻ふく（明治一八年生、茨城縣人新井善二郎長女、日本女子大學卒）嗣子冽（明治三三年生、早稻田大學卒、凸版印刷會社勤務）

小林 和助氏 淺草區北仲町八  
電話 淺草（84）二五八二

舟和屋本店々主  
明治一六年一〇月生、東京市

淺草名物の一として「舟和」の名聲は夙に普く都人士の間に知られてゐる。その創始者にして又現店主たる氏は、淺草區駒形に生れ、若冠の頃より實業界に入り、始め薪炭商を経営したが後知友石川定吉氏に就いて菓子販賣業に轉じ、明治三十七年頃現在地に「蜜豆ホール」を開業した。由來蜜豆は石川氏がその郷里信州の一地方に於て、同地方の名産杏子に心天を配したるものに蜜を加へて珍客に饗する習慣にヒントを得て、之に豌豆を配し「蜜豆」として帝都に賣出したのが濫觴である。然れども當時は未だ一般的に普及せず、粗菓として下層階級の一部に嗜好されるに過ぎなかつたが、氏は蜜豆ホールの開設以來、先づ在來の接客設備を一新して嶄新清潔なる容器を選び、親切丁寧をモットーとする獨特のサービスに依ると共に、一方材料を精選して品質の向上に努め、一般大衆の嗜好に適應しめることを眼目として普及發達を圖つた。此の結果、同店の名聲は年と共に高く、又蜜豆が各階級に廣く歡迎されるに至つた。氏の功績は實に斯業界に没す可らざる赫々たるものと稱すべきである。

戸倉惣太郎氏 豐島區西巢鴨三ノ三三  
電話 大塚五三二一

帝國海上火災保險（株）支配人  
明治一五年生、山口縣

明治三九年中央大學法科卒業  
氏は山口縣戸倉五郎氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げ、後その家督を嗣いだ。夙に上京して中央大學法科に學び優秀の成績を以て卒業後直ちに帝國海上火災保險會社に入社し、爾來約三十年の長年月を同社に勤務以て今日に及んでゐる。此の間一意その職務に精勵し、同社の發展に努力し、その着實勤勉なる性格と才腕相俟つて夙に社内信望を博し、海上部長に擧げられ、更に支配人に拔擢され、現時その要職に在つて益々同社の發展に健闘しつゝある。

母ツル、妻富子、長男嘉明、三男實

西大條 覺氏 淀橋區西大久保  
電話 四谷四八一

正五位、工學士、荒玉水道町村組合技師長  
明治一三年二月生、宮城縣

明治三八年東京帝大工科土木科卒業  
當家は代々仙臺藩に仕へたる名門である。氏は夙に上京して東京帝國大學に學び、卒業後東京市技師、内務技師兼宮内技師、鐵道技師等として實地經驗を積むこと多年、又此の間歐米諸國を巡遊して

土木建築に關する新知識を吸收し、歸來復興局都市計畫第一技術課長として敏腕を揮ひ、帝都復興事業に貢獻する所甚大であつた。後荒玉水道町村組合技師長に就任し以て今日に及んでゐる。

平塚 廣義氏 臺北市文武町一丁目、  
官舎内 電話 臺北七  
（東京宅）目黒區中目黒  
三ノ九四六 電話 高輪六二六

從三位、勳二等、法學士、臺灣總督府總務長官  
明治八年九月生、山形縣

明治三五年東京帝大法科政治科卒業  
氏は山形縣士族平塚榮次郎氏の長男、農學博士平塚英吉氏の實兄にして、同縣下に生れ、明治三十二年家督を嗣いだ。大學卒業後文官高等試験に合格して直ちに官界に入り、内務屬、福井縣參事官、宮城、長崎、三重、新潟各縣事務官等を経て神奈川縣警察部長に進み、後愛媛、新潟、兵庫各縣内務部長を経て栃木縣知事となり、更に長崎、兵庫兩縣知事に歴任後東京府知事として敏腕を揮ひ、昭和四年七月之を辭したが、同六年十二月臺灣總督府總務部長を拜命し、最も困難と稱された臺灣の行政を掌り、着々として成績を擧げつゝある。

妻シゲ（明治一八年生、東京府神谷茂



太郎(二女)養子廣雄(同四〇年生、山口縣森久右衛門七男)同妻浪子(同四四年生、東京府内藤鐵五郎三女)

秋山武士丸氏

本郷區元町二ノ二四  
電小石川(85)六、四四九

甲陽商會(株)取締役、光正不動産(株)常務  
明治八年五月生、茨城縣

帝都金融界に活躍して名聲ある氏は、茨城縣人秋山武濟氏の長男として同縣笠間町に生れ、大正八年家督を相續した夙に平塚漢學塾に學び、明治三十九年先代の經營せる甲陽商會に入り、敏腕を揮ふこと多年、同商會は逐年發展し大正九年株式組織に更められると同時に其の取締役に擧げられた。爾來益々同商會の爲め奮闘努力すると共に、その餘勢を驅つて帝都財界に驥足を伸べ、大正九年駒澤銀行常務取締役に兼ね、更に昭和三年十二月光正不動産株式會社常務取締役に擧げられた。斯くて今や金融界に於て確乎たる信用を有し、その敏腕は多年に亘る深き經驗と共に普く斯界に認められ、聲望隆々たるものがある。信教は神道、趣味は寫眞、旅行等である。

妻きよ(明治八年生、黒澤岩尾二女)長男  
武彦(明治三五年生、京華商業卒)長女多  
加子(同三九年生、佐藤高女卒)二男勝次

明治二年一二月生、東京府

當家は元文年間より代々菓子商を營み、徳川幕府に饅頭を上納したる由緒深き老舗として夙に普く知られてゐる。氏は東京府人小西金太郎氏の弟にして、明治二十五年當家の養子となり、大正二年家督を相續すると同時に前名米次郎を改め、當家累代の名たる陸之助を襲名し八代目當主となつ

(同四二年生、明治大學在學)二女卯女子  
(大正四年生、日本高女在學)母まつ(安政元年生)

宮城 敬氏

神奈川縣逗子町一、一一八

農學士、日魯漁業(株)營業部長代理、鮭鱒罐詰協調會理事

明治一九年三月生、北海道  
明治四二年、北海道帝國大學農科卒業

罐詰業界に令名ある氏は、北海道人宮城正雄氏の五男として函館市内に呱呱の聲を揚げ、後分れて一家を樹てた。北海道帝國大學卒業後直ちに北海道廳に勤務したが、後之を辭しセールフレザー商會に入り、更に樺太合同産業會社支配人、南樺太漁業會社樺太部主任等に歴任して漸次漁業界にその名を認められるに至つた。その後大正六年日魯漁業株式會社に入社し、多年の經驗と豊富なる學識を傾注して同社の發展に努力し、現時その營業課長代理たる外、前記の要職を兼ねて敏腕を揮ひつゝある。宗旨は禪宗、趣味は一般スポーツ等である。  
妻ミサオ(明治二五年生、遊佐肅妹)長男  
正敏(大正九年生)二男敬二(同一〇年生)  
長女敏子(同四年生)二女重子

大正八年東京帝國大學法科卒業

氏は富山縣人水上喜平氏の六男として富山市に生れた。長じて東京帝國大學に學び、政治を専攻して優秀の成績を以て卒業後更に研究を續け、大正九年文官高等試験に合格した。直ちに實業界雄飛を志して三井物産會社に入社したが、入社後間もなく臺灣電力株式會社に轉じ、勵精恪勤次第に認め

峰島 光信氏

澁谷區榮通一ノ二五  
電話青山(36)六、六五二

尾張屋債券商店(金融並債券賣買)店主、  
東京商品切手賣買營業組合員  
明治一七年一二月生、東京市

當家は富豪峰島家の嫡流にして、先代茂吉氏は先代峰島茂兵衛の長男であつたが、明治初年分家して質商を經營し、明治四十三年廢業した。光信氏は通稱光延と呼び、先代茂吉氏の二男として深川區森下町三三三に生れ、父の業を援けて活躍し、質商廢業後昭和五年一月金融業を開始した。爾來着々として業績を擧げ、一般金融及債券賣買業界に確乎たる地歩を占め、豊富たる資産と堅實なる營業方針と相俟つて遂に現在の隆況を呈するに至つた。氏は資性温厚にして博愛觀念強く、深く蓮宗を信仰して信念頗る鞏固なる人格者として普く斯業界に名聲を博してゐる。趣味は高尚にして、特に文學、和歌等に最も興味を有してゐる。  
妻てう(四六歳、東京府人小川よし孫)長男庸(明治四三年生、慶應義塾大學醫科在學)長女妙子(大正二年生、洗足高女卒)

峰村陸之助氏

本郷區駒込富士前町四三  
電話小石川(85)四四三

松岡本舗主

物産會社に入社し、本社調査課を始め天津、香港各支店の營業部等に歴勤し、又此の間南洋歐米等に出張して敏腕を揮ひ、漸次認められて重用されるに至つた。其の後同社を辭して太平洋海上火災保險會社に轉じ、現に同社の樞機に在つて専らその發展に努力しつゝある。氏は頗る圓滿なる人格者にして、而も敏腕博識の譽れ高く、利己的觀



共、その餘業を嗣いで帝者財界に馳足を伸べ、大正九年駒澤銀行常務取締役を兼ね、更に昭和三年十二月光正不動産株式會社常務取締役の擧げられた。斯くて今や金融界に於て確乎たる信用を有し、その敏腕は多年に亘る深き經驗と共に普く斯界に認められ、聲望隆々たるものがある。信教は神道、趣味は寫眞、旅行等である。

妻きよ(明治八年生、黒澤岩尾二女)長男  
武彦(明治三五年生、京華商業卒)長女多  
加子(同三九年生、佐藤高女卒)二男勝次

會社村太郎主任等に歴任して津浦漁業界にその名を認められるに至つた。その後大正六年日魯漁業株式會社に入社し、多年の經驗と豊富なる學識を傾注して同社の發展に努力し、現時その營業課長代理たる外、前記の要職を兼ねて敏腕を揮ひつゝある。宗旨は禪宗、趣味は一般スポーツ等である。  
妻ミサオ(明治二五年生、遊佐肅妹)長男  
正敏(大正九年生)二男敬二(同一〇年生)  
長女敏子(同四年生)二女重子

て博愛觀念強く、深く蓮宗を信仰して信念頗る鞏固なる人格者として普く斯業界に名聲を博してゐる。趣味は高尚にして、特に文學、和歌等に最も興味を有してゐる。  
妻てう(四六歳、東京府人小川よし孫)長男庸(明治四三年生、慶應義塾大學醫科在學)長女妙子(大正二年生、洗足高女卒)  
峰村陸之助氏 本郷區駒込富士前町三三  
電話小石川(85)四四三三  
松岡本舖主

明治二年一二月生、東京府

當家は元文年間より代々菓子商を營み、徳川幕府に饅頭を上納したる由緒深き老舗として夙に普く知られてゐる。氏は東京府人小西金太郎氏の弟にして、明治二十五年當家の養子となり、大正二年家督を相續すると同時に前名米次郎を改め、當家累代の名たる陸之助を襲名し八代目當主となつた。祖業繼承以來當家傳統の獨特の製法を會得して光輝ある歴史の發揚に努めると共に、必ずしも舊套を墨守せず、時勢の趨向に應じ嗜好の變化に鑑みて絶えず製品の改良に意を注ぎたる結果、店舗の名聲は益々高く、製品は各方面に好評を以て迎へられ、賣行き日に激増して業續頗る向上し、遂に現今の隆況を呈するに至つた。氏は又公共奉仕の念に強く、斯業界の發展に貢献し同業者間に絶大の信用を博してゐる。

妻きく(明治七年生、先代陸之助長女)長男陸(明治三二年生)同妻マサ(明治三三年生、東京府人原東吉長女)長女たか(明治三九年生)

水上清次郎氏

四谷區舟町三八  
電話四谷(35)三四九

法學士、臺灣電力(株)東京出張所長

明治二十七年七月生、富山縣

大正八年東京帝國大學法科卒業

氏は富山縣人水上喜平氏の六男として富山市に生れた。長じて東京帝國大學に學び、政治を専攻して優秀の成績を以て卒業後更に研究を續け、大正九年文官高等試験に合格した、直ちに實業界雄飛を志して三井物産會社に入社したが、入社後間もなく臺灣電力株式會社に轉じ、勵精恪勤次第に認められて累進し本社營業部長となり、更に東京出張所長に擧げられ以て現在に及んで居る。此の間大正十二年には電氣事業視察のため歐米に出張し、先進諸國の實情を具さに調査研究し、歸朝後新知識を傾注して同社の發展に資しつゝある。氏は資性頗る温厚篤實にして、夙に業界稀に見る人格者として知られ、その敏腕と相俟て名望隆々たるものがある。

三上 貞雅氏

淀橋區下落合三ノ六三  
電話大塚(86)三、六二七

太平洋海上火災保險(株)事務

明治一七年一〇月生、京都府

明治三五年東京高等商業學校卒業

氏は京都府人三上莞爾氏の長男として同府興謝郡岩瀧村に呱呱の聲を揚げ、明治四十二年家督を相續した。之より先夙に上京して東京高等商業學校に學び、卒業後三井

物産會社に入社し、本社調査課を始め天津、香港各支店の營業部等に歴勤し、又此の間南洋歐米等に出張して敏腕を揮ひ、漸次認められて重用されるに至つた。其の後同社を辭して太平洋海上火災保險會社に轉じ、現に同社の樞機に在つて専らその發展に努力しつゝある。氏は頗る圓滿なる人格者にして、而も敏腕博識の譽れ高く、利己的觀念に乏しく、同社の盛衰をその双肩に擔つて活躍し、社内には勿論、我が保險界に普く信望を博し令名を馳せてゐる。信仰は淨土宗、趣味として圍碁を無上の怡樂としてゐる。

妻歌枝(小室房造二女、明治二四年生、共立女子職業卒)長男毅(大正四年生、開成中學校在學)

三富 道臣氏

牛込區津久戸町三  
電話牛込(34)一八四五

正七位、三功社々主

安政四年八月生、長崎縣

金融界に敏腕を揮ひつゝある氏は、長崎縣士族三富安氏の二男として同縣壹岐郡渡良村に生れ、後分れて一家を創めた。明治九年上京して操觚界に投じ、東京輿論新誌を發行し、後鎮西日報を創刊し、更に明治日報、内外新聞等に記者として活躍するこ



と多年、又此の間明治十四年長崎縣會議員に選ばれ、同二十年長崎縣石田郡長となり同縣下政界の刷新向上に敏腕を揮ひ、貢獻甚大なるものがあつた。其の後操觚界及政界を去つて明治二十九年頃より實業界に投じ、帝都に金融業三功社を起し、自らその社主として經營の衝に當り、爾來業務の發展に努力奮闘以て今日に及んで居る。氏は性來頗る機敏にして又獨創の才に富み、計數に長じ、加ふるに多年の經驗に依つて業界の大勢に曉通するを以て、業績年を逐ふて向上し、今や普く斯界に信望を博してゐる。信教は神道、趣味は書畫骨董等である。

長男武一(明治二十二年生)、同妻菊枝(同二十九年生)

三谷 隆信氏 麴町區外務省構内官舎 電話四谷(35)八五〇

從五位、勳五等、法學士、外務書記官人事課長

明治一五年六月生、神奈川縣 大正六年東京帝國大學法科卒業

外交界に活躍しつゝある氏は、神奈川縣人三谷宗兵衛氏の二男として同縣下に呱呱の聲を揚げた。長じて東京帝國大學に學び獨逸法律を專攻し、卒業と同時に文官高等試験に合格して直ちに官界に投じ、内務屬、

廣島縣沼隈郡長等を勤め、後外務省に轉じた。外務省に於ては事務官として敏腕を揮ひ、國際聯盟帝國委員隨員として派遣されたる際には克く委員を翼けて活躍し、その明晰たる頭腦と機敏の才を賞揚された。その後大使館書記官、佛國大使館附外務書記官等に歴勤して海外に名を博し、本省に還つて條約局第三課長に擧げられ、更に昭和五年現職に任ぜられた。資性温厚篤實にして而も外交的手腕の冴えは夙に内外に普く認められ、前途の大飛躍を期待されてゐる

妻李惠子(明治三四年生、長尾半平氏長女、聖心女子學院卒)長男信(大正一四年生)長女邦子(昭和二年生)

澁澤 昇三氏 日本橋區藥研堀町一 電話浪花(67)一九五六 辯護士、公證人

明治一〇年二月生、群馬縣 明治三三年明治大學法科卒業

往年在野法曹界に敏腕を揮ひ、現時公證人として信望ある氏は、群馬縣に生れ明治大學を卒業すると同時に辯護士試験を受け、優秀の成績を以て合格し、直ちに岡村輝彦法律事務所勤務して實地經驗を積みたる後、同四十二年獨立して辯護士を開業した。性來頭腦明晰にして又辯論の雄たる

氏は、爾來大小幾多の難事件を取扱つて斯界に名聲を博したが、後之を廢して大正八年公證人となり、以て現今に及んで居る。資性温厚にして利慾に淡く、上州人一流の俠氣に富み、斯業に好評を博してゐる。宗旨は天臺宗、趣味は文學、書道等である。妻はる子(明治二十四年生、茨城縣人、相模中央新聞社長飯塚竹次妹)

柴田 義一氏 下谷區茅町二ノ一四 電話下谷(83)一五七六

富士製紙(株)參事作業部副部長 明治一九年八月生、靜岡縣

氏は靜岡縣人柴田萬藏氏の長男として同縣志田郡に呱呱の聲を揚げた。長じて靜岡商業學校に學んで實業界活躍の基礎教育を受け、同校卒業後は殆んど獨學を以て法律語學等を研究し實力の養成に努めた。かくて明治四十一年富士製紙株式會社に入社し調査課その他に多年歴勤して漸次社内信用を得、手腕を認められ、年と共に昇進して池田工場事務主任に擧げられた。而もその後益々至誠を旨として恪勤したるため更に參事に進み、現に作業部副部長の要職に在つて、専ら同社の發展に貢獻しつゝある。入社以來實に二十餘年間を通じて些の過誤

なく勤續したる氏は、夙に社内外に信望厚く、斯業者間に普く好評を得て日に名望を賞へられつゝある。禪宗を信仰し、職務に勵精することを無上の趣味として益々活躍を繼げてゐる。

妻末子(明治二五年生)母きみ子

廣瀨 廣氏 淀橋區柏木一ノ一一九 電話四谷(35)五六六

廣瀨 廣氏 電話四谷(35)五六六

の盛況を見るに至つた。此の間に於ける氏の功績は没す可らざるものと稱せられてゐる。因みに氏の趣味は園藝、信教は佛教である。

妻シヅ子(明治一九年生)長男榮一、二男利夫、長女貞子、三女安子、四女友子

平野登美夫氏 小石川區高田老松町二 電話中八(45)二四四

平野登美夫氏 電話中八(45)二四四

趣味は謠曲、寫真等である。

妻政子(明治二五年生、養父其夫長女)長男國夫(大正五年生)二男勇夫(同一三年生)三男勝(昭和二年生)長女萬里子(大正九年生)二女百合子(同一一年生)

平井 恭三氏 大森區新井宿一ノ二三 電話大森(一)一九四

平井 恭三氏 電話大森(一)一九四



三谷 隆信氏 電話四谷(35)八五〇

從五位、勳五等、法學士、外務書記官人事課長

明治二五年六月生、神奈川縣

大正六年東京帝國大學法科卒業

外交界に活躍しつゝある氏は、神奈川縣人三谷宗兵衛氏の二男として同縣下に呱呱の聲を揚げた。長じて東京帝國大學に學び獨逸法律を専攻し、卒業と同時に文官高等試験に合格して直ちに官界に投じ、内務屬

辯護士、公證人

明治一〇年二月生、群馬縣

明治三三年明治大學法科卒業

往年在野法曹界に敏腕を揮ひ、現時公證人として信望ある氏は、群馬縣に生れ明治大學を卒業すると同時に辯護士試験を受け、優秀の成績を以て合格し、直ちに岡村輝彦法律事務所勤務して實地経験を積みたる後、同四十四年獨立して辯護士を開業した。性來頭腦明晰にして又辯論の雄たる

受け、同校卒業後は殆んど獨學を以て法律語學等を研究し實力の養成に努めた。かくて明治四十一年富士製紙株式會社に入社し調査課その他に多年歷勤して漸次社内信川を得、手腕を認められ、年と共に昇進して池田工場事務主任に擧げられた。而もその後益々至誠を旨として恪勤したるため更に參事に進み、現に作業部副部長の要職に在つて、専ら同社の發展に貢献しつゝある。入社以來實に二十餘年間を通じて些の過誤

なく勤続したる氏は、夙に社内外に信望厚く、斯業者間に普く好評を得て日に名望を賞へられつゝある。禪宗を信仰し、職務に勵精することを無上の趣味として益々活躍を續けてゐる。

妻末子(明治二五年生)母きみ子

廣瀨 廣氏 澁橋區柏木一ノ一九 電話四谷(35)五六六

ほてい屋吳服店(株)監査役

明治一一年三月生、東京府 大倉商業學校第一期卒業



當家は代々現地に住し町内屈指の大地主として知られてゐる。氏は先代敬輔氏の長男として

現住地に生れ、明治二十五年家督を相續した。夙に大倉商業學校に學び、明治三十三年茶の販賣を開始したが、同四十三年感ずる所あつて之を廢し、昭和三年ほてい屋吳服店の監査役となつた。當時ほてい屋は株式組織に變更後日尙ほ淺く、經營上の困難は一方ならぬものがあつたが、新宿街の繁榮と關係者一同の努力と相俟つて終に今日

の盛況を見るに至つた。此の間に於ける氏の功績は没す可らざるものと稱せられてゐる。因みに氏の趣味は園藝、信教は佛教である。

妻シヅ子(明治一九年生)長男榮一、二男利夫、長女貞子、三女安子、四女友子

平野登美夫氏 小石川區高田老松町二六 電話牛込(34)五、二四四

日清印刷(株)常務

明治二二年七月生、栃木縣 大正二年早稻田大學商科卒業

印刷界の覇者日清印刷株式會社の重役として斯界に名聲噴々たる氏は、栃木縣人齋藤長一郎氏の三男に生れ、後平野其夫氏の養嗣子となり平野姓を襲いだ。夙に早稻田大學に學び、卒業後直ちに日本郵船會社に入社し漸次累進して秘書課長に擧げられ、敏腕を謳はれた。大正十五年同社を去つて日清印刷に入り、總務部長となつたが、昭和四年更に同社常務取締役を選ばれ、現にその職に在つて同社の發展に活躍しつゝある。資性温厚にして人望高く、永樂俱樂部會員等として廣く都下業界に交遊がある。加ふるに事業經營の才腕、敏活なる頭腦等は既に斯界の普く認むる所にして、聲望日に隆々たるものがある。因みに宗旨は禪宗、

趣味は謠曲、寫眞等である。

妻政子(明治二五年生、養父其夫長女)長男國夫(大正五年生)二男勇夫(同一三年生)三男勝(昭和二年生)長女萬里子(大正九年生)二女百合子(同一一年生)

平井 恭三氏 大森區新井宿一ノ二三 電話 大森一、一九四

平井醫院々長

明治二二年一月生、山口縣 大正六年長崎醫學專門學校卒業

氏は山口縣人時澤禎助氏の二男として同縣美彌郡伊佐町に呱呱の聲を揚げ、後先代平井邦三氏の養子となり、明治四十三年その家督を相續した。實父禎助氏は醫を業とし、氏も亦幼少の頃より醫界に志し、郷里の中學校を經長崎醫專に學び、同校卒業後直ちに上京し大正七年九月現在の地に開業した。爾來専ら懇切主義を標榜して謬療に従事したるため、漸次患者の信望を得て日に隆盛に赴き、本院のみに於ては到底患者の診療に應じ得ざる状態となつた。依つて馬込町及入新井町新井宿春日神社前に分院を設け、現時氏は本院及分院を統轄して活躍し診療に席の温まる暇なき盛況である。宗旨は眞宗、趣味は劍道、謠曲、書畫等頗る廣汎である。



妻好子(明治二十七年生、山口縣人瀧田利作長女、同縣立厚狹高女卒)長男正晴(大正一〇年生)長女房子(同五年生)二女恭子(同九年生)三女孝子(同一年生)

檜 常之助氏 神田區錦町一ノ一〇 電話神田(25)二、五二八 檜書店(資)代表社員、わんや書店(株)取締役

明治六年八月生、京都府

氏は京都府人檜助常氏の長男に生れたが後分れて一家を創立した。夙に出版界に入り大瓜堂を起し、謡曲本出版及附屬品の販賣に従事して漸次名聲を博し、謡曲界は勿論一般出版界にも普く認められるに至つた。店勢の擴張に伴れ昭和三年六月合資組織に改めて益々内容の充實を期し、販路の擴張を圖りたる結果商況頓に活氣を呈するに至り、現時氏はその代表社員として本店を統率する傍ら、わんや書店の重役を兼ねて活躍しつゝある。資性温厚にして而も商機に長け、業界は勿論一般的に信望厚く、名聲噴々たるものがある。宗旨は淨土宗、趣味の尤なるものは謡曲にして亦堪能である。

妻ヨネ(明治一八年生、京都府人八木喜助二女)長男常太郎(明治四二年生、慶

大法學部卒)二男英次郎(同四四年生、京都府立一中卒)長女やす(同四一年生、京都府立第一高女卒)

鈴木 敏一氏 豊島區巢鴨五ノ一〇八八 電話大塚(86)二、一〇三 理學士、第一生命(相互)アクチュアリー、東北帝國大學、東京物理學校、保險高等專攻學校(各講師)

明治一八年八月生、兵庫縣

大正三年東北帝大理科數學科卒業 氏は兵庫縣人鈴木快音氏の長男として同縣下に呱呱の聲を揚げた。長じて東北帝國大學に學び、卒業後第一生命保險に入社し、大正七年歐米に遊學して歸朝後會社アクチュアリーとして活躍する傍ら、前掲諸學校に教鞭を執り、後進の指導に従事してゐる。資性温厚にして研究心強く、夙に斯界に信望を博して居るが、又アメリカ・アクチュアリー會、アメリカ統計學會、獨逸保險協會、スキス・アクチュアリー會等の會員として世界的に名聲を識られてゐる。

妻きよの(明治二三年生、宮城縣人東郷理平六女、宮城縣立高女卒)養嗣子靜男(明治二七年生、東京帝大卒)長女文子(大正元年生、養嗣子妻)二女和子(同三年生)三女武子(同六年生)四女恭子(同

八年生)五女佳子(同一三年生)六女房子(同一五年生)

杉本好太郎氏 澁谷區千駄谷二ノ四六〇 電話 青山七五五 工學士、關東水力電氣(株)支配人、鐵筋コンクリート(株)取締役 明治二〇年二月生、大阪府

明治四四年東京帝大工科土木科卒業

技術家として將た事業家として、學才兼備の稱ある氏は、大阪府士族杉本安兵衛氏の長男として同地に生れた。大學卒業後直ちに志岐組に入り、朝鮮に於て鐵道の請負事業に従事すること數年にして大正四年鐵割組に移り、主任技師として活躍し、翌五年淺野合資會社に轉じた。其の後關東水力電氣の創立に奔走し、同社成立と共に入社して現にその支配人の要職に在る外、東京鐵筋コンクリート會社の重役を兼ねて、帝都事業界に盛名を馳せつゝある。

父安兵衛(慶應元年生)母もと(明治二二年生)妻直子(明治二八年生、三重縣士族田川傳八二女)長男純一(大正七年生)長女綾子(大正一〇年生)二女貞子(大正一二年生)四女隆子(昭和二年生)

杉田 直樹氏

本郷區西片町一〇 電話小石川(85)一、九三

從六位、醫學博士、東京帝國大學講師、府立松澤病院副長、日本精神衛生協會幹事 明治二〇年九月生、東京市

大正元年東京帝國大學醫科卒業

精神醫學の泰斗として名名ある氏は、杉田伊助氏の長男として芝區で生れ、明治二

伊藤 浩藏氏

京橋區銀座二ノ三ノ四 電話京橋(56)二、二七六

從三位、勳四等、公證人 明治八年一月生、千葉縣 明治二九年東京法學院卒業

氏は千葉縣士族伊藤安親氏の三男として本所區中之郷七軒町に生れた。長じて東京去學院で學び、卒業後判官事務官として

小室 利吉氏

大阪市天王寺區松ヶ鼻 町五四七四ノ一 電話 南五五〇八

日本シール、天滿紡織各(株)社長、日本工業(株)代表取締役、北泉紡績所、千代田木管、朝鮮紡績、大阪興業各(株)取締役、日高紡績(株)監査役、浪速紡織(株)相談役



擴張を圖りたる結果商況頓に活氣を呈するに至り、現時氏はその代表社員として本支店を統率する傍ら、わんや書店の重役を兼ねて活躍しつゝある。資性温厚にして而も商機に長け、業界は勿論一般的に信望厚く、名聲噴々たるものがある。宗旨は浄土宗、趣味の尤なるものは謡曲にして亦堪能である。

妻ヨネ(明治一八年生、京都府人八木喜助二女) 長男常太郎(明治四二年生、慶

資性温厚にして研究心強く、夙に斯界に信望を博して居るが、又アメリカ・アクチュアリー會、アメリカ統計學會、獨逸保險協會、スキス・アクチュアリー會等の會員として世界的に名聲を識られてゐる。

妻きよの(明治二三年生、宮城縣人東郷理平六女、宮城縣立高女卒) 養嗣子靜男(明治二七年生、東京帝大卒) 長女文子(大正元年生、養嗣子妻) 二女和子(同三年生) 三女武子(同六年生) 四女恭子(同

電氣の創立に奔走し、同社成立と共に入社して現にその支配人の要職に在る外、東京鐵筋コンクリート會社の重役を兼ねて、帝都事業界に盛名を馳せつゝある。

父安兵衛(慶應元年生) 母もと(明治二二年生) 妻直子(明治二八年生、三重縣土族田川傳八二女) 長男純一(大正七年生) 長女綾子(大正一〇年生) 二女貞子(大正一二年生) 四女隆子(昭和二年生)

杉田 直樹氏

本郷區西片町一〇  
電話小石川(85)二、九三

從六位、醫學博士、東京帝國大學講師、府立松澤病院副長、日本精神衛生協會幹事  
明治二〇年九月生、東京市

大正元年東京帝國大學醫科卒業

精神病學の泰斗として令名ある氏は、杉田伊助氏の長男として芝區に生れ、明治二十五年家督を相續した。大學卒業の翌大正二年文部省留學生として派遣され、獨逸のミュンヘン大學を始め、和蘭、英國、及び米國ウイスター研究所等に於て専ら精神病を研究し、大正七年歸朝した。爾來母校に教鞭を執る傍ら更に研鑽を重ね、大正十年精神病學に關する論文を提出して醫學博士の學位を授與された。その後も引續き母校の講師を勤め、又松澤病院の副長として精神病者の治療に靈腕を揮ひ、本邦斯界の權威として普く認められてゐる。尙ほ著書には「低能兒及不良兒の醫學的考察」「異狀兒童の病理」「大脳生理及病理」「天才兒の教育」等權威あるものが尠くない。

妻テル(明治三〇年生) 千葉縣人小川長右衛門四女) 長男裕(大正一〇年生) 二男稔(同一三年生) 三男修(昭和二年生)

伊藤 浩藏氏

京橋區銀座二ノ三ノ四  
電話京橋(56)二二七六

從三位、勳四等、公證人  
明治八年一月生、千葉縣  
明治二九年東京法學院卒業

氏は千葉縣士族伊藤安親氏の三男として本所區中之郷七軒町に生れた。長じて東京法學院に學び、卒業後判檢事登用試験に合格し、明治三十一年判事に任ぜられ、平石卷各區裁判所、仙臺地方裁判所等の各判事、仙臺地方裁判所部長、磐井區裁判所、宮城控訴院、盛岡、長野各地方裁判所、土浦區裁判所等に歴勤し、更に釧路、鹿兒島、札幌各地方裁判所長を経て昭和三年和歌山地方裁判所長に轉じた。此の間斯界に貢献したる功績に依つて從三位、勳四等に叙せられたが、後官を辭し昭和五年七月現在の地に公證役場を開き、東京地方裁判所を屬を命ぜられた。その温厚にして俊敏潤達なる性格は、敏腕と相俟つて忽ち斯界に認められ、創業日尙ほ淺きに拘らず繁忙を極めてゐる。

妻こはる(明治一八年生、長野縣人川島五郎長女) 長男陽介(同四一年生) 長女ちか(同四三年生) 二女すま(大正元年生) 三女ゆか(同五年生)

小室 利吉氏

大阪市天王寺區松ヶ鼻  
町五四七四ノ一  
電話 南五五〇八

日本シール、天滿紡織各(株)社長、日本工業(株)代表取締役、北泉紡績所、千代田木管、朝鮮紡績、大阪興業各(株)取締役、日高紡績(株)監査役、浪速紡織(株)相談役

明治七年六月生、京都府

氏は京都府人福井三郎兵衛氏の實弟にして、先代小室よねの養子となり、明治三十四年その家督を嗣いだ。夙に三井物産に入社し、累進して名古屋支店長に抜擢されたが、後同社を辭して千代田木管會社社長となり、更に福島紡織會社、堺紡績會社等の重役に擧げられて漸次紡績業界に地歩を開拓し、又歐米、印度、埃及等を巡遊して斯界の發達に貢献する所多く、現時前掲數社の重役を兼ねて益々雄飛しつゝある。

妻よね(明治一一年生、京都府小室利七長女) 男寛(同四一年生) 男四郎(同四四年生) 女壽(大正三年生) 養子一夫(同三二年生、京都府小室一平弟) 同よし(同三九年生、滋賀縣塚本信三妹) 男利夫(大正六年生) 女益子(同八年生) 孫二郎(昭和四年生、養子一夫二男)



之(一四歳、府立八中在學)

横井武次郎氏

本郷區眞砂町三七  
電話小石川(85)二三六

本郷區々會議員、同家屋稅調查委員、同青年團長、同浴場組合長、浴場主  
明治一五年九月生、東京市

當家は代々三州岡崎の城主本多藩に仕へたる名門にして、先代弘勝氏は同藩中に俊敏の譽れ高く藩主より選ばれて大原三位附を命ぜられ、廢藩後は新政府に出仕して大參事を拜命した。上京後九段牛ヶ淵に於て牧場を經營したが、該地が陸軍用地として買上げられたる爲め現地に移轉し、家主として晩年を送つた。氏は其長男として現地に生れ、郁文館卒業後家督を相續し、百餘戸の家主として又傍ら浴場を經營して今日に及んでゐる。資性頗る温厚にして公共奉仕の念に富み、大正十三年以來眞砂町々會長、同十四年以來青年團長たる外現時頭記の名譽職を兼ねて盡瘁し、其顯著なる功績は普く認められてゐる。宗旨は淨土宗、趣味は音樂、演劇等である。

妻ハツ(明治二六年生、東京府人澤田一姉)

田村金三郎氏

芝區愛宕町三ノ一四  
電話芝(43)一八五七

田村塗料商會(資)代表社員  
明治一三年五月生、東京市

塗料業界に名聲ある氏は、東京府人田村朝直氏の三男として呱呱の聲を揚げた。夙に實業界に投じ、大正九年合資會社田村塗料商會を創立した。爾來ペンキ塗料工事請負及び材料の販賣を營んで同商會の發展に努め、着實主義信用本位を標榜して活躍すること既に十餘年に及び、其名聲は年を逐ふて同業者に認められ、一般に信用を得て業績日に向上し、遂に現時の隆況を呈するに至つた。東亞ペイント、オリエンタルワニスペイント、岩城塗料製造等斯界に定評ある塗料製造株式會社の特約店として良品の普及に努め、又東京ペンキ塗料組合理事として同業界の親睦と發展に貢献し、信譽を博してゐる。

妻やチ子(明治二六年生) 長男鐵彌(同四〇年生) 長女ふみ(同二八年生) 一男正也(昭和四年生)

竹内仙次郎氏

瀧野川區田端三三二

米井商店(株)會計部主任

明治一九年五月生、廣島縣

大正二年慶應義塾大學理財科卒業

氏は廣島縣人姿宇吉の二男として同縣下に呱呱の聲を擧げたが、大正二年竹内家の養子となり、後その家督を相續した。幼少の頃より頭腦頗る明晰にして前途を囑望せられ、長じて慶應義塾に學ぶや頭腦益々芽え、優秀の成績を以て終始した。大學卒業後第一銀行に入り、同行横濱支店に勤務し實直主義を以て職務に勵精し行内に信譽を博したが、大正五年同行を辭して米井商店に轉じ、爾來誠心誠意を以て同店の發展に努力し、その手腕と高潔なる人格は漸次認められて信任厚く、現時會計部主任の要職に在つて益々活躍しつゝある。宗旨は眞宗趣味は圍碁等である。

妻郁子(明治二八年生、長崎縣人西田剛雄姉、長崎縣立島原高女卒) 長男俊男(大正八年生) 長女明子(同一五年生)

高橋林三郎氏

麴町區元園町一ノ五一  
電話九段(33)一一九四

リーガル商會々主

明治一二年一二月生、東京市

化粧品業界に活躍しつゝある氏は、高橋善助氏の四男として市内芝區に生れ、明治三十二年家督を相續した。始め義兄に當る莊司七之助氏に就いて理髮を修業し、理髮

業に従事してゐたが、炯眼の氏は化粧品の有望なるに着眼し、明治三十八年獨立して

リーガル商會を創立し、歐米化粧品輸入販賣を開始した。斯業には殆んど經驗なき

ため創業當初は事意の如くならず、具さに

經營の苦を嘗めたが、不撓不屈一意業績の

向上に努め、將來の大成を期して信用本位

を以て邁進したる結果、漸次業界に認めら

同窓の所謂帝大二八組の一人にして、卒業

後直ちに官界に入り、統監府參與官、韓國

學部次官、三重、宮城兩縣知事、北海道長

官等を経て中央官界に轉じ、拓殖事務局長

鐵道政務次官等に歴任し、大正十四年内務

次官に進み、昭和四年濱口内閣の成立と共に

に商工大臣として臺閣に列して商工業の發

展に貢献し、同六年閣僚と共に總辭職して

氏は熊本市出水町に呱呱の聲を擧げ、後

分家した。浦賀船渠株式會社取締役兼工務

監督椿宣次氏の實弟である。學業を終へる

や直ちに鐵道院に入り工務課に勤務し、後

熊本保線事務所管内八代保線區、都城保線

區等に轉動したが、大正四年之を辭して三

共株式會社に入社した。在社約六年にして

興業貿易會社に轉じたが、大正十四年六月



に及んでゐる。資性頗る温厚にして公共奉仕の念に富み、大正十三年以來眞砂町々會長、同十四年以來青年團長たる外現時頭記の名譽職を兼ねて盡瘁し、其顯著なる功績は普く認められてゐる。宗旨は浄土宗、趣味は音楽、演劇等である。

妻ハツ(明治二六年生、東京府人澤田一姉)

の實に努めたる事、其功績を博してゐる。として同業界の親睦と發展に貢献し、信望を博してゐる。妻やチ子(明治二六年生)長男鐵彌(同四〇年生)長女ふみ(同二八年生)一男正也(昭和四年生)

竹内仙次郎氏 瀧野川區田端三三二

米井商店(株)會計部主任  
明治一九年五月生、廣島縣

高橋林三郎氏 麴町區元園町一ノ五一  
電話九段(33)一一九四  
リーガル商會々主  
明治一二年一二月生、東京市  
化粧品業界に活躍しつゝある氏は、高橋善助氏の四男として市内芝區に生れ、明治三十二年家督を相續した。始め義兄に當る莊司七之助氏に就いて理髮を修業し、理髮

業に従事してゐたが、炯眼の氏は化粧品有望なるに着眼し、明治三十八年獨立してリーガル商會を創立し、歐米化粧品輸入販賣を開始した。斯業には殆んど經驗なきため創業當初は事意の如くならず、具さに經營の苦を嘗めたが、不撓不屈一意業績の向上に努め、將來の大成を期して信用本位を以て邁進したる結果、漸次業界に認められるに至つた。現在は輸入品の外、自製品としてベジリン香水、ユーモリンクリーム等を販賣してゐるが、何れも斯界に確乎たる信用を博し、全国各地に販路を有して活況を呈しつゝある。

妻ヘウ(明治一二年生、京都府士族吉井平八郎二女)長男進(明治四四年生)二男信義(大正一二年生)三男公雄(同九年生)四女敦子(明治四一年生)五女御慶子(大正四年生)

倭 孫一氏 赤坂區新坂町六  
電話青山(36)六四九〇

從三位、勳一等、貴族院議員、元商工大臣  
明治二年九月生、島根縣  
明治二八年東京帝國大學英法科卒業  
政界に令名噴々たる氏は、島根縣人俵祐信氏の四男、工學博士倭國一氏の實兄である。故濱口首相、小野塚東京帝大總長等と

同窓の所謂帝大二八組の一人にして、卒業後直ちに官界に入り、統監府參與官、韓國學部次官、三重、宮城兩縣知事、北海道長官等を経て中央官界に轉じ、拓殖事務局長鐵道政務次官等に歴任し、大正十四年内務次官に進み、昭和四年濱口内閣の成立と共に商工大臣として臺閣に列して商工業の發展に貢献し、同六年閣僚と共に總辭職して野に下つた。政界稀に見る人格者として夙に江湖の信望を博し、公共奉仕の念に富み政界以外に於て社會公共に盡したる功績も亦尠くない。郷里島根縣より代議士に選出されること四回、現に民政黨顧問として重きをなしてゐる。

妻まつ(明治一五年生)長男精一(同三四年生)二男祐(同三九年生)四男隆治(同四一年生)五男宏(同四三年生)六男正道(大正元年生)七男七郎(同一二年生)長女淑子(明治三五年生、東京高女卒、子爵栗野慎一郎六男工學博士義六郎妻)二徳子(大正元年生)

椿 祥次氏 杉並區高圓寺四ノ六八  
電話 中野三三四八

三共(株)社員  
明治一五年一二月生、熊本縣  
明治四五年山口高等商業學校卒業

氏は熊本市出水町に呱呱の聲を擧げ、後分家した。浦賀船渠株式會社取締役兼工務監督椿次氏の實弟である。學業を終へるや直ちに鐵道院に入り工務課に勤務し、後熊本保線事務所管内八代保線區、都城保線區等に轉動したが、大正四年之を辭して三共株式會社に入社した。在社約六年にして興業貿易會社に轉じたが、大正十四年六月再び三共に入り、現在同社會計課に在つて敏腕を揮ひつゝある。資性温厚にして職務に對して頗る熱心忠實、然も敏腕達議の譽れ高く、社内外に人望を博してゐる。宗旨は眞宗、趣味は書畫、和歌等である。

妻梅子(明治二六年生、山口縣人河本文一妹)長男祥夫大正二年生、二男辰夫同四年生、長女久子同二二年生

根本 松美氏 瀨谷町羽澤四五  
電話青山(36)七九二一

從四位、勳四等、公證人  
慶應元年一月生、栃木縣  
氏は栃木縣人根本松五郎氏の長男として同縣下に生れ、明治二十三年家督を相續した。夙に上京して法律を研究し、辛酸具さに嘗めて研學に勵みたる効果空しからず、明治三十年判事登用試験に及第し、直ちに檢事に任ぜられた。明治三十三年判事とな



り、爾來東京控訴院を始めとし、水戸、甲府、長岡、松本、東京の各地方裁判所判事に歴任し、釧路地方裁判所長に榮進した。此の間各裁判所に於て大小幾多の事件を取扱ひ、快刀亂麻を斷つが如き明快なる判決を以て名聲を博し、その功に依つて從四位勳四等に叙せられた。大正十二年官を辭して公證人となり、現時深川區富岡町一ノ二〇の役場に在つて斯界に活躍しつゝある。

妻能司(明治四年生、栃木縣人三沼猛寛女)嗣子松男(明治二九年生、法學士、判事)同妻トメキ(同三四年生、福岡縣人稻垣重雄妹、甘木高女卒)松男長男松彦(大正一四年生)同長女富美(同一五年生)同二女歌子(昭和四年生)長女操子(栃木縣人蛭田家に嫁す)

永井柳太郎氏 澁谷區千駄谷三ノ五〇七、電話青山五七五一  
從四位、衆議院議員、拓務大臣  
明治一四年生、石川縣

明治三八年早稻田大學政治經濟科卒業  
議政壇上の花形たる氏は、石川縣士族永井登氏の長男として金澤市中主馬町に生れ大正六年家督を相續した。早稻田大學に在學當時より雄辯を以て鳴り、大隈侯に見出されて知遇を受け、早稻田卒業後渡英して

躍し代議士たること七回、原内閣の時文部大臣に親任せられ、田中内閣の時商工大臣となり、犬養内閣の成立に際し内務大臣に擧げられたが、總選舉終了後臨時議會開會に先だつて昭和七年三月辭任した。

妻えつ(明治元年生、男爵藤田平太郎養姉)長男武一(同一三年生)二男謹一(同一四年生、分家す)長女雛子(同一三年生、

オックスフォード大學、マンチエスター・カレッジ等に學び、歸朝後母校に教鞭を執り新進教授として學生間の信望を博した。その後政界に進出し、郷里より出馬して代議士に當選すること前後五回、得意の雄辯を以て政界に嘖々たる名聲を博し、大正十三年外務參與官、昭和四年同政務次官に任ぜられた。若槻内閣總辭職と共に臺閣を去り現内閣に拓務大臣として活躍しつゝある。

母つる(文久元年生)妻次代(明治二〇年生、東京府士族三浦徹長女)長男明雄(大正四年生)二男道雄(同一二年生)長女愛子(同五年生)弟知二(明治三〇年生)

永井 廣明氏 本郷區春木町二ノ二六  
光線治療研究所々長、東京理化醫學專修學校々長  
明治七年一月生、秋田縣

特殊治療法を以て國民保健に貢獻しつゝある氏は、秋田市下米町に呱呱の聲を擧げた。長じて物理療法の研究に没頭し、辛酸具さに嘗めて努力すること多年、遂にN・M光線療法を創案した。爾來此の特殊療法を以て一般の診療に従事しつゝあるが、從來の醫藥効なき患者も此の療法に依つて救はれたる例頗る多く、我が治療界に一大セン

演に、放送に其他凡ゆる方面に活動して益々文名を高めつゝある。創作の主たるものは「人生」「女人群像」「群盲」「蒼白き薔薇」等の長編小説、「花園を荒す者は誰れだ」等の論文集など何れも洛陽の紙價を高からしめたるものである。宗教は淨土宗、趣味は釣、蓄音器等である。

父頑次(文久元年生)母芳江(元治元年生)

セーションを起し、全國的に名聲を博して治療を乞ふ者、教へを受けんとする者殺到するに至つた。茲に於て氏は該療法を秘せず、普く全國に普及して國民の保健に貢獻すべく、光線治療研究所を起して治療に應ずる傍ら益々研究を積み、一方該療法に従事する者を養成する機關として東京理化醫學專修學校を創立し、生徒の養成に努めてゐる。氏は性來頗る名利に淡く、義侠心に富み、公共奉仕を念として邁進し凡ゆる方面に信望を博してゐる。

中橋徳五郎氏 麴町區中六番町三九  
電話九段(33)七三三三  
正三位、勳一等、衆議院議員、前内務大臣  
元治元年九月生、石川縣

政界の長老たる氏は、舊金澤藩士齋藤宗一氏の五男に生れ、明治十七年中橋家の養子となり、同二十年家督を相續した。金澤専門學校文科を経て東京帝國大學に學び、後判事試補となり、爾來特許局審判官、農商務省參事官、法制局參事官、衆議院書記官、逓信省參事官及書記官、財務課長、文書課長、調度課長、監査局長、鐵道局長、等を歴任し、明治三十一年野に下つて大阪商船會社々長となつた。其の後明治四十五年衆議院議員に當選し、以來専ら政界に活

公共の爲めに盡瘁し殆んど寸暇なき爲め現在に於ては氏が經營の中樞となり、活躍しつゝある。炯眼敏才にして經營の手腕冴え、加ふるに資厚篤實稀れに見る人格者として、父君と相並んで各方面に信望隆々たるものがある。

妻トシ



永井柳太郎氏 澁谷區千駄谷三ノ五〇七、電話青山五七五一

從四位、衆議院議員、拓務大臣

明治一四年生、石川縣

明治三八年早稻田大學政治經濟科卒業

議政壇上の花形たる氏は、石川縣士族永井登氏の長男として金澤市中主馬町に生れ大正六年家督を相續した。早稻田大學に在學當時より雄辯を以て鳴り、大隈侯に見出されて知遇を受け、早稻田卒業後渡英して

校々長

明治七年一月生、秋田縣

特殊治療法を以て國民保健に貢獻しつゝある氏は、秋田市下米町に呱呱の聲を擧げた。長じて物理療法の研究に没頭し、辛酸具さに嘗めて努力すること多年、遂にN・M光線療法を創案した。爾來此の特殊療法を以て一般の診療に従事しつゝあるが、從來の醫藥効なき患者も此の療法に依つて救はれたる例頗る多く、我が治療界に一大セン

一氏の五男に生れ、明治十七年中橋家の養子となり、同二十年家督を相續した。金澤専門學校文科を経て東京帝國大學に學び、後判事試補となり、爾來特許局審判官、農商務省參事官、法制局參事官、衆議院書記官、逓信省參事官及書記官、財務課長、文書課長、調度課長、監查局長、鐵道局長、等を歴任し、明治三十一年野に下つて大阪商船會社々長となつた。其の後明治四十五年衆議院議員に當選し、以來専ら政界に活

躍し代議士たること七回、原内閣の時文部大臣に親任せられ、田中内閣の時商工大臣となり、犬養内閣の成立に際し内務大臣に擧げられたが、總選舉終了後臨時議會開會に先だつて昭和七年三月辭任した。

妻えつ(明治元年生、男爵藤田平太郎養

姉)長男武一(同二三年生)二男謹二(同三

四年生、分家す)長女縫子(同二三年生、

男爵九鬼隆一四男一造に嫁す)二女千代

子(同二〇年生、石川縣人齋藤廉に嫁す)

四女知恵(同三四年生、茨城縣人安達朔

壽に嫁す)五女伴子(大正三年生)

中村武羅夫氏

牛込區矢來町四六(本宅)神奈川縣藤澤町

著述業、雜誌「新潮」主幹

明治一九年一〇月生、北海道

文壇に名聲噴々たる氏は、北海道人中村禎二氏の長男にして石狩國岩見澤町に生れ昭和三年家督を相續した。幼少より文學に興味を持ち、上京して辛酸具さに嘗めて研究を重ね、明治四十一年新潮社に入社し、記者として活躍する傍ら絶えず修業して創作に努力すること多年、漸次帝都の文壇に認められるに至つた。現時「新潮」の主幹として敏腕を揮ふと共に、各新聞、雜誌或は單行本、全集等はその創作を發表し、又講

演に、放送に其他凡ゆる方面に活動して益々文名を高めつゝある。創作の主たるものは「人生」「女人群像」「群盲」「蒼白き薔薇」等の長編小説、「花園を荒す者は誰れだ」等の論文集など何れも洛陽の紙價を高からしめたるものである。宗教は淨土宗、趣味は釣、蓄音器等である。

父禎次(文久元年生)母芳江(元治元年生)妻ます(明治二二年生)長男隆司(大正一年生)長女榮(同二二年生)

北原清太郎氏

神田區岩本町二五ノ二電話神田九四・三九六

東京板金工業機械製作所北原商店經營

明治二六年生、東京市

氏は神田區會副議長北原常次郎氏の長男にして、現地に呱呱の聲を揚げた。夙に京華商業學校に學び、優秀の成績を以て同校を卒業後直ちに家業に携はり、父君を援けて經營の衝に當り、以て今日に及んでゐる。北原商店はプレス、切斷機、折曲機、ロール材、ドスム罐製造機等の製造販賣を業とし、瀧野川區田端に大規模の工場を設け、陸海軍省その他の官公署、全國一流會社等確實なる取引先を擁し、夙に斯業界に確乎たる地歩を占めてゐるが、父君は幾多の公職に在りて社會

公共の爲めに盡瘁し殆んど寸暇なき爲め現在に於ては氏が經營の中樞となり、活躍しつゝある。炯眼敏才にして經營の手腕冴え、加ふるに資厚篤實稀れに見る人格者として、父君と相並んで各方面に信望隆々たるものがある。妻トシ。

長澤林太郎氏

芝區櫻田本郷町一四電話銀座(57)三〇二六

祖先教々主、日本國體本義編纂審議會々長

明治三年三月生、兵庫縣



氏は兵庫縣

人長澤勇次郎

氏の長男とし

て同縣神崎郡

に生れ、後家

督を相續した

忠君愛國の念

に富み、夙に西洋文明の輸入に伴れて人心浮華輕兆に流れ、動もすれば祖先崇拜の念を失ひ國家皇室に對する觀念を誤り、光輝ある歴史を汚さんことを憂へて祖先教を創唱し、本部を神奈川縣箱根仙石原に置いて本教を開始した。爾來一意専心その布教に努めると共に、「祖先教書」「新運命觀」「皇祖皇宗の遺蹟」「宗教政策」「神靈」「神鏡」



「神拜詞」等の有益なる著書を公にし、凡ゆる機會、凡ゆる方法を以て忠君愛國思想の鼓吹、祖先崇拜觀念の喚起に努めつゝある妻乙女(明治一十七年生)長女綾子(同二八年生、民政黨事務長杉原孫右衛門妻)

長屋 順耳氏

中野區桃園町七  
電話四谷一四七八

從三位、勳二等、文學士、東京外國語學校名譽教授、女子學習院長

明治七年二月生、岐阜縣

明治三〇年東京帝國大學英文科卒業

氏は岐阜縣士族長屋由太郎の長男に生れ明治三十九年家督を相續した。東京帝國大學に於て英文學を修め、卒業後更に大學院に進んで研究を重ね、後第四高等學校教授となつた。次で廣島高等師範學校教授となり、更に文部省に轉じて督學官を命ぜられたが、之より先明治三十九年英語及英文學研究の爲め英國及米國に留學した。大正八年四月東京外國語學校々長に任ぜられ、同校の修業年限延長を始め學制の刷新に貢献し後女子學習院長として教育に活躍しつゝある。又此の間大正十年には布哇に出張し、汎太平洋教育會議に本邦代表として參加し、同十二年には朝鮮及支那に出張する等、教育界の向上發展に功績顯著なるものがある。

佐藤 博夫氏

大阪府豊能郡箕面村字  
半町四六九電話櫻井六

阪神急行電鐵(株)専務取締役、六甲山乗合自動車(株)取締役

明治一八年一月生、大阪府

氏は大阪府佐藤敏夫氏の實弟にして、同府に呱呱の聲を揚げ、大正十二年分れて一家を創めた。明治四十年阪神急行電鐵會社の創立と同時に同社に入り、爾來只管その職務に勤精し、累進して大正五

がある。

妻さだ(明治一五年生、東京府士族吉田忠長四女)長男敏郎(同三四年生)二男宏(同三七年生)三男英明(同三九年生)長女以節(同四二年生)

野口 佐吉氏

芝區白金志田町八〇  
電話高輪(44)二三七一

醫師

明治一〇年一〇月生

産婦人科及小兒科醫院を經營し夙に確乎たる地位を占めてゐる氏は、明治三十二年醫術開業試験に合格後栃木縣安蘇郡の安蘇病院に勤務し、同三十五年現在の地に獨立開業した。爾來産婦人科及小兒科の診療に従事して實地經驗を積むと共に、東京帝國大學選科生として學理的研究を爲し、又絶えず東西の醫書を繕いて新學說の吸收に努め、或は古書を涉獵して研究に資する等努力怠らず、一方患者に對しては懇切丁寧を旨として治療に當つた。その努力は年と共に報ひられ、診療を乞ふ者漸次激増し、遠隔の地よりその名聲を慕つて訪れる者頗る多く、今や遠近各地の患者に絶大の信用を博し、益々活況を呈しつゝある。趣味として謡曲を最も好み、多年修練を積んで妙域に達してゐる。

氏は奈良縣人松本重太郎氏の長男として同縣宇智郡五條町に生れ、大正六年家督を相續した。大學卒業後高等文官試験に合格して直ちに官界に投じ、神戸稅關吏、大藏省國際局書記官、同省參事官、理財局國庫課長等を経て大阪稅關長となり、更に神戸橫濱の各稅關長を経て海外駐在財務官に任ぜられ、大藏省銀行局長に陞進した。又此の間大正六年帝國政府特殊財政經濟委員と

野田 捨藏氏

小石川區上富坂町九  
電話小石川(85)七五〇

正五位、勳五等(役場)神田區淡路町一ノ四公證人  
電話神田(25)二六五四

明治三年七月生、東京府

明治二五年獨乙協會學校専修科卒業

氏は東京府士族野田耕藏氏の長男に生れ後家督を相續した。獨逸協會卒業後判檢事試験に合格して司法官試補となり、後判事に任ぜられて名古屋地方裁判所に赴任し、爾來東京、甲府、前橋、新潟の各地方裁判所判事に歴任し、最後に東京控訴院判事として敏腕を揮ひ、大小幾多の難事件を取扱ひ明快機敏なる判決を以て名判官の名を博し、多年の功績に依つて正五位、勳五等に叙せられた。大正二年勇退して公證人となり、以て現在に及んで居るが、その高潔な人格は夙に普く斯界に認められてゐる。宗旨は淨土宗、趣味は謡曲である。

妻靜(東京府士族安居修藏長女、明治女學校卒)

故子爵澁澤榮一述

青淵論叢

頁175  
定價 1,50

統計資料協會發行

主事に擧げられ、大正五年英、米、瑞各國の教育を視察研究して歸朝するや、直ちに同校附屬高等女學校主事となつた。同十三年四月勅任待遇となり、同年東京市西學長に轉じ、爾來學務課長、視學課長等を経て同十五年教育局長に擧げられた。此の間帝都教育界の發展向上に貢献する所甚大にして、斯界の恩人として仰がれてゐる。宗旨は禪宗、趣味は圍碁等である。